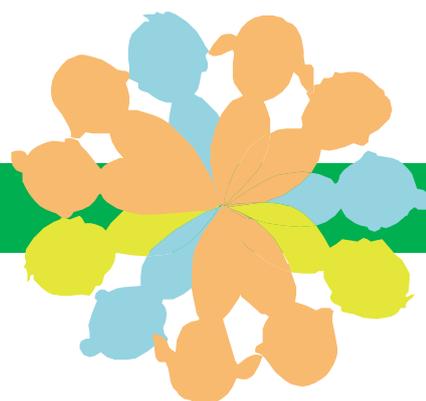


# 一身田・ 橋北校区との 連携活動

平成 24 年度 報告書



三重大学 教育学部

## はじめに

大学に隣接する中学校区と教育学部との連携協力が平成18年からスタートして7年が経ちました。この間に、一身田と橋北校区の学校園、津市教育委員会、および教育学部の皆様のご協力によって、学生が教育現場に関わる機会は増加し、教員を志望する学生が実践的指導力を涵養する機会を設けるとともに、連携校の教育的支援について進めることができました。関係者の皆様には深くお礼申し上げます。

隣接学校園と連携した学生教育活動の実施体制を構築するにあたっては、平成18年から23年までは文部科学省の競争的資金を受けたことによる社会的・財政的支援は大きいものでした。その成果は、日本学術振興会の学生支援推進事業委員会からも高い評価を受け、「近隣の幼稚園、小学校、中学校、教育委員会等と連携関係を構築し、協同的な学びの体制を整備するためにさまざまな活動を行うことで、教員養成のみならず、教員研修においても教育の質向上を実現できた」というコメントをいただきました。

隣接学校園における活動が学部教育のコア・カリキュラムに関わることから、24年度以降も継続する必要性を、関係者は共通して理解しています。しかし、支援期間終了後の財政的な基盤についてどうするかは大きな課題でした。幸いにも、平成24年度には文部科学省特別経費(プロジェクト分)―高度な専門職業人の養成や専門教育機能の充実―として配分があり、「附属学校園及び隣接校区学校園と連携した実地活動の拡充による実践的指導力をもつ教員養成機能の充実」として、これまでと同様に活動を継続することが可能となりました。この経費を受けるに伴い、連携活動を推進する組織が「連携支援室」となり、隣接校区の関係については「連携支援室Ⅱ」として活動を進めることができました。学部の先生方の深いご理解の賜物であり、感謝しております。

24年度で特筆すべきことは、特任教員として、隣接学校である栗真小学校元校長の中川三朗先生と、西が丘小学校元校長の寺下泰彦先生にお越しいただき、大学と隣接学校園との連携活動の調整や、教育実習の指導にあたっていただくことができたことです。連携活動を受け入れる学校現場としてのご経験が豊富であることから、学部との連携活動を行う上で、大学教員では気がつかなかったことを実施してくださったことで、連携を一層深化させることができました。

24年度の事業である、連携活動および成果報告会について、ここに報告書としてまとめました。本報告書の作成にあたり、連携活動に関わっていただきました隣接学校園、津市教育委員会、および教育学部の皆様に深くお礼申し上げます。

最後に、隣接学校園との連携活動に関する調整や取りまとめ、および各種記録の作成をはじめ、本報告書の作成にあたってくださった小河久美さんに心よりお礼申し上げます。

三重大学教育学部 一身田・橋北校区連携推進委員会 後藤太一郎

# 目次

## はじめに

### I 平成 24 年度 of 取組

活動一覧	1
1. 国語・日本語教育	7
2. 社会科教育	11
3. 数学教育	24
4. 理科教育	33
5. 音楽教育	40
6. 保健体育教育	44
7. 技術教育	47
8. 情報教育	48
9. 家政教育	50
10. 英語教育	57
11. 特別支援教育	63
12. 幼児教育	64
13. 教育実践総合センター	68
教育実習	72
連携支援室 II	74

### II 隣接学校園からみた連携活動

1. 白塚幼稚園	77
2. 北立誠幼稚園	80
3. 南立誠幼稚園	86
4. 栗真小学校	91
5. 白塚小学校	97
6. 一身田小学校	99
7. 北立誠小学校	103
8. 南立誠小学校	113
9. 西が丘小学校	116
10. 一身田中学校	121
11. 橋北中学校	127

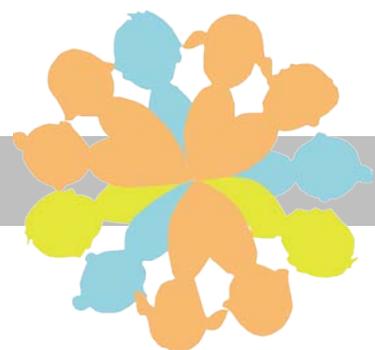
### III 成果報告会

平成 24 年度教育フォーラム	133
-----------------	-----

### IV 資料

大学教育・学生支援推進事業【テーマ A】	183
大学教育推進プログラム（平成 21 年度選定取組）	
状況調査結果票	

# I 平成 24 年度の取組



## 活動一覧

平成 24 年度に行われた活動を連携校ごとに分けて一覧にしたものを次ページにあげた。各連携校との間での活動計画をたて、それをまとめたものである。

活動は約 80 であり、連携校に関わった日数はおよそ 300 日で、関わった学生は延べで約 800 名であった。

各コースの活動内容は、活動一覧の後に続いて掲載されている通りである。

件数	該当コース	担当予定教員	連携校	学年/ クラス	連携校 担当教員	教科/ 活動名	活動内容	該当授業科目	学生数	実施日
1	家政教育	磯部 由香	一身田中学校	1年生	中島 弘子	家庭	学習支援	教育実習関連	1	7月
2	技術教育	松岡 守	一身田中学校	1年生	田中 克昌	技術	学習支援	教育実習関連	1	2～3月に週1～4回
3	社会科教育	山根 栄次	一身田中学校	1年生	丸谷 恵梨 林 敬一郎 飯田 祐也	総合	キャリア教育	特設:興味がある学生に呼びかけ	1	授業支援 10月29日
4	英語教育	荒尾 浩子	一身田中学校	1年生	丸谷 恵梨	英語	英語の授業参観と授業検討会	教育実地研究基礎	15	1月11日
5	理科教育	平賀 伸夫 荻原 彰	一身田中学校	1・2年生	米村 清香 向井 正人	理科	理科授業の観察・補助	理科教育法Ⅰ・Ⅱ	19	前期:5月上旬-7月上旬 後期:10月下旬-12月
6	社会科教育	永田 成文	一身田中学校	2年生	松崎 裕香	社会	大学院生による授業とその支援・授業研究および学習支援	社会科教育特論演習Ⅱ	5	打ち合わせ 5月10日 授業参観 5月28日 授業実施 6月7日
7	理科教育 家政教育	後藤 太一郎 磯部 由香	一身田中学校	2年生	向井 正人 米村 清香 中島 弘子	理科 家庭科	解剖&調理実習		10	12月6・12・13日
8	理科教育	後藤 太一郎	一身田中学校	2年生選択	米村 清香 向井 正人	理科	科学の祭典への参加			11月10日・11日
9	保健体育	岡野 昇 後藤 洋子	一身田中学校	3年生	水井 遼 清長 隆司 竹内 慎一郎 安野 彩加	保健体育	ラート運動授業補助	教育実習	1	9月
10	英語教育	早瀬 光秋	一身田中学校	全学年	片岡・柁田・ 丸谷・赤根・ 中村 汐	英語	学習支援		14	1年を通じて
11	音楽教育	高瀬 瑛子	一身田中学校	全学年	中村 葉子	音楽	合唱コンクールに向けた指導		6	10月初旬～中旬
12	音楽教育	高瀬 瑛子 弓場 徹 森川 孝太郎 兼重 尚文 根津 知佳子 川村 有美	一身田中学校	全学年	中村 葉子	音楽	合唱コンクールとコラボ音楽祭		35	10月26日
13	数学教育	中西 正治	一身田中学校		北岡 明直 後藤 昭 山本 貴大 細江 加代 小久保 博司 飯田 祐也 湊川 祐也	数学	・授業研究 ・授業アシスタント		14	1年を通じて
14	保健体育	後藤 洋子 岡野 昇	一身田中学校 橋北中学校	教員		保健体育	ラート運動実技研修会	教育実習	2	8月24日
15	保健体育	後藤 洋子 岡野 昇	橋北中学校	2・3年生	岡田 興昌 平岡 三恵子 服部 尚史	保健体育	ラート運動授業補助	教育実習	1	9月

件数	該当コース	担当予定教員	連携校	学年/ クラス	連携校 担当教員	教科/ 活動名	活動内容	該当授業科目	学生数	実施日
16	家政教育	平島 円	橋北中学校	全学年	田中 かおり	家庭科	学習支援(裁縫実習・調理実習)	教育実地研究	2	5・6・10・11月
17	音楽教育	森川 孝太郎 弓場 徹 高瀬 瑛子 兼重 尚文 根津 知佳子 川村 有美	橋北中学校	全学年	古市 和代	音楽科	教育学部音楽科とのコラボ音楽祭開催		35	10月23日
18	音楽教育	根津 知佳子	橋北中学校	全学年	古市 和代	音楽科	合唱練習の支援		6	10月初旬～中旬
19	音楽教育	森川 孝太郎	橋北中学校	全学年	古市 和代	音楽科	合唱コンクール審査			10月23日
20	音楽教育	高瀬 瑛子 兼重 直文 根津 知佳子	橋北中学校	全学年	古市 和代	音楽科	指揮法・伴奏法のワークショップ			9月21日
21	数学教育	中西 正治	橋北中学校		高城 あつ子	数学科	学習支援		15	1年間を通じて
22	特別支援教育	菊池 紀彦	橋北中学校		奥野 裕子 辻川 新悟	特別支援学級	学習支援		16	1年間を通じて
23	理科教育 数学教育 英語教育	後藤 太一郎 中西 正治 田中 伸明 早瀬 光秋	橋北中学校	全学年	溝口 宏彦	SSS (Saturday Step-Up School)	学習支援		20	6・8・9・11・12月
24	情報教育	萩原 克幸	一身田小学校	1年生 (特別支援学級児童含む)	河合 房子	生活科	「パソコンをつかってみよう」 (マウス操作の支援)	教育実地研究基礎	18	2月19日・20日
25	理科教育	牧原 義一	一身田小学校	3年生	寺尾 弘太	理科	「光のせいしつ」			2月28日
26	理科教育	國仲 寛人	一身田小学校	3年生2クラス	川合 敬子 中田 恵子	理科	「磁石のふしぎをさぐるう」			1月31日
27	日本語教育	林 朝子 服部 明子 牟 躍	一身田小学校	4・5年生	秋澤 シルビア 村田 真理	クラブ活動	クラブ活動支援・企画	人間発達実地研究Ⅴ	14	5月～2月
28	家政教育	磯部 由香	一身田小学校	5年生	大原 敦子	家庭科	ミシンの作業の時の支援	教育実地研究	6	2学期初め頃
29	家政教育	磯部 由香	一身田小学校	6年生	山本 朝香	家庭科	エプロン製作の時の支援	教育実地研究	1	1学期5月頃
30	家政教育	平島 円	一身田小学校	6年生	山本 朝香	家庭科	「まかせてね！きょうのごはん」献立作成	教育実地研究	1	11月
31	数学教育	田中 伸明	一身田小学校	全学年	山本 朝香 各クラス担任	各科	学習支援	教育実地研究基礎	4	通年週1回
32	社会科教育 英語教育	永田 成文 荒尾 浩子	北立誠小学校	1年生		社会・英語	オーストラリア・クージー小学校とのテレビ会議「家と学校生活を伝えよう」	特設：興味がある学生に呼びかけ	5	遠隔会議 11月6日
33	家政教育 技術教育	磯部 由香 中西 康雅	北立誠小学校	2年生	森田 希 鈴木 瑞城 小林 千栄子	生活	作って遊ぼう(遊び体験)	生活教材研究	42	1月

件数	該当コース	担当予定教員	連携校	学年/ クラス	連携校 担当教員	教科/ 活動名	活動内容	該当授業科目	学生数	実施日
34	社会科教育	永田 成文	北立誠小学校	2年生		生活	町たんけん(三重大学内の案内)支援	生活教材研究	40	探検支援 6月13日
35	社会科教育 英語教育	永田 成文 荒尾 浩子	北立誠小学校	3年生		社会・英語	オーストラリア・クージー小学校とのテレビ会議「人にやさしいまちづくり」	特設:興味がある学生に呼びかけ	10	まちづくり授業11月9日 英語指導 11月21日 遠隔会議 11月28日
36	英語教育	荒尾 浩子	北立誠小学校	3年生		英語活動	英語による発表指導		14	11月21日
37	英語教育	荒尾 浩子	北立誠小学校	5年生	向井 潔	外国語活動	学生主導の外国語活動	英語科教育入門	14	1月24日
38	英語教育	荒尾 浩子	北立誠小学校	5年生	向井 潔	外国語活動	外国語活動支援		8	通年週1回
39	情報教育	萩原 克幸	北立誠小学校	5年生	向井 潔	情報	レゴロボットを使ったプログラミング指導		5	11月13・27日
40	英語教育	荒尾 浩子	北立誠小学校	6年生		外国語活動	英語による発表原稿作成補助			11月9日
41	英語教育	荒尾 浩子	北立誠小学校	6年生		外国語活動	英語による発表指導	教育実地研究基礎		11月14日
42	社会科教育	永田 成文	北立誠小学校	6年生		総合	防災教育「危険箇所調査」の支援	社会教材研究	30	学習支援 6月26日
43	社会科教育 英語教育	永田 成文 宮岡 邦任 荒尾 浩子	北立誠小学校	6年生		社会・英語	オーストラリア・クージー小学校とのテレビ会議「家庭・学校・地域の防災」	特設:興味がある学生に呼びかけ	10	防災実験 10月11日 防災授業 10月15日 英語指導 11月9日 英語指導 11月14日 遠隔会議 11月20日
44	数学教育	田中 伸明	北立誠小学校	6年生	向井 潔 駒田 秀樹	算数	指導補助	教育実地研究基礎	1	通年週1回
45	理科教育	平山 大輔	栗真小学校	1・2年生	坂口 奈緒美 村居 照子	生活科	「秋みつけ」		4	10月30日
46	教育実践総合 センター	下村 勉	栗真小学校	2年生	村居 照子	生活科	パソコンで名刺作り		8	1月中旬
47	理科教育	平山 大輔	栗真小学校	4年	川辺 健治	理科	理科研究授業の事前事後指導(4年「夏の自然」)			6月下旬～7月上旬
48	家政教育	磯部 由香	栗真小学校	5年生	福島 チヨ子	家庭	調理実習	教育実地研究	1	11月
49	社会科教育	永田 成文	栗真小学校	5・6年生	川辺 健治	社会	大学院生による授業研究及び学習支援	社会科教育特論演習Ⅱ	5	打ち合わせ 5月8日 授業参観 5月22日 授業実施 6月12日
50	家政教育	磯部 由香	栗真小学校	6年生	曾根 圭子	家庭	お弁当づくり	教育実地研究	1	11～12月
51	数学教育	田中 伸明	栗真小学校	全学年	川辺 健治 各クラス担任	くりまっこタイム・各科	授業のアシスタント	教育実地研究基礎	4	通年週1回
52	音楽教育	根津 知佳子	栗真小学校	全学年	曾根 圭子 吉田 隆子	6年生を送る会	模範演奏		2	3月1日
53	音楽教育	根津 知佳子	栗真小学校	教員	奥井 浩史	特別支援教育	特別支援学級における研究授業の事前事後指導			6月22日、10月18日
54	数学教育	田中 伸明 中西 正治	栗真小学校	教員	渡邊 知子 川辺 健治	算数	算数科研究授業の事前事後指導			通年

件数	該当コース	担当予定教員	連携校	学年/ クラス	連携校 担当教員	教科/ 活動名	活動内容	該当授業科目	学生数	実施日
55	数学教育	中西 正治 田中 伸明	栗真小学校	教員	渡邊 知子 川辺 健治	算数	夏季研修(学習会・教材研究・研究授業構想検討等)			7月・8月
56	数学教育	田中 伸明	白塚小学校	特別支援 各学年	高須 昌子 各クラス担任	各科	授業のアシスタント	教育実地研究基礎	3	通年週1回
57	情報教育	萩原 克幸	西が丘小学校	2年生	藤田 しおり	生活	「パソコンを使って感謝状を書こう」(文書入力支援)		9	2月12日
58	理科教育	平山 大輔	西が丘小学校	4年生	秋田 勝己 小山 史己	理科	「どんぐりのふしぎ」			11月21日
59	家政教育	磯部 由香	西が丘小学校	5年生	5年生担当	家庭	ミシンの実習支援	教育実地研究	4	10月11・18・19日
60	教育実践総合 センター	下村 勉	西が丘小学校	5年生	小山 史己	理科	学習成果の情報発信における著作権指導		1	11月30日
61	社会科教育	永田 成文	西が丘小学校	6年生		社会	明治維新から世界のなかの日本へ・幕末「開国と幕府政治の終わり」授業実践・検討	特設:興味がある学生に呼びかけ	6	打ち合わせ 8月1日 授業実施4h 10月1日 事後検討1h 10月1日
62	数学教育	田中 伸明	南立誠小学校	1年生	石川 昭子 各クラス担任	算数	算数補助	算数科ほか	2	月曜1限目
63	理科教育	國仲 寛人	南立誠小学校	3年生	三谷 陽平 藤澤 薫子	理科	理科「磁石と豆電球」			2月12日
64	理科教育	後藤 太一郎	南立誠小学校	4年生	前田 泰宏	春の遠足	春の遠足(三重大キャンパス)		30	5月2日
65	家政教育	磯部 由香	南立誠小学校	5・6年生	萩 恵子 田中 由美子	家庭	家庭「ミシン指導 ナップサック作り」	教育実地研究	4	9月
66	家政教育	磯部 由香 吉本 敏子 林 未和子	南立誠小学校	6年生	田中 由美子	家庭	食物分野	教育実地研究	2	11月
67	理科教育	後藤 太一郎	南立誠小学校	6年生	東出 賢一	理科	理科「植物のつくりとはたらき」「ヒトや動物の体づくりとはたらき」 光合成のはたらきとヒトの血液の流れ			1学期
68	技術教育	魚住 明生	北立誠幼稚園	年少 年長	磯田 祥恵	ものづくり	年少…木片を組み合わせ、好きなものを作ろう(木工用ボンド) 年長…木片を組み合わせ、好きなものを作ろう(木工)		19	7月11日
69	国語教育	林 朝子	北立誠幼稚園	年少 年長	小菅 なぎさ 大森 麻子 磯田 祥恵	書道	筆や墨を使って、線や絵を描いてみよう	書論・鑑賞 I	30	11月1日
70	国語教育	林 朝子	北立誠幼稚園	年少 年長	小菅 なぎさ 大森 麻子 磯田 祥恵	書道	好きな絵や自分の名前をかいてみよう	書論・鑑賞 I	30	12月13日
71	技術教育	魚住 明生	北立誠幼稚園	年長	磯田 祥恵	ものづくり	くぎ打ちを楽しもう(年長のみ)		8	6月22日、7月11日

件数	該当コース	担当予定教員	連携校	学年/ クラス	連携校 担当教員	教科/ 活動名	活動内容	該当授業科目	学生数	実施日
72	幼児教育	吉田 真理子	北立誠幼稚園	未就園児	小菅 なぎさ	子育て支援	年間20回程度開催される「未就園児の遊ぶ会(たんぽぽ会)」の運営と親子支援等を通して、乳幼児理解や受け止め方、環境設定、教材研究等を学ぶ。 ・年間計画立案等打ち合わせ会(4月23日)		3	5月～3月 (月2～3回開催)
73	幼児教育	河崎 道夫	白塚幼稚園				夕涼み会の暗闇部屋の計画と実施		13	6月30日
74	幼児教育	吉田 真理子	白塚幼稚園				未就園児保育「ぴよんちゃんクラブ」の企画と運営		3	5月～3月 火曜日 (月2～3回開催)
75	理科教育	平山 大輔	白塚幼稚園 北立誠幼稚園		大森 麻子	自然観察	「木の実拾い」		5	11月7日
76	理科教育	後藤 太一郎	南立誠幼稚園	4・5歳児	北岡 あや	生き物大好き	ザリガニの生態、飼育について			6月21日
77	理科教育	平山 大輔	南立誠幼稚園	4・5歳児	長谷川 弘子	自然と遊ぼう	三重大学にて遠足 どんぐり拾いなど		5	10月26日
78	幼児教育	吉田 真理子	南立誠幼稚園	未就園児	丹羽 立子	未就園児の会(うさぎ・ひよこ組)	未就園児の会(うさぎ・ひよこ組)の運営と企画		5	年間計画等打ち合せ 5月10日 毎月第2・3・4水曜日 10:30～11:00実施

# 1. 国語・日本語教育

書論・鑑賞Ⅰ（国語教育講座）の取り組み

## 「筆！墨！紙！を楽しもう！」第4回

報告者：教育学部 林朝子

### 【目的】

子どもたちの「筆で書く」という初めての体験の場への参加を通して

- 1) 子どもたちの発見する力・感じる力・表現する力を感じ、
- 2) 子どもたちにとって「筆で書く」ことの意義を考え、

子どもを対象とした有効的な毛筆活動を考えるきっかけとする

### 【概要】

実施日時：平成24（2012）年11月1日（木）・  
12月13日（木）12：30～14：30

※書論・鑑賞Ⅰの授業時間内で行った

実施場所：北立誠幼稚園

教諭：小菅園長先生、大森先生（年少）、磯田先生（年長）

園児：計34名（年少15名／年長19名）

参加学生：書道Ⅲ履修生30名

活動の流れ：

◎1回目：11月1日テーマ：筆に慣れよう  
（※年少は初めて）

12：30～35 幼稚園集合

12：35～13：00 準備

13：00～13：55 活動

※最初に全員で挨拶、ペアになったら個別に挨拶

15分 全体活動：用具等について説明Ⅰ（林）

25分 個別活動：ペア（園児1～2名＋学生1名）

小さい紙に線・図形・絵などをかく（4枚）

15分 グループ活動：園児2～3人（年少1名＋年長1～2名）

大きい紙に絵などをかく

13：55～14：05 発表会

14：05～14：25 後片付け（園児と学生）

※大きい紙 70cm×135cm

小さい紙 大きい紙の1/3

◎2回目：12月13日

テーマ：年少）筆に慣れよう

年長）半紙に名前を書こう

12：30～35 幼稚園集合

12：35～13：00 準備

13：00～14：00 活動

※最初に全員で挨拶、ペアになったら個別に挨拶

15分 全体活動：用具等について説明Ⅱ（林）

45分 【年長】個別活動

・自分の名前色半紙に書く

（半紙で練習⇒色半紙清書2枚）

※学生は1対1で支援する

・大きい紙に名前や絵などをかく

【年少】

・個別活動：小さい紙に絵を描く

・グループ活動（2～3人）：大きな紙に好きなものをかく

14：00～14：20 片付け（園児と学生）

振り返りとレポート提出：

各回の活動後、レポート提出を課題とし、また、授業時に振り返りを行った

### 【成果】

本活動は、今年度で4回目であり、幼稚園の先生方との関係も築けた中での実施で、準備段階・活動を非常にスムーズに行うことができた。先生方には前もって子どもたちの様子を伺い、子どもたちへの声掛け、支援の工夫などを具体的に教えていただき、学生が子どもたちとの関係作りの際の不安をかなり取り除くことができた。幼い子どもたちとの触れ合いに慣れていない学生もいたが、それぞれの子どもの様子を見ながら、各自でコミュニケーションの方法を探っていたようである。

本活動の目的である、「子どもたちの発見する力・感じる力・表現する力を感じ、子どもたちにとって“筆で書く”ことの意義を考える」ことは、各学生がそれぞれの気づきを通して、実践できていた。学生のレポート内容を一部紹介し、本活動の成果を具体的に記したい。

◎「筆・墨・紙」と子どもの表現力・発見力

・筆をトントントンと押さえながら書いたときに、筆の穂先が割れ、鳥の足跡のようになった。女の

子は足跡と言ってたくさん書いていたら、一緒に書いていた男の子が「足跡たくさん書いている」と言っていた。私は女の子が「これは足跡」と言っていてそれを聞いて足跡に見えることに気がついた。でも、男の子は書いているのを見ただけで理解していたので、子どもの世界というのを強く感じる事ができた。

・一枚目は、同じような文字の太さでひたすら漢字を書いていた。(中略)二枚目以降、文字の太さを変えたり、大きく書いたり小さく書いたりしていた。

・半紙を渡して、「表と裏じゃどう違う？」と質問すると、「表がさらさらで裏がびりびりしている感じ」という一般的なイメージに捉われない回答があって驚いた。

・作品の内容としては、通常のように筆を使って絵を書いたり、墨の量を調節せずボタボタと垂らして「雨粒」としていたり、それをより発展させ筆を振って「雨粒」を増やしたり、筆を寝かせて書いたり、逆毛にしたり、かすれさせたりし、園児の中ではいろいろな筆の使い方ができたのではないと思う。それが本来の使用法とは違えど、独創性に富み、筆に親しむことが目的だと思うので、これで良いのだと思う。

・園児たちにとって、墨や筆は習字を習っていない限りほとんど触れる機会の無いものであるため、自然と興味や関心をひきつけると考える。それが文字を書くきっかけになり、文字を学ぶ良いきっかけにつながると感じる。

・年長組は椅子に座って本格的に書道をしていて、体験活動がきちんと段階を踏んで指導されていることを知り、それはとても大切なことに思えました。筆で字を書くことは、やはり普段鉛筆等で字を書くこととは全く違い、ゆっくり丁寧に字を書く機会となるので、字のバランスや形を考えながら書くことができます。それを続けることでやはり字は見やすく整った字になり、また、ゆっくり丁寧に書くということでも字の書き順を覚えることができます。しかし、成長するにつれて書き順や形などを意識せずに字を書くようになると、だんだんと字が雑になってくるので、大学で書道の授業をとり、もう一度筆に触れることも大切なんだなと感じました。

◎教え方やコミュニケーションへの気づき

・教えるということには言葉をどう噛み砕き、子どもたちが理解できるようどう翻訳するのかと

いうことだけでなく、直接子どもたちと触れ合い、どうしたらいいか実演するのも教える方法としてあるのだなと実感した。

・私は、楽しく書く書道も心を静めて書く書道もどちらも大切であると感じました。学校教育においてもどちらも必要な要素であり、その書道の二面性は書道を学校教育に取り入れる理由の一つでもあるのではないかと思います。この体験活動を通して、楽しそうに筆を動かす子どもたちを見て、「楽しい」と思えることが子どもたちにとってとても大切な部分だと思いました。

・一人の子どものことだけでも精一杯なのに、先生方は全体を常に見ていらして、驚いた。

・こちらの問いかけに対して、筆で書いて答えるという場面が非常に多かった。(中略)コミュニケーションが苦手な子どもでも、書道を通して自分の意志を表現できると感じた。

レポートの一部を抜粋しただけであるが、本活動を通した学びの深さは計り知れない。学生たちにとっては「筆・墨・紙」というシンプルな道具が、子どもたちの発見力と表現力によって、とても魅力のあるものへと変化したことは、小中学校における書写教育を実践する際の意識にも大きく影響するはずである。また、少人数の子どもたちとの関わりを通し、子どもたちの関心や子ども同士の関係を目の当たりにし、十分ではないけれども、子どもを知ることに繋がった。

最後に、今回の活動を通し、学生にとって非常に貴重な経験を与えていただいた北立成功幼稚園の先生方に心より感謝申し上げます。



## 「学校現場における多文化共生」ver. 5

報告者：林朝子

### 【目的】

小学校のクラブ活動の観察や参加を通して、学校現場における多文化共生について学び、考える機会とする。また、実際に多文化共生につながる活動を考え、実践する。

### 【概要】

活動場所：津市立一身田小学校

「世界を結ぼうクラブ」

月1回で年間7回実施。

小学校教員：秋澤シルビア先生・村田真理先生

大学教員：服部明子・牟躍・林朝子

参加児童：4年生9名、5年生6名、計15名

参加学生：第1・2回

日本語教育コース3年3名

第4～7回

日本語教育コース1年10名

天津師範大学留学生1名

活動内容：

①6月18日：

#### 【ブラジルってどんな所？】

- ・ポルトガル語で挨拶をする
- ・写真を使って、ブラジルの地理や風土、学校文化について知る

#### 【カレンダー作成準備】

- ・5グループに分かれ、日本文化を伝える挿絵入りカレンダーを作り、ブラジルのめぐみ学園に送る
- ・グループでカレンダーで取り上げたい日本文化について話し合う

②7月9日：

#### 【カレンダー作成】

- ・グループでカレンダー作成

③9月24日：

#### 【ブラジルの音楽で楽しもう】

※学生参加無

④10月15日：

#### 【ブラジルの遊びを体験しよう】

- ・Rouba Bandeira (ホウバ・バンデイラ/旗取り) というブラジルの遊びを運動場で皆で行う

⑤11月19日：

#### 【ブラジルのお菓子を作ろう】

- ・Queijadinha(ケイジャジーニャ)というブラ

ジルのお菓子を皆で作って食べる

⑥1月28日

#### 【中国の文化紹介】

- ・中国からの留学生が中心になって、クイズ形式で中国語や中国の遊びについて紹介
- ・運動場で中国の羽蹴りを楽しむ

⑦2月18日：予定

#### 【世界の文化紹介】

その他の活動：

各回の活動後、レポート提出を課題とし、授業時に振り返りを行った。学校現場における多文化共生、外国人児童生徒の状況を知るために、DVD教材「ようこそ！さくら小学校へ～みんな、なかまだ」(AJALT)を視聴し、レポートを作成した。また、多文化共生について考えを深めるために、中国人講師による中国文化紹介(2回)、自国の文化紹介の発表(2回)の時間を設けた。

### 【成果】

昨今、学校は多文化・多国籍の子どもたちが共に学ぶ空間となりつつあり、多文化共生の学校づくりが大きな課題とされている。本活動は、多文化共生を目指す小学校でのクラブ活動に学生が参加し、学校や子どもたちに必要な多文化共生とは何なのかを感じ取り、考える機会と位置付けている。本年度も参加学生のほとんどが1年生であり、入学後の早い段階で問題意識を持つことができ、今後の大学での学びの中で、各自が問題解決に向けて様々な視点から考察を深めていくことにつながる事が可能である。

子どもたちとのコミュニケーションを通して、教員として必要とされる力についても感じられているようである。大学1年生ということもあり、子どもとどう接していいのかかわからず、ほとんどコミュニケーションが取れていない学生も多い。クラブの先生方の子どもたちへの声掛けや支援の方法を観察し、時には直接指導いただきながら、子どもたちとどのように人間関係を築いていけばいいのかを少しずつではあるが各自が工夫できるようになった。

以下では、学生のレポートから、「多文化共生」「子どもとのコミュニケーション」の2つの視点から述べられている部分を紹介し、本活動の成果としたい。

#### 【多文化共生について】

◎多文化共生とは、人種や国ごとに異なる文化を認め合い、互いに対等な立場で社会を構成していくことであると思う。この活動（遊び）を通して他の文化を知ることが、多文化共生社会を作っていく過程で大切な第一歩であると感じた。

◎国際的な交流をするには、相手の国のことを知るの大前提なのだが、自分の国を知らず相手の国のことだけ知っていても国際「交流」にはならない。自国の長所・短所・特徴も知った上で、相手の国のことを知ることが大切だろう。

◎小学生が異文化を理解するという点において、言葉で伝えるより実際に体験する方が理解しやすいのではないかと活動を通じて感じた。

◎多文化共生社会を目指すにあたって、外国について知り、理解するだけでなく、自分の国である日本のことについても伝える必要がある。たとえ言葉が通じなくても、絵やジェスチャーを使うなど、お互いの国について知り、互いの国について知ってもらおうと、互いの意見を伝えようと努力することが大切で、そうすることで相手にも届くだろう。

◎国家間の対立や差別を学ぶ前に、他の国の興味深い文化に触れておくことで、日本も他の国も、文化は違っても本質は同じであることを早い段階で感じ取れ、「対等な立場で」社会を築くことへの近道となるだろう。

◎日常的に行うことのできる「遊び」と同様に、身近なものである「食べ物（お菓子）」の紹介や、協力して作る機会があれば、互いに国のことを教えあって理解でき、多文化に関して間近で触れることができる。「日本人」「外国人」という心理的な壁を壊しうることも考えられる。小さなところから壁が崩れ、異文化の交流が次第に広まっていくことで多文化共生は成立すると思う。

◎日本人には当たり前のことが外国人にとっては当たり前でないことがわかった。「掃除」「休み時間の遊び」「給食」など、小学校の生活という日常の一部からにも当たり前でないことがたくさんあることを改めて感じた。

◎新しい環境に入ると、不安を感じるはずだ。どうすればこのような不安な気持ちを除けるのか、これは学校、教師、子ども同士、保護者など広い人々の助けが必要だろう。

#### 【子どもとのコミュニケーションについて】

◎まずは自分が楽しむことが大切だ。自分が楽しめば子どもたちにも伝わって、子どもたちも楽しむことができる。子どもの目線で活動を楽しむと同時に、教師という目線で子どもたちの様子や態度を見ていけるようにしたい。

◎最初は動けず、ただ立って見ているだけになってしまっていた。また、個人的に笑顔も少なかったと思う。子どもたちからしても、何も言わない、笑顔も少ない人には近づきたいと感じるだろう。自分が楽しんで、積極的に子どもたちと関わっていくことの大切さを感じた。

以上、レポートの一部を紹介した。当初は「多文化共生」という言葉も知らなかった学生も多かったが、本活動が多文化共生について考えるきっかけとなった。学校の中だけではなく、社会としての多文化共生まで意識を広げられた学生もいる。子どもたちとのコミュニケーションは、課題が多く残されている。これは毎年の課題であるが、大学の授業との関係で、本活動には1年生が参加しているため、子どもたちとの交流に慣れていない学生が多い。クラブ時間外にも学校に伺い、子どもたちと交流の時間を持つような流れを今後は作っていきたいと思う。

最後に、1年間に渡る活動に参加させていただき、学生が多文化共生について学ぶ、非常に貴重な経験を与えていただいた一身田小学校の先生方に心より感謝申し上げます。



## 2. 社会科教育

本年度、社会科教育講座で実施した取り組みは以下の通りである。

1. 栗真小学校5・6年生を対象とした大学院生による研究授業の実施
2. 一身田中学校2年生を対象とした大学院生による研究授業の実施
3. 北立誠小学校2年生を対象とした生活科の町たんけんの支援
4. 西が丘小学校6年生を対象とした社会科の連携授業の実施
5. 北立誠小学校1年生を対象としたオーストラリアとの遠隔会議の実施
6. 北立誠小学校6年生を対象としたオーストラリアとの遠隔会議の実施
7. 北立誠小学校3年生を対象としたオーストラリアとの遠隔会議の実施
8. 一身田中学校1年生を対象としたキャリア教育への支援

以下に担当した大学教員による活動報告を示す。

### 1. 栗真小学校5・6年生を対象とした大学院生による研究授業の実施

(永田成文)

#### 【目的】

目標・内容・方法を明確にした小学校社会科授業を開発し、小学校において実験授業を行い、その有効性を実証的に検証する。

#### 【概要】

平成17年度より、大学院教育の一環として、大学院生とともに半年以上かけて開発した授業を栗真小学校で実施している。「社会科教育特論Ⅱ」で社会科に関わる複数の単元を構想する。「社会科教育特論演習Ⅱ」で複数の単元案の中から栗真小学校が選定したものについて教材研究を深め、実験授業を実施し、その効果を分析する。

2012年度は栗真小学校の伊東尚美教頭を窓口とし、6月12日(火)5・6限に小単元「世界の餃子から食文化のつながりを考える」を5年生13人・6年生21人を対象に総合学習として実施した。5名の大学院生中、2名の留学生が主担当となり、他の学生は授業の補助を行った。この単元は留学生の目から見た異文化理解に関わるテーマを小学生用として開発したものである。

単元「世界の餃子から食文化のつながりを考える」の概要は次の通りである。

小単元の目標

○中国から伝わって来た餃子が日本で独自の餃

子になっていること、世界にはいろいろな餃子があることに興味を持つ。(関心・意欲・態度)

○餃子を事例とし、中国と日本の餃子の違い、世界中に広がる条件、世界の餃子について考える。(思考・判断・表現)

○中国と日本の餃子の観察を通じて、その特徴と違いを捉える。(技能)

○餃子の定義をつかみ、世界各地で作り方、食べ方に違いがあることを知る。

小単元の構成(2時間)

・日中両国の餃子(食文化の発達)・・・1時間

・世界の餃子(食文化の伝播)・・・1時間

研究テーマを「地域における食文化の発達と伝播を捉える異文化理解学習—餃子を事例として—」と設定し、日中両国の中華料理の共通点と相違点についての理解や食文化の発達と伝播についての理解を深めようとした。具体的には、次の二段階を設定した。①中国の餃子と日本の餃子を見比べることにより、日中両国の餃子の違いを理解させる。②世界中の餃子を見比べることにより、地域独自の餃子があることと餃子が伝播していることを理解させる。

授業では、児童に、次のような発問をし、ワークシートに書かせた。

- 日本のお正月では何を食べますか？
- 中国のお正月では何を食べるとおもいますか？
- 中国の餃子はどれですか？
- なぜ中国では餃子は大切な食べ物だと思いますか？
- 中国と日本の餃子から食文化について分かったことを書きましょう。
- 世界の餃子の特色を書きましょう。
- 世界にはどんな餃子があると思いますか？
- 世界の餃子から食文化について分かったことを書きましょう。

ワークシートの分析から、食文化はそれぞれの地域で独自に芽生えること、中国と日本の餃子は異なり、日本では餃子はおかずとして食べるが、中国では餃子は主食であることを理解できた。また、メキシコ、ロシア、イタリア、インド、ノルウェーの餃子の写真から、世界の餃子の形、色、中身を予想させた。世界の餃子をグループ分けすることを通して、食文化の伝播と発達について考え、表現することで、世界の餃子の伝播とそれぞれの地域での発達を理解することができた。

本実践の課題として、ワークシートに餃子のグ



写真 中国の餃子を説明する様子

ループ観察でわかったことを記すスペースを設けなかったことが挙げられる。児童たちの観察への記録を重視すべきであった。関連して、餃子の観察で多くの時間を費やしたため、授業のまとめをワークシートに書き込む時間が不足した。授業の時間配分を把握することが重要である。

また、児童の関心・意欲を授業の最初に出せるような導入を考えること、児童がワークシートに記入時に適宜指導することが必要であった。

今後、学生とともに発達段階にそった授業づくりと指導方法の改善を行っていきたい。

## 2. 一身田中学校2年生を対象とした大学院生による研究授業の実施

(永田成文)

### 【目的】

目標・内容・方法を明確にした中学校社会科授業を開発し、中学校において実験授業を行い、その有効性を実証的に検証する。

### 【概要】

平成21年度より、三重大学と一身田校区との連携の一環として、大学院生が半年以上かけて開発した授業を一身田中学校で実施している。「社会科教育特論Ⅱ」で社会科に関わる複数の単元を構想する。「社会科教育特論演習Ⅱ」で複数の単元案の中から一身田中学校が選定したものにつ

いて教材研究を深め、実験授業として実施し、その効果を分析する。

2012年度は2学年担当の松崎裕香教員を窓口とし、6月23日(木)5・6限に小単元「日本と中国の人口問題とその対策」を2年2組34人に社会科地理的分野の学習として実施した。5名の大学院生中、2名の中国人留学生が主担当で、他の学生は授業の補助を行った。この単元は中国の「一人っ子政策」の実態について中国人留学生から直接学ぶ視点から開発したものである。

小単元「日本と中国の人口問題とその対策」の

概要は次の通りである。

小単元の目標

- 日中両国がそれぞれ抱える人口問題に興味をもち、中国の「一人っ子政策」について、積極的に学ぼうとする。(関心・意欲・態度)
- 中国では「一人っ子政策」の実施状況が地域や家族構成などの条件によって異なること、そのメリット・デメリットを勘案した上で中国は「一人っ子政策」を続けていくべきか考える。(思考・判断・表現)
- 日中両国の人口ピラミッド対照表から、日中それぞれが抱える問題や共通の問題となる少子高齢化について読みとることができる。(技能)
- 日中両国の少子高齢化の解決策のうちの一つであるソーシャルビジネスの導入が検討されていることを理解する。(知識・理解)

小単元の構成

- ・中国の『一人っ子政策』の実情・・・1時間
  - ・中国の『一人っ子政策』の是非・・・1時間
- 研究テーマを「社会問題を追究する力を育てる社会科授業―日中の人口問題を事例として―」と設定し、中国の「一人っ子政策」が抱える諸問題への理解が深め、日中の抱える人口問題の解決について追究する力を育成しようとした。具体的に次の手順を踏んだ。「一人っ子政策」について、中国人留学生の話聞き、人口抑制策のイメージを持たせる。次に、日中両国の人口動態と人口ピラミッドを比較し、人口抑制策がもたらす問題を考える。さらに、日中両国の社会問題を解決することを目的とした日本のソーシャルビジネスの導入の実態をもとに、中国での今後を考える。

授業では、生徒に、次のような発問をし、ワークシートに書かせた。

- 世界人口は何億人いると思いますか？
- 日本と中国の人口数と世界順位を書きましょう。
- 中国の留学生(4名)に「一人っ子政策」の実施状況を紹介してもらいます。ワークシートの表に分かったことを記入して下さい。

- ・兄弟の数
- ・出身地(農村、都市)
- ・「一人っ子政策」の実施状況はどのくらい厳しいか
- ・中学校の時、お友達は何人兄弟であったか？
- ・「一人っ子政策」をどう思うか？

地図:大学院生の出身地



- 「一人っ子政策」について考えたことをワークシートに書きましょう。
  - 日本の人口ピラミッドの2010年10～14才と2050年50～54才のところを書きましょう。
  - 「一人っ子政策」によるメリットとデメリットを考えましょう。
  - 「中国は『一人っ子政策』を続けていってよいと思いますか？」
  - ソーシャルビジネスの話聞き、少子高齢化問題の解決について考えた事を書きましょう。
- ワークシートの分析から、1時間目は、留学生の出身地における「一人っ子政策」の話積極的に聞き、考えていることがわかった。具体的には、農村では一人っ子政策は厳しくないけど都市は厳しいことや、都市では1人でも農村に2～3人いたらあんまり効果がないことを記していた。
- 一人っ子政策については兄弟がいた方が楽しいことや命の問題であることから反対とする意見や、一人っ子政策の効果を認めつつも緩めた方がよいという意見が大多数であった。少数ながら中国の人口増加を重視して賛成の意見もあった。
- 2時間目の日中の人口ピラミッドを比較し、一人っ子政策のメリットとデメリットを考察した



写真 中国の一人っ子政策を説明する様子

上で、一人っ子政策の継続を議論した場面では、賛成派が増加した。その理由として、お金がかかることや品不足になることや食糧不足になるこ

となどを示していた。また、実施する期間を決め、人口の変化に対応した「一人っ子政策」の継続を記していた生徒もいた。

このように、事実をもとに生徒の考え方も変化していることがわかった。また、少子高齢化問題を解決する日本のソーシャルビジネスを紹介することで、生徒は中国の社会問題に対して興味を持ち、中国でも導入する必要があると考えた生徒がいた。

今後も継続して、中国と関わる異文化理解のテーマについて、中国の実態に基づいた単元を留学生ととともに開発していく予定である。

### 3. 北立誠小学校2年生を対象とした生活科の町たんけんの支援

(永田成文)

#### 【目的】

三重大学内のどこを案内するかについてグループで計画をたて、実際に児童がどのようなところに興味をもったのかをつかむ。また、生活科の町たんけんを支援することにより、適切な支援のあり方をつかむ。

#### 【概要】

2012年度に、小林千栄子教員を窓口として、北立誠小学校2学年の生活科の町たんけんの一環として、三重大学たんけんの支援を生活教材研究の授業の中で行った。2学年が3クラスでそれぞれ6グループとなっていたので、生活教材研究を受講している学生約40名の学生を18グループに分けて対応した。

永田が担当している生活教材研究の3回分を次のようにすすめた。

第1回 6月6日(水)

○学習指導要領を比べて、生活科と社会科の校区探検の違いを考える。

○実際に三重大学の探検・体験をして、改めて発見したところを確認し、計画を立てる。

第2回 6月13日(水)

○チームの探検・体験計画にそって、三重大学たんけんの支援を行う。

○たんけんの支援で気をつけていたことや生活科の学習のすすめ方で重要な点を考える。

第3回 6月20日(水)

○社会科の流れをくむ項目、新しく重視されてきている項目に着目して、生活科の変遷を確認し、たんけんが社会科の流れをくむことをつかむ。

○低学年社会科と生活科のそれぞれの良い点を考える。

第1回で、実際に生活教材研究の受講生に、グループごとに三重大学内で探検・体験ができることを調査させ、計画を立てさせた。学生はいままで気づかなかったスポットを子どもの視点から再確認していた。第2回はたんけんの支援を実際に行い、児童の興味・関心の高まりによる行動や実際の対応の仕方を学んだ。支援のふりかえりを行うことにより、今後のたんけん支援で改善すべき点をグループで確認し合った。第3回で生活科の変遷をとらえていくことで、社会科の流れを組むものが校区探検であることを確認し、活動とともに社会認識の形成を意識することができた。

探検や体験場所はそれぞれのグループで決定させた。昨年度の反省から、1つの場所での時間をとるようにアドバイスした。主な場所として、教育学部棟(中庭)、図書館、家畜飼育小屋、運動場、食堂、三翠ホール、三翠館、環境情報科学館、体育館、翠陵店、190番教室、花壇、生物資源学部などから5つ程度選び、ルートを決めていた。



写真 探検後の学生の対応の様子

たんけんの振り返りで、学生は支援について、子どもの興味・関心に応じた探検場所の設定や時間配分、児童との積極的な関わり方の必要性を記述していた。

以下は代表的な学生の意図と感想である。

「子どもの興味がありそうなところや普段入らないところを計画した。体感することから学べるように気をつけた」「私たちが歩くスピードより速い子も遅い子もいる。気づいた点をたくさん書く子や書かない子もいる。子どもによって興味はまちまちである。その分、子ども達をまとめるのがたいへんであった。」

2年生の児童は、三重大大学を探検・体験し、三重大大学の広さや池や、家畜や風力発電があったことなどに驚くとともに、学生に案内をしてもらったことが嬉しいと同時に気づきを高めていた。

今後、生活教材研究の時間の中で、より学生の教育実践力が育成できる方策を考えていきたい。

#### 4. 西が丘小学校6年生を対象とした社会科の連携授業の実施

(永田成文)

##### 【目的】

教育実習で実践した授業を再構想し、実験授業を行い、成果と課題を分析することで、目的・内容・方法を踏まえた授業実践力を身につける。

##### 【概要】

三重大大学教育学部社会科教育講座では、三重大大学教育学部と一身田・橋北地区連携の一環として、平成25年度から4年次後期に導入の予定である教職実践演習を見据えて、西が丘小学校の先生方と協力して授業実践を行った。この授業実践の連携は平成22年度から継続している。これは、学生の授業実践力をみがくとともに、担当教員の教材研究を再考する機会として位置付けている。

本年度は、西が丘小学校から、6年社会科の幕末以降の授業を行ってほしいという依頼を受け、

黒船来航(1時間)について、教員の指導の下、3年次9月と4年次6月に教育実習を経験している4年生が指導案作成し、授業実践に望んだ。3年次の教育実習で社会科教育講座の学生が開発した黒船来航の授業をベースに、基本の流れ(授業過程や主要教材)は変えないで指導案を改善した。4クラス分の指導案を各クラス担当の4年生がそれぞれ作成し、授業を実践した。

田中博子教員を窓口とし、10月1日(月)の1限に6年2組、2限に1組、3限に4組、4限に3組で実施した。授業後に、1時間程度、学生と教員を交えて授業の反省会を行った。授業実践内容は小単元「開国と幕府政治の終わり」3時間に位置付き、本時(2/3)は開国した理由について話し合う場面であった。本時は、教育実習で使用し

た教材をもとに基本となる発問と教材を決め、それぞれ授業実践を考えた(4通りの指導案)。教材は教育実習で使用したものを活用した。次に、基本形に近い第3時の指導案を示す。

本時「黒船来航を考える」

1. 目標 黒船来航が日本の開国につながる大きな出来事であったことを絵から読み取り、当時の幕府の人の立場に立って黒船来航への対応について考えることで、日本が江戸時代の外交政策で200年以上続いていた鎖国を終え、アメリカと条約を結んだことを理解する。
2. 準備物 日本地図(資料1) 黒船来航の絵(資料2) ペリーの写真(資料3)  
日本船(千石船)と黒船(サスケハナ船)(資料4) 大砲の写真(資料5)
3. 学習過程(45分) ☆当日は短縮授業で40分

学 習 活 動	指導者の主な働きかけと予想される子どもの反応等
<p>1. 開国の絵について話し合う。</p> <p>2. 開国の絵から当時の人の立場に立って黒船来航について話し合う。</p>	<p>○「鎖国ってなんですか？」</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・外国と貿易をしない ・外国と仲良くしない</li> <li>・幕府が貿易を独占する政策 ・キリスト教を追い払う</li> </ul> <p>●日本地図を提示し、地図から江戸時代の外交政策の様子と貿易場所、国を確認する。(資料1) 幕府の管理下においてオランダと中国の2カ国のみ貿易していたことや貿易場所は定められており長崎の出島のみ貿易であったことを確認していく。本時では江戸時代後半の日本と外国について学習することを伝える。(5分)</p> <p>○黒船来航の絵(資料2)を黒板に掲示し、「この絵を見て気づいたことをノートに書こう。」と問い、5分間時間を取る。(15分)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・子どもたちは次のようなことを言うだろう。</li> </ul> <p><u>「黒い船(軍艦)が三隻ある。」(4隻) 「小さい船(見回り船)がある。」</u>  <u>「黒い船がこっちに向かっている。」 「日本の船が黒い船に向かっている。」</u>  「黒船来航。」  「米俵を運んでいる人がいる。」  <u>「大砲が海に向けられている。」</u>  「戦をする格好をしている人がいる。」  <u>「全体的に人々はあわてている。」</u></p> <p>大きい船はアメリカの船(軍艦)、小さい船は日本船であることは押さえる。</p> <p>○ペリーの写真(資料3)を黒板に掲示し、「どんな人でしょう？」と問う。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・子どもたちは「ペリー」「軍人」「司令官」と言うだろう。</li> </ul> <p>●黒船ペリーが1853年日本に来航した絵であることを伝える。また、アメリカは捕鯨の食料と燃料の補給基地となるよう開国を迫ってきたことを伝える。</p> <p>●ペリーが来航した場所も地図で押さえる。出島ではなく、幕府に近いところ(浦賀)に挑発的に来た。</p> <p>○日本の船の大きさと黒船の大きさ(資料4)を黒板に掲示し、  「ある日このような大きな船が幕府近くに現れたら幕府の人たちはどう思っただろう？」と問う。(児童の意見から船に着目させる)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・「慌てる。」</li> <li>・「びっくりする。」「驚く。」</li> </ul>

	<p>・「戦う」「ペリーの要求を受け入れる」</p> <p>●当時の人達も驚き、大騒ぎしたことを伝え、資料2の人々の様子を見て人々があわただしく動いていることを確認する。</p> <p>○絵の中の大砲に着目させ、「何のために準備されているのだろう。」と問う。資料5を提示。</p> <p>・「攻撃されないため。」「追い払うため。」「威嚇。」「戦うための準備。」</p>
	<p>◎「このような大きな船が来たとき、幕府は大砲を撃とうと考えたでしょうか？」と問う。(10分)</p> <p>●子どもたちは「撃とうとした。」「撃とうとしてない。」の二つの意見を言うてくるだろう。どうしてそう思うのか理由も考える。</p> <p>「撃とうとしてない」</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・「大砲を撃ったとしても勝てなさそう。」</li> <li>・「船の大きさからアメリカの方が強い。」</li> <li>・「慌てているから無理。」 ・「食料くらいあげてもいいから。」</li> </ul> <p>「撃とうとした。」</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・「撃たないと侵略されてしまうから打った。」「日本を守るため。」</li> <li>・「食料や燃料供給だけでなく、侵略されてしまうかもしれない。」</li> <li>・「撃たずに何もしないより打った方が良い」</li> </ul> <p>●幕府は、ペリーの開国要求の国書を受け取り一年後に返事をする約束し、一度帰ってもらった。</p> <p>○日本（幕府）はこのあとどのような対応を取っていったらう？</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・「アメリカと仲良くする。」「言うこと聞く。」「貿易をする。」</li> <li>・「要求を断り、戦う。」「今まで通り、長崎だけの貿易をする。」</li> </ul> <p>●いろいろな意見はあったが当時の幕府も開国しようと考え、1854年にアメリカと日米和親条約を結び、要求を受け入れ、また下田と函館の港を開き、貿易を始めたことにより鎖国が終わったことを伝える。(下田と函館は地図で場所を確認)</p>

○資料1 日本地図 省略

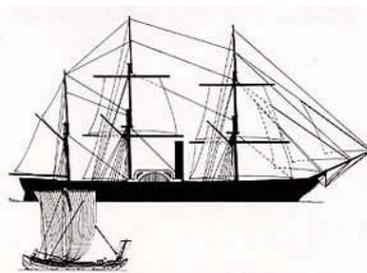
○資料2 (黒船来航の絵)



○資料3 (ペリーの写真)



○資料4 (日本船と黒船の比較)



○資料5 (大砲の写真)





写真 2時の授業の様子

連携校の先生方から次のようなアドバイスを頂いた。

○指導案の計画通り進めることができ、児童の視線も黒板に集まっており、興味が持続できていた。楽しい授業にしようとしていただいたことは、児童の心にとてもよく響きました。教科書の挿絵を拡大した掲示物や、黒船と日本の船の大きさの比較は子ども達の関心を高めていた。黒船と日本船の大きさの違いを挿絵で示し、アメリカの船が来たことの驚異をイメージすることができた。

△発言者と教師だけのやりとりだけで進んで行かないように注意すると、たくさんの児童が理解できる。机間巡視をした時に、発表させたい意見があったとしたら、挙手していなくても指名することもあります。浦賀が江戸に近いこと、出島と浦賀は遠いことを日本地図の位置確認

から気づかせることができる。主発問の「大砲を撃とうと考えていたか」が、「撃とうとしていたか、していないか」と変わってしまった。学生は次のような反省と課題をもった。

○授業の中で子ども達とのやりとりを楽しめるや、子どもの発言に対し、もっと対応できる力が必要である。一つの資料をどう使うか、どこまで読み込むかで児童の対応が変わるので、教材研究を深くする必要がある。資料の提示の仕方、授業内での児童に対する発問、声掛けの仕方はもっと力を身につける必要がある。主発問に持っていくために押さえるポイントに気をつけ、授業を一つの流れにする力が必要である。児童に資料の読み取りを促す力、予想外の児童の意見に対応する力、コミュニケーション力が必要である。

4クラスで授業実践を行い、お互いの良い点を認め合い、先生方にアドバイスをもらうことで、時間配分、資料提示などの授業実践力が高まった。

この実践は、一昨年度と昨年度の教育実習の経験や専門知識を活用して1人の学生が実施した実践とともに、複数の学生が試行錯誤・切磋琢磨して授業づくりを行うという教育実習後の授業実践力の育成のモデルとなりえる。

## 5. 北立誠小学校1年生を対象としたオーストラリアとの遠隔会議の実施

(永田成文)

### 【目的】

生活科の学習の一環として、遠隔会議でクージーの友達に自分たちの生活のことを伝え、相手の生活を聞くことができる。

### 【概要】

平成22年度に生活科の勉強として、クージー小の友達に学校での生活を伝えた。今回は、クージー小学校の副校長先生のリンダ先生が再度、クージー幼稚園年長と北立誠小学校1年生で遠隔

会議を行いたいとの依頼があり、お互いに学校と家での生活について伝え合うことになった。

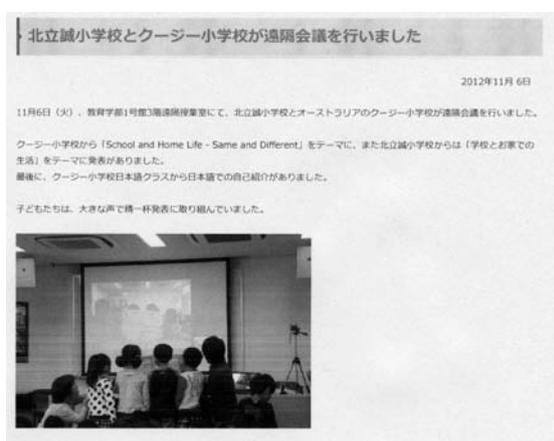
低学年同士でお互いの子どもにとっては初めての試みなので、難しいテーマではなく、生活をテーマとした。また、お互いの児童がお互いの言語を用いて、お互いに通訳をたて、通訳を通して伝え合うという形式をとった。

遠隔会議の経験のある西村学教員を窓口として打ち合わせをし、2012年11月6日に実施した。

遠隔会議の流れは次の通りである。



写真 英語タイムについて説明する様子



資料 三重大ホームページ 2012. 11. 6

流れ：

- クージー小学校(幼稚園最終学年) 20分  
『School and Home Life - Same and Different』  
パワーポイントを使用。23 人の子どもが名前

を紹介後、簡単な発表をする。

"Heads, shoulders, knees and toes" を歌う。北立誠小は日本語で歌う。

- 北立誠小学校 1 年生 20 分

『学校とお家での生活』

ボードを使用。グループになって発表する。学校とお家での生活を 3 クラスで分担して相手に伝える。ボードに写真や絵や言葉(英語の単語)を書き、日本語で発表

- クージー小日本語クラスの発表と応答 20 分

午前クラス：どんな日本語を勉強しているか。

歌の発表など

午後クラス：日本語での自己紹介(質疑応答の形で相互に代表者 4 人)

1. お名前は何ですか。
2. 何歳ですか。
3. お誕生日はいつですか。
4. 好きな科目は何ですか。
5. 何になりたいですか。

児童は、クージーの発表の中盤あたりから聞くことが難しくなった。また、自分たちのグループの発表はきちんとできたが、友達のグループの発表を聞くことができない児童が見られた。クージー小の日本語の発表はきちんと聞いていた。

今後、低学年児童が集中力を持続できるような遠隔会議の流れを再考していく必要がある。

## 6. 北立誠小学校 6 年生を対象としたオーストラリアとの遠隔会議の実施

(永田成文)

平成 20 年度より、小学校の外国語活動における遠隔会議を活用した ESD (持続発展教育) の学習を行っている。本年度は北立誠小学校 6 年担任駒田秀樹教員と連携担当の向井潔教員を窓口として連絡を取り合い、実践した。

### 【目的】

身近な地域の防災活動や外国での防災活動を

伝え合うことにより、異文化コミュニケーション能力を育成するとともに地球市民として持続可能な社会を形成するための行動の変革を促す。

### 【遠隔会議までの取り組み】

《北立誠小学校での取り組み》

- ①消防署で地震体験
- ②防災の話を聞く(防災すごろく)

③自分の家の防災対策調べ

④通学路の防災：どのようなことを調べたか  
危険箇所調査(6月26日支援学生30名)  
※学校行事(総合的な学習の時間)での防災教育=避難訓練6/12(火)(総合文化センター)  
《北立誠小学校と三重大学との連携》9~11月  
○地理教育としての地図を使った防災授業1h  
講師：日本女子大学 田部俊充

日時：9月10日(月)6限(14:35-15:20)  
場所：北立誠小学校会議室

○自然地理からの地域の防災実験授業2h  
講師：三重大学 宮岡邦任

日時：10月11日(木)5-6限(13:35-15:20)  
場所：三重大学教育学部多目的室・中庭

○社会科教育E S Dの視点からの防災授業1h  
講師 三重大学 永田成文

日時：10月15日(月)6限(14:35-15:20)  
場所：北立誠小多目的室

○英語コミュニケーション指導3h  
講師 三重大学 荒尾浩子

日時：11月9日(金)4限(11:35-12:20)  
11月14日(水)3/4限(10:45-12:20)  
場所：北立誠小多目的室

【概要】

北立誠小学校6年生31名のテーマは『家庭・学校・地域の防災』で、児童は ○地震多発(津市も起こる) ○家で見つけた危険箇所 ○家で工夫している防災対策 ○非常持ち出し袋(中味) ○学校の防災(避難訓練・非常食) ○地震体験 ○防災すごろく ○通学路調査 ○町の防災 ○日本の防災などをチームに分かれて発表した。

また、クージー小学校シニア(5・6年)Dクラスのテーマである『ファッション・食べ物・絵画(海岸)』についても5分程度話し、お互いのテーマについて深めることにした。

遠隔会議は次のように実施した。

○遠隔会議日時:2012年11月20日(火)11-12:00

○遠隔会議場所：三重大学教育学部遠隔授業室

○遠隔会議言語：英語(ただし、Coogeeの発表は適宜日本語に通訳者が通訳する)

○遠隔会議形式：8グループ(4人)×2分

※1グループPower point4枚程度：児童と話し合い教員が作成。

以下は避難訓練のパワーポイントの例である。地図を使って高所に移動したことを伝えている。



We evacuated to the location of the 22m elevation.



○遠隔会議進行

：あいさつ(5分)

：北立誠プレゼン『家庭・学校・地域の防災』(25分)、うち5分は『家庭・学校・地域の防災』Coogeeプレゼン、うち5分は質疑応答

中日新聞 防災実験授業の様子の報道

- : クージープレゼン『ファッション・食べ物・絵画(海岸)』(25分)、うち5分は『ファッション・食べ物・絵画(海岸)』北立誠プレゼン、うち5分は質疑応答
- : あいさつ(コメント) (5分)



写真 地域の防災を説明する様子

6年生は総合学習で勉強してきた内容をきちんとクージー小学校に伝えることができた。また、クージー小学校のテーマについても日本の視点から発表することができた。

本年度の成果として、お互いにテーマについての発表を行うだけではなく、お互いのテーマについて学習し、質疑応答ができたことが挙げられる。また、児童の防災に対する理解や意識、コミュニケーション能力が高まった。

課題として、遠隔会議までの準備に時間がかかったことである。特に、日本語から英語に翻訳すること、発音する場面のスリム化が必要である。また、6年生の学習過程の中に遠隔会議を計画的に位置付けることが必要である。

## 7. 北立誠小学校3年生を対象としたオーストラリアとの遠隔会議の実施

(永田成文)

平成22年度より、小学校の外国語活動における遠隔会議を活用したESD(持続発展教育)の事前学習を、同じ児童を対象として行っている。本年度は北立誠小学校3年担任の小林勇斗教員と連携担当の向井潔教員を窓口で連絡をとった。

### 【目的】

身近な地域の様子を外国の友達に伝えることにより、地域理解を深めるとともに異文化コミュニケーション能力を育成する。

### 【遠隔会議までの取り組み】

《北立誠小学校での取り組み》9～11月

- ①人に優しいまちづくりの調査(9・10月)
  - ・まとめ
- ②遠隔会議に向けたグループ分け・グループ発表指導(11月)
  - 《北立誠小学校と三重大との連携》9～11月
- 地理教育の地図を活用した防災授業1h
  - 講師：日本女子大学 田部俊充
  - 日時：9月10日(月)5限(13:45-14:30)
  - 場所：北立誠小学校会議室

○社会科のユニバーサルデザインの授業1h

講師：三重大 永田成文  
 日時：11月9日(金)5限(13:45-14:30)  
 場所：北立誠小多目的室

○コミュニケーション指導1h

講師：三重大 荒尾浩子  
 日時：11/21(水)5限(13:45-14:30)  
 場所：北立誠小多目的室※事前英文データ添削

### 【概要】

北立誠小学校3年生47名のテーマは『人に優しいまちづくり』で、児童は○障害を持った人への配慮(スロープ) ○外国の方への配慮 ○高齢者への配慮 など2クラス6チームに分かれて発表した。クージー小学校シニア(5・6年)Rクラスは『Celebrating the Australian Way!』をテーマとして発表した。お互いの発表に対してお互いに調べ、簡単に発表した。

遠隔会議は次のように実施した。

- 遠隔会議日時:2012年11月28日(水)11-12:20
- 遠隔会議場所：三重大教育学部遠隔授業室

○遠隔会議言語：日本語と英語(お互いの言語で発表する、お互いに通訳者をつける)

※3年生は簡単な英語(単語・文節)を使って伝える。日本語と英語を交えて。

○遠隔会議進行予定

☆当日はトラブルがあり Coogee の発表が先：  
あいさつ(5分)

ヘッドショルダーの歌(3分)

：北立誠発表(20分) 人に優しいまちづくり

Coogee 発表(5分) 人に優しいまちづくり

質疑応答(5分) ※主にクージー小からの質問に答える

：Coogee 発表(20分) 豪の年間行事や祝日

北立誠発表(5分) 日本の年間行事や祝日

質疑応答(5分) ※主にクージー小に質問する

○遠隔会議形式：12グループ(4人)×2分

※1グループ Power point 2枚程度：主に教員が作成。

クージーの生徒は、Special days celebrating Australian culture including Valentine's Day, Book Week, Science Day, Australia Day, Christmas Day, New Year's Eve, Mother's Day, Father's Day について発表した。これらは生活に関わるものであったので児童は真剣に聞いていた。

以下は人にやさしいまちづくりとして、県立図書館における外国人への配慮のパワーポイントの例である。



以下は人にやさしいまちづくりに関わり、人そのものにやさしく接するパワーポイントの例である。



以下は、クージー小の人にやさしいまちづくりとして、シドニーでの多文化社会における配慮のパワーポイントの例である。



写真 クージー小へ手話を披露する様子

本年度の成果は、社会科の学習で勉強してきた内容を意欲的に大きな声できちんとクージー小学校に伝えることができたことである。しか

し、機会の不具合でパワーポイントデータを活用して相手にわかりやすく伝えることができなかった。クージー小学校の祝日や行事については、パワーポイントのデータと通訳をもとに日本と比較しながら聞くことができた。

課題として、時間の設定がある。60分で設定したが、クージーの発表の通訳の時間がかかり、20分程度時間をオーバーしてしまった。あらかじめ通訳の時間を多めにとって会議の進行を決定する必要がある。また、相手の児童の選定が挙げられる。バレンタインデーなどは3年生と6年生では興味・関心や行事に対するとらえ方が異なっていた。最後に通信機器のトラブルへの対応である。原因不明の理由で北立誠のパワーポイントデータを相手に伝えることができな

かった(会議後、メールでパワーポイントの資料を送った)。このような事態になると、英語と日本語(通訳してもらう)の発音に頼るしかなくなる。今回、写真で示したように、手話を入れたので、動作からクージー小の児童も伝えたいことを理解できた。あらかじめパワーポイントのデータを交換できるように計画的に準備していく必要がある。

3年生は1年生の時から遠隔会議を行っており、発表自体は堂々としていた。今回、英語の簡単な発音が入ったが、グループ全体で声を合わせて発音することができた。

今後、低学年と高学年を結ぶ中学年のESDを内容とした遠隔会議を活用した外国語活動のカリキュラムを改善していく必要がある。

## 8. 一身田中学校1年生を対象としたキャリア教育への支援

(山根栄次)

### 【概要】

#### ・連携事項

第1学年の総合学習におけるキャリア教育への支援。特に、山根の開発した起業家教育プログラム「会社をつくろう」を生徒が実施するに際して、指導される教員と活動する生徒に対して助言をした。

#### ・具体的な連携・支援

<10月29日(月)午後>

一身田中学校体育館において行われた、1年生の全学級(4クラス)の全グループ(会社)が試作した商品についての生徒によるプレゼンテーションを聞くとともに、それぞれの

商品のよいところ、改善するとよい点、アピールすべきところについて具体的にコメント・アドバイスをした。

<11月24日(土)全日>

この日に、京都大学の百周年時計台記念観2Fで行われた、トレードフェア実行委員会主催の「バーチャルカンパニー・トレードフェア 2012」に一身田中学校の一年生のグループが「一身田カンパニー」の出店をするに当たり、現地に山根も出向き、生徒たちに売り方や商品の並べ方などについて助言をするとともに、生徒たちを激励した。

結果として、一身田カンパニーは、「スチューデント賞」を受賞した。

### 3. 数学教育

#### 数学教育講座の取り組み

中西正治 田中伸明

#### 1. 一身田小学校・白塚小学校・栗真小学校・北立誠小学校・南立誠小学校との連携による「教育実施研究基礎」

##### (1) 目的

数学教育講座が取り組む「教育実地研究基礎」は、「学生が教育現場に入って、子どもの学習支援や、教員の教育アシスタント活動を行うことにより、子ども理解、学校理解を深め、教職への意欲を高めること」を目的としている。教育学部学生にとって、1年次から「教職の基礎」を身をもって学ぶよき機会となるものである。

##### (2) 概要

本年度の「実地研究基礎」(担当田中)では、一身田小・白塚小・栗真小・北立誠小・南立誠小の5つの学校にお願いし、数学教育講座1年次生14名一人ひとりが、いずれかの小学校において「毎週1時限」を担当させて頂いた。本年度の実績としては、一人当たり約22回、のべ308回の研修を行った。

なお、津市輝きプロジェクト「輝く学校づくり」

推進事業の補助員を務め、先生方の研究授業やその事後研修会にも参加させていただき、学校現場での授業づくり研修の体験もさせていただいた。

さて、通年の「毎週1時限」の研修の内容は、算数の授業のサポートに限らず、他教科の評価テストの丸付け、直しや、特別支援学級での活動支援、プールなど体育の授業サポート、音楽科のリコーダー演奏の支援、家庭科などの実習支援、本の読み聞かせ、運動会などの学校行事への参画、清掃活動など、多岐に亘る。加えて、休憩時間には児童と遊び触れ合うことで、学校現場における「児童の世界」を垣間見る機会も与えてもらった。

学生にとっては、大学入学直後でありながら、「未来の教師」としての自己を重ねつつ、期待と不安を胸に「実地研究基礎」は始まる。

2012年度の取り組みの外郭は以下の表のとおりである。

学校	世話係の先生	学生数	打合せ	期間
一身田小	山本朝香 先生	4人	5月10日	(前期) 5月17日～7月13日 (後期) 10月1日～1月31日
白塚小	高須昌子 先生	3人	5月1日	(前期) 5月10日～7月13日 (後期) 10月1日～1月31日
栗真小	川辺健治 先生	4人	5月8日	(前期) 5月10日～7月13日 (後期) 10月1日～1月31日 ※10月19日「輝きプロジェクト事業」
北立誠小	向井 潔 先生	1人	5月15日	(前期) 5月17日～7月13日 (後期) 10月1日～1月31日
南立誠小	若林俊子 先生	2人	5月17日	(前期) 5月17日～7月13日 (後期) 10月1日～1月31日

「打合せ」では、大学の担当教員（田中）が学生を各小学校に引率し、校長先生、教頭先生、世話係の先生、お世話になる学級・科目の先生方とのミーティングを持ち、諸注意を与えるとともに、担当する学級や支援の内容を決定した。なお、期間が設定されてはいるが、この期間以外にも活動をさせてもらう学生もいた。

「教育実地研究基礎」での学びの質を高めることをねらい、「図1」のような「記録ノート」を作成し、学生は自己評価を行なった。この「記録ノート」を研修の回ごとに大学の担当教員に提出し、大学の担当からは、指導・助言としてコメントを返す。また、前期と後期の終わりには、各担任の先生方にもこのノートを見ていただき、学生の活動に対し、丁寧なご指導を頂いた。

なお、このノートは、「学びのあしあと」として、連携支援室 I に保管される。

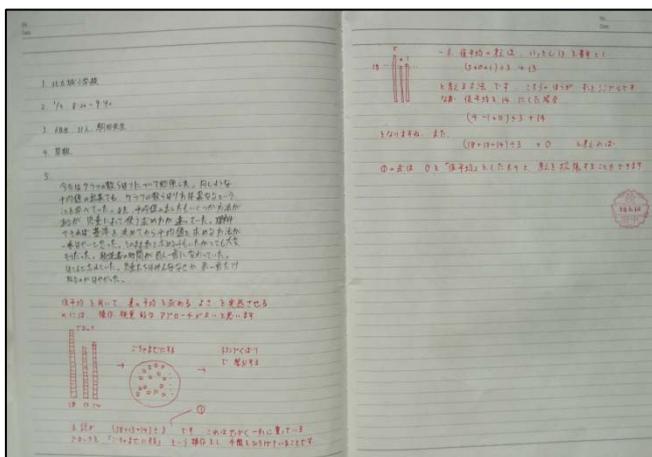


図1：記録ノート

することで多くのことを学びました。

教える側として初めて授業に参加して、子供たちとどう接してよいか分からなかったり、子供たちに注意した時に聞いてくれなかったりなど、戸惑う部分もたくさんありました。しかし、先生方の助けもあり、子供たちとの触れあい方や、子供たちの指導の仕方などを、少しずつ学ぶことが出来ました。

算数だけでなく、他の教科の授業や、丸つけ、運動会の練習など、授業以外のことにも参加させてもらって、指導の仕方や、教えることの難しさ、教師の大変さを感じました。しかし、子供たちと触れあっている時間はとても充実していて、子供たちと接することの魅力を感じました。

教育実地研究基礎で子供たち、先生方から多くのことを学びました。これから学んだことを活かしていきたいと思います。

(井上・日置・松本・鈴木)



写真1：一身田小にて

### (3) 学生の感想

以下、「教育実地研究基礎」における活動に対しての学生の感想文を紹介する。

#### 《一身田小学校》

私たち4人は、一身田小学校に行かせていただきました。担当するクラスや教科は違いますが、それぞれの場所で子どもたちと接し、授業に参加

#### 《白塚小学校》

私たちにとって、この「教育実地研究基礎」は、「教師」という職業に、教える側として接する初めての体験でした。

最初は、緊張して子供たちに接するのもしづかなく、授業中に質問をされても、戸惑い、うまく説明できませんでした。また、特別支援学

級などでは、子供たちの集中力が途切れてしまったり、内容が分からなくて、勉強から意識をはずしてしまった時など、うまく勉強に気持ちを誘導したり、気持ちの切り替えなどもできなかったりしました。さらに、昼休み明けの授業などで、昼休みの遊びの空気から勉強への切り替えをさせなければなりません、注意すべきところでも強く注意できずに、なかなか切り替えさせることができず、先生の力をお借りする場面などもありました。このように、最初は、失敗の連続でした。しかし何回も参加するうちに子供たちの意識の切り替えや、各々の個性なども把握していき、最初に比べたら、徐々に先にあげた問題も対処できるようになっていきました。

この「実地研究基礎」では、子供たちには様々な個性があり、その個性を理解してうまく授業へと誘導してあげることの大切さが、改めてわかりました。実際に教える側の立場から子供たちに接することで、教師としての現場の視点を知ることができました。この経験を自分たちの未来へと活かしていきたいと思います。

(増田・岡村・松井)



写真2:白塚小にて

### 《栗真小学校》

私たちは栗真小学校に行き、大学の授業では体験することのできない現場での教育というものに触れることができました。

算数の授業の中で、丸付けをさせてもらったりする時や、分からない子に教えてあげたりする時、どのように教えれば子どもたちにとって分かりやすいのか悩むこともありました。そのようなとき、子どもたちがその問題に対してどのように考え、どこで間違えるのか見きわめることが必要であると教わり、「教える」ということがとても難しいことだと実感できました。また上手く教えられてわかってもらえたときには、教師としてのやりがいを感じられると思えました。

私たちは、授業や休み時間だけでなく、「くりまっこタイム」での、絵本の読み聞かせもさせていただきました。子どもたちが興味を持てる本を選び、興味をひきつけられるような読み方をしなければならぬことが、とても難しく思いました。

栗真小学校にて得られたこれらの貴重な経験を、将来活かせるようこれからも日々努力を続けたいと思います。

(廣田・三橋・市川・家城)



写真3:栗真小にて

### 《北立誠小学校》

私は、北立誠小学校に毎週1限の教育実地研究基礎にお伺いしています。北立誠小学校の6年生の算数の授業を、毎週見学させていただき、数学の教員を目指す私にとって、毎回とても参考にさせて頂いています。

最初は、アシスタントと言えど、教える側に初めて立った私には、分からないことも多く、戸惑っていましたが、最近では、先生の授業を参考にし、子どもたちにどのように教えれば理解しやすく説明できるかなどを考え、質問をしてこなくても問題がわからない児童をこちらから見つけ積極的に教えにいけるようになってきました。

また、計算ドリルなども問題の丸付けなどもさせてもらい、そこで子供たちがどのように考え、どこで間違えるのかを見極め、そしてどのように教えるかと、たくさんのことを考えなければならず、教えることがとても難しい事であるとわかりました。しかし、教えることの難しさの一端に触れて、児童が理解してくれたときの喜びも感じることができ、将来役に立つ経験をつませてもらっています。

これから先、自分が教壇に立つとき、この経験をうまく活かしたいと思います。

(黒野)



写真4:北立誠小にて

### 《南立誠小学校》

私はこの「教育実地研究基礎」において、南立誠小学校に行き、講義のような授業ではなく、実際の現場の体験をすることができました。

現場に立って実際に教えるのは初めて経験で、

一回目の時は何をしてもよいかわからず、カタまってしまっていました。

しかし、授業が終わった瞬間に何人もの生徒が回りに来て、積極的にコミュニケーションを取りに来てくれたおかげで、次の回から緊張せずにはいれました。話していくうちにその子達の個性がかなりわかるようになってきて、積極的にコミュニケーションをとってくる子や、そういうのがあまり得意でない子など様々です。そのような個性がとても強い中で、学級を統率していくことの難しさを感じました。

これから先、自分が教師の立場になった時には今回感じたことをいかしていきたいと思いました。

最後になりましたが、「教育実地研究基礎」で、授業に参加させていただいた先生方、本当にありがとうございました。

(松田・山田)



写真5:北立誠小にて

### (5) 成果と課題

この取り組みの総括として、学生が学び取ったことをまとめたい。

まず、子どもに対する先生の日常的な働きかけが、一見教育とは関係がないように見えても、すべて教師の重要な仕事であり、それらが学校運営の重要な基礎を作っていることに対する気づきがあったことである。

そして、授業においては、学習規律を保つことの難しさを知らされ、指導の場面で、厳しさと優しさをどのようにもって児童に接するのか、どの学生も直ちに突き当たる壁であったといえる。特

別支援においては、支援することと自立を促すことのバランスをどのように保つのか、子どもを思う心に加え、子どもの思いと実態を踏まえた指導が必要となることを学んだ。休み時間には、教室内外での児童間のトラブルに対して、素早く適切な対処が求められるのである。

なお、学生とは当然レベルの違いはあれ、現場の先生方も、これらと同様の悩みを持たれていることも感じ取っている。

まさに、「教育実地研究基礎」において、教職には、高い資質と専門性が必要となることを、1年間小学校に通い詰めることで、身をもって体験

し、実学を通して、教職への思いの「高まり」と「深まり」を得たと言えるだろう。

### 謝 辞

末筆ながら、数学教育コースの「教育実地研究基礎」の活動を全面的に支えてくださった一身田小、白塚小、栗真小、北立誠小、南立誠小の先生方には、書面をお借りして、心からお礼を申し上げます。有難うございました。

## 2. 一身田中学校・橋北中学校との連携による学習支援・教育アシスタント活動「教育実地研究」

### (1) 目的

数学教育講座が取り組む数学科教育法で行っている「教育実地研究」は、「学生が教育現場に入って、生徒の学習支援や、教員の教育アシスタント活動を行うことにより、子どものつまずき、数学の授業へのさらなる認識を深め、教職への意欲を高めること」を目的としている。数学の教師を目指す学生にとって得るものは大きい。

### (2) 概要

2012年度も昨年度に引き続き、一身田中学校と橋北中学校で行われた。授業科目「数学科教育法」の受講生の内（数学教育コース学生：17名、情報教育課程学生：12名）が、お世話になった。一身田中学校で14名、橋北中学校は15名であった。

前期・後期を通して、学生それぞれが自分の空き時間を利用し、週に1度（50分）一身田中学校・橋北中学校へ通い数学の授業のアシスタントとして実地研究に取り組んだ。

### 《一身田中学校》

一身田中学校の係りの先生（北岡先生）と本年

度の取組みの打ち合わせを4月5日に行った。

学生の中学校でのオリエンテーションは5月10日に行われ、数学科の教員が紹介され、学生が支援に入る学級が決定された。

実地研究期間は、前期は6月4日から7月13日まで、後期は10月22日から3月まで行われた。期間中には、教育実習や定期テストや三者懇談などもあり、実質的回数は、前期は一人平均4.1回くらい、後期は平均5回くらいであった。

本年度も記録ノートの代わりに、「数学科指導アシスタント フィードバックシート」を利用した。シートへの記入は授業中またはその後とし、必ず授業を行った担当の先生に渡し、授業者の先生からコメントをいただき、次回学生に返却することとした。返却されたシートは、その後大学教員に提出し、大学教員も一言コメントを書き入れ学生に返却し それを大学側の指導とした。学生はアシスタント活動を通して、授業者の授業の進め方（内容論・方法論）だけではなく、学習意欲をなくしている生徒への配慮や対応や私語をしている生徒への注意の仕方など、学習内容とは直接関わらないが、授業づくりに関わってくる大切



<先生に指導を受けている様子>



<教育実習での挨拶、緊張しています>



《橋北中学校》

橋北中学校の係りの先生（高城先生）と本年度の取組みの打ち合わせを4月5日に行った。

学生の中学校でのオリエンテーションは5月25日に行われ、数学科の教員が紹介された。学生が支援に入る学級は学校の状況にあわせ適宜決めていくこととなった。

実地研究期間は、前期は6月4日～7月13日、後期は10月16日～3月まで行われた。実質的回数は、前期は一人平均4.6回くらい、後期は平均6.6回くらいで、のべにして約170回であった。

実地にあたって、本年度からは一身田中学校で行われている「数学科指導アシスタント フィードバックシート」を利用することとなった。シートへの記入は授業中またはその後とし、必ず授業を行った担当の先生に渡し、授業者の先生からコメントをいただき、次回学生に返却することとした。

以下、学生の感想を紹介する。

**教育実地研究**～津市立橋北中学校にて～  
 指導教員：中西正治  
 ポスター作製：宮本宜美

先生 わかりません！

この比例の関係を表を書いてから、グラフを書いてみよう！

少しのヒントを与えるだけで、問題解決への取り組み方も変わることになった。グループ活動を通して、生徒同士で説明しあい、学びを深めていた。

教育実地研究を通して、生徒の理解を深めるためには、教具を用いて説明することの大切さや、授業における生徒の表情を確認しながら授業を行うことの大切さを学んだ。クラスによって、授業での要領が違っているので、説明の仕方を変えたりする工夫が必要なることを知った。この教育実地研究では、たくさんのお話を学ぶことができ、貴重な経験になった。

先生この解き方でいいですか？

先生 この解き方は？

じゃあ、今度は別の解き方でそれぞれといてみよう！

教育実習を通して、授業でのポイントや気を付けることだけでなく、生徒との関わり方、どんな言葉がけや接し方をするのかも学ぶことができた。また、優しいだけの先生ではなく、厳しさも必要であり、けじめをもって生徒と接することの大切さを知った。

<振り返りとこれから> 橋北中学校での実地研究では生徒たちと触れ合うことによって大学で学んできたことが実際の現場でどのように使われているのかを知ることができた。生徒たちは学年やクラスによって大きく異なっていて、支援に入る私たちが工夫する必要がある。クラス全体を見渡しながら授業についていけない生徒を見出し、生徒に声をかける。「何か困っているところはある？」生徒の反応はまちまちではあるが声をかけることで自分が授業で放っておかれていないのだと思っしてほしい。「ここがこうなっているんだよ」と話していく。すると、わかったのだろうか、ある瞬間に子どもたちは「ああ、そうか」などのつぶやきと共にとても嬉しい顔をみる。その表情を見ると、数学が苦手な生徒にとって授業時間が辛い時間にならず、少しでも学びを深める時間になったのだと思う。私たちは授業が辛い時間にならないような支援をしてきた。そしてこれからも引き続きしていく。

数学科 指導アシスタント フィードバックシート

名前	指導日時	指導クラス
大野 知穂	11月9日(金) / 時間	3年 4組

1. 今日の授業内容

相似な図形の演習

相似比  $a:b$   
 面積比  $a^2:b^2$   
 体積比  $a^3:b^3$

2. 自分が具体的に支援したことを書いて下さい。また、関わった生徒がどのようなところでつまづいているか(難しいと感じているか)を書いて下さい。

① 最初に相似比から面積比、体積比を求めるところですぐに答えを出すところをきくと計算で求めようとしていたので「頑張ってるなあ、もつと求めようよ」と言ったら、気が付いたからか「すぐ求めかっていた。全ての解き方を教えてほしいんだ」と思った。

②  $12:9=x:6$   
 $4:3=x:6$   
 のところまでできていたが  
 $3x=12$   
 とやっていた。答えが違っていたので、となりに確認させた。

③  $4:3=x:6$  の比例式  
 $4 \cdot 3 = x \cdot 6$  の計算  
 $3x = 4 \cdot 6$  7 変形する  
 $3x = 24$   
 $x = 8$   
 となりに確認させた。

3. 全体を通じての感想(生徒の反応や授業の様子)

全体的に自分の問題に似たものに頑張っていて、進んでいてまたすぐに取っかかっていた。早めて伸ばすところね

先生が問題の答え合わせをしている時に、「私に賢いなあ！」と褒めているのを見て、ただおつておつてだけでなく前向きな褒め言葉をかけてあげるとモチベーションがあがるのかなと思った。

ヒントを出しているうちに生徒の自信が上がる。この授業で生徒の自信が上がる。この授業で生徒の自信が上がる。この授業で生徒の自信が上がる。

12/15

<学生の感想>

私は、前期・後期の教育支援と教育実習を橋北中学校で行いました。今年の9月に教育実習がありました。実習に行く前と行った後では、同じ教育支援でも、感じる事、考える事、注目す



るポイントなど少し違うものになったり変わったりしました。

一番大きく違うなと感じることは、生徒が私のことを先生だと思ってくれているところです。前期に実習で担当するクラスの授業支援を何回かさせていただきましたが、私が支援で来ていたことをちゃんと知っていた生徒はごく少なかったです。生徒にとっては「毎週この時間にきて勉強を教えてくれる大学生の一人」としてしか認識されていないんだなと思いました。実習を行ったから生徒たちが私のことを一人の先生として見てくれたのだと思います。その後、教育支援に行くと、「あっ、〇〇先生！」と生徒から声をかけてくれたり、机間巡視の際に生徒が質問するときには、前期よりも気軽に質問してきたりするようになりました。

その結果、授業支援にも積極的に取り組むことができ、自分のモチベーションも上がるようになりました。これは実習校と教育支援で行く学校が同じであることの利点でもあるかなと思います。また、実習前に自分の担当するクラスの様子を授業支援という形で見ることができたり、担当クラスでなくても他のクラスの見学でもその学校の雰囲気を知ることができたりして実習に対し不安で一杯であった私にとってはすごく助けになりました。

授業支援では先生方の授業を見学することもできます。教育実習の前と後では、注目して見学するところも変わりました。実際に生徒の前に立って授業をしてみると、うまくいかないことばかりでした。どのようにすれば少しでもわかりやす



い説明になるか。どのように発問すればいいか。限られた授業時間をどのように使うか、また時間配分はいいのか。どのように教具を使えばいいか。など、挙げていけばきりがありません。それまで聞き流していたことでも実際に授業をしてみて初めて気付くことが多くあり、前期はそこに全く気付くことができなかつたのは非常にもったいナかつたなと思います。後期ではこのように、自分がうまくできなかつたことを先生方はどのようにしているのか、自分がしてきたことと比較して授業を見学するようになりました。長年授業をされてきた先生方の授業は、その年月のぶん磨かれてきたものです。授業見学から少しでも自分の足りない部分を埋め、その磨かれた技術を学んでいけたらいいなと思います。

そして、来年再び教育実習があります。そのときに、この教育支援ないし授業見学で学んだことを生かすことができればいいなと思います。

(堀内創太)

### (3) 成果と課題

中学生という学齢期にあたる子どもたちの様子を、授業だけでなく教育実習も含めこの1年間見てきている。机上の勉強だけでなく、その現実を見て、各々が自分自身のこれからの課題をいくつか得られたことは極めて貴重なことである。

「数学の授業をする」とはどういうことなのか。単線的では決してないことがわかり、その要素を色々考えさせられている。特に教育実習後は、授業の見方にも大きな変化がある。教科担当の先生

の教材研究の内容や授業の運び方、生徒の発言の取り上げ方、しんどい生徒への接し方、トラブルに対する対処法など、教育実習以前と比べ、かなり現実的本質的なところまで見る事ができるようになってきている。

教師になれば当然ぶち当たる壁である。教師になるにあたって、そうなればどうしようか、十分に考えておかなければならないことばかりである。このような自覚を持てたことは大きく評価できる。

ただ、学生の課題に対して時間を割き、互いの考えを話し合う機会が持てなかったことは課題として残る。

#### (4) 一身田中学校での取り組み

本年度は、11月14日の校内研究会に向けて、数学科8月30日に指導案検討会を行った。

#### (5) 橋北中学校での取り組み

本年度は具体的な取り組みは持たれなかった。

#### 謝 辞

末筆ながら、数学科教育法の「教育実地研究」の活動を全面的に支えてくださった一身田中、橋北中の校長先生はじめ諸先生特に数学科の先生方には、書面をお借りして、心からお礼を申し上げます。有難うございました。

## 4. 理科教育

本年度、理科教育講座で実施した取り組みは以下の通りである。

1. 一身田中学校における理科と家庭科のクロスカリキュラム（解剖実習と調理実習）の実施
2. 理科教育法受講生による隣接校区との授業連携
3. 一身田小学校における出前授業「じしゃくのふしぎをさぐろう」
4. 一身田小学校における出前授業「光のせいしつ」
5. 西が丘小学校における出前授業「どんぐりのふしぎ」
6. 南立誠小学校の春の遠足
7. 南立誠小学校における出前授業「磁石と豆電球」
8. 栗真小学校・白塚幼稚園・北立誠幼稚園・南立誠幼稚園を対象とした大学キャンパスにおける自然観察

以下に担当した大学教員による活動報告を示す。

### 1. 一身田中学校における理科と家庭科のクロスカリキュラム(解剖実習と調理実習)の実施

(後藤太一郎)

【目的】 中学2年理科で学習する「動物の体のつくりと働き」の単元の中で、食材となる生きた魚の解剖実習を行うことで脊椎動物の基本構造を学ぶとともに、解剖後に調理して食べることで「命をいただいている」という食育の基本を学ぶ。

【概要】 生きたニジマスを使った「解剖&調理」実習を平成18年度より一身田中学校で実施している。企画と学生指導には、理科教育の後藤と家政科教育の磯部准教授があたっている。本年度、

中学校で授業者だったのは理科担当の米村教諭と向井教諭、家庭科担当の中島教諭であり、12月に実施した。すでに基本的な授業プランは確立しており、調理室で解剖と調理を1時間ずつ行うものである。理科の授業者はこれまでにこの実習の実施経験があるが、家庭科の中島教諭は今回がはじめての実施であった。実施には、大学教員と学生が授業補助にあたった。具体的には以下の表の通りである。

実施日	時限	授業者	学生・教員
12月6日(木)	1,2限	米村、中島	理科4年1名、家政4年1名、磯部、後藤
12月12日(水)	1,2限	米村、中島	家政3年2名、理科4年1名、後藤
	3,4限	米村、中島	
12月13日(木)	1,2限	向井、中島	家政M2年2名、4年2名、理科4年1名、後藤
	3,4限	米村、中島	

解剖の補助にあたった理科の学生と、調理の準備や指導にあたった家政の4年生以上は、この実習を経験していたため、授業全体としてはスムーズに進んだ。家庭科の中島先生は、回数を重ねるごとに生命教育の視点からの説明の内容が深くなり、この実習の意義について十分理解した授業であった。

実施日の決定が直前であったために、参加できる学生は多くはないが、生きた魚を扱うことで、生命や食育について改めて考え直す機会になっているようだ。すでに7回目を迎えた実習である

ために、理科の担当者も慣れている点はあるが、連携活動として学生が関わる中で、事前の打ち合わせと事後の反省会は必要であろう。この授業の意味については生徒に十分な指導が行われているようだが、生徒によっては嫌悪感をもつ場合もある。生きた状態でニジマスを扱うには、購入から維持管理にかなりの労力を必要とし、通常は体験できない内容である。この機会を最大限に生かすため、生徒への対応などの改善は今後とも欠かせないと思われる。

## 2. 理科教育法受講生による隣接校区との授業連携

(平賀伸夫、荻原彰)

【目的】 理科教育法では、指導力向上を目的とし、学生が隣接校区の学校（一身田中学校）の理科授業の観察・補助を行っている。以下はその活動及び連携による学生教育の効果の概要である。

### 【概要】

#### 1 授業科目名

理科教育法Ⅰ（前期、指導教員：平賀伸夫、荻原彰）、同Ⅱ（後期、指導教員：荻原彰、平賀伸夫）。

#### 2 受講者数及び学年

理科教育コース3年生13名、技術教育コース3年生3名、数学教育コース2名、大学院技術教育専修1名 計19名。

#### 3 時期、学生の担当時間数

前期：5月上旬～7月上旬（学生1人あたり4～8時間担当し、1回の授業に3～4人の学生が参加した）。

後期：10月下旬～12月（学生1人あたり3～7時間担当し、1回の授業に3～4人の学生が参加した）。

#### 4 活動の対象となったクラス

1年生理科6クラス、2年生5クラス

#### 5 連携の効果

（1）1年を通じた学校現場への参加を通じて、学生の抱く、理科教師の能力観（理科の教師にとって必要な能力についての考え方）は豊富になった。

（2）教育実習を経ることにより、板書等の「一斉授業運営のスキル」の必要性についての意識が高まった。

（3）教材研究の重要性への認識が深まった。

（4）学校現場への参加を通じて学生が得た理科教師の能力観の主要な要素は

①理科についての十分な知識を持ち、興味深い題材の利用を行う能力を持ち、実験・安全管理に習熟しているという理科教師固有の能力

②授業設計者・実施者としての教師の能力

③児童生徒を理解し、信頼関係を築き上げることができるという教師のいわば人間力ともいえるべき能力

という3つである。

（5）教師の持つ理科の知識の重要性については、教育現場への参加前から意識されているが、参加を通じて、より授業に即した形で知識の必要性を捉え直す傾向が見られるようになった。

（6）学校現場への参加により、授業の中での具体的な生徒の姿を念頭に置いて、生徒への対処のしかたを考える意見が見られた。

（7）学校現場への参加を通じて生徒の多様さが実感され、それに対応する力を教師が持つことへの必要性の認識が生じた。

（8）今回行った授業参加は一年を通じて行うものであるため、前期の授業参加と後期の授業参加が教育実習をはさんでおこなわれる。サンドイッチ状の構成になっているわけだが、その中で、前期の授業参加が教育実習に役立ち、教育実習が後期の授業参加に役立つという共益的な構造が成立していることがわかった。

## 3. 一身田小学校における出前授業「じしゃくのふしぎをさぐろう」

(國仲寛人)

### 【目的】

磁石と鉄粉を用いて磁石のまわりのできる磁力線を観察する。そして、2つの磁極の間に引力が働いている場合と斥力が働いている場合で、磁力線がどのように違うのかを調べる。

### 【概要】

平成25年1月31日に一身田小学校において、5時間目と6時間目に、それぞれ3年4組（34名）と3年2組（32名）の生徒に対して「じしゃくのふしぎをさぐろう」と題する授業を行っ

た。3年生は理科の授業で磁石の性質について学んでいる途中であり、磁石の知識の再確認も兼ねて磁石の性質に関するクイズからスタートした。クイズでは磁石につくものつかないものを分類する問題や、地球の極に関する問題を出題した。また、砂鉄を用いた3つの実験を各班で行ってもらい、講師が用意したワークシートに観察した様子をスケッチしてもらった。最後にはスケッチした内容を何人かに発表してもらい、N極とS極が向かい合ったときと、S極とS極が向かい合ったときで、どのように磁力線の様子が違い、それがなぜかを解説した。

#### 【成果】

「はさみは磁石につくか？」という質問には、ほとんどの生徒が「くつつく」と即答する中、何人かの生徒は「はさみのどの部分？」という注意深い質問をし、鉄とそうでないもので磁石につくかどうかを区別しているようであった。

また「スチール缶は磁石につくか？」という質問では、ほとんどの生徒が「つかない」と回答した。缶には磁石につくものつかないものがあることは認識しているようだが、アルミ缶と混同している生徒が多かった。そこでスチール缶に磁石がくつつく様子を演示実験で示した。

「石は磁石につくか？」という問いでは「つかない」と即答する生徒もいる中で、「石によってはつくのでは？」と考える生徒も少なからずいた。そこで各班に磁鉄鉱と磁石を配布し、磁鉄鉱に磁石がくつつく様子を体験させたところ、子供達は大きな驚きをもってその様子を観察していた。

地球の北極と南極には何極があるかという問いに関しては、北極にN極、南極にS極があると答えた生徒が多かった。地球の磁極に関しては教科書ではコラムとして扱うこともあるが、まだ磁石の学習をはじめた間もないせいか、方位磁針が南北を指すことを磁極間に働く力との関連で理解していないと考えられる。そこで方位磁針が南北方向をさす理由を、スライドを用いて解説した。

砂鉄の実験は班ごとに行い、その内容は向かい合った二つの磁石の上にOHPシートを置き、その上に砂鉄をふりかけるというものであった。砂鉄はふりかけやすいように塩を入れる容器に入れたため、生徒達は塩やふりかけをふる要領で楽しく実験に取り組んでいたようである。

実験後に観察した磁力線の様子を黒板に描いてもらい、N極とS極を向かい合わせた場合とS極とS極を向かい合わせた場合について違いを考えてもらった。最後に磁力線の性質と関連させて磁極間に働く力を説明したが、少し内容が難しかったようである。

#### 【課題】

磁石のまわりにはなぜ磁力線が生じるのかという鋭い質問をした生徒がいた。講師は小学校高学年で学習する電気と磁気の関連について簡単に述べた後、磁石内に原子レベルで流れる微小な電気の流れが磁石の磁気を生み出していることを説明した。このような説明は大学生向けの電磁気学の教科書には載っているが、教育現場で指導にあたる教員にとっては、たとえ大学で学習したとしてもすぐには思い出せないであろうし、ましてや小学校の教育現場では物理を専門的に学習していない教員が大多数を占めることを考えると回答に困る質問であると思う。また、もう一人の生徒は「このような磁石に関する知識はどのような経緯を経て発見されたのですか？」という質問をした。大学の教員も教育現場の教員も、個々の知識の整理や、その伝達方法を考えることに時間を取られがちで、それらの知識体系がどのような経緯で組み上げられてきたのかを振り返る余裕がないことがしばしばではないだろうか。このような疑問に答えるためには、定期的に大学教員が教育現場を行き来し知識の伝達を行うこと、大学教員が常日頃から大学レベルの知識を一般向けに説明できるように準備しておくこと、また教員免許更新講習などの機会において大学教員と小中高の教員間で知識の共有を行うことの必要性を感じた。

#### 4. 一身田小学校における出前授業「光のせいしつ」

(牧原義一)

日時：平成 25 年 2 月 28 日

対象：3 年 1 組 (32 名)、3 時限目に実施  
3 年 3 組 (32 名)、4 時限目に実施

3 年生理科の単元「光のせいしつ」に関する内容として、屋外で鏡や虫めがねを使ったいくつかの実験を行って、太陽光（日光）の性質について学習した。

##### 実験 A. 日光による影のでき方の観察

人、建物、木々の影はどれも同じ向きにできること、自分がどんなに動き回っても影は同じ向きにできることを観察して、日光が平行な光であるということを理解した。

##### 実験 B. 鏡で日光を地面（影）へ反射させる

鏡を使って日光を地面すれすれに反射させて日光の光路を地面に映し、光は直進すること、そして鏡を使って光の進路を曲げられることを学んだ。



##### 実験 C. 鏡を使って日光を壁へ集光する

全員で鏡を使って日光を壁の 1 点に反射させて日光を集光し、そこに手を置くと暖かく感じることを体験した。また、デジタル温度計を使って温度の変化を測定し、約 5 分でお風呂の温度まで温度が上昇することを確認した。また、虫めがねで日光を集光して紙を燃やした。これらのことから、日光はエネルギーを持っていることを学んだ。

##### 実験 D. 水と鏡を使って日光を分光し、壁に虹色の光を映す

水を入れた弁当箱の中に鏡を置き、これに日光を当てて反射（分光）させて、壁に虹色の光を映しだした。また、霧吹きを使って小さな虹を作って観察した。このことから、日光の中には、いろいろな色の光が含まれていることを学んだ。当日は晴天で暖かく、日光を使った実験をうまく行うことができた。また、今後同じ実験ができるように、実験方法に関するメモを担当の先生にお渡しした。



#### 5. 西が丘小学校における出前授業「どんぐりのふしぎ」

(平山大輔)

【概要】日時：平成 24 年 11 月 21 日

学年：4 年生全クラス（同時）

西が丘小学校では、どんぐり拾いや、拾ったどんぐりを調理して食べる等の活動が行われており、どんぐりのなる樹木は児童にとって身近な存在である。この授業では、どんぐりを作るカシ類の樹木の性質や、まだ解明されていない奇妙な生態などの紹介を行い、身近な自然現象に対する興

味・関心を一層深めることを目的とした。

最初に、会場に持参したさまざまな樹木の種子（果実）を用いて、どんぐりに限らず木の実には移動するための仕組みが備わっていることを解説した。また、植物によっては、地面をほう茎や根により体ごと別の場所に移るものが存在することを、スライドなどを用いて解説した。さらに、どんぐりに備わる移動手段について解説し

た。児童たちの多くは、普段動かないと思っている植物が「動く」という事実に興味をもった様子で聞いていた。

次に、どんぐりを作る樹木の生態の解説を行った。森林全体の樹木がいっせいにどんぐりを作ったり、いっせいに休んだりする奇妙な現象を、スライドなどにより紹介した。自分たちのすぐ身近

なところに生育するどんぐりの樹木に、実際にまだ仕組みや原因が解き明かされていない現象があることを、児童たちは驚いた様子で受け止めていた。

授業後には、非常に多くの児童から質問の声があがり、児童たちの関心の高さを実感することができた。

## 6. 南立誠小学校の春の遠足

### 【目的】

三重大学を訪れた小学生を対象に、理科教育コースの学生が授業者となって理科の面白さを伝えることを目的とした。

### 【概要】

5月2日に、春の遠足で三重大学キャンパスを訪れた南立誠小学校4年生を対象として実施した。学部の授業「生物学実験」を受講する理科教育コース3、4年生8名が、児童に翼果や堅果な

(平山大輔)

ど多様な形態の果実標本を紹介し、それぞれの形態のもつ生物学的な意味を解説した。高い場所から実際に翼果を滑空させてその様子を観察する際には、児童の多くが歓声をあげて取り組んでいた。

実施後の学生の感想(自由記述式)から、植物の生活(生存戦略)と関連付けた観察を行うことで形態のもつ意味の理解や興味の惹起につながるということを理解できたことが分かった。



## 7. 南立誠小学校における出前授業「磁石と豆電球」

### 【目的】

電気が流れるとなぜ豆電球が光るのかを理解する。磁石と鉄粉を用いて磁石のまわりのできる磁力線を観察する。

### 【概要】

平成25年2月12日に南立誠小学校3年1

(國仲寛人)

組と2組の生徒に対して「磁石と豆電球」と題する授業を行った。3年生は2学期の理科の授業で豆電球について学習済みであり、現在は磁石の性質についての学習に入ったところである。授業ではまず、豆電球が点灯する仕組みについての解説と実験を行った。次に磁石につくものをつかない

ものを分類するクイズを出題し、鉄粉を用いた実験を各班で行ってもらった。

#### 【成果】

豆電球を電池のプラス極とマイナス極に接続すると、回路が形成されて電気が流れるため点灯するという事はほとんどの生徒が認識していた。だが、なぜ電気が流れると豆電球が点灯するかということに関しては、誰もその仕組みを答えることができなかった。講師はスライドを用いて、もの（導体）に電気が流れると必ず熱が発生して熱くなること、更に、ものは熱くなりすぎると光を発するようになることを説明した。その際、スライドに刀鍛冶が熱い鉄を叩いて刀を作る様子を載せたところ、生徒達のほとんどが刀の製法を知らなかったようで、驚きの声が上がった。

フィラメントの温度が上昇することで光を発することを説明した後に、アーテック社の「エジソン電球」という教材を用いてシャープペンシルの芯（フィラメントとして使用）が発光の様子を演示してみせた。生徒達は徐々にシャープペンシルの芯が光を放つ様子を興味深く観察していた。

磁石につくものとつかないものを分類するクイズでは、「スチール缶は磁石につくか？」という質問をしたところ、ほとんどの生徒が「つく」と回答した。スチール缶が鉄でできていることは認識しているようであったが、もう一つのアルミ缶は何でできているかという質問には答えられない生徒がほとんどだった。アルミ缶はアルミニウムからできていることを述べ、磁石がくっつかないことを演示実験で示した。

「石は磁石につくか？」という問いではほとんどの生徒が「つくものとつかないものがある」と

即答した。更に鉄鉱石という言葉を知っている生徒も少なからずいて講師を驚かせた。後から聞くと、校庭で磁石につくものを調べたときに磁石にくっつく小さな石を見つけ、それが鉄鉱石であると習ったようであった。

鉄粉の実験は班ごとに行い、その内容は棒磁石の上にかぶせた OHP シートの上に、鉄粉をふりかけて磁力線の様子を観察するというものであった。鉄粉はふりかけやすいように塩を入れる容器に入れたため、生徒達は塩やふりかけをふる要領で楽しく実験に取り組んでいたようである。中には容器のふたを開けて鉄粉をすべて OHP シートに出してしまい、磁力線を観察できなくなる班もあったが、それでも鉄粉がとげのように宙に向かって伸びる様子をみて、磁力線が立体的に伸びることを観察したようである。

#### 【課題】

授業の最後には質問の時間を設けたが、あまり積極的な質問は出なかった。特に豆電球の原理の説明では、講師からの一方的な説明が多かったこともあり、生徒達は何を質問していいかわからなかったのかもしれない。詳しい説明は多少省略したとしても実験の時間を増やし、生徒に実験結果を発表する機会を与えると、もっと生徒達も積極的になったのかもしれない。また、「砂鉄はどこでとれるのですか？」という質問をした生徒がいた。講師自身の子供時代を思い出しても、磁石をひもにくくりつけて校庭を歩き回り、砂鉄や鉄くぎなどを集めて遊んだことは今になっても楽しい思い出である。是非、海岸や校庭の砂場に磁石を持ってでかけ、磁石につく様々なものを集めて遊んでくださいとその質問に答えて授業を終えた。

## 8. 栗真小学校・白塚幼稚園・北立誠幼稚園・南立誠幼稚園を対象とした大学キャンパスにおける自然観察 (平山大輔)

### 【目的】

自然に親しむ機会の減少にともない、学校園での自然体験学習の重要性は益々大きくなっている。昨年度に引き続き、近隣の幼稚園および小学校を対象として、子どもたちが三重大学キャンパス内の木の実拾いや植物観察を通して身近な自然の多様性に触れること、また、学生が自然観察のガイド役となることを通して自然誌の面白さを伝える能力を養うことを目的とした取り組みを行った。

### 【概要】

10月26日に南立誠幼稚園、10月30日に栗真小学校1、2年生、11月7日に北立誠幼稚園と白塚幼稚園を対象として実施した。実施に際しては、理科教育コースと幼児教育コースの学生を中心に参加を呼びかけた。また、幼児教育コースの吉田真理子先生にもご参加頂いた。

南立誠幼稚園、北立誠幼稚園、白塚幼稚園の活動では、午前10時に講堂前に集合し、キャンパス内の事前に選定しておいた場所で木の実拾いを行い、12時から教育学部横の芝生で昼食をとった後に解散した。栗真小学校の活動では、午前9時半に教育学部前に集合し、キャンパス内の数か所で木の実拾いと観察を行った。11時半頃から人文学部裏の芝生で昼食をとり、午後1時半頃まで採集を行い、活動を終えた。

いずれの活動でも、スタジイ、マテバシイ、アラカシなどのドングリを中心に、多種類の木の実を観察・採集することができ、子どもたちが興味

をもって取り組む様子が見られた。活動後、参加学生に感想のアンケート（自由記述）を行ったところ、「今まで知らなかった身近な植物の名前や特徴、面白さを知ることができました。植物や自然の中で遊ぶ機会の大切さを改めて感じ、今後保育士として働くことができれば、子どもたちが自然に触れる機会を持ちたいと思いました」（4年生）、「実際に自然に触れてみることで、楽しみながら新しい知識を得ることができ、とてもいい経験になりました。私自身も今回のような経験を重ねながら、子どもの自然に対する興味関心を育ててあげられるようになりたいと思います」（4年生）、「自分も子どもたちと一緒に袋を持って、しゃがんでどんぐりを拾ったり、見たことがない木の実について話したり、木の上の方を見上げてみたりなど、子どもたちと同じ行動をすることで発見できることが多々ありました。小学校の先生方もそのようにしていってほしいなと思いました」（2年生）といった感想が得られた。学生たちは自然観察のガイド役を経験したことによって、教師・保育士を目指すうえで身近な自然に関する知識を深めることの大切さに気づけたのではないかと思われる。

豊かな自然を有する三重大学キャンパスを最大限に活用した教員養成ができるよう、次年度以降も取り組みを継続させていきたいと考えている。



## 5. 音楽教育

本年度、音楽教育講座で実施した取り組みは以下の通りである。

1. 一身田中学校および橋北中学校とのコラボ音楽祭・合唱支援の実施（9～10月）
2. 橋北中学校におけるワークショップ（1回）
3. 栗真小学校における研究助言の実施（2回）
4. 栗真小学校における音楽会の開催（1回）

### 中学校の合唱コンクールをめぐって

（根津知佳子）

#### 【自然さ】

毎年9月～10月にかけて一身田中学校および橋北中学校で合唱指導の支援をし、コラボ音楽祭のステージで表現をする、ということが、音楽教育コースの学生にとって＜自然＞になってきている。昼休みや放課後に集まり、4年生がリーダーとなって合唱の練習をすることも、上級生にまじって自転車で両校に通うことも、音楽教育コースの学生にとって＜自然＞なことであり、現場で学びあい＝教えあうという＜文化＞になりつつあることは、これまでの報告でも述べてきた通りである。

一方、私たち教員は、コラボ音楽祭会場での審査・助言等や、発声のワークショップを開催するなど、合唱指導に対しての専門的助言を中心に連携活動を行ってきた。

ところが、今年度の取組に関して学生にとっても教員にとっても、これまでと異なる＜意識の変化＞があった。それは、連携活動が質的な転換期を迎えていることを示唆しているように思える。

#### 【ワークショップ】

9月21日（水）に、橋北中学校体育館において、『伴奏と指揮に関するワークショップ』を実施した。合唱活動において、指揮者と伴奏者は重要な役割を担っている。おそらく中学校の生徒達にとっては、「音楽をなっている人」が伴奏を担当し、「リーダー的な存在の人」が指揮者にな

るといふ傾向があるに違いない。指揮者も伴奏者も、合唱コンクールという重大な場面での表現の責任を抱えるだけではなく、練習においてクラスをまとめるという役割も負うことになる。



#### 【イメージ・運動を共有しよう（兼重）】

大学教員は、「指揮・伴奏の意味」だけではなく、「全員が指揮者と伴奏者と共に感じあうことの意味」をワークショップで強調した。兼重直文教員は、全校生徒を対象に、指揮法に関する基礎的な技能指導を行なった上で、「テンポに乗ること」が音楽表現においてどのような意味があるのかについて考える体験を促した。また、ステージに立つ時の基本的なマナーについての確認も行った。

高瀬瑛子教員は、簡易打楽器を用いながら、「感じあうこと」の意味について考える体験を提供した。身体で相互に反応しあうということが基盤に

なって、感じあうことができるということを理解してもらえたのではないかと考えている。



#### 【身体で、心で、音楽を感じてほしい（高瀬）】

では、今年度、私たち大学教員は、なぜこのようなワークショップを構成したのであるか。おそらく、これまでのコラボ音楽祭における中学生の表現を通して、私たちが伝えたい＜何か＞が明確になってきたのではないかと考える。それは、大学生に対しての指導意識とも共通している。

合唱コンクールという行事には、ドラマが内在している。コンクールである以上、優劣に対する意識が強くなってしまふことを否定はしない。そのことにより、クラスが団結し、時には分裂してしまうことも、そのドラマの重要な要素になるからである。

私たち大学教員は、合唱コンクールを短編ドラマで終わって欲しくないと願っている。その先にある＜響きあう＞という本随に触れたならば、合唱コンクールが終わっても、その体験から得たモノ・コトは、消えることのないものになるはずである。

#### 【学生の意識の変化】

学生は、9月～10月に自転車で一身田中学校や橋北中学校に通っているだけではなく、その他の市内の学校にも通い、いくつかの＜学校文化＞に触れる体験をしている。その中で、今年度に問題意識としてあがったことが2つある。

まず、各学校のコンクールの審査基準の相違である。一生懸命教えれば教えるほど、自分のかかわったクラスには、がんばって欲しいと考えるであろう。審査には、大学教員も専門的観点で関わるが、日常の生徒指導的観点が強い年度もあった。そこで、「音楽教育ゼミナール」では、次のような手順で合唱コンクールの審査について検討し、いくつかの中学校の審査基準を比較する作業を行った。

\*合唱コンクールの位置づけ

\*合唱コンクールの目的

\*合唱コンクールの評価の基準

次に、コラボ音楽祭の客席での態度に関する問題意識も学生から挙げられた。表現者としてだけではなく、鑑賞者・批評者をどのように育てるのかは、文化活動である以上重要な視点といえる。

今年度、多くの学生がこういった課題意識を持った理由として、連携校での教育実習があげられるだろう。9月～10月という期間限定で関わってきた視点と、年間計画や教科指導の目的や評価を理解した上での視点の違いといえることができる。ここに連携活動を通じた学生の成長が見られる。

#### 【不自然さ】

最後に、連携活動が軌道に乗っているからこそ感じる＜不自然さ＞について、あえていくつか記したい。

\*中学生や教職員、父兄の抱く三翠ホールに対するイメージは、数年前と変容していないだろうか。

\*三重大学生の演奏を聴く、という鑑賞活動は、コラボ音楽祭でどのように位置づけられるのか。

コラボ音楽祭が、ルーチンワークとならないように、この転換期に感じている課題を改善したいと考えている。

平成24年度

津市立一身田中学校 文化祭

# 一身田中学校 × 三重大学教育学部音楽科

平成24年10月26日(金)



## 当日のスケジュール

8:00~	開場
8:30~	出席確認
8:40~	開会セレモニー
8:45~	合唱コンクール
一年	8:00~9:25
二年	9:00~10:00
三年	10:00~10:40
10:40~	三重大学教育学部 音楽科合唱発表 (この後10分間の休憩)
11:10~	吹奏楽部
11:50~	合唱コンクール講評 結果発表・表彰 アンコール発表
12:15~	文化祭閉会・連絡

平成 24 年度 津市立橋北中学校 文化祭

橋北中学校

三重大学教育学部音楽科

# ポ 音楽祭

平成 24 年 10 月 23 日 (火)

私たちの夢は終わらない  
～輝け橋北魂～

## 当日のスケジュール

- |        |                                 |
|--------|---------------------------------|
| 8:30～  | 開会式                             |
| 8:45～  | コーラスコンクール                       |
| 10:20～ | 三重大学教育学部<br>音楽科学生合唱             |
| 10:40～ | K-T's 合唱(職員合唱)                  |
| 11:00～ | 吹奏楽部準備・昼食                       |
| 12:00～ | 吹奏楽部発表                          |
| 12:50～ | 休憩                              |
| 13:10～ | 閉会行事<br>コーラスコンクール<br>審査結果発表&表彰式 |
| 14:00～ | 解散                              |

## 6. 保健体育教育

本年度、保健体育講座で実施した取り組みは以下の通りである。

1. 一身田中学校・橋北中学校におけるラート運動の授業補助
2. 一身田中学校における教育実習
3. 橋北中学校における教育実習

以下に担当した学生と大学教員による活動報告を示す。

### 1. 一身田中学校・橋北中学校におけるラート運動の授業補助

(保健体育コース3年：木村有里・藤田有里、指導教員：後藤洋子・岡野 昇)

#### 1.1 はじめに

私たちは、津市立一身田中学校、津市立橋北中学校（以下、一身田中、橋北中）で教育実習を行った。両校では、保健体育の体づくり運動の領域でラート運動が取り入れられている。本稿では、私たちが教育実習において両校で行ったラート運動の授業補助について報告する。

#### 1.2 ラート実技研修会について

教育実習へ行くにあたり、8月24日（金）に一身田中学校体育館で行われたラート運動実技研修会に、津市内の体育教員と一緒に参加した。ここでは、ラート協会の講師の方からラートの取り扱いや基本的な動き、ラート運動を行うにあたっての注意点などを、実技を交えて指導していただいた。その中で実際に自分たちがラート運動を行ってみることで、ラートで回転するおもしろさや、回転する中で足が抜けそうになる危険なところなどを把握することができた。

#### 1.3 ラート運動の授業補助

一身田中においては3年生のラート運動の授業補助、橋北中においては2年生のラート運動の授業補助と3年生にラート運動の基本的な技の指導を行った。ラート授業の補助を行う中で、多くの生徒たちは普段感じることはない非日常的感覺のおもしろさから、積極的に色々な技に挑戦していく姿が見られた。しかし、なかには回転することに対する恐怖心を抱く生徒もいた。補助を

するにあたって、その生徒たちはどうなった時に恐怖心を抱くのかなどに丁寧に耳を傾けるように心がけ、主に怖いと感じている生徒に対する補助を行った。私たちが補助をしながら回転に挑戦し、出来たときには怖がっていた生徒からも「おもしろい！」と嬉しそうな表情が見られた。

橋北中では指導者として授業も行った。文化祭でのラート運動発表に向け、基本的な技などの見本を示しながら指導をした。自らラートを選択してきた生徒が多かったため、授業に意欲的に取り組む姿が見られた。また、生徒は基本的なことができる、更に難しいことに挑戦する意欲を見せ、授業が進むにつれて高度な技に挑戦するようになった。新しい技に成功した時の「先生できるようになったから見とって！」という満足気な表情が授業内で何度も見られた。

#### 1.4 おわりに

ラート運動の授業を行う中で、回転や難しい技が出来た時に見られる生徒らの嬉しそうな表情が最も印象的であった。ラート運動が体育の授業として導入されている中学校は、全国的にも皆無と聞いている。しかし、一身田中と橋北中でラート運動の授業補助を行わせてもらい、ラート運動における非日常的感覺や、できたという満足感から見られる生徒たちの嬉しそうな表情から、ラート運動が持つおもしろさを体育の授業内で味わわせてあげることが、体育における大きな魅力のひとつになるのではないかと思った。

## 2. 一身田中学校における教育実習

(保健体育コース3年:木村有里、指導教員:岡野 昇)

### 2.1 一身田中学校教育実習実施概要

- ① 実施日時：2012年9月3日～28日
- ② 実施場所：津市立一身田中学校
- ③ 担当学年・担当教科：第2学年・保健体育
- ④ 授業概要

第2学年の3クラスを担当させてもらい、体育分野においてはマット運動の領域を担当した。授業内では主に、ほん転技群を中心として取り上げた。その中で「回転した後にピタッと立てるかな？」という課題を設定し、単元を通して回転をした後の起立姿勢を意識させる授業を展開した。また、保健分野では「水と健康」と「生活排水の処理」の領域を担当した。

### 2.2 教育実習前の私

教育実習に行くにあたり、事前に5回のガイダンスと2回の指導案検討、ラート研修を行った。6月には何度か授業見学へ行き、担当する第2学年の保健体育の授業を4回見学させてもらった。協力校での教育実習ということで不安はあったが、一身田中の活発な生徒たちの様子を見て、この子たちにどのような保健体育の授業を展開しようかと楽しみな気持ちが大きかった。

### 2.3 教育実習中の私

教育実習が始まり、最初の体育の授業を行ったが、生徒たちも普段とは違う私の授業に戸惑っている様子で、全員が積極的に授業に参加する雰囲気ではなかった。そこで、私は授業以外での生徒たちとの関わりを大切にすることを心掛けた。一身田中は、部活動に熱心に取り組んでおり、毎朝朝練に取り組む生徒たちから「おはようございます！」という元気な声が飛んできた。私は、放課後は部活動に参加し、休日にも試合の応援や演奏会に行くことで生徒たちとの関わりを持つようにした。また、下校時刻の15分前から正門に教師全員と実習生全員が立ち、下校する生徒を見送る

下校指導も毎日行った。ここでも生徒たちと会話をしたり挨拶を交わすことで交流を深めることができた。

このような授業以外の場で生徒たちとの関わりを多く持つことで、授業内でも生徒たちの積極的に取り組む姿が見られるようになっていった。初めは互いに探り探りであった私との関係も、授業を進めるうちに技が出来た時には生徒たちから「先生、見とって見とって」と声が掛かるほどになっていった。授業が始まる時も、「今日はどんなことするの？」と尋ねてきたり、マット運動に対しての意識にも少しずつ変化が見られた。

### 2.4 教育実習後の私

一身田中の教育実習では、授業外の指導でも生徒たちと関わる機会を多く持つことが出来た。その中で生徒たちと教師である私とのつながりが生まれ、それが私の授業へ積極的に参加していこうという生徒たちの意欲や、マットという教材に対する興味にもつながったと考えられる。教師として生徒とさまざまな場面で関わり、つながりを持つことは、単に生徒と仲良くなるためではなく、生徒と授業をつなぐために重要であることをこの教育実習を通して学んだ

ここから、この教師と生徒のつながりによって生まれた意欲や興味を、更に授業内で学ぶべきことへ、つまり体育であれば“その運動のおもしろさ”へとどうつなげていくかが、今後の私の課題である。



### 3. 橋北中学校における教育実習

(保健体育コース3年：藤田有里、指導教員：後藤洋子)

#### 3.1 はじめに

私は、平成24年9月5日(水)から10月2日(火)までの1ヶ月間、橋北中学校で教育実習を行った。教育実習が始まる前、教育実習中、教育実習を終えてからの期間の中でどのようなことを経験し何を学んだか、また自分の考え方はどのように変わったかについて考察していく。

#### 3.2 教育実習前の私

教育実習に行くにあたり、単元や担当クラスを決めるための事前打ち合わせ、夏休み前に3回の授業見学(体育)、夏休みには2回の指導案検討会と何度か橋北中学校に行った。また、ラートの授業で補助につくため、三重大学での授業に参加したり、夏休みには他校の先生方と共に研修会に参加したりした。

この時の私は、教師の仕事は何もわかっておらず、ただ授業をスムーズにしようという想いで指導案を書いてしまい、せっかく事前に授業を見学することができたにも関わらず、指導案を書く中で生徒のことを視野に入れることを忘れてしまっていたように思う。



#### 3.3 教育実習中の私

実際に教育実習が始まり、すぐに後悔した。教育実習が始まるまで、私は、指導案が上手くかければ、授業がスムーズに進むと考えていたからで

ある。生徒にとって授業(学習指導)は必要で、意味のある授業を行うことは教師の仕事であるが、それと同じくらい、生活指導や部活指導も大切であるということに気付いた。

教頭先生にも、「できるだけ積極的に部活指導や、下校指導に参加してください。そうすることで、生徒の違う一面も見ることができます」と指導を受けた。確かに授業中とは違った真剣な顔や、笑顔があり、教育実習期間の経過と共にそのような顔を見ることが増えた。このような指導を積極的に行うことは、学校でのすべての「教師—生徒」の関係に関わっており、授業を行っていく中でも生徒らの態度は変化した。学校という場での教師の役割には授業で生徒を指導するだけでなく、他にも給食、休み時間、下校時や部活動などのありとあらゆる場面での指導を行うことであると気付いた。

また、教師の指導の仕方や接し方によって生徒からの反応は全く異なり、こちらが一步引いてしまえば、相手も一步引いてしまうといった関係がつけられてしまうと感じた。

#### 3.4 おわりに

教育実習前は、「授業うまくできるかな」といった授業のことばかり心配していたが、実際に現場に出て感じたことは、授業時間外の時間(例えば、給食、清掃、部活の時間など)の生徒への指導も、とても大切であるということだった。実習生は年も近く「教師—生徒」という関係を築くことは難しかったが、この関係をしっかりと築き、多くの場面で指導をすることが教師にとってとても重要な役割であると感じた。

教育実習で学んだことを活かし、これからは授業だけでなく、その他の指導も大切だということを頭において、生徒と関わっていきたい。

## 7. 技術教育

### 北立誠幼稚園でのものづくり出前授業の活動報告

(魚住明生)

本年度、技術科教育研究室（以下、ゼミとする。）では地域連携室を介し、北立誠幼稚園からものづくりでの出前授業の依頼を受けて、次に示す活動を行った。ここでは、ゼミでの取組を中心に報告する。なお、活動の詳細については、本報告書の成果発表会(平成24年度教育フォーラム)での学生によるレポート並びにポスターに掲載している。

【目的】ゼミの運営方針の1つとして『現場主義』を掲げている。教育現場での活動を通して、将来教職を目指す学生に、教員としての資質を少しでも身につけてもらうことをねらいとしている。その活動の1つとして、地域連携での活動に毎年積極的に参加している。

また、ゼミでは教育現場での活動を行う際に、次のことを学生と確認し、実施している。

- ・教育現場の要望を最大限に受け入れること。
- ・活動を詳細に検討し、より良いものを追求すること。
- ・最後まで諦めず、全力を尽くすこと。

本年度においても、これらのことに留意して活動を行った。

【概要】本年度の活動におけるゼミでの取組を以下に示す。

- ① 幼稚園において出前授業における要望の聞き取り（担当学生、大学教員）
- ② ゼミでの報告並びに題材の検討
- ③ 幼稚園へ出前授業での題材の提案と協議（担当学生）
- ④ 学生による幼稚園への観察実習（随時）
- ⑤ 幼稚園での協議を基にして、ゼミでの教材並びに学習過程の検討
- ⑥ 幼稚園への教材並びに学習過程の提案と協

議（担当学生）

- ⑦ 幼稚園での協議を基にして、ゼミでの教材並びに学習過程の再検討
- ⑧ 教材に関わる材料並びに工具の購入（担当学生）
- ⑨ ゼミでの模擬授業の実施
- ⑩ ゼミでの出前授業の準備
- ⑪ 幼稚園での出前授業の実施（学生、大学教員）
- ⑫ 幼稚園での事後反省会（学生、大学教員）
- ⑬ ゼミでの事後反省会

ほとんどの活動は、担当学生（3年）を中心に学生が行った。ゼミでの教材並びに学習過程の検討は複数回行われ、幼稚園への観察実習においては担当学生を中心に複数の学生がほぼ毎週参観した。なお、大学教員は、活動の支援者として、初回における幼稚園の先生方の打ち合わせや、教材並びに学習過程を構想する際の指導助言、教材に関わる材料・工具購入の手助け、出前授業終了後の反省会での指導助言等を行った。

【成果と課題】今年度の活動において特筆すべき点としては、担当学生の積極的な取組が挙げられる。例年に況して、題材の提案や幼稚園への参観、出前授業に向けての準備など、自主的に行った。このことにより、本年度の教育フォーラムにおいて幼稚園の関係者から良い評価を頂くことができた。

今後の課題としては、今年度の学生の主体的な取組を次年度へと継承していくことが挙げられる。具体的には、ゼミでの学生の取組がさらに活性化するように、大学教員として担当学生の特性に即して多様な支援を行い、ゼミにおいて支持的風土を醸成していくことであると考えている。

## 8. 情報教育

本年度、情報教育講座で実施した取り組みは、

北立誠小学校（対象：5年生2限×1クラス）における「ロボット・プログラミング」の授業・演習

以下に担当した大学教員による活動報告を示す。

### 北立誠小学校における「ロボット・プログラミング」の授業・演習

（萩原克幸）

【目的】 科学技術、特に、情報技術は近年急速に発展しており、社会において必要不可欠なものとなっている。このため、情報教育の重要性は非常に高いと考えられる。初等・中等教育における従来の情報教育としては、パソコン・インターネットの活用が主である。しかしながら、それに限らず、高度な情報技術の一端に触れることは、子どもの将来における情報社会への適合性を促進すると同時に、将来的な職業選択という意味においても意義深いと考えられる。しかしながら、そうした学びの機会をどのような形で与えるかは難しい課題である。本取り組みでは、その一つの方法として、レゴ・マインドストームを教材として、教育現場でのロボット制御の授業・実践を試みた。本取り組みでは、特に、ロボットの作成など「ものづくり」には重点を置かず、「ロボットを制御する」ことへの理解とそれを実現する「プログラミング」という情報教育的側面に重点を置く。レゴ・マインドストームは、こうした目的のためには最適の教材である。一方で、本学部情報教育課程の学生には、ロボット・プログラミングについて子どもの支援を行うことで、子どもと触れ合う機会を与えらるとともに、情報教育の一環として、プログラミングという大学で学んだ高度な概念を如何に分かりやすく子どもに伝えるかという点を学ぶことが目的である。

【概要】 自律型ロボットは、最先端の技術であるとともに、教育的な見地からは、子どもの興味

を引くには十分な教材である。自律型ロボットについて学ぶことは、単に興味を引くだけでなく、初等教育でも学ぶモーター、広く普及しているセンサ、情報技術に関わるプログラミングを通じた制御の概念といった基本的な科学技術を知る機会でもある。レゴ・マインドストームは、モーターとセンサを搭載しており、プログラムにより自律的に動作するロボットである。特に、ソフトウェア上のプログラミングは、モーターやセンサなどの要素を並べることにより実現でき、この直観性は、子どもにも容易に理解できるものと考えられる。これにより、ほとんど予備知識を必要とせず、プログラミングを通してロボットを動作させることができ、科学技術についての学びを生徒の興味を引く形で提供できる。プログラミングにおける各要素は、それぞれの属性（例えば、モーターの回転方向や光センサの感度）を調整することで、ユーザが望むロボットの動作を実現できる。教育上の重要な点は、このソフトウェア上で、プログラミングの基本である直列的処理、ループおよび分岐の概念を学べる点にある。

実践の対象は、北立誠小学校・5年生（2クラス：25名・26名）であり、時間数は1クラスあたり4限（1限：45分）である。2クラスとも同じ内容で行う。授業の構成は、モーターの仕組み、センサの概要、プログラミングによる制御の概念を1限の授業として提供し、その後の3限をロボット・プログラミング演習に充てた。1限目の授業は、萩原准教授が担当した。演習につい

ては、対象31人を5グループに分け、1グループを学生1人が担当し、それぞれのグループ毎に解説・実演・演習補助を行った。この際、対象と授業時間を考え、ロボットは予め作成しておいた。演習では、ソフトウェア上での制御プログラミングの仕方、要素の属性の意味と設定方法、各演習課題に対応したプログラミングの概念を解説した。各演習課題は、先に述べた直列的处理、ループおよび分岐の概念を順番に学習できるような構成にしてある。例えば、前後に進行を繰り返す動作はループとして記述できること、センサ入力に対する分岐で動作が変更できることなどである。いくつかの課題は、こうした概念を駆使したアルゴリズムを考えることができるように工夫した。

【成果と課題】体験において、生徒が興味をもって課題に取り組んでいた点は大きい。これは、設定された目的に対して、それを実現するためのア

ルゴリズムを考え、プログラミングし、実際の動作を確かめられることによるものであり、結果が目に見えるトライ&エラーの過程によるものと考えられる。ただし、教材の台数が限られていることによる教育効果の低減の問題、時間制限の問題も存在した。体験後のアンケート回答結果では、ただ単に楽しかったという回答のみでなく、理解できた・ロボット・プログラミングについてもっと詳しく学びたいなどの意見があった点は教育的効果として評価できると考えられる。また、今年度は、ものづくり教育に関連する活動であることから、技術教育の学生ボランティアの参加があった。先に述べたように、本活動は、情報教育を通じた、科学・工学に対する興味づけとしても位置づけられるが、技術・理科で修得する内容も多く含んでいる。今後は、分野を越えて、小学校教員を目指す様々な学生さんの参加を期待したい。

実施日	時限	授業者	学生
11月13日(火)	1-4限	萩原	情報教育4年3名、技術教育4年生2名
11月27日(火)	1-4限	萩原	情報教育4年3名、技術教育4年生2名

## 9. 家政教育

本年度、家政教育講座で実施した取り組みは以下の通りである。

1. 一身田中学校における教育実習
2. 橋北中学校における教育実習
3. 連携地区小・中学校における家庭科などの授業補助
4. 一身田小学校における家庭科授業実践
5. 栗真小学校5年生における家庭科授業実践
6. 栗真小学校6年生における家庭科授業実践
7. 南立誠小学校6年生における家庭科授業実践
8. 橋北中学校における家庭科授業実践

以下に学生と担当した大学教員による活動報告を示す。

### 1. 一身田中学校における教育実習

(矢部さやか)

#### 【はじめに】

私たちは9月に一身田中学校で教育実習を行った。具体的な実習内容は以下のとおりである。

#### 【実習前の準備】

1学期中に、授業を担当するクラスの学習支援(調理実習)、担当するクラスの授業見学を行い、夏休みに中学校の担当教員からの指導案指導を受けた。

#### 【実習中】

1年生では、「衣服分野」において、衣服のはたらき、選び方、取り扱い絵表示、手入れの方法を取り上げた。2年生では、「食生活の課題」の単元を担当し、朝食の欠食、糖分・塩分の過剰摂取の問題を取り上げた授業を行った。また、身近

な飲み物を用いた糖度計の実験を行った。3年生では、「消費生活」の単元を担当した。販売方法、支払い方法、買い物のコツ、悪質商法について取り上げた。

授業以外では、朝学活、帰り学活、清掃、下校の指導を行い、部活動(ソフトテニス部)にも参加した。

#### 【実習を終えて】

事前に学習支援に行ったことで、授業中の雰囲気をもっと掴むことができたので心構えもできてよかった。また、様々な性格の生徒がいる学校で授業を行うことで、クラスごとの対応や机間巡視を通じた個々への対応も学ぶことができた。時には困難を感じることもあったが、良い経験ができたと思う

### 2. 橋北中学校における教育実習

(中村真帆・藤山千歩子)

#### 【はじめに】

私たちは9月に橋北中学校で教育実習を行った。具体的な実習内容は以下のとおりである。

#### 【実習前の準備】

1学期に1年生の学習支援(裁縫の補助)を行い、夏休み中に指導案指導を受けた。

#### 【実習中】

1年生では、「フォトフレームづくり」の1学期の続き、仕上げの学習支援を行った。また、

「衣生活と自立」の単元を担当し、衣服購入、試着についての授業を行った。2年生では、「食品の表示と選択・食品添加物」の単元を担当し、生鮮食品、加工食品についての授業を行った。

授業以外では、朝の会、学活、合唱練習、給食、清掃の指導を行い、部活動にも参加した。

#### 【実習を終えて】

実習前の学習支援は中学校全体の雰囲気も知ることができ、前もった心構えを持って実習に臨むことができたのがよかった。担当学年全部のクラスに関わることができたので、それぞれのクラスに合わせた授業を考えることの難しさを感じた。

大変なことも多々あったが、子どもたちを見ることでたくさんの元気をもらえた。自分自身も成長できるものとなったと思う。

### 3. 連携地区小・中学校における家庭科などの授業補助

(磯部由香)

【目的】家庭科の実習支援、他教科の授業支援を通して、子ども理解、授業づくりおよび指導方法についての理解を深める。

【概要】本取組は、おもに家政教育コースおよび消費生活科学コースの4年生の教育実地研究の活動として行った。実施校および授業内容は以下の通り。

- ・西が丘小学校5・6年生：ランチョンマット制作、エプロン制作（ミシンの指導）
- ・一身田小学校6年生：エプロン制作（ミシンの指導）
- ・栗真小学校5・6年生：国語、算数、音楽、図画工作、英語の授業補助
- ・南立誠小学校5年生：ナップザック作り（ミシンの指導）

- ・一身田中学校2年生：ニジマスの解剖と調理

#### 【成果と課題】

本取組には4年生および院生の10名が参加した。実習補助に参加後、活動報告書を記入し、提出させた。振り返りの記述からは、授業の内容および構成、取り上げる教材、指導方法などについて、様々な角度からの気づきがみられた。また、子どもについては、発達段階や個人差などの特質をとらえていた。多くの学校において、様々な授業に参加することは、実践的指導力の基礎を養う上で、有効であると考えられる。このように学ぶべき要素はおおい取り組みであるが、それぞれの振り返りが個人のレベルで終わっているため、今後は、教職実践演習などの授業内で深く掘り下げることが望まれる。

## 4. 一身田小学校6年生における家庭科授業実践

(家政教育コース4年 齋藤真奈、指導教員 平島 円)

### 【はじめに】

一身田小学校において、三重大学教育学部生による家庭科の授業「家族の体が喜ぶ食事の献立をつくってみよう」が行われた。

以下は、一身田小学校で行われた授業の際に、特に食材の3色分けに関心を持った子どもAの様子を元に、バランスの良い食事の組み合わせについて学ぶ意義について考察していく。

### 【授業概要】

①実施日時：平成24年12月3日(月)

(11:40~12:25)

②実施場所：一身田小学校6の1教室

③参加者：

6年生 28人

小学校教員 1人

三重大学生(授業者) 1人

第1時では、「家族の体が喜ぶ食事の献立を考えよう」というめあてで、栄養面のバランスも踏まえた献立作りをグループ別に行った。これを踏まえて本時では、「家族の栄養士さんになってみよう」というめあてのもと、前時に作成した献立に使われている食品を3色分けし、栄養の面からバランスがとれているのかを確認する時間とした。

授業全体は、学習指導要領B「日常の食事と調理の基礎」のうち特に(2)栄養を考えた食事に着目して構成した。



### 【考察】

子どもたちも活動中、口々に分類方法を話し合い、献立に対する改善案を出していた。私は栄養のバランスについて特に着目し続けていたが、子どものつぶやきから、バランスの良い食事について考えるということは、自然に見た目の彩りや味のバランスを考えることにもつながると実感した。また、授業直後の給食時にAが突然「先生、このれんこんは緑色のグループかな。」と発言したことにより、クラス全体で考えるきっかけになった。この時、食事の組み合わせに着目するには、食材一つひとつの働きについて理解する必要があるため、それを踏まえたうえで組み合わせを考えるため、Aを含め1組の子どもたちは目の前の食材の働きに目を向けられたのだと感じた。そして、改めて家庭科の授業は45分や单元の中で完結するものではなく普段の生活に子どもが結び付け、実践しようとする態度を身につけるところまでが目標であると感じた。

### 【おわりに】

全2時間の授業を主にグループ活動を主として構成していたが、活動内容の難易度や時間配分などを十分に調節していくことが今後の課題として挙げられた。また発表方法についても試行錯誤する必要があると痛感した。そしてより一層授業内容を日常生活に近付けられるものにする事で家庭科の学習が自分たちの生活に直結しているということを子どもたち自身が実感できるようなものにしていきたいと感じた。

## 5. 栗真小学校5年生における家庭科授業実践

(家政教育コース4年 藤澤春香、指導教員 磯部由香)

### 【はじめに】

栗真小学校において、ゆでる・炒める調理操作を含む調理実習を行った。作るだけではなく、調理の一連の流れも学ばせるために、調理計画から振り返りまでを毎時間行った。また、アレンジレシピを渡し、家での実践につながるように指導した。また一人一品作ることににより、子ども達に調理への自信を持たせ、家庭でも調理をするようになり、調理への興味・関心につながるように授業を行った。

### 【授業概要】

#### ① 実施日時：

11月16日（金）3,4限

11月30日（金）3,4限

12月7日（金）3,4限、12月11日（火）5,6限

#### ②実施場所：栗真小学校調理実習室

③参加者：5年生13人、小学校教諭1人、三重大学生1人

#### ④授業内容

11月16日 いろり卵の調理実習

11月30日 手洗いチェック、調理計画表作成

12月7日 野菜いためための調理実習

12月11日 ポテトサラダの調理実習

### 【考察】

最初の授業のいろり卵の授業では、一人一品作ることに不安を感じていた子どもたちだったが、いろり卵、野菜いためといった料理を作っていくにつれて、誰かに頼って作るのではなく、自分で作ることに自信を持つようになっていき、スムーズに調理実習を行えるようになった。手洗いについても、自分の手洗いの仕方ですれくらいの汚れに残っているかを確認する授業を行ったため、手洗いも熱心に行う姿が見られた。必要な調理器具を自分たちで毎回用意し、調理を行っていたため、さ

いばしや計量スプーンなどの調理器具を覚えることができるようになった。後片付けが遅かった班が最後には一番、最初に後片付けを終えることができ、暇な時間に後片付けを行うなど手際がよくなっていた。毎回、調理実習を行うことで、子ども達の協力する姿も見られ、友達に感謝する気持ちも自然に持つようになっていた。一人の子どもが、自分の料理を自分で食べるだけではなく、友達にも試食してもらっておいしいといわれることに喜びを感じていて、そのような気持ちが調理することの喜びとなり、家庭での実践につながるのだと感じることができた。

### 【おわりに】

滅多に体験できない調理実習の授業を1ヶ月間で4回できて、とても勉強になった。何よりも子ども達に調理への自信を持たせることが、家庭での調理の実践につながる今回の授業を通して感じることもできた。また、調理実習では子ども達の人間関係を見ることができ、また子ども達の人間関係を深めるに良い機会であると感じた。調理実習では、子ども達にとって危ないものがたくさんある。その危険を伝える際に、指導者が実際に体験した話をする中で、子ども達の安全への意識が高まることがわかった。今回は、とても少ない人数であったが、実際のクラスでは倍以上の人数での授業となるため、大人数でも行える調理実習の方法も考えていきたいと思った。

## 6. 栗真小学校6年生における家庭科授業実践

(家政教育コース4年 大竹美沙紀、指導教員 磯部由香)

### 【はじめに】

栗真小学校において、三重大学教育学部学生による家庭科の調理実習「お弁当作り」が行われた。

以下は、栗真小学校で行われた授業の際に、特に効率よく調理を進めていくことに興味を持った子どもAの様子を元に、段取り力を学ぶ意義について考察していく。

### 【授業概要】

①実施日時:平成24年11月8日(木)、15日(木)、22日(木)、29日(木)(13:55~15:30)

12月23日(金)(10:30~12:00)

②実施場所:栗真小学校6年生教室、調理実習室

③参加者:

6年生	21人
小学校教員	1人
三重大学生(授業者)	1人

23日はこれに加え

三重大学生(補助)	2人
三重大学教員	1人

④授業内容

第1時:事前の「お弁当の授業」で考えたおかずについての改善

第2時:調理実習計画

第3時:調理実習(おかず作り)

第4時:調理実習のふりかえり

第5時:お弁当作りの調理実習

### 【考察】

Aは、B、Cと同じ3人グループで調理を行った。Aは3人の中では比較的大人しい性格である。

お弁当のおかずには、Aは粉ふきいも・アスパラベーコン、Bはポテトサラダ・ちくわ焼き、Cはポテトサラダ・アスパラベーコンを考えた。使用できるコンロは2つ、包丁とまな板も2セットで考えさせた。

BとCがより早く仕上げたいという気持ちが強く、コンロ・包丁・まな板の取り合いになったが、Aは3人に共通するスクランブルエッグだけではなく、AとCに共通するアスパラベーコン、BとCに共通するポテトサラダに着目して、同じものは1度にまとめて調理しようと提案した。また、コンロの使う順番についても、時間がかかるポテトサラダのじゃがいもをゆでる作業を始めにもってきて、ゆでている間に野菜を切る、ベーコンを巻くなどの作業をしようと提案した。タイムスケジュールとは別にコンロと包丁・まな板の表を作り、誰がどの順番でそれらを使うのかを分かりやすくまとめていた。

お弁当作り当日の様子は、事前に準備がしっかりできていたAを含む班は、どこの班よりも早く仕上げていた。Aの的確な提案がこの班の段取り力を高めていたと考えた。

### 【おわりに】

今回はお弁当作りを実践して、完結になってしまったので、子どもたちが家庭でも続けていけるようなレシピを考え、知識や技術のみならず、実践力も伸ばしていけるような活動を増やしていきたいと感じた。そのためには、指導者自身が日ごろから家庭で多くの実践をすること、より多くの教材の研究をすることが今後の課題である。



## 7. 南立誠小学校6年生における家庭科授業実践

(消費生活科学コース4年 小野晴加、指導教員 磯部由香)

### 【はじめに】

南立誠小学校において、三重大学教育学部による家庭科の授業が行われた。以下は第2時と第3時のグループA、Bの学習過程について触れる。

### 【授業概要】

①実施日時：11月14日（水）、21日（水）、28日（水）10:40~12:20

②実施場所：南立誠小学校教室・調理室

③参加者：6年生、24名、小学校教諭 1名、三重大学生、2名

### ④授業内容

第1時：夕飯を考える上で大切なこと、夕飯のバランス調べと見直し。

第2時：食材の切り方の確認、栄養バランス調べ、調理計画。

第3時：調理実習

### 【考察】

以下の記述は第2時の調理計画表作成時の出来事である。グループAはいち早く調理計画表を作成したのに対し、グループBは最後まで調理計画表の作成に苦労していた班だ。（児童名は仮名）

グループAでは、ケイコとアヤカが男女交互に座っていた席を隣同士に座り直し、計画表を作成していた。一方マナブとケン、話し合いに入れてもらえずにいた。授業者が4人で作成するよう声をかけるとケイコは嫌そうにした。するとマナブは「僕たちは男やから要領悪いからいいや」といってその様子を眺めていた。一方グループBでは、4人全員が参加して計画表を立てようとするが、コンロの数や全員が役割を均等に持てるよ

うに配慮することによって、何から始めていいかわからない様子であった。

第3時では、グループAの後半の作業がケイコとアヤカに偏っていたため授業者は「マナブくんとケンくんここですることないよ」と声をかけた。マナブは「僕達男同士やから、上手くできやん。えー」といった。するとケイコは「じゃあ男女でやればいいやん」といい、ケイコとマナブ、アヤカとケンがペアで作業をすることを提案した。第2時では、一見スムーズに計画表を作成し、理解の深まりがあるように見えるグループAと深まりがないように見えるグループBにおいて、計画表を作成することの難しさに触れていたのはグループBであり、効率のよさという結果では評価できない部分があった。また、第2時で、アヤカとケイコのみによって計画表が作成されたグループAは、マナブの調理への不安により、第3時では全員で取り組む姿勢が見られた。

### 【おわりに】

今回の調理計画の作成では、複数の班で全員が参加していない様子が見られた。調理計画表の作成が全員の参加なくしても可能であったからである。また、コンロの数や効率よく作業を行うための方法、全員で作業を行うといった計画表作成時に配慮することについて授業者が子どもたちの認識を深められなかったことも要因の一つである。また、ケイコに見られるように、共に学ぶ仲間の困りに対しては、子どもは積極的に働きかける。しかし、ケイコとマナブにみられるような教え教えられる関係は固定的と言えるだろう。今後はケイコのような子どもにも困りが生まれるような授業を考えていきたい。

## 8. 橋北中学校における家庭科授業実践

(消費生活科学コース 4年 加藤裕美子、指導教員 平島円)

### 【はじめに】

橋北中学校において、三重大学教育学部学生による家庭科の授業「りんごジャムをつくろう」が行われた。以下は、橋北中学校で行われた授業の際に、ペクチンの抽出に関しての様子をもとに、ジャムの製造過程を学ぶ意義について考察していく。

### 【授業概要】

- ①実施日時：11月15日(木) 11:45～12:35
- ②実施場所：橋北中学校調理実習室
- ③参加者：2年生34人、中学校教員1人、三重大学生(授業者)1人、三重大学生(見学)1人
- ④授業内容

「りんごジャムを作ろう① ジャムのしくみ」

- ・りんごジャムとりんごジュースの違いを見つける
- ・ペクチンを見てみよう
- ・砂糖で長持ちする食品を考えよう

### 【考察】

ペクチンは

- ・植物の細胞壁に含まれている多糖類
- ・酸と糖を加えるとゲル化
- ・加熱し過ぎるとゼリー化しない
- ・高分子(分子量 50000～360000)
- ・ガラクトuron酸のカルボキシル基がメチルエステル化されたものであり、そのままの状態では目に見えないものではないが、果汁に99%エタノールを添加すると、ペクチンが白い糸状に凝固する。

授業では4人から5人の班になり、ペクチンの抽出を行った。

家庭科で実験を行う機会は少ないので、積極的に実験に取り組む生徒も多かったと思われる。しかし、実験で抽出したペクチンを使って、ジャム作りをするわけではないので、「ジャムが作られ

ればよい」と考えた生徒にとっては、あまり興味関心が抱けなかった様子であった。

抽出したペクチンについては、黒画用紙におくと、より鮮明に観察でき、しばしば見入っている様子も見受けられた。

ジャムとジュースの違いを発問した際に、ジャムはドロドロしているなど、状態を応える生徒がいた。次回の実習では、ドロドロとする過程が見られるので、ペクチンの抽出との関連性を感じられると考える。

### 【おわりに】

生徒の関心が別のところにあることも多く、なかなか静かな状態を作ることが出来なかった。99%エタノールは注意をして扱わなければならない溶液であるが、徹底させることが出来なかった。4、5人で1つの実験用具であったが、実験手順としては簡単なものであり、1、2人で行えるものであった。そのことで、人任せにしたり、話を聞いていない生徒も見受けられた。

今後は、実験の導入をしっかりと行い、生徒全員が実験手順の把握を行うことが重要であると思われる。また、実験の意義や必要性が生徒にとって分かりやすい題材を選ぶべきであったと考える。

## 10. 英語教育

本年度、英語教育講座で実施した取り組みは以下の通りである。

1. 橋北中学校における SSS におけるアシスタント
2. 一身田中学校ナイトスクールにおけるアシスタント
3. 一身田中学校での授業アシスタント
4. 一身田中学校の英語の授業参観
5. 北立誠小学校 5 年生を対象とした英語活動実施
6. 北立誠小学校 3 年生の英語による発表準備の補助
7. 北立小学校 5 年生の外国語活動補助

### 1. 橋北中学校における SSS におけるアシスタント

【活動日】11 月 17～

活動時間：8:20～9:10 中 1 英語、9:20～10:10  
中 1 数学

【目的】

生徒の学習支援活動を通じて、生徒の学習力・学習意欲アップにつなげると共に、生徒との関わり方や学習指導の仕方を体験的に学ぶ。

【概要】

有志の学生によるアシスタントとしての中学生の自主学習を支援することが主な活動である。大学生は学習中の生徒の周りを見て回り、躓いているところ、または間違えているところをていねいにアドバイスする。サタデーステップアップスクール、通称 SSS は家では勉強しない生徒、普段聞けないことを聞きに来る生徒、宿題をしに来る生徒等が、土曜日に学校に来て自由に勉強することになっている。教科は数学と英語で時間は通常クラスの時間と同じ 50 分になっており、その時間を有効に活用するため、それぞれの生徒は静かに勉強に勤しんでいる。時には友だちに分からないところを聞いたり、自分たちで勉強の仕方を工夫していることが窺える。また、大学生がアドバイスするだけでなく、生徒自らも積極的に分からないところを聞いてきてくるので、お互いの双方向のバランスがうまくとれた形となり、充実

した 50 分を送っているという印象を受けた。

なお、前期には英語から 3 人の学生が合計 5 回参加した。



橋北中学校 SSS のアシスタントの様子

【成果・課題】

成果としては、生徒の分かったという気持ちを促進するために、例えば生徒が分かっていないという素振りを見せたら、すかさずその子のところにいき、分かるまで徹底的に教えることができた。つまり、その場で何をやっているのかという見極めや、生徒の分かるという気持ちを作り上げるということを大切にする態度が重要であるということに気づくことができた。また、このようなアシスタントという場は大学生が自らを再確認する場であるということにも気付かせられた。というのも、生徒は習いたての文法に素朴な疑問を持ち、こちらに投げかけてくるので、こちら側としても「なんでこうなるんだっけな。」と、自分を見つめ直すことができる場になっていると

考える。このような経験が、大学生の学ぶ意欲にもつながり、大学生・中学生お互いがお互いを刺激し合える場になっている。

課題としては、集中をしているものの50分間全く質問もせず、ただ簡単な問題だけをしに来ている子に、どのようにアプローチしたらいいかということである。その子は淡々と宿題や予習をし、本当に分かっているのかどうか不安になる時が

あるが、ある時声をかけたはいいものの「大丈夫。」と一言言われて、それ以上何も言えなかったことがある。学生アシスタントとして来ているので、その子の特性や性格が瞬時につかみにくく、どのようにとらえればいいのか分からない時があった。学校の先生とも話し合い、その子に合った学習方法を見つけていく必要があると実感した。

(61期 鈴木雄地)

## 2. 一身田中学校：「ナイトスクール」におけるアシスタント

【活動内容】中学生の学習活動の支援

- ・ 活動日：6月～白塚市民センター（火曜日、金曜日）北部市民センター（水曜日、金曜日）
- ・ 活動時間：19時～21時

【目的】アシスタントとして生徒の学習を支援することを通して、生徒との関わり方、学習支援の仕方を体験的に学ぶ。

【概要】

昨年に引き続き6月より、英語科の学生がアシスタントとして、ナイトスクールに参加した。4人ほどの学生が年間を通して一人約20回行った。ナイトスクールは、生徒たちが学校で分からないことや学校での学習内容を復習しつつ、ついていけないところを学習し直し、また学習習慣をつける場でもあるなどの役目を担っている。さらにこれは学校外の活動であるため、地域の方々が主催となって行っているが、学校の先生方も参加するなど、地域に密着した環境であるといえる。生徒たちも楽しく自分のペースに合わせてそれぞれの学習に取り組んでいる。時折、友達との会話が盛り上がりすぎてしまう場面もあるが、地域の方々や先生、またアシスタントが学習に向かうよう

指導するなど、生徒たちは学習する姿勢をこの活動を通して身につけることができる。



一身田中学校ナイトスクールのアシスタントの様子

【成果・課題】

一身田中学校の先生方も会場を訪れ、生徒に学習指導を行うので、生徒との接し方や教え方などを間近で見ることが出来た。ナイトスクールは中学1年生～3年生までが参加しており、それぞれが学習の速度も異なる。そのため、一人一人に合わせた学習支援を行い、生徒たちが、ナイトスクールに来る前よりも「解ける問題」を増やして帰ってもらえるよう、協力していきたい。

(63期 山川みなみ)

## 3. 一身田中学校での授業アシスタント

(「英語科教授法 I、II」及び「英語科教育特講 II」担当 早瀬光秋)

【活動内容】

授業中における生徒に対しての学習支援活動

- 活動日：年間を通して
- 活動時間：1回1つの授業に入ってから

### 【目的】

三重大学教育学部の英語科の学生が、一身田中学校の英語科の授業に指導アシスタントという（「英語科教授法 I、II」及び「英語科教育特講 II」担当 早瀬光秋）形で、生徒に対しての学習支援活動を行う。この取組は、学校地域支援授業の「サポーターいっちゅう」の活動としても位置づけるものとする。大学側としては、「英語科教授法 I、II」及び「英語科教育特講 II」（「中学・高校英語教材論」）の授業に関連する活動として位置づけられる。

### 【概要】

指導アシスタントの大学生1～3名が各授業に入り、机間巡視をしながら、わからないと困っている生徒や質問のある生徒に対して個人支援を行う。指導アシスタント（学生）は、教材・教具の扱い、授業の進め方、生徒への発問の仕方、生徒の反応などを参観しながら学ぶこととする。なお、英語科としては、今年度は初めての試みでもあり、希望者を対象とし、前期で13人、後期で4人参加した。それぞれの期で1人平均3～6回のアシスタントをした。

### 【参加学生の声】

その1. 授業をどう構成するか、子どもたちに対してどのように指導するか、ボランティアとして補助をしながら現職の先生方の動きを観察することで、自分が授業を作り上げる際のヒントを得ることができた。机間指導の際にどのような声掛けを行って生徒との関係を作りあげていくか、生徒との距離感の重要性とともに、生徒との関わり方・ふれあい方をありありと学び取ることができた。

その2. 先生が前に立って授業を進行する間、子どもたちの様子を注意深く観察し、助けが必要なと思った生徒に声をかけて補助を行ってきた結果、どのようなところで子どもたちがつまずき、苦戦しているのかを理解することができた。授業中の子供たちの雰囲気、子供たちの実際をする有意義な機会であった。

その3. 担任の先生からも「先生」と呼ばれ、ボランティアとはいえ、教室には一人の「先生」として参加する。当たり前なことだが、子どもたちにとっては私たち大学生が言う一言も先生が言う言葉と変わりなく、行動、言動には責任感が伴う。個別に補助を行う際にも、確かな英語に対する知識が必要で間違いは許されない。日ごろの勉学の重要性も痛感する機会であった。

### 【成果・課題】

学生達は、普段大学で授業を通して、英語力を高め、英語学、英米文学、異文化理解、英語教授法、英語学習者の特徴等を学ぶわけであるが、実際の教育現場を十分に経験するのは3年生前期最終月での教育実習以後のこととなる。そういう意味で、3年の前期から、この授業アシスタントに参加することで、教室でしか学ぶことのできない、生徒との対応、実際の授業運営等に触れることができることが最大の成果であると思われる。

課題としては、大学での授業を全うするために多くの時間が必要であり、いかに、この授業アシスタントのための時間を捻出するか、ということである。また、実際の中学生に英語をアシスタントして指導することにより、自分の英語力に慢心しないようにすることである。

## 4. 一身田中学校の英語の授業参観

(教育実地研究基礎 担当 荒尾浩子)

### 【活動内容】 中学での英語の授業参観

- 活動日：1月11日
- 活動時間：授業参観：2013年1月11日（金）

第5限（13:40-14:30）

反省会：2013年1月11日（金）14:40-15:10

### 【活動目的】

中学校での英語の授業を参観して英語科の授業の進め方や教え方、生徒の実態を把握する。

### 【概要】

英語科一年生が一身田中学1年5組の英語の授業の見学を行った。

授業の始まりは、How are you?などの先生のあいさつから始まった。授業が始まると、毎授業行われる小テストの範囲になっている宿題の発音を練習した。小テスト後は、「いつもの3分」という先生の質問に対し生徒が英語で返答する時間が設けられている。生徒は挙手をして回答をする。

その後「Sing!」という曲を使ったリスニングが行われた。これはプリントの空欄を埋めるディクテーション方式になっており、生徒が積極的に挙手をして答えていた。この時、先生は前に二人いて、一人は板書をし、もう一人が生徒に質問をするというTTという方式がとられていた。これは授業の効率化を狙ったものであり、うまく機能していた。

リスニングの後は前回の授業の復習である、現在進行形の作り方の確認を行った。形式としては、生徒にある写真を見せ、そこからわかることを進行形～ingを使って簡単な英文を作るというものだった。これはグループになって行われた。グループで行うことで英文を作ることも楽しさに

変わっていったと思われる。できた英文を発表する際、間違った文法で答えてしまう生徒がいたが、深く追究するわけではなく、間違っているという指摘で終わってしまっていた。

授業後の反省会では、英語が苦手であったり、嫌いであったりする子どもへの対応について話し合った。一つの解決策としては、小テストやゲームなど、何か一つ頑張ろうと声掛けをする。また、グループの中や、歌の中で英語を学ぶことでやる気を出す生徒もいるという。また、グループワークを行うことで先生には聞きづらいこともグループ内で話し合いお互いが積極的に授業に参加できるという利点があるという。

【成果・課題】中学英語教育の現状を実際に見ることで、生徒がどのようにしたら英語に苦手意識を持たないで授業を受けることができるのかということが各々理解できたと思われる。写真を利用し、視覚的に、また歌を利用し聴覚的に五感を十分に活用することで授業への集中力が高まるだろう。TTという授業スタイルは学生がほぼ見たことのないスタイルであったので斬新だと感じたはずだ。効率の良さから考えて、とても有効性がある。反省会では、生徒の考え方をよく理解した具体的なアドバイス（グループで作業を行うなど）が出てきてこれから教員を目指す人たちにとって大きな指針となっただろう。

(64期生 城田敬広)

## 5. 英語科教育法入門の受講生による北立誠小学校5年生を対象とした英語活動実施

(英語科教育法入門 担当 荒尾浩子)

### 【活動内容】

英語活動の構成や実践を学生が主体的に行う。

- 活動日：1月23日
- 活動時間 11時～12時

【目的】英語での実践的なコミュニケーション能力を養う。

### 【概要】

テーマを外国旅行とし、児童に旅行を疑似体験さ

せるような活動を通して外国の文化を通して英語の英語を用いたコミュニケーションを促進させた。5年生の児童を7人、7グループに分け、アメリカ、ブラジル、ロシア、中国、インド、イタリアなどの行き先を割り当てた。学生の自己紹介の後、飛行機に見立てた座席にグループごとに児童を座らせ、そこから飛行機での英語でのやり取りを見本で見せた。そして実際に児童にチケット

トを渡して、それを CA に見せて座席を見つけるのに英語を使用しなくてはならない仕組みにした。また人の前を通過して着席する際の表現も教えた。グループ担当の学生と何度も練習することで英語の言い方に慣れると共に顔見知りになる効果をねらっていた。その後、機内アナウンスを聞かせ、外国旅行の雰囲気を感じさせた。

次に異文化についての学習をさせた。画像で様々な文化の特徴的な食べ物や建造物を見せ、その言い方をリピートしながら、クイズを織り交ぜ練習した。

各国の文化についてある程度の知識を与えた後はカルタを用いて画像を少しずつ見せて、それと同じカードをチームで競ってとらせ、カードをとった人がその英語を言うというゲームをすることで音声の定着を図った。ポイント制にしたためゲームへの動機付けを高めることに繋がった。

#### 【成果と課題】

学生は時間をかけて活動を考えることで効果的な英語活動を構成する力を養うことができた。児

童のリアクションを予想することで実際の活動の場を常に意識して準備することが重要であったため単にアイデアだけでは英語活動の実践は難しいことを十分に理解した。課題としては話し合いに時間を多くかけたため実際に動いてリハーサル練習する時間が足りなくなってしまった点、また直前まで教材にする画像が選択しきれず慌てた点などがある。北立誠小学校の先生からはゲームにおいてカードの配置などによりグループによって不平等が出た点などが指摘された。ゲームで勝つことに真剣な児童にとってはちょっとした不平等は大きな問題であるという意識が学生に足らなかった点が悔やまれる。学生から挙げられた課題としては、もう少し英語を増やせば良かった点や、英語の言い方を教える際にリピートをもっと増やした方が良かった点など挙げられた。課題を言い出せば枚挙にいとまがないが自分たちが準備したゲームに児童が期待以上に興味を持って参加してくれた点など達成感も多く挙げられた。

## 6. 北立誠小学校3年生の英語による発表準備

(教育実地研究基礎 担当 荒尾浩子)

#### 【活動内容】英語活動のデザイン、実施

- 活動日：11月21日
- 活動時間：13時45分～14時30分

#### 【目的】

英語でのコミュニケーションを通して何かを伝える活動を考案し実施する実践力を養う。

#### 【概要】

英語活動を英語科1年生の学生がサポートするというところを行った。具体的には、8～9人の児童が前に出て、プロジェクターに映し出されたことを児童が英語で説明するというものだった。児童たちはあらかじめ読むところが決められており、3～4人で同じところを、声をそろえて説明していた。英語で説明するものの内容としては、

一年間の行事をそれぞれ英語で説明するということがあった。例えば、5月 子どもの日「Children's Day」・こいのぼりを飾ります。We display carp streamers. といったようなものである。英語科1年生はサポートとして、こういった例文の発音のお手本をしていた。

【課題・成果】英語科1年生は小学三年生の英語の授業だとは思えないと口々に漏らしていた。説明文の英語の内容が中学校レベルくらいあり驚いていた。小学三年生には発音がわかりづらい単語が多く英語科1年生はそれをただそうと発音を頑張っていた。小学生は発音をしっかり教えないと中学校に進学したときに大きな影響が出るのでしっかりしなければならない課題である。

(64期 城田敬広)

## 7. 北立誠小学校5年生の外国語活動支援

(教育実地研究基礎 担当 荒尾浩子)

【活動内容】 小学校5年生の外国語活動の支援

- 活動日：
- 活動時間：10時45分～11時30分  
11時35分～12時2分

【目的】

小学校の外国語活動の授業に学生が参加し、英語活動の実態や授業構成、教材の準備の工夫、児童との関わり方などの実践的教育力を習得する。

【概要】

北立誠小学校の5年1組と5年2組の授業を見学した。主な授業内容としては、あいさつ表現、日付、曜日、天気表現、また、動画にあわせて1から20までを発音していた。数字表現の応用編として、30, 40, 50, 60, 70, 80, 90, 100の発音も行っていた。13(thirteen)と30(thirty)の発音の違いを先生が身振り手振りを使って児童に教えていた。また数字の書いてあるカードを順番に並べるゲームをしたあと、それを使ってかるたゲームを行った。かるたゲームではしっかり数字と発音がリンクしている児童とそうでない児童の差がはっきりとしていた。他にも、How do you say ~ in English?と先生に向かって児童が質問をするということを行った。身近にある物が英語では何と言ったらよいかという児童の好奇心をうまく利用していると思われる。また、教室内にあるテレビを使い、そこに映し出された絵を見てHow many ~?に対する答えを書くということも行った。

おわりに

以上、英語科の連携活動を報告した。学生の教育現場での経験を増やしたいという希望は年々増えつつあるので、その機会を今後もできるだけ持つように努めていきたいものである。学生が経験したことを確実な学びとして習得するにはそれを授業内で共有したり振り返ったり、また現場の先生方から説明を受けたりすることが当然必要となってくる。今年度は連携校の先生方には様々な形で学生の学びを支援していただき感謝

【成果・課題】

小学生がどのようにしたら英語に苦手意識を持たないで授業に参加できるようにするかという工夫が随所に見受けられた。基本的にゲーム形式で行うことで、楽しく英語に接することができ、親しみをもたせ、難しさを感じさせないようにしていたと思われる。

また、児童にとって受動的な授業にさせないためにHow do you say ~ in English?のように、児童に質問させ、授業を能動的なものにしようとしていることが理解できた。しかし児童の中には先生の言っていることが理解できていない子であったり、ただ発音しているだけでどの数字がどの発音かわかっていない子がいたので、そのような児童にはどのようにアプローチすべきかが課題としてあるだろう。

(64期 城田敬広)



北立誠小学校5年生の外国語活動支援の様子

につかない。将来のより効果的な教育実践のために学生が教育現場の実態を知り、児童、生徒の理解を深めることが重要である。それ共に教えるための目先の技術だけにとらわれず教える内容に関する正しい知識の重要性も意識しなくてはならない。そのために連携活動をしながら教科に関する知識を深める努力も軽視しないことを認識させたい。

## 1 1. 特別支援教育

本年度、特別支援教育講座で実施した取り組みは以下の通りである。

1. 橋北中学校の特別支援学級に在籍する生徒の学習支援  
以下に担当した大学教員による活動報告を示す。

### 1. 橋北中学校の特別支援学級に在籍する生徒の学習支援

(菊池紀彦)

【目的】橋北中学校の特別支援学級に在籍している生徒に対する学習支援を行う。

【概要】前期については3年生3名が担当教員とともに活動を行った。後期については4年生13名が一人あたり週に1回程度の活動を行った。特別支援学級に在籍する生徒に対し、①特別支援学級における学習支援、②通常学級における学習支援、を行った。以下にその概要について記した。

まず、①特別支援学級における学習支援については、担任の指導の下、生徒一人に一人の学生がつき、学習指導を行った。具体的な学習内容としては、制作活動や作業活動の援助であった。

次に、②普通学級における授業支援についてである。特別支援学級籍の生徒は、教科によっては「交流授業」という形で通常学級において授業を受ける。授業科目は生徒一人ひとりにより異なる。活動開始当初、交流授業を受けている生徒の様子を観察していると、「教師が話している教科書のページがわからない」、「教師が板書した内容をノートに書き写すことが困難」や、「実験器具や工作器械の扱い方がわからない」などの様子が見受けられた。

学生は、教室の後ろに立ち生徒が授業を受ける様子を見守るとともに、必要に応じて生徒のそばに行き、教師が話している教科書のページを指し示したり、教師が板書した内容を付箋紙に書き留め、生徒のノートに貼付し、生徒が授業を理解しやすいように配慮を行った。また、教師が板書した内容を全てノートに書き写すのではなく、要点のみを箇条書きにする、などの支援を行い授業に

参加できるよう配慮した。

理科や技術の授業は、生徒自らが実験器具や工作器械を扱うことがある。班ごとに分かれて教師からの指示に基づいて作業を進めることが必要な場合もあり、生徒間の役割分担が重要となってくる。特別な支援を必要とする生徒の場合、こうした授業の場合はともすれば他の生徒が行う作業を見守っていることが多く、主体的に授業に参加しているとはいえない場合があった。そのため、学生が当該生徒の横に座り、実験器具や工作器械のマニュアルを共に確認したり、生徒が実際にそれらの器具を操作することを支援するなどした。

特別支援学級に在籍する生徒は、特別支援学級と普通学級を行き来しながら授業を受けるため、同じクラスの生徒との関係が希薄になりがちである。そのため、授業中における共同学習場面においては、学生自身が生徒と生徒の通訳的な役割を果たすよう心がけた。

#### 【成果と課題】

活動開始当初は、生徒も学生も緊張していたのか、コミュニケーションをうまくとることができない様子が観察されていた。しかしながら活動を重ねる中で、双方の信頼関係が築かれるとともに、生徒が積極的に授業に向かう姿勢が窺われるようになった。また、学生（特に4年生）にとっても、来年度以降に教壇に立つ上で大きな学びの場になった。特別支援教育講座は隣接学校園との関係が十分であるとは言い難いため、今後ますます小・中学校との連携活動を拡充させていきたいと考えている。

## 12. 幼児教育

本年度、幼児教育講座で実施した取り組みのうち、

1. 2012年度教育実地研究基礎「暗闇部屋」の実践
2. 幼稚園における子育て支援事業と未就園児保育の運営 について、  
以下に担当した大学教員による活動報告を示す。

### 1. 2012年度教育実地研究基礎「暗闇部屋」の実践

教育実地研究基礎

幼児教育 1年 11名

人間発達科学コース 2年 2名

幼児教育講座 河崎道夫

#### 【目的】

幼稚園の夏祭りに「暗闇部屋コーナー」を分担して参加し、子どもとふれあう活動を通して幼児教育現場の実際を知る。

#### 【概要】

「暗闇部屋」とは「おばけ屋敷」と違い、ただ光がない真っ暗闇を子どもに体験してもらうための部屋であり、これまでも多くの保育実践がある。この実地研究基礎においても毎年白塚幼稚園で実施している。(今年度は、附属幼稚園でも実地研究基礎として実施した。)

4月のオリエンテーション後、計画と準備を数回行い、段ボール集めを行った。学生は、実行委員が部屋作成の下準備で幼稚園を訪れた。また幼稚園と子どもたちに慣れるため全員が1回ずつ幼稚園を訪問し、子どもたちと遊ぶ機会をもった。

夏祭り(2012年6月30日・土曜日)当日、遊戯室に段ボールで囲い真っ暗の部屋を作った。遊戯室の窓や入り口を、光がいっさい入らないようにカーテンや段ボールを使って覆うことに最新の注意を払った。例年の経験を踏まえ、入り口、出口を工夫することに努力した。

入り口の説明や案内、出口でのメダル渡し、部屋の中での待機と観察、出入り口でのビデオ撮影など分担して実施した。

できあがって子どもたちが入る段階では、学生は入り口、部屋の中の2コーナー、出口に交替で

立ち安全確保につとめながら、中での子どもの様子を観察することができた。と言っても何も見えないので、子どもが歩いたり壁に触ったりするときの音や子どもの発する声でおおよその様子を感じ取っていった。

今年は昨年の反省を踏まえ夏祭りの開始前にも子どもが入れるようにした。

幼児を中心にその兄や姉などの小学生の低学年の児童が参加した。はじめての経験で「中に何がおるの?」「おばけいない?」などと不安がる子どももいた。逆に「全然怖くない、一人で行けるよ」と強がる子もいた。中では急いで走る子、ゆっくり探りながらいく子と、様々であったが、一切見えないという経験が、不安ながら新鮮でおもしろかったようである。何度も何度も入りたがる子どももいれば、特に小さい子は泣いてしまうこともあった。

例年のことであるが、出口から出てきた子どもの表情に、準備・実施した学生は報われるものがあつた。みな泣くにしても笑うにしても生き生きとした様子であつた。驚いたり怖がったり強がったりホッとしたりと、子どもたちの様々な姿を見ることができた。また学生にとっても「暗闇」を経験するよい機会となつた。

また、今年は幼稚園側の要請で、もう一つの遊びコーナーを企画担当した。一室を利用して「魚釣りコーナー」を子どもたちを楽しませた。

大学生として初めて、子どものために実際

の保育現場に関わって、企画・運営・実施することができた。企画運営の難しさを経験するとともに、共同で一つのことを成し遂げる楽しさ、子どもたちの笑顔の素晴らしさを実

感じ、保育が保育者はもちろん、地域や保護者の協力共同で実現、充実していくことに、改めて気付くことが出来たと思われる。

## 2. 幼稚園における子育て支援事業と未就園児保育の運営

三重大学教育学部幼児教育コース 4年

【北立誠幼稚園 たんぽぽ会】 関絵里奈・玉置綾・脇阪舞

【白塚幼稚園 ぴよんちゃんクラブ】 岡歩美・小川真友子・奥田静香

【南立誠幼稚園 うさぎ組ひよこ組】 岩永尚子・長谷川佳世・藤原理絵・森岡有紀・山田真由  
指導教員：吉田真理子・河崎道夫

津市内の公立幼稚園（白塚幼稚園、北立誠幼稚園、南立誠幼稚園）で、子育て支援の一環として未就園児保育の運営をさせていただいた。園の方やボランティアの方とともに協力しながら、毎週未就園児とその保護者を集めて、親子で楽しめる様々な活動内容を企画した。家でもできる簡単なふれあい遊びや、絵本の読み聞かせ、季節に合わせた製作、戸外での遊びなどを企画し、子どもだけでなく保護者の方も楽しめて皆で交流を深められるようなものを行ってきた。また、運動会など園での行事の支援にも積極的に参加した。

### ①活動内容

津市内の公立幼稚園（白塚幼稚園・北立誠幼稚園・南立誠幼稚園）で、子育て支援の一環として未就園児保育の運営を行った。園の方やお母さん

### ②全体の経過

#### 〈たんぽぽ会〉

たんぽぽ会は、0～4歳児とその保護者を対象とした子育て支援の活動である。たんぽぽ会は、月曜日に、北立誠幼稚園の保育室「たんぽぽ会の部屋」で行っており、月に2～3回開いている。毎回、約20組の親子が参加している。

5月当初から、毎回のように参加する親子もいれば、各回で、初めて参加する親子もいた。どの子どもたちも、初めはかなり緊張した様子で、保護者のもとを離れられなかったり、私たちが話しかけても恥ずかしがって隠れてしまったりする姿が

ボランティアの方と共に協力しながら、月2～3回未就園児とその保護者を集めて、家でもできる簡単なふれあい遊びや、絵本の読み聞かせ、季節に合わせた制作などを企画して活動した。私たち自身が楽しむことで、会全体も楽しい雰囲気になり、全員のつながりが深められるよう工夫している。また、七夕や運動会などの園の行事の支援にも積極的に参加した。

《人気のあった活動》

ふれあいあそび……ラララぞうきん、バスにのって、大きくなって小さくなって  
体操……どうぶつたいそう1・2・3、サンサンたいそう、はとぼっぼたいそう

制作……うちわ作り、どんぐりのスタンプング、キノコの制作、クリスマスブーツ、たこ絵本……たまごをこんこんこん、だるまさんが、おいもをどうぞ

多く見られた。しかし、何回か参加していくうちに、子どもたちも少しずつ「たんぽぽ会」という環境に慣れてきた様子が見られ、笑顔で挨拶をしたり、保護者のもとを離れて私たちと遊んだりするようになった。10月頃からは、子どもと学生の間には壁がなくなっただけで、良い意味での遠慮がなくなり、より積極的に、活発に私たち学生と関わろうとする姿が見られた。また、子どもたち同士の関わりも少しずつ見られ始め、友だちを意識して絵をかく様子が見られたり、粘土遊びやおままごと遊びなどでは、友だちに物を渡したりす

る姿も見られた。時には、友だちとのおもちゃの取り合いなどが見られるようになったが、それも、多くの子どもたちが自分を出せるようになったからなのだろう。このように、回を重ねて、友だちや私たち学生と関わっていく中で、子どもたちにとってたんぼぼ会が自分たちを出せる安心した環境、楽しい場所になっているのではないかと思う。

私たちは、そのような安心した環境にしていけるよう、親とのふれあいを大切にして進めてきた。毎回、みんなで一緒に遊ぶ設定あそびでは、親子のふれあい遊びを多く取り入れてきた。親とふれあう遊びに対してとても嬉しそうに笑っている子どもを見て、次の活動にいかしていくようにした。また、6月頃から、毎回のように「どうぶつ体操1・2・3!」という体操を取り入れ、今では、子どもたちみんなが大好きな活動になっている。毎回行う活動を取り入れることで、設定あそびも安

#### <ぴよんちゃんクラブ>

ぴよんちゃんクラブは20組前後の親子が参加する未就園児保育となっており、参加人数は5月から次第に多くなってきた。

5月当初は、子どもたちも初めての環境に戸惑っており、学生から関わろうとしても保護者の後ろに隠れてしまうことが多かった。そこで、まずは親子の関わりを大切にして子どもが安心できる環境を作ることを優先するようになった。また、積極的に保護者とコミュニケーションを取り馴染んでいく中で、子どもとも自然と関わりを持てるようにした。そのような関わりの中で、子どもたちは次第に慣れていき、子どもと学生との一对一の関わりも多く持てるようになり、積極的に学生に話しかけてくる子どもの姿も見られるようになってきた。また、親子や学生との関わりだけではなく、子ども同士の関わりも次第に多く見られるようになってきた。例えば、友達がしている遊びに自ら入って一緒に遊んだり、「〇〇くん来た」と友達が登園してきたことを嬉しく思ったりするなど、友達と関わりたい気持ちを持っている様子や、仲の良い友達関係ができていく様子も見られるようになった。

心して参加できるのではないかと思う。全体的に、元気で活発な雰囲気「たんぼぼ会」である。その中で、子どもたちは自分なりに参加し、楽しんでいる様子が見られる。

子どもたちは、0~4歳と幅広い年齢なので、みんなが楽しめるような活動を考えることは難しかった。時には、0~2歳には難しい内容になってしまったと反省することもあった。しかし、反省することで、次回からの活動につなげることができたと思う。また、子どもたちが、目に見える形で参加していないからといって、その活動に無関心なわけではなく、その子なりに興味を持ち、楽しんでいると考え、全体への目配りを大切にするようになった。「たんぼぼ会」といった0~4歳児の未就園児保育に1年という長期にわたって参加させていただくことで、子どもたちの成長を見ることができ、私たちも多く考えることができた。この経験を今後の保育などに活かしていきたい。

また、ぴよんちゃんクラブでは、全体活動だけではなく、自由遊びの時間の保育室のコーナーも学生が行ってよいことになっていた。積み木コーナー、おままごとコーナー、制作（粘土・お絵かき・季節の制作）コーナーを主に設定し、子どもたちが毎回安心して参加することができるように、一年を通して大きな変化はつけなかった。季節の制作については、0~4歳まで幅広い年齢の子が楽しむことができるように、小さい子でも楽しむことのできるようなシールを用意したり、一つ作り終わっても飽きずに何個も作りたくなるように、色や形など数種類のパターンを用意するなど工夫した。「もっと作ってみたい」「家でも作った」という子どもたちの声を聞くこともでき、子どもたちは楽しんで制作に取り組んでいたように感じた。

このように、ぴよんちゃんクラブでは、どのようにしたら子どもたちが安心して楽しんで参加できるのか色々な方法を試してみたり、子どもたちの成長を間近で感じることができ、私たちにとってとても貴重な良い経験になったと思う。

### 〈うさぎ・ひよこ組〉

うさぎ組は3歳児、ひよこ組は3歳児未満の子どもとその保護者を対象とした子育て支援の活動である。うさぎ組・ひよこ組は南立誠幼稚園の遊戯室で行っており、月に2~3回開かれている。毎回30~40組の親子が参加し、大規模な活動となる。

活動をはじめた5月頃は、子どもたちも人数の多さや空間の広さに戸惑っているようで、保護者から離れられないようであった。また、目の前に遊び道具があっても中々遊び始められなかったり、話しかけるとうつむいてしまったりする子どもたちも多く、学生ともかなり距離があったように思う。そこで、保護者と共に活動へ参加できるような内容を行おうと考え、ふれあい遊びを取り入れると、安心した様子で保護者と一緒に遊ぶ子ども達の姿がみられた。はじめは、子どもが保護者から離れられるように活動を進めることが大切だと思っていた私たちだったが、このような子どもたちの姿から、まずは慣れない環境でも十分に楽しめる安心感を得られるようにすることが必要だと

気が付いた。このことをきっかけに、保護者とふれあい時間を取り入れながら子どもだけで行う活動や、活動を通して友だちと関わることができるような活動を意識し、子どもたちが安心して会に参加できるような雰囲気作りを行うようにした。このように回を重ねることで、積極的に活動に参加する子どもたちの姿も見られるようになっていった。

うさぎ組ひよこ組は0~4歳児までと年齢の幅が大きく、活動内容を考える上で対象年齢に捉われてしまい、難しいと感じることもあった。しかし、子どもたちにとって『安心感』のある活動をしていくことが大切だと気づき、そういった活動をしていく中で、子ども達の心身ともに成長した姿を間近で感じることができるようになった。また、子どもたちやその保護者の方々との関わりが持てたことは、私たちにとっても、貴重な経験となった。

### ③まとめ

初めは、今まであまり関わったことのなかった未満児と接することに戸惑いを感じていたり、全体の活動では緊張や不安が大きかったが、徐々に慣れていき、学生自身が楽しんで取り組むことができるようになった。そうすることで、会自体が楽しい雰囲気になるということを実感した。また

、幅広い年齢が同じ空間で活動することへの配慮や、一緒に楽しめる活動を考えることなどの難しさを感じ、その都度みんなで話し合い、会を進めていくことができた。これらの経験は、今後現場で活かしていきたい。

## 13. 教育実践総合センター

本年度、教育実践総合センターでは、以下の取り組みを実施した。

1. 小学校におけるパソコンを用いた名刺づくりの支援
2. 学習成果の情報発信における著作権指導

### 1. 小学校におけるパソコンを用いた名刺づくりの支援

(下村 勉)

#### 1. 目的

小学校「生活科」において、パソコンを用いて児童が自分の名刺(名札)を作成する活動を学生が支援する。その活動を通じて、児童にわかりやすく説明すること、児童とふれあい交流すること、小学校の情報教育の一端を知ること、などをねらいとした。

#### 2. 取り組みの概要

平成21年度に小学3年生の「パソコンを用いた名刺づくり」に対する支援の要請を受けて、私の担当する授業「教育工学」の一部を使って支援したのが最初であるが、今回は4回目の実践にあたる。今回も昨年に引き続き、小学校2年生と1年生を対象とした。前回同様、子どもたちは名刺づくりを楽しみ、とても喜びを感じていた。大学生もその様子に、支援活動に対する満足感を感じていた。実践の概要は以下のとおりである。

<小学校側>

- 1) 栗真小学校1-2年生17名
- 2) 「生活科」での名刺づくりの支援  
目的は、名刺の作成。操作習得は主目的でない。
- 3) 授業実施日：2013年1月17日(木)、  
10:40-12:25(2時間分)
- 4) 場所：栗真小学校3階パソコン教室

<大学側>

- 1) 三重大学教育学部授業：「教育工学」〔(木曜・3-4限、担当：下村勉)の一部を活用する。〕
- 2) 受講生 教育学部2~4年生 42名の中から、希望者20名を選んだ(残りは大学で学習)。
- 3) 単なる手伝いにならないようにする。

- 4) 事前に自分で名刺のサンプルを作って準備する。想定されるトラブルや留意点をあげておく。
- 5) 交流授業のあと、感想等をレポートする。

### 3. 「パソコン名刺づくり」支援の取り組み経過

#### 3.1 準備

##### (1) 担当教師との打ち合わせ

これまでの実践があるため、授業の目的、実施条件、パソコン環境、印刷チェック、使用ソフト、必要な消耗品などの打ち合わせを1回で済ませることができた。

昨年同様、名刺づくりには、津市の小学校のパソコンに導入されている「ジャストスマイル」を使用した。

##### (2) 授業「教育工学」における準備

実践に当たって、「教育工学」の授業1コマ分を準備にあてた。使用するソフトは大学のパソコンにはないので、事前の授業で、教師のノートパソコンで操作手順を説明した。昨年までは、小学生が作成する手順を踏んで、まず学生が自分の名刺を作成していたが、今回は省略した。今回は受講生が42名と多く20名にしぼったため、栗真小学校支援に参加できない学生がいたためである。作成の容易さを優先して、テンプレートは「名刺」ではなく「名札」を使うこと、文字入力はいちキーボードの代わりに「クリックパレット」を用いること、などを留意した。

なお、学生には、児童に操作を覚えてもらうのが目的ではないこと、小学生とコミュニケーションしながら作業をすること、などを指示した。

### 3.2 授業の実施

#### (1) 直前の指示

パソコン室に集合した学生に対して、担当する児童とパソコンとの対応および留意事項を指示した。児童は17名、大学生は20名、パソコンは26台である。児童は一人一台のパソコンを利用でき、各児童に対し大学生1名がサポートできた。

#### (2) 名刺づくりの共同作業

パソコン室に小学生が入り、指定された場所に着席した。私が名刺づくりの手順を簡単に紹介した後、児童と担当する大学生がお互いに自己紹介をしてから作業が始められた。

名刺作成ソフトを立ち上げ、まず名札のテンプレート(デザイン)を選択する。選んだテンプレートで、学校名、氏名、ふりがななどを「クリックパレット」で入力した。好きなイラストや図形を加えて、1枚の名刺を完成させた。つづいて同じものを全面コピーで10枚作成し、専用の名刺ラベルシートに印刷した。

各自が名刺を作り終えた後、名刺交換の時間を取って交流した。今回はとても円滑に進み、10分ほど時間が余るほどであった。

#### 3.3 事後指導

学生に、授業の感想をMoodleに記入するように指示した。また、最終のレポート課題の1つに「今回の実践をもとに、今回の改善点やどのようにこの授業を発展させるか」を設定・奨励した。

### 4. まとめ

実践後の大学生の感想を、以下に示す。

・小学校1年生の子どもは、細かいところにカーソルを合わせるのが難しいということを実感した。やり方を教えると、はじめは困ったり次の動作をととても不安げに行ったりしていたが、自分でやってみて理解すると、次々と作業を進めていくので感心した。はじめの不安な気持ちを教師側がよく理解し、必要に合わせて待ったり教えたりするといった判断が必要だと思った。



(写真1 名刺を作成する児童と大学生の支援)

・小学2年生を担当しました。少し難しいところはサポートしましたが、上手に名刺を作っていました。そのあとに子供同士で名刺交換をしました。が、とてもうれしそうに自分の名刺を自慢していて手伝えることができてよかったなあと感じました。小学2年生がどのような子たちなのかあまり想像ができていませんでしたが、実際に行ってみて、どれぐらいのことまでなら簡単に操作できるのかをみるのができてよかったです。

・子供たちはとても可愛くて、先生や大学生の言ったことをちゃんと聞いてくれました。支援活動が順調に完成しました。その過程もとても楽しかったです。例えば、名刺を交換する前に、正しいやり方を教え、活動が終わるときに「ありがとう」という言葉を伝えることがとてもいいと思います。このような小さなことによって、子供たちのマナー教育ができ、将来の生活や仕事などに役に立つと思います。

以上のように、この実践に参加できたことに対して肯定的な評価がほとんどであった。名刺が印刷できてそれを手にしたときの児童の喜びは想像以上のものであった。名刺づくりは、名前の代わりに学習事項に変えると、いろいろな学習に活用できる。そのような活用を今後の課題としたい。

最後に、この授業実践の機会をいただいた栗真小学校、川辺先生、坂口先生に感謝します。

## 2. 学習成果の情報発信における著作権指導

(下村 勉)

### 1. 目的

新学習指導要領の実施に伴い、情報モラル教育や著作権教育の重要性が強調され、教科書でも著作権に関する記載が増加している。しかし、新たに加わった著作権教育をどのように実施すればよいのか、学校現場では戸惑いがある。

そこで、本実践は、早期の著作権教育が有効と考え、小学校でどのような著作権指導を行えば効果的かを検討した。そして、児童の学習成果物を題材に、引用に着目した著作権指導の試行的な実践を行い、児童の著作権・引用についての理解の深化、本指導法の有効性などを検討した。

### 2. 取り組みの概要

小学校における著作権教育については、①小学校では著作権教育の実施率が低い、②実施内容もDVDやWeb教材を用いた受身的学習で体験が少ない、③単発的に行われている、④「～してはいけない」という禁止に偏る指導になりがち、などの問題点がある。そこで、これらの問題点を改善する著作権の指導法を考案し、試行実践を行った。その概要は以下のとおりである。

<小学校側>

津市立西が丘小学校、理科「流れる水のはたらき」、児童：5年生 32名。授業実施日：2012年11月30日、担当：小山史己教諭。

この学習単元で学んだことを、グループ作業で新聞形式で模造紙にまとめた。そのあと、1時間分を著作権指導の時間と位置付けてもらった。

<大学側>

筆者の指導する大学院生（倉田高宗）が、児童が作成した学習成果物（新聞）を題材に、著作権教育についての1時間分の指導案を作成した。

また、授業の一部の「著作権・引用の説明」を担当した（約10分）。そして、事前事後のアンケートや感想などから、著作権・引用に関する理解度の変化を分析した。



(写真2 著作権・引用ルールを説明)

### 3. 著作権教育の試行実践

#### (1) 著作権指導法の開発

前述の問題点を改善するため、「引用」に着目した著作権の指導方法を開発した。その特徴は、①自分たちの調べ学習の成果物を教材とする、②3つの引用ルールを教え、それを守って積極的な情報発信を奨励すること（禁止教育ではない）、③引用の不十分な箇所に付箋を貼るという体験活動を重視している、などである。

#### (2) 引用に着目した指導（本時）

授業では、児童の著作物でもある学習成果物を例に、著作権に関する指導を行うことで、著作権を自分自身の問題として認識でき、児童の実感を伴う学習へとつながることを重視した。そこで、身の周りにある著作物・著作権について例示した後、児童が作成した著作物にも著作権があると指導した。その後、著作権を尊重しつつ、より積極的に情報発信を行う態度を養うために、引用に関する説明を行った。

引用に関する指導を著作権と併せて行うことで、著作権を尊重しつつ、より積極的に情報発信を行う態度を養うことができるようにした。引用に関する指導の中では、引用をするための3つのルール（①引用箇所に「」をつける②改変禁止③引用先明記）を説明した。

3つのルールの説明後、児童は、自分たちの学習成果物において3つのルールについて不十分だと気づいた箇所を、それぞれの色の付箋紙で貼った。

### (3) 実践結果と考察

最初の学習成果物では引用の記述はみられなかった。「引用」は4年生の国語での既習事項であったが、言葉は知っていても実際の引用行動に結びついていなかったことが明らかになった。

事前・事後アンケート、貼られた付箋の数、授業の感想等を分析した結果、児童の「著作権・引用についての理解度」は大きく向上した。しかし、既習事項であった「引用」については、少し改善の余地がある。全体的には、本指導法の有効性を示す結果が得られた。

## 4. まとめ

今回用いた指導法は、学習成果物を題材にしたこと、引用ルールを守った情報発信の推進、付箋を貼る体験的学習など、新たな特徴を持つものである。今回の試行実践を通じて、一定の効果が見られた。小学校において、調べ学習などで学習成果をまとめる機会が多い。これらの機会を利用し



(写真3 引用が不十分な箇所に付箋紙を貼る)

て、継続的に実施することで、行動レベル（引用行動）での成果が期待できる。

最後に、この授業実践の機会をいただき、多大な協力をいただいた西が丘小学校の小山史己先生に深く感謝いたします。

## 2012年度 地域連携校における教育実習・報告

教育実習委員会委員長 松本 昭彦

今年度は、津市立の連携校での実習としては、別表にあげたように、4週間実習に、橋北中学校では12人、一身田中学校では11人、南立誠小学校で2人の学生が実習をさせていただきました。

大変に実りのある実習をさせていただきましたことにつき、特別の配慮をいただいた地域連携校の教職員・子どもさんたち及び津市教育委員会等関係する方々には、厚く感謝申し上げます。

### 2012年度 地域連携校教育委実習修了者数

### 【4週間実習】

		合計人数	国語	数学	音楽	保健体育	技術	家庭	英語
○小学校	<b>南立誠</b>	2	*2						
○中学校			国語	数学	音楽	保健体育	技術	家庭	英語
	<b>一身田</b>	11	2	4	1	1	1	1	1
	<b>橋北</b>	12	2	4		1	1	2	2

\* 南立誠小学校での実習生2人は、国語の授業をさせていただきました。

#### 【経過】

4週間実習に向けては、昨年度同様、3月30日にガイダンスを行い、連携校・協力校・母校での実習の意義や準備について説明をした。その後、4月には2週間実習生とともに全般的な教育実習のオリエンテーションを行った。また事前指導については、附属学校での事前指導と分けて、橋北中学校・一身田中学校の教頭先生に、大変お忙しい中であつたがお願いをして、実習校を意識して、3回の事前指導をしていただいた。

学生は、実習の前に何回か実習校に入って、授業見学等をし、学校や子どもの様子を実習が始まる前に把握するようにした。実際には、4、5回訪問させていただいた者もいる一方で、1回だけの学生もあり差が出たが、実習校のお邪魔にならない範囲でなるべく見学することを促し、ある程度実習校や子どもたちの様子を知ってから実習に入ることができた。

また実習生の学部指導教員にも、実習中を含め、

複数回学生指導に出向くよう要請し、特練授業の様子だけでなく、実習生の変化・成長を見守ることを依頼した。特に連携室の特任教員は、実習校の先生方からお話しをうかがうことや、実習生の様子を見るために何度も訪問して、実習校と大学、学生と大学との連絡・調整をして頂いた。

#### 【反省と課題】

公立校での実践的な実習を通して、教科指導及び子どもたちへの関わりかたについて自覚を深め、また学校内での先生方の多様なお仕事をつぶさに拝見して、その広がりや責任の大きさを実感した者がある一方で、いろいろな点で自覚が足りず、先生方や子どもさんたちに迷惑をかけた者があった。また、実習生個々の問題でなく、制度としての実習のあり方でも改善の必要な部分があった。

まず、12年11月27日に行われた、一身田・橋北中学校の校長先生・教頭先生、及び津市

教委との会議の場で、ご発言としていただいた要改善点を含めて、今後改善すべき点について、主なものをいくつか列挙する。

#### 「実習生に関するもの」

- ・言葉遣いやマナーの問題
- ・実習に取り組む姿勢に、積極性のあまり見られない学生がいる（特に、合唱指導や放課後の部活動）
- ・板書の文字が丁寧でない
- ・子どもとの距離感がうまくとれていない実習生がある

#### 「実習の制度に関するもの」

- ・教科によってはお1人で2名の実習生をご指導していただく先生もあり、大変である
- ・事前指導の際の各回の焦点の宛て方

#### ・教科別の受け入れ数の設定の仕方

\*一身田中学校では、改修があり、また橋北中学校では6月のふる里実習に加えての実習であること、また教科の中には、講師や新任の先生もいらっしゃるし、教科別の受け入れる実習生数の決め方を考える必要がある。

他にもいろいろとご指摘をいただいたが、来年度にむけては、これまで以上にガイダンスやオリエンテーション等の指導の場で具体的に注意を促し、また各学生の指導教員にも実習生の一般的な要改善点を認識いただき、指導案指導とあわせて個別に指導するようにしなければならない。

また、4週間実習に受け入れていただく人数については、一方的なお願にならないよう、各実習校のご事情をお聞きしながら、お願いをする必要がある。

おわりに

実習については、当然のことではあるが、学部教員全員が実習期間中のみならず、学生の指導にあたり、学習指導と生活指導の全体について学生の意識・資質が高まるよう、意を用いなければならない。実習委員会としても、今後も各実習校や教育委員会のお力をお貸しいただきながら、実習生のみならず、実習を受け入れていただく学校にとってもよりよい教育実習となるよう、努力を重ねていきたい。

### 一身田・橋北校区との連携活動（教育実習について）

中川 三朗

平成 24 年度の教育実習に関わらせていただき、その中で取り組んだことや今後の課題として残されたこと等について感じたことや考えたことをレポートさせていただきます。

今年度、連携校には 2 週間実習として 6 月に一身田小 10 人、西が丘小に 12 人の実習生が、4 週間実習として 9 月から 10 月にかけて南立誠小に 2 人、一身田中に 12 人、橋北中に 12 人の実習生がお世話になり、そのほか協力校にも数多くの実習生がお世話になりました。いろいろな面でご指導をいただき大変ありがとうございました。

今、教育現場は超多忙であり、さまざまな問題が山積しています。おそらく、本音で言えば、教育実習どころではないと思います。にもかかわらず、連携校におかれましては、毎年多くの学生を受け入れてくださっています。

これは、これまでの地域連携事業の取り組みの推進や津市教育委員会との連携協力の結果であると同時に将来の教育界に有意な人材を育てるために協力してやろうという寛大で懐深い大きな心が連携校の校長先生をはじめ教頭先生、諸先生方にあるからだろうと有難く思っています。

いうまでもなく教育実習は学生にとっては実習であっても、児童・生徒にとっては真剣勝負の学習の場です。安易な考えは許されません。

実習中の実習生の様子をしっかりと把握し、悩みや問題等を相談しやすい雰囲気作りや一人で抱え込まずチーム力に対応していくことを志向し、やすいようにきめ細かな対応や手立てを講じていく必要があります。

昨年度の教育実習振り返りの中で、実習生としての基本的な態度や認識が欠けている学生が多くいたこと（具体的には実習中の児童生徒への言葉の使い方、身だしなみ、教材等の準備、実習控え室の使い方、給食時の児童生徒とのコミュニケーションの取り方、掃除の仕方、児童生徒との距

離の取り方、教師としての認識、実習日誌の書き方等々）をおおいに反省し大学としてこれらのことを一からやり直すつもりで指導を徹底すべきであるとのコメントがなされています。

また、実習の中では生徒指導の分野について早急な対応を考える必要があること。多数の大学教員がきちんと実習生を把握して、今後とも実習中のフォローをするような方策を継続して講じる必要があること。などのコメントがなされています。

これらの課題を少しでもクリアすべく、連携支援室Ⅱとして、現場に在籍していた経験やパイプを活かしつつ、気心が通じている管理職の先生方や指導担当の先生方と今までのつながりを大切にしながらフラクナ話し合いをさせていただき、現場の声に寄り添いながら実習しやすい環境づくりへの支援を行ってまいりました。

また、各校で事前に開かれた「教育実習説明会」への参加や大学での「教育実習を語る会」への参加により教育実習に対する学生の姿勢を把握したり、実習委員会への陪席参加により教育実習に対する私たち自身の理解と認識を深めるための活動などの機会を得たりしてきました。

実習生に対しては日常の活動の記録へのコメントをメインに、実習校において 2 週間実習では事前に記入された①授業実践者としての課題②2 週間実習で身につけたい力などについてより具体化するようなアドバイスを、また 4 週間実習では悩みや課題に向き合う方法や事前に提出された「学びのあしあと」に記入された①授業実践者としての課題②教材研究③児童生徒や教師との関係やコミュニケーションに関することなどをもとに実習を実のあるものにするために個々の課題や問題意識・悩みなどについて話をすることなどで個別に対応するよう心がけました。

また、協力校にも関わらせていただいたことも

あって、勤務日との関係からなかなか思うようにはいきませんでした。可能な範囲で連携校に足を運び、実習生の声や、実際の実習の様子を見聞きした上で適時適切な支援やきめ細やかな支援を行うよう心がけました。

例えば教材開発に課題を置いている実習生については自分で考案した導入用の教材を製作準備するなど工夫していたので努力を認める方向で励ましました。

また、困ったことや分からないことは一人で抱え込まずに指導教諭や大学の指導教官など周りの人に早い目に相談しチームの力で対応することや健康管理の重要性についてアドバイスしました。教育実習中のみ下宿生活をする実習生に対しては食生活や健康管理に特に留意するように付け加えておきました。

教育実習を通して実際の児童生徒を前にした経験を通して「学ぶこと」「教えること」などに思いを巡らせ、今後の学生生活の見直しや学生生活の質の向上や自分自身の生き方を考えることにつながれば今後の人生に大きな意味を持つと思われま

全般的に見て「実習生はよく努力した」「優秀な学生が多い」などの好意的な見方が多かったように思いますが、他方では「言われたことはきちんとこなすが、自分たちで判断し行動に移すことはできにくい」「いわゆる指示待ちの傾向がみられる」「今後、教職に就いた時に保護者や地域の人々とうまくやっていけるか心配」などの声を耳にしたこともありました。また、一部には児童生徒への対応や授業の進め方などでの問題などもあったようです。

今後、考えていかなければならない残された課題として、連携校へのより重点的な取り組みを進めること、支援の一貫性を担保するため担当 2 名の連絡調整をさらに図ること、実習校へさらに足を運びより実際に即した支援ができるようにすること、実効性のあるアドバイスになるような学生個々の具体的な様子の把握の仕方を考えることなどがあげられます。

これらの課題につきましては連携支援室Ⅱとして解決に向け、今後とも努力していく必要があります。

## 地域・社会連携 教育機関との連携

寺下 泰彦

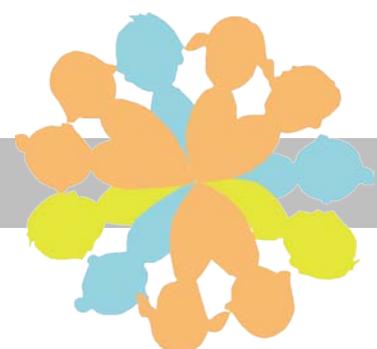
本学の学生は、附属学校園での学校体験にとどまらず、年間を通して、近隣の公立学校園における学校体験を可能とするための体制づくりを推進してきた。教員をめざす学生にとって、「学校体験」がいかに大切であるかを、連携校・協力校に周知し、確固たる協力体制の構築に向け努めている。

1. 学生の教育実地研修や教育実習等のバックアップ（後方支援）
2. 公立学校園の教師支援（教育情報・機器貸出）

4年間の学生生活を通して、多様な学校体験を行うことは、教職への関心や意欲を高めるために有効なものである。子どもたちとの出会いは予想を超えた活力・魅力を感じ取る機会である。こういった機会を体系的に持つことにより、人間に対する深い洞察や共感的態度を習得し、実証的な教育研究能力の獲得に繋げることができる。子どもたちと多く関わることで、一人ひとりの良さに気づき、その子の持つ可能性を伸ばす、そのような影響を与えられるような教師をめざして欲しい。



## Ⅱ 隣接学校園からみた連携活動



# 1. 白塚幼稚園

本年度の白塚幼稚園で実施した取り組みは以下の通りである。

1. 夕涼み会での「暗闇部屋」と「さかなつり」コーナーの計画と実施
2. 大学キャンパスを活用した木の実拾い
3. 未就園児保育（ぴよんちゃんクラブ）の計画と運営

以下に活動報告を示す。

## 1. 夕涼み会での「暗闇部屋」と「さかなつり」コーナーの計画と実施

河崎道夫先生と幼児教育コース1，2年生

### 【目的】

- ・夕涼み会のコーナーで親子や家族で、自ら体験できるものを作る。
- ・子どもたちが学生の人に関わってもらいながら、暗闇部屋やさかな釣りを楽しむ。

### 【概要】

昨年同様、園行事の一つである夕涼み会（平成24年6月30日）において、学生による暗闇部屋とさかなつりコーナーの計画と実施をしてもらう。「暗闇部屋」は昨年まで毎年、計画・実施してもらっていたので、子どもも保護者もイメージできる人が多く、本番も順調に進んでいった。今年度は、もう一つの遊びコーナーとして「ぷかぷかどんなさかなかな」さかなつりコーナーも計画・実施してもらう。さかなつり遊びも園内での経験があるので人気があったが、夕涼み会での遊びコーナーとしての回転の仕方に工夫が必要な部分があった。

### 【成果と課題】

昨年の経験のある年長児は、暗闇部屋ができていく昼間から期待感でいっぱいだった。部屋の中は入って見ることはできないが、顔見知りの学生たちがとなりの部屋で準備を進めている気配は十分に感じることができたので、子どもたちの期待感をさらに高める効果があった。年少児は暗闇部屋の経験がないので、恐怖を感じてしまう子が多いが、学生たち

がその子に応じた言葉がけや関わり方により、暗闇部屋に上手に誘っていたように思う。側に保護者がいるが、そんな様子に保護者たちは安心して任せる様子が見られた。また、年長児では、夕涼み会後の保育の中で、学生たちを真似て自分たちで身の回りのものを使って暗闇部屋を再現しようとする姿も見られた。学生たちの暗闇部屋が、子どもたちの印象深い思い出となって残り、その後も自分たちで遊びに応用することとなった。子どもたちの心を大きく揺さぶる経験となったことが分かる。

さかなつりコーナーは、初めてでも、年齢の低い子どもたちも参加できるので、たくさん子どもたちが一度に押し寄せた。一度に二人ずつ遊ぶ（つる）のではおいつかず、待っている時間が長くなってしまった。途中からでも、臨機応変に一度に四人ずつ遊ぶ（つる）ように変更自在にすると良かったように思う。また、年長児や小学生まで、時には保護者も参加しやすいように、さかなを釣る高さを変えるなど、年齢や発達段階に応じた遊びの柔軟性もあるとよかったように思う。学生手作りのプレゼントももらえて、皆さんに大好評でした。

白塚幼稚園の夕涼み会では、保護者はもちろん地域の方々もおなじみの「三重大の学生さん」がなくてはならない存在になっています。

## 2. 大学キャンパスを利用した木の実拾い

平山大輔先生と理科教育コースの学生、幼児教育コースの学生

### 【目的】

・大学キャンパス内の木の実拾いや植物観察を通して身近な植物の多様性に触れる。

### 【概要】

2012年11月7日に三重大学キャンパスにて北立誠幼稚園との交流を兼ねて木の実拾いをした。平山先生に説明・案内してもらいながら、構内の場所を移動し、アラカシ、コナラ、ウバメガシなどのどんぐりを見つけ、子どもたちはたくさん収穫することが出来た。その後、キャンパス内で北立誠幼稚園と当園の年長組、年少組同士で一緒にお弁当を食べながら交流をした。昼食後、北立誠幼稚園の園児と別れ、バス停に向かい帰園した。この間、ずっと学生たちが子どもたちと積極的にかかわってくれたり、迷ったり、危険なことのないよう見守ってくれた。

### 【成果と課題】

- ・女性の学生が子どもたちに笑顔でたくさん話しかけてくれたおかげで場が和み、楽しい雰囲気になった。
- ・マツボックリが少ないとのことであったが、ある教授が木の枝を下に下げてくださいって、子どもたちはたくさんマツボックリを採ることが出来た。また、初対面で緊張している子どもたちであった

のに、気さくに関わってもらうことにより子供たちの緊張感もほぐれ、喜んでマツボックリ収集に励む子どもたちであった。

- ・バス停まで、平山先生が木の枝を目印に持って、園児を先導してくれた。さり気ない動作であるが、平山先生の手にした木の枝が、子どもたちの今日一日の余韻を感じさせるものであり、子どもたちも木の枝をじっと追いかけてついていく様子が見られた。
- ・構内のイレの利用についても、学生たちがついて世話してくれたおかげで、子どもたちは迷うことなく、困ることなく休憩・食事の時間を過ごすことができた。初めての場所、しかも園外での活動であったのに、学生たちが安全の確保に十分に気を配ってくれたおかげで、子どもたちは安心して過ごすことができたように思う。
- ・園にもどってから、収集したどんぐりやマツボックリを使って製作活動を行った。子どもたちはどんぐりの特徴と名前を口にしたたり、マツボックリの歌を自然と口ずさみながら、大きさ分けをしたりする姿も見られた。

## 3. 未就園児保育（ぴよんちゃんクラブ）の計画と運営

吉田真理子先生と幼児教育コース4年生

### 【目的】

未就園児（0歳から3歳の乳幼児対象）が保護者と一緒に遊ぶ機会を設け、白塚地域の子育て支援センター的役割を果たす。



絵本の読み聞かせなど、一緒に遊ぶ場の設定

### 【概要】

毎火曜日の午前中、当園では未就園児保育（ぴよんちゃんクラブ）を開いている。未就園児とその保護者が共に、ままごと、粘土遊び、リズム、ふれあい遊び、絵本の読み聞かせなど、一緒に遊ぶ機会を設けている。朝、毎回3名の学生が当園の保護者ボランティアとその日の計画や担当について話し合いを持つとともに、登園してきた未就園児に声をかけ、一緒に遊んだり、その保護者と子どもの成長について話し合ったりするなど、活動の支援をしている。

### 【成果と課題】

毎年、学生同士のバトンタッチがきっちりとしており、学生が変わっても同じ気持ちで続いているので、今年度もスタート当初から、経験豊かな保護者ボランティアとの連携がしっかりとれ、ぴよんち

ちゃんクラブがスムーズにスタートした。

学生は保護者ボランティアのお母さん先生と一緒に過ごすことで、母親の思いを知り、母親ならではの子どもへの接し方を学んでいる。

毎回大事にしている反省会では、保護者ボランティアも学生も教師も、「適切な支援はできたか」「次回はどのようにしていこうか？」という視点で話し合い、それは、子どもや保護者の行動の奥にある気持ちを知ることにつながると同時に、学生が回りの様子を見て自分は何ができるかを考えたり、主体的に行動したりすることにつながった。

保護者ボランティアも、学生たちの回数を重ねるごとの成長を感じており、反省会でそのような感想や意見を直接、学生に話す。それが学生たちの励みや自信につながっているように思う。

## 2. 北立誠幼稚園

本年度の北立誠幼稚園で実施した取り組みは以下の通りである。

1. ものづくり
2. 書道体験活動
3. 未就園児の遊ぶ会（たんぽぽ会）の運営支援
4. 大学キャンパスを利用した自然観察（どんぐり拾いを中心として）… 白塚幼稚園と合同  
以下に活動報告を示す。

### 1. ものづくり～くぎ打ちや木工を楽しもう～

#### 【目的】

木ぎれや釘を使った活動経験が少ない現状がある。そこで、大学の技術教育科の力を借りて、園児たちが釘打ちや木工を楽しめるよう、計画することにした。

#### 【概要】

学年の発達段階による興味や関心に合わせ、年長児は2回、年少児は1回の活動を楽しんだ。

<年長児 6月22日>

1回目：釘打ちとんとん（くぎ打ち遊び体験）

1回目の活動では、園児たちが釘打ちに慣れることをねらいとした。大学生に、いろいろな大きさや形の木ぎれを準備してもらい、園児が思いつくままに釘を打つことを楽しんだ。

また、釘についても長さや色の異なる物を幾つか用意してもらった。玄能は、個々により扱いやすい重さが異なるであろうことを配慮し、重さの違う物を準備してもらった。

活動の導入では「危ないから、してはいけないこと」について話があり、絵を見せながら知らせてもらったことで、園児たちにとって分かりやすかったと思われる。また、活動の中では、園児2人に対して学生1人に支援してもらった。園児一人一人が、声をかけてもらいながら、活動をじっくりと楽しむことができた。

そのような中で、釘をたくさん打つことを楽しむ子、釘を打つ時に力の加減をして、玄能の使い方を確かめる子、木材同士を釘でくっつけようとする子など、いろいろな姿が見られた。

<年長児 7月11日>

2回目：釘打ちで絵を作ろう（壁掛け）

2回目の活動では、園児が桐材に予め絵をかいとおき、その絵の線に沿って釘を打つことを楽しんだ。

釘を完全に打ち込むことが必要であるため、活動の導入時に、大学生から玄能の使い方を詳しく教えてもらったり、釘を打つ時に大切なことを知らせてもらったりした。

この時も、園児2人に対して学生1人に支援してもらった。園児たちは、予想した以上に集中して活動に取り組んでいた。また、大学生の手助けや見守りによって、玄能をうまく使って釘を打つ姿があった。

<年少児 7月11日>

木をくっつけて遊ぼう

年少児は、園生活に慣れてきたところであるという発達段階に合わせ、活動を1回とした。

木ぎれを使って気軽に遊ぶことができればと考え、木工用ボンドを使って木ぎれを思いつくままにくっつけて楽しむことにした。

木ぎれは、年少児にとって扱いやすいものであることや園児がいろいろなことを思い浮かべたり興味をもったりできることなどを配慮し、小さめで様々な形のものを用意してもらった。

園児たちは、木ぎれ2～3個をくっつけたものを幾つも作ったり、少し高くなるように木ぎれを積んだり、木ぎれを固定する部分と上に乗せて動かせる部分とを作ったりしていた。また、できたものを好きなように見立て「これは～だよ」など話すことを楽しんでいた。学生には、1対1で支援してもらった。

## 【成果と課題】

- 活動の前に、大学生に何度も幼稚園へ遊びに来てもらったことで、園児たちが学生に親しみを感じることができた。そのため、活動の時にも“大好きなお兄さん、お姉さんがどんな楽しいことをしてくれるのだろう”と興味をもつことができたと思われる。大学生にとっても、親しくなった園児たちが相手であるため、安心して支援することができたのではないだろうか。

また、幼稚園の教育課程は「自ら選んでする活動（自分でしたい遊びをみつけて、友だちや先生と一緒に楽しむ時間）」「クラス全体の活動」から成り立っている。自ら選んでする活動の時間に、大学生が来園してくれたこともあったが、その中での幼児の姿や教師の援助については知らせることができず、反省点である。幼稚園教育の特性について、大学生に知ってもらえたことができたなら、更に良かったのではないだろうか。

- 年長児の1回目の活動では、釘打ちが比較的しやすい木材、木目のはっきりしたものなど、3種類の木材を準備してもらった。園児たちは、種類の違う木材を使うことによって、釘打ちをする時にそれぞれの木の硬さや特質を感じていた。

年長児の2回目の活動では、釘を打ち込むことがねらいであったため、桐材を準備してもらった。釘を打ち込みやすい材質の木材を準備してもらったことにより、活動のねらいを大切にしたい指導や支援が可能となったと思われる。また、手首の使い方や玄能の平面と木殺し面との使い方を知らせてもらったことで、園児がそのようにして使ってみようとする気持ちをもつことができた。

- 年長児が釘打ちを経験する中では、指を打ってしまう姿もあった。大きな怪我は避けなければいけないが、「痛い」という経験を味わうことも大切であると考えられる。
- 年長児の1回目の活動をした後に、用具や材料を残していつてももらったため、活動の翌日からも釘打ちを楽しむことができて良かった。

また、年長児の2回目の活動後には、壁掛けにドリルで穴を開けるところも見せてもらっ

た。活動が途中で途切れてしまうのではなく、自分が釘打ちをしたものが、どのように壁掛けになったのかを知ることができて良かった。

- 年少児の活動では、木工用ボンドでくっつけやすい木材を準備してもらったことにより、園児たちが無理なく楽しむことができた。同じ形や大きさのものではなく、様々な形や大きさの木ぎれを準備してもらったことで、園児たちの作ろうとするイメージが広がり、楽しさが増したのではないかとと思われる。

- 活動の中では、大学生が園児たちの様子を丁寧にしながら支援してもらっている様子から、熱心さが感じられた。幼児期には、個別・具体的な支援が大切であり、この活動にかかわって感じたこと、気づいたことなどを幼児の発達の様子として、心に留めておいてほしいと思う。そして、今後いろいろな発達段階の子どもたちと過ごす中で、活かしてほしいと考える。

- 技術教育科との連携により、園児たちが釘打ちや木工遊びの活動を楽しむことができた。今後は、技術教育の専門性から、木を使っての遊びを幅広く教えてもらうとともに、幼稚園からは、遊びを通じた指導という面から園児の楽しみ方を伝えて、連携活動を考え、更に楽しいものになるよう方向性を探ることも可能かと思われる。活動をクラス全体ですることにもあつて良いし、時には、自ら選んでする活動の中で、大学生と連携して楽しむこともあつて良いのかもしれないと考える。



## 2. 書道体験活動 ～筆や墨で遊ぼう～

### 【目的】

本園は、大学との連携活動の中で、筆や墨を使った表現活動を数年続けて楽しんできている。これまでの経過から、書道が園児にとって無理なく楽しめる表現活動の一つであると感じている。また、大学と園の教員にとって、同じ活動に引き続き取り組むことは、前年度の成果や課題をみつめ直すことができ、意義があるのではないかと考える。

そこで、今年度も書道体験に取り組むことにした。

### 【概要】

年少児にとって、書道用の筆を使う経験は初めてであり、少しずつ慣れることができるように活動を2回に分けて行った。また、2回目の活動内容については、各学年の発達段階やクラスの様子に合わせて考えるようにした。

#### < 1回目 11月1日 >

テーマ：筆を使って、好きなように線や絵をかいてみよう ～筆に慣れよう～

初めに、大学の林先生から筆や硯などを中心とした書道用具について、園児たちに分かりやすく説明してもらった。用具の使い方や大切に扱うことも、知らせてもらうようにした。また、一本の筆でかいた様々な太さの線や絵を実際に見せてもらった。

次に、園児1～2人に対して学生1人程度の割合で支援してもらいながら、筆を使っての表現をそれぞれが楽しんだ。大きな半紙に線や形、絵、知っている文字などを好きなようにかいてみた。枚数にはこだわらず、自分のかきたい分をその子のペースで楽しんだところ、たくさんかくことが楽しい子、学生とかかわりながらかくことがうれしい子、筆の動かし方を試しながらかく子など、いろいろな姿が見られた。

その後、園児2～3人で1組になり、更に大き

な半紙に表現することを楽しんだ。

年長児の多くは、昨年度にも筆や墨での表現を経験していることから、その楽しさが分かっており、安心して楽しむ姿があった。ほとんどの園児が筆に慣れることができたのではないかと思われる。

#### < 2回目 12月13日 >

テーマ：年少児・・・筆の表現を楽しもう

年長児・・・自分の名前をかいてみよう

2回目の活動では、学年ごとにテーマを設けた。年少児は、同じ活動を繰り返すことで安定するため、1回目と同様に好きな線や絵などを数枚かき、その後で更に大きな半紙に表現することを2～3人1組で楽しんだ。また、年長児は、前回と同様に好きな絵や文字をかくことを楽しんでから、自分の名前をかくことにした。文字への関心が増してきた時期であり、少し緊張しながらも一生懸命にかこうとする姿が見られた。

園児たちが安定して活動に取り組めるように、大学生には、1回目の活動で支援した園児となるべく同じ子にかかわってもらうように配慮した。

### 【成果と課題】

○ 林先生の導入は、園児たちにとって、大変分かりやすかった。具体的であること、視覚に訴えることは、幼児期の子どもたちにとって有効であると思われる。また、園児たちに分かりやすい言葉で簡潔に伝えてもらったこと、ゆっくりとした口調で話してもらったことが、園児たちの安心感や活動を楽しみにする気持ちにつながったのではないかと考える。

大学生にとっては、林先生の導入の仕方や園児たちの反応を見ることによって、子どもの発達段階や一人一人の発達のペースに合わせた知らせ方に触れる機会となったのではないだろうか。

○ 活動のねらいや活動の中で大切にしたいこ

と、園児が落ち着いて楽しめる時間、その年の園児の様子などを大学と園からお互いに出し合い、確かめ合うことが必要であると考え。

例えば、今年度の1回目の活動後半時に、集中することがやや難しくなってきた年少児の中には、墨を手の平につけ、手型を押して楽しむ姿があった。声をかけるかどうか迷った末、その場は見守ることにした。活動後の話し合いで、手型押しは墨でなくても楽しめること、この活動では筆を使った表現に重きをおくことなどの理由で、2回目の活動では筆と墨の表現を楽しめるように支援することとした。

○ 書道の授業を選択する人数の都合上、年度によって学生の人数に違いがあるため、その年に合わせて、園児にかかわることができれば良いのではないかと考える。

発達段階から考えて、幼児が戸惑いを感じるようなことについては、大学生におおまかに知らせておくことが必要かと思われる。幼児の中には、多人数の大人がいると圧倒される子もいるし、語彙が少ないため、言葉の理解度にも個人差がある。相手の表情から気持ちを感じ取る面も大きい。そのため、身を低くしたり膝をついたりして園児と視線を合わせたり、短い言葉を使い、ゆっくりとした口調で話したり、笑顔で接すると園児が安心したりすることなどを事前に園から伝えておくと良いかと思う。

そうすることで、学生、園児ともに安心感が増し、書道体験が更に楽しいものになるのではないだろうか。

- この連携活動に参加した学生は、幼児教育専攻ではないため、活動の楽しみ方や園児への支援の仕方に戸惑いを感じた部分もあるのではないかと思う。しかし、子どもたちの発達は、幼児期からつながっていくものであり、この時期の発達の姿を僅かでも見てもらえたことは、良かったのではないかと考える。また、活動の導入や展開の仕方、園児への支援の仕方などは、特別支援教育における配慮や小学校低学年の

指導、個人の発達のペースに合わせた支援などにもつながるものであると言える。教育現場で子どもたちと過ごすことになった時、何らかの形で活かされるものになればと考える。

- 園児たちは、就学後に毛筆習字を学習することになる。“そういえば幼稚園の時に筆でかいたなあ”“楽しかったなあ”と思い返す子も、中にはいるのではないだろうか。そのような楽しさや興味が、園児の心のどこかに残っていくことを願っている。



### 3. 未就園児の遊ぶ会「たんぼぼ会」の運営支援

#### 【目的】

未就園児の遊ぶ会「たんぼぼ会」の運営支援として、幼児教育コース4年の3名の学生が参加し、一緒に遊んだり全体活動の立案、指導をしたりする。その中で、大学で培ってきた実践力をより確かなものにすると同時に、乳幼児へのかかわり方や環境設定、教材研究、保護者対応等、教師としての感性や力量を高める機会とする。

#### 【概要】

##### (1) 未就園児の遊ぶ会「たんぼぼ会」

当園では、月2～3回、月曜日の午前中を中心に地域の未就園児（0歳～3歳）が保護者と共に遊ぶ会（たんぼぼ会）を実施している。

その運営は、幼稚園の担当教員と子育て支援ボランティア（お母さんボランティア、北立誠地区主任児童委員等）が行っている。実施時間は、午前10時から午前11時30分までである。午前11時までの前半の時間は、粘土やままごと、絵画製作、積み木、砂遊び等をして親子で遊んでいる。その後、全体活動の時間となり、未就園児の発達や興味・関心を考えながら、ふれ合い遊びやリズム、歌、絵本の読み聞かせなどを行っている。

##### (2) 運営支援の内容

今年度も、過去3年間の成果や課題を踏まえ、同コース4年の3名の学生に年間を通して継続的に参加してもらい、前半の活動では、乳幼児観察や保育参加、保護者対応等をしてもらった。後半の全体活動は、学生が中心となり、活動内容の立案、指導をした。そして、たんぼぼ会終了後は、子育て支援ボランティアの方も入り、全員でその日の反省会を実施した。

主な活動の内容は、以下の通りである。（上段は前半の主な活動、下段は後半の主な全体活動）

月 日	活 動 内 容	参加者
4/23	<打ち合わせ会> 自己紹介、年間計画立案等	学3名 保8名 吉田先生 小菅
第1回 5/21	はじめまして ふれあい遊び、リズム、絵本他	学3名 保6名 小菅

第2回 5/28	何をして遊ぼうかな？ ふれあい遊び、リズム、絵本他	学3名 保4名 小菅
第3回 6/4	好きな遊びをして遊ぼう ふれあい遊び、手遊び、絵本	学1名 保3名 小菅
第4回 6/18	絵の具で遊ぼう ふれあい遊び、リズム、絵本他	学2名 保6名 小菅
第5回 6/25	スタンプングをして遊ぼう ふれあい遊び、手遊び、絵本他	学2名 保4名 小菅
第6回 7/2	水遊びをしよう ふれあい遊び、手遊び、絵本	学2名 保0名 小菅
7/7	夕涼み会(園行事に自由参加)	小菅
第7回 9/3	戸外でいっぱい遊ぼう 手遊び、リズム、紙芝居他	学2名 保4名 小菅
第8回 9/10	戸外でいっぱい遊ぼう ふれあい遊び、リズム、絵本	学2名 保4名 小菅
第9回 9/29	運動会(園行事に参加)	学0名 保0名 小菅
第10回 10/15	秋の自然物で遊ぼう ふれあい遊び、歌、絵本	学3名 保4名 小菅
第11回 10/22	秋の自然物で遊ぼう ふれあい遊び、歌、絵本	学3名 保3名 小菅
第12回 10/29	手型押しをしよう(作品展) ふれあい遊び、歌、絵本他	学3名 保3名 小菅
第13回 11/5	さつまいもを作ろう(作品展) ふれあい遊び、リズム、絵本他	学3名 保3名 小菅
第14回 11/12	どんぐりを作ろう(作品展) 手遊び、リズム、絵本	学3名 保6名 小菅
第15回 11/22	作品展(園行事に自由参加)	学1名 保0名 小菅
第16回 12/3	クリスマス製作 ふれあい遊び、リズム、絵本他	学3名 保3名 小菅
第17回 12/17	クリスマス会 ふれあい遊び、手遊び、ペープサート、ハンドベル、リズム、歌、サンタさんからプレゼント	学11名(協力) 保6名 小菅

第 18 回 1/16	入園説明会（来入児のみ）	学 0 名 保 0 名 小菅
第 19 回 1/21	お正月遊びをしよう ふれあい遊び、リズム、絵本他	学 3 名 保 4 名 小菅
第 20 回 1/28	鬼のお面や三方を作ろう ふれあい遊び、リズム、絵本他 <一年間の反省会>	学 3 名 保 4 名 小菅
第 21 回 2/4	新しいお姉さん先生と遊ぼう ふれあい遊び、リズム、絵本他	学 6 名 保 3 名 小菅
第 22 回 2/19	新しいお姉さん先生と遊ぼう	学 名 保 名 小菅
第 23 回 2/25	一日入園（来入児のみ） 幼稚園の友達と一緒に遊ぼう	学 0 名 保 0 名 小菅
第 24 回 3/11	お別れ会 <次年度に向けて>	学 名 保 名 小菅

- \*学は学生、保は子育て支援ボランティア
- \*各月の最終回は、お誕生会と身体測定を実施
- \*ふれあい遊び、手遊び、絵本などの詳細は、省略

#### 【成果と課題】

- 未就園児の遊ぶ会に参加する子どもたちは、毎回同じであるとは限らず、開催日により参加人数に変動がある。その上、年齢にも幅がある。乳幼児期の月齢差による発達差は大変大きく、全体活動の立案や指導は難しいが、毎回の反省を活かし、次の実践につなげることが出来た。また、年間を通して、同じ学生に参加してもらったことは、未就園児の子どもやその保護者と親しくなったり、一人ひとりの子どもの成長過程を身近に感じ取ったりすることにつながった。
- 反省会は、毎回、子育て支援ボランティアの方も一緒に全員で行い、その日の感想や反省、質問等を出し合った。その中で、次回に向けて配慮することを共通理解し、活かせるようにした。個々の親子に対する受け止め方や支援の仕方等についても、全員が同じ姿勢で関わられるように心がけた。このような積み重ねが、たんぽぽ会の心地良い雰囲気を作り出し、未就園児の親子がこの会を心待ちにし、喜んで参加することにつながった。
- 大きな行事の一つであるクリスマス会は、担

当教員との打ち合わせ後、全てを幼児教育コースの4年生全員で立案、実践をした。一つ一つの出し物はもちろんのこと、それらを繋ぐ間合いや子どもの反応を見ながらの言葉かけ、準備等、十分配慮しながら実践することが出来、一年間の経験が活かされていることを感じた。学生の意欲的な姿や一生懸命さが伝わってきた。



- その他、一年間を振り返って、学生からは、「最初は、子どもや保護者にどのように話しかけていけばよいのか緊張や戸惑いがあったが、毎回の積み重ねの中で、自分と子どもや保護者との距離感が縮まり、普通に話せるようになった」「苦手だったピアノを一生懸命練習したが、これからももっと練習しようと思う」「戸外の遊びに積極的に誘いかけることが少なかった。自分が戸外に出て一緒に遊ぼうとする気持ちや遊びたくなるような環境設定が大切であると反省した」「声をかけたり遊びに誘ったりする時のタイミングが難しかった。目が合った時や遊びと遊びのちょっとした間のタイミングを見つけていくとよいことを学んだ」等の感想が出された。
- 今年度も、園に“学生支援”という大きな責務をいただいているので、担当教員より教材研究等の課題を出した。その時期の子どもの姿を踏まえながら、真剣に考えたり、熱心に教材研究をしたりするなど、学ぼうとする意欲が伝わってきた。  
また、自分の思いを出したり、周りのアイデアを聞いたり、取り組んだりすることは、社会生活においても基本的なことである。真摯な姿は、4月から教育現場に出る学生にとって大きな力になったことと確信している。

### 3. 南立誠幼稚園

本年度の南立誠幼稚園で実施した取り組みは以下の通りである。

1. 大学キャンパスを活用した木の実拾い
2. 生き物大好き（ザリガニの飼育観察の話）
3. 子育て支援（未就園児の会うさぎ・ひよこ組の計画と実施）

以下に活動報告を示す。

#### 1. 大学キャンパスを活用した木の実拾い ～平山先生、吉田先生、学生さんと一緒に～

##### 【目的】

- 1 木の実や落ち葉を拾ったり観察したりしながら、秋の自然を楽しむ。
- 2 大学キャンパスを散策しながら、発見したり興味をもったことに、先生や学生さんに教えてもらったり触れ合ったりして楽しむ。

##### 【概要】

今年も「秋の遠足」として、三重大学へのどんぐり遠足を実施することにした。(2012年10月29日)バスに乗って出かけることも楽しみで、ワクワクしていた子どもたち、大学に着くと、広いキャンパス内を歩いて、たくさんのどんぐりが落ちている所へ案内していただいた。「わあ～どんぐりがいっぱいやー」と、歓声をあげながら、持ってきたビニール袋に、拾って入っていた。高い所に、くっついているどんぐりを見つけると、先生に高枝バサミで枝を切ってもらって、うれしそうに拾っている子もいた。どんぐり拾いに熱中している子どもたちに、学生さんたちが、やさしく声をかけて一緒に楽しんでいる姿がほほえましく感じた。



また、大きな葉っぱを見つけたり、木の実の名前を教えてもらったりして、興味を持って話を聞いている様子が見られた。集めた葉っぱや木の実で「ケーキ」を作った子もいた。

##### 【成果と課題】

ドングリ遠足を通して、大学の先生や学生さんたちと一緒に、秋の自然に触れながら、楽しく過ごした経験から、自然に対する興味や関心を深めることができた。ドングリには、いろいろな種類があることを知り、「マテバシイ」「シラカシ」などドングリの名前もいくつか覚えた。大きさや形の違いに気付いたり、集めた木の実で遊んだりする姿も見られた。子どもたちの発見や疑問に、やさしく丁寧に応えていただいた先生や学生さんたちとのかかわりも楽しかったようである。

持ち帰ったドングリで、コマを作ったり「どんぐりコースター」で遊んだりする姿が見られた。また、作品展にて、5歳児は「フォトフレーム」4歳児は「リース」作りに、木の実を使って、秋の自然物を生かすことができた。

こうした直接体験が、子どもたちの感性を豊かにし、自然に対する興味や関心を育てていく機会となった。



## 2. ザリガニについての話 後藤 太一郎 先生

### 【目的】

・園の近くで見つけたザリガニの飼育活動をする中で、先生のお話をお聞きし、より生き物を身近に感じ、生き物への興味を深めていく機会とする。

【概要】2012年6月21日 10:30～11:30

園児29名が遊戯室に集まり、後藤先生からザリガニについてのお話を聞いた。



オスとメスの見分け方について、モニターに拡大して映してもらい、はさみの大きさや、お腹の裏の話をしなが、ザリガニの飼い方や習性なども詳しく

く教えていただいた。

子どもたちからのたくさんの質問に時間をかけて答えていただき、子ども達は自分たちが飼育しているザリガニの様子を思い浮かべながら聞き入っている様子だった。

### 【成果と課題】

近くで捕まえたザリガニを園で飼育している。先生からのお話を受けて、自分たちがしていた飼育の仕方を振り返ったり、今まで飼ってきたザリガニがオスなのかメスなのかを確かめたりしていた。

たくさんを知ったことにより、興味や関心も深くなり、水を替えるとき、餌をあげるときに声をかけるなど、今まで以上に愛情を持って接する姿が見られるようになった。

担任自身も詳しく話を聞き、飼育について積極的になれたことから、ザリガニに触れることができなかった子ども達も実際に触ってみたりしながら世話を楽しむことができるようになった。

## 3. 子育て支援 未就園児の遊ぶ会 「うさぎ組・ひよこ組」の計画と実施



平成24年5月16日～平成25年2月27日まで  
吉田真理子先生・三重大学学生(岩永・長谷川・森岡・山田・藤原さん)  
保護者、ボランティア・主任児童委員伊藤さん・園長

### 【目的】

\*地域子育て支援に、学生が未就園児や保護者、地域の人、教師と関わる中で、幼児や保護者理解、現場に即した活動内容の研修向上につなげると共に、園として、子育て支援の充実を図る。

### 【概要】

・毎月第2・3・4水曜日に行う子育て支援(未就園児の会)「うさぎ組・ひよこ組」に保護者ボランティア、主任児童委員と一緒に三重大学教育学部の5人の学生(岩永・長谷川・森岡・山田・藤原さん)にかかわっていただいた。第1回目の打ち合わせ会では、未就園児の会の目的や流れ、運営などについて話し合い共通理解すると共に、それぞれの「個人紹介カード」を園で用意し、互いを紹介することで親睦や理解を深めた。

10:30～11:30までの自由に遊ぶ時間では、0～3歳までの未就園児やその保護者と積み木や・粘土・おままごとのコーナー等で、親子で遊んでいる様子を見たり一緒に遊んだりする機会を持った。

また今年は「特別コーナー」として学生が中心

となって企画できるコーナーを考案準備してもらったことにした。

11:00～11:30までのみんなで楽しむ活動では学生が中心となり計画を立て、毎回、体操やリズム遊び、歌やパネルシアター、絵本など、園ボランティアや主任児童委員の方と一緒にしてもらった。

終了後の反省会では、保護者ボランティア、地域児童委員や園長と、子どものこと保護者のこと、子育て支援のこと、指導内容などについてそれぞれの立場で積極的に意見交換をしながら交流を深めることができた。

終了後に話し合った主なことも含め、反省や考察、取り組みなど以下資料として表に記述した。(次頁)



#### 【成果と課題】

・今年度も保護者ボランティアが未就園児をもつ保護者であったので、子育て支援の会への率直な要望を聞くことができた。

・学生は、子どもと同じように粘土をしたり表情や様子をみたりして声をかけ関わる中で、幼児や保護者と親しくなっていくことができた様に思う。また、事後の反省会で、地域児童委員や園保護者の方々とは話し合う場が持ったことで、いろいろな世代とのコミュニケーションがとれ、気軽に話せるようになった。

・子どもとどのようにかかわるのか、かかわるといえるかが分からない学生に、まずは一緒にその場において子どもがしている同じことをして遊び、その子の名前を覚えて呼んであげることが大切であるこ

となど話し合った。

・絵本や紙芝居を読むときの教師の位置や配慮を子どもたちの状況に応じてしていくことや、子どもたちの姿を見ながら指導方法の工夫をすることの大切さを、体験を通して学べた。

・今年は学生が5人で、常に5人そろうということではなかったが、未就園児一人一人とじっくりかかわることができた。反面5人での連絡、相談などするための時間の確保が必要であり、事前事後の話し合う時間の確保が難しい中、会終了後にその時間を持つよう努力した。

・昨年同様に反省したことを生かす、保護者や子どもの希望なども聞いて内容を計画し充実していくといったように、課題意識を持って創意工夫を凝らすことができた。ただ、活動内容では、園長が提案し、それをこなしていくことがあったように思う。学生の新しい新鮮な発想で子どもたちが喜ぶものを提案できるよう積極的な取り組み、姿勢が望まれる。

・子どもや保護者地域の方や教師とかかわることの中で得たものは、実力をつけることにもつながり、将来かかわる仕事への自信となってほしいと考える。

・学生、保護者、地域児童委員、園長が仲良くなり、話し合い力を合わせることでより楽しく豊かな会となり、喜んでもらうことができた。また、それぞれの立場で学び合うことが多くあった。

・幼稚園の職員が少ない中、新鮮な目で物事をとらえ子どもたちとかかわる様子には学ぶところがあった。また、運動会やクリスマス会など園行事に積極的に参加してもらい大いに助かった。

・失敗や成功を繰り返しながら、常に反省し、次につなげていくことの大切さを感じ取ってもらえたのではないかと思う。



平成24年度未就園の会（うさぎ・ひよこ組）計画について ～資料～

開催日	みんなでする活動と コーナーでする活動	反省・考察等	次回に向けて
平成24. 5. 16	・体操・絵本・手遊びなど あんぱんまん体操 にんげんっていいな は毎回最初と最後にする。	・絵本を読み聞かせる時に幼児が 集まりやすいようごぎをひいた が、保護者と離れられない子もい て活用できなかった。	・ごぎをひくのは、3歳対象のう さぎ組のみでもよい。 ・さよならは学生が入口に立って 一人一人に声かけ、次に繋いでい く。
平成24. 5. 23	・体操・触れ合い遊び・手遊び・ 絵本・歌 ・ちょうや花の形に切った画用紙 に絵を描き棒につける。	・アンパンマンなどの子どもたち に人気のものを取り入れていく。 ・作ってすぐ持って遊べるので好 評であった。	・アンパンマン体操を昨年度から 引き続き取り入れていく。 ・前に立つ教師が楽しそうにして いく。
平成24. 6. 13	・エプロンシアター○△◆触れ合 い遊び・手遊び・絵本・歌 ・カタツムリの形に切った画用紙 に絵を描き棒につける。	・作ったものをすぐ手に持ってう たを歌えて楽しめた。 ・一人一人に話しかけるようにす ることが大切である。	・子どもたちの歌に合わせてピア ノが弾けるように練習する。
平成24. 6. 20	・在園児との交流（夕涼み会の踊 り練習）ドラえもん音頭 ・うちわ作り ・体操・絵本・手遊び歌など	・園児の様子が未就園児の保護者 にも分かり良かった。 ・作ったものを家でも喜んで使っ ていると好評であった。	・絵本読み聞かせの時、絵本を見 せる角度、教師が床でなく椅子に 座る方が子どもも落ち着く。 ・うちわに使う割り箸が危険であ り、広告紙を丸めて使うなどの工 夫をする。
平成24. 6. 27	・水遊び 園庭で泥んこ、ペットボトルやバ ケツに水を汲み、流して遊ぶ。 ・アンパンマンシリーズ の手遊び、体操、エプロンシアタ ー	・日頃できないような砂場や水で の遊びを親子で十分楽しめた。 ・エプロンシアターなど目に見え るもので表すことで、子どもたち が自然と集まって聞くことがで きた。	・うちわでのシアター（お話）な ど積極的に入れていく。 ・教師がカタツムリのお面をつ け、カタツムリの家族になって歌 ったりすずをみんなでならしたり して楽しむ。
平成24. 7. 11	・うちわ作り ・うちわシアター（ぞうさんのさ んぽ） ・カタツムリの歌とすずを使った 遊び。	・繰り返しを喜ぶため歌や手遊び など最低2回は繰り返す。 ・子どもの座る位置など活動内容 や年齢によって工夫する。	・子どもが歌いたくなる雰囲気作 りを心がける。 ・先生が見える、友達や保護者同 士が、み合える等の活動による座 り方を工夫する。
平成24. 7. 18	・魚釣りのコーナー ・水遊び（プールにて） ・在園児交流（よさこい）	・水遊びを十分満喫できたが、着 替えもあり時間的に余裕がある と良い。 ・中と外との活動を準備したこと で、その子の様子に合わせるこ とができた。	・園児との交流は、園のことを知 ってもらいよい機会となった。今 後もこういった機会を計画的に 作る。

平成24.9.12	<ul style="list-style-type: none"> <li>・作品展用、きのこの製作</li> <li>・小さな輪大きな輪</li> <li>・動物になって遊ぼう</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・作った子の名前の表示【準備】が必要。</li> <li>・みんなで大小の輪になって動くことはすべての参加者で楽しめた。</li> <li>・歌や絵本の時に走り回る子への対処が必要である。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・歌や絵本の時に走り回る子に教師の膝に座らせたり、外で走ることを楽しませるようにしたり工夫する。0～3歳までであれば保護者の元に返すことも考える。</li> </ul>
平成24.9.19	<ul style="list-style-type: none"> <li>・作品展用、きのこの製作</li> <li>・お話のおばさん西塔さん</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・絵本や手遊びを通してお母さん自身が楽しむことが、子供が自らやってみようという気持ちにつながり大切であることが分かった。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・クリスマス会の長靴製作準備をする。</li> <li>・発達から考え作ってすぐに手にできるものにする。</li> </ul>
平成24.10.10	<ul style="list-style-type: none"> <li>・作品展用、きのこの製作</li> <li>・トランポリン</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・電車になってのつながり遊びは、親子以外でするのは難しかった。</li> <li>・焼き芋の手遊びからお芋の絵本への導入が良かった。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・親子中心で動ける触れ合い遊びから入っていき、年齢に応じて友達や学生と触れ合えるものも入れていく。</li> </ul>
平成24.10.17	<ul style="list-style-type: none"> <li>・作品展用、きのこの製作</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・絵本「だるまさん」から主任児童委員のウッドブロックを入れ体で、楽しく表現できてよかった。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・絵本の言葉から感じたことを、体で十分表現できるように、前に立つものが、楽しく伸び伸びと表現する。</li> </ul>
平成24.11.21	<ul style="list-style-type: none"> <li>・クリスマス用長靴作り</li> <li>・ジングルベルのリズム</li> <li>・アンパンマン体操</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・クリスマス会の会場準備について話し合う。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・クリスマスのおしりについて打ち合わせをしていく。</li> </ul>
平成24.11.28	<ul style="list-style-type: none"> <li>・クリスマス用長靴作り</li> <li>・ジングルベルのリズム</li> <li>・3びきのこぶた手遊び</li> <li>・エプロンシアターこぶた</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・3びきのこぶたのエプロンシアターのお話の内容が0, 1, 2歳児にとってはわかりにくかった。</li> <li>・ジングルベルのリズムの振り付けの再確認をする。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・うさぎ組とひよこ組の年齢に応じた内容の検討をしていく。ただし0～3歳の対照となると難しいので工夫が必要である。</li> </ul>
平成24.12.12	<ul style="list-style-type: none"> <li>・長靴のお絵かき</li> <li>・ジングルベルのリズム</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・クリスマス会詳細の打ち合わせ、環境設定について話しあう時間を持つ。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・17日に準備打ち合わせ環境設定</li> </ul>
平成24.12.19	<ul style="list-style-type: none"> <li>・クリスマス会</li> <li>・クリスマスペーパーサート</li> <li>・サンタ・イリュージョン</li> <li>・歌・あわてんぼうのサンタ</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・クリスマスの雰囲気作りをバックミュージックや電飾・壁面・トナカイや三角帽子など担当者みんなできてよかった。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・担当者の打ち合わせの時間をしっかりと取っていき、準備につなげていく。</li> </ul>
平成25.1.16	<ul style="list-style-type: none"> <li>・たこつくり</li> <li>・へびくんのお散歩(大型絵本)</li> <li>・鬼のパンツ(リズム)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・すぐにたこを作って遊べてよかった。園庭で思い切り走る楽しさを味わえた。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・リズムのとり方が違っていたので、次回気をつける。幼児は2拍子でするとよい。</li> </ul>
平成25.1.23	<ul style="list-style-type: none"> <li>・たこつくり</li> <li>・ひっぱろうね触れ合い遊び</li> <li>・鬼のお話と豆まき</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・笑顔で落ち着いて指導できた。</li> <li>・あんぱんまんの登場方法を変化させるなど工夫できた。</li> <li>・鬼の登場が楽しめた。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・子どもたちも慣れてきたので保護者から離れられる子は前に呼んで一緒にする。子供同士の怪我には十分注意する。</li> </ul>
平成25.2.20と平成25.2.27実施予定			

## 4. 栗真小学校

### 栗真小学校における連携活動

栗真小学校教諭 川辺健治

本年度、本校における連携活動の取り組みは、大きく次の2つに分けることができる。

1. 学校の教育的支援となる学生の実地研究
  - ① 1・3・4・5学年における数学教育学生による実地研究
  - ② 5・6学年における家庭科教育学生による実地研究
2. 主に大学教員による学校に対する教育支援活動
  - ① 特色ある授業づくり
  - ② 公開授業や研究発表への指導・助言
  - ③ 学年部会での算数科の授業づくり

以下に1～2における活動報告を示す。

#### 1. 学校の教育的支援となる学生の実地研究

##### ① 数学教育学生による実地研究

###### 【概要】

本校では、1年、3年、4年、5年の4つの学年で実地研究学生を受け入れ、約1年間、毎週1時間を主に算数科の授業を中心に、他教科の学習も含めて児童支援を目的として行った。

###### 【成果と課題】

本校は各学年単学級の小規模校であり、全校児童数も80名余りのため、毎週来てくれる学生をととても楽しみにしており、実地学年やそれ以外の学年の児童も一緒になって遊ぶ姿が見られた。

学習内容がよく理解できない児童への声かけや助言をする等、教師一人では対応しきれない細やかな個別支援のよきサポートとなった。朝の習熟学習では児童全員の算数プリントの採点を行い、教師の個別指導を円滑に進めることに貢献できた。また、朝の「くりまっ子」タイムの読み聞かせの時間では、選んできた図書を丁寧に子どもたちに読み聞かせ、子どもたちも聴き入っている姿が見られた。さらに、多感な時期に入る子どもたちにとって、身近に関わってくれ、相手をしてくれる人が増えることは子どもたちの心の安定にもつながった。

その一方で、週1時間という限られた時間であるため、当日の担当教師との打ち合わせ時間も少なく、次回での学習活動の展望に関する話し合いを十分することができずに終わってしまうことが多かった。しかし、少ない時間ながらも、臨機応変に対応していただき、大変助かったことも多い。学生たちの真面目な取り組みが、毎回のノートにまとめられ、子どもたちのことを真剣に考えてくれたことに感謝している。



朝の習熟学習でプリントの採点をする実地研究学生

## ②家庭科教育学生による実地研究

### 【概要】

5・6学年の家庭科において、家庭科教育学生2名が、それぞれ各学年1名ずつ主に調理実習の単元を中心に実地研究を行い、子どもたちの指導に当たった。

### 【成果と課題】

調理実習の単元を、家庭科教育の専門的な立場から指導していただいたので、子どもたちも、安心して学習ができた。6年生の「お弁当作り」の実習では、一人一人の児童が献立作りからアドバイスしていただき、計画に十分な時間をかけて調理実習に臨むことができたので、子どもたちも満足感のあるお弁当を作り上げることができた。

課題としては、学生が来校できる時間が限られているため、担任との十分な打ち合わせができず、指導案に基づく授業の進め方がどのようなようになるのか、担任が直前まで把握しにくかったことである。



お弁当作りの様子と完成したお弁当

## 2. 主に大学教員による学校に対する教育支援活動

この分野では、教育支援活動を

【1】特色ある授業づくり・・・・・・・・・・・・・大学がかかわる授業および授業支援

【2】公開授業や研究発表会への指導・助言・・・・・・・・・・・・・校内研究への指導・助言

の2点から記す。

### 【1】特色ある授業づくり

#### ①1・2年生の体験学習と教科支援

#### <秋見つけ>

### 【概要】

1・2年生が遠足を兼ねて大学キャンパスを訪れ、キャンパス内にあるどんぐりや松ぼっくり、落ち葉等の説明を受け、採集を行った。大学からは、平山先生が指導にあたった。

### 【成果と課題】

近くの大学キャンパスで、身近な木や実について、大学の先生が分かりやすく話してくれて、子どもたちは興味や関心をもって自然に親しむことができた。たくさんの木の実や落ち葉を採集することができ、これらは、後に開催される「秋ま

つり」に招待する地域の方へのお土産の飾りを作ることに繋がっていった。本校では、毎年、1・2年生の生活科で、秋に「秋まつり」を開催している。その中で欠かせないものが、落ち葉やどんぐりである。幸い大学構内には様々な木々が植えられており、秋見つけには絶好の場所となっているが、採集の時期は、気候に左右されることが多い。気候の状況を予想しながら、前もって秋見つけの遠足の日を設定していくことが課題になっている。



平山先生から木の実について学ぶ子ども達



いろいろな木の実を集める子ども達

## <パソコンで名刺作り>

### 【概要】

1・2年生17名がパソコンの使い方を学び、パソコンを使っての名刺作りを体験した。大学からは、下村先生と学生約20名が指導にあたった。

### 【成果と課題】

1・2年生の児童はパソコン操作の経験が少なく、専門の方から本格的に使い方を教えてもらうとてもよい機会となった。マンツーマンで学生たちにサポートしてもらいながら、テンプレートを使って、自分のオリジナル名刺を作ることに、夢中になって取り組むことができた。

子どもたちにとって、パソコンを操作するのは初めてであり、大学生にパソコンの操作を教えてもらう貴重な体験ができた。

子どもたちは名刺が完成すると、お互いに見せ合いっこをして、得意気な様子だった。そして、自己紹介しながら名刺交換をしたり、指導してくれた学生たちに、自分が作った名刺を1枚プレゼントしたりして、とても楽しい時間となった。

パソコン操作に不慣れな教師にとっては、大学からの専門家による支援はとても助けになり、教師自身も学ぶことができた。



楽しく名刺作りに取り組む子ども達



作った名刺で交換会をする子ども

## <1年生算数科への教科支援>

### 【概要】

数学教育の学生1名が、1年生の算数科の授業で、個別支援を行った。

### 【成果と課題】

本校の1年生は8名と少人数ではあるが、個人差が大きく、授業でも支援を必要とする子どもが多い。算数科では、具体的な操作活動を伴う授業が行われており、確実に理解させるためには様々な支援が必要となってくる。

授業では、子どもの様子を見守りながら必要とする子に対して丁寧に個別に支援を行い、学習内容を理解させる上で、効果が大きかった。この学年の子どもたちは、今後も支援していく必要があるので、次年度以降も引き続き個別支援が行われるよう、大学の方へもはたらきかけていきたい。

## ②高学年家庭科への教科支援

### <エプロン製作>

#### 【概要】

5年生13名に対して、家庭科教育の磯部先生の指導を受けた家庭科教育学生1名が、授業支援として、エプロン製作指導の補助に当たった。

#### 【成果と課題】

エプロン製作は裁縫を行うため、安全面に十分注意する必要がある。個々の作業の進行状況

には差があり、教師1名では支援が追いつかないことが多く、学生1名が補助に加わることで製作を順調に進めることができた。

小学校の時間割と支援に来てくれる学生の時間を調節していくことが、今後の課題として残った。

## ③6年生を送る会での模範演奏

### 【概要】

本校では、毎年3学期に「6年生を送る会」で、音楽教育の学生や大学院生に模範演奏等をしていただいている。

今年度も、音楽教育の根津先生の監修のもと、模範演奏をしていただく予定である。

## 【2】公開授業や研究発表会への指導・助言

### 【概要】

本校では、算数科における校内研究の3年目にあたり、算数科の校内研究には、これまで大学の数学教育の専門家として、中西先生や田中先生に来ていただき、授業への指導・助言をいただいている。

今年度は、これまでの研究の積み上げを生かして、10月19日に全学級で算数科の授業を公開し、その成果を発表した。算数科では、以下の単元で

指導や助言をいただいた。

1年生「ぜんぶでいくつ」「たしざん」

2年生「長さ」「かけ算」

3年生「わり算」「分数」

4年生「あまりのあるわり算」「面積」

5年生「体積」「ともなって変わる量」

6年生「比例と反比例」「比」

また、特別支援学級においても、6年生を対象に「対称な図形」「場合の数」の研究授業を行い、

大学から根津先生、中西先生に指導・助言をしていただいた。

さらに、専科の研究授業においては、4年生を対象に理科の「夏の自然」の授業を行い、大学から理科教育の平山先生に指導・助言をいただき、授業では、ゲストティーチャーとして、専門的な立場からこともたちに分かりやすく、植物が夏に成長するわけについて、話をしていただいた。



1年生における算数科の研究授業の様子



2年生における算数科の研究授業の様子



3年生における算数科の研究授業の様子



4年生における算数科の研究授業の様子



5年生における算数科の研究授業の様子



6年生における算数科の授業の様子



特別支援学級における6年生算数科の研究授業の様子



専科における4年生理科の研究授業の様子

### 【成果と課題】

算数科においては、理解しやすくするための教具を使うことで、基礎的・基本的事項の理解に役立った。(例：1年生でのたまごパック計算器、2年生でのマイものさし等) また、算数の具体的活動の場(例：4年生算数科での針金を使った面積の意味、5年生での体積測定等)を多く経験し、子どもたちは楽しく学習して理解を深めることができた。

私たち教師も、大学から算数科、理科、特別支援教育等、教育の専門的な指導や助言をいただき、教材観を突き詰めていくことや指導の深化につながる機会を与えていただいた。公開研究会では、市内からも多くの教師が授業を参観し、授業のポイントをメモする姿もたくさん見られた。

指導案の構想や作成、研究授業の反省会は、大学の先生と共に学年部単位で行い、互いの話し合いも深まって、実りのある研修会となった。

## 5. 白塚小学校

本年度の白塚小学校で実施した取り組みは以下の通りである。

1. 特別支援学級での取り組み（教育実地研究）
2. 3年生の音楽での取り組み（教育実地研究前期）
3. 2年生国語の取り組み（教育実地研究前期）
4. 4年生の算数の取り組み（教育実地研究後期）
5. 5年生の算数の取り組み（教育実地研究後期）

### 【本年度の取り組み】

#### 1. 特別支援学級での取り組み（教育実地研究）



##### 個別学習の様子

算数の個別学習の支援に取り組んでもらった。子どもたちにとっては、大学生の先生と一緒に勉強してもらおうの楽しみにしていた。

個別にじっくり教えてもらえ、集中して課題を進めることができた。いろいろな先生と関わる経

験にもなっている。

個性豊かな子どもたちに戸惑うこともあったと思うが、一年間を通じて取り組んでもらい、教師の対応も見ながら、それぞれの性格を考えて対応してもらえた。学生にとってもそれぞれの子が、得意なことを意欲的に行ったり、スモールステップで繰り返し学習して苦手なことでもがんばって行ったりできるよう支援する体験をしてもらったことは、勉強の苦手な子、目立たない子への対応を考えるきっかけになったのではないかと思う。

#### 2. 音楽科での取り組み

< 3年生 >

5月から9月迄、週に2回のうち1回、木曜日の2時間目に、授業の補助をしてもらった。

始めは、授業参観でクラスの様子と雰囲気をつかんでもらい、一斉指導援助型で担当教師の一斉指導中に机間巡視を頼んだ。33名のクラスで初めてのリコーダーの学習の時期でもあったので、個別に声をかけてもらい、子どもたちの学習意欲の向上につながっていったと考えている。少し慣れてきたら、リコーダー演奏の姿勢や基本の演奏

等の手本となって前で示してもらった場面も設定した。

子どもたちは、先生が2人いるといういつもとちがう雰囲気の中で新鮮な気持ちで楽しくできたようだ。この時間をとても楽しみにしている子もいた。担任一人では一度にたくさんの子の演奏を聞き分けて指導することは大変難しい。学生の一生懸命な子どもへの声かけから、困難な課題を征服しようと努力する子どもの姿も見られた。

### 3. 2年生での取り組み

国語の時間に、主に学習に集中できない子どものそばで声かけをして、支援してもらった。子どもは落ち着いて学習することができた。また、漢字の形を取りにくい児童へ机間巡視をしながら、支援してもらった。一斉授業では、目が配れない

### 4. 4年生での取り組み

算数の教科で、学習の理解が難しそうな様子の子どもたちに、個別に声かけやアドバイスをしてもらった。また、宿題のプリントをチェックしてもらったり、間違ったところのなおしの支援をし

### 5. 5年生での取り組み

算数の教科で、学力の低い児童について個別支援してもらった。子ども達は、大学生が来ることを楽しみにしていた。子ども達は人なつこく、休み時間には、大学生の先生に寄って行って雑談する姿が見られた。また、授業時間には、担任が見られない子どもをそっと教えてくれていた。特に、子ども達が自分のスピードで問題を解く場面では、机間指導をしてもらった。

#### 【成果と課題】

##### (1) 成果

- 前期、後期で、入ってもらった学級が変わった学級、1年間を通じて入ってもらった学級があったが、学級を固定し、継続的に見てもらうことができるようにした。そのため、子どもの実態を把握しながら、個別に支援してもらうことができた。
- 特別支援学級では、個々に応じた学習をしているので、個別に指導してもらうことにより、集中して学習に取り組むことができた。

##### (2) 課題

- 教師の意図や配慮してほしいこと、支援を必要とする子どもへの効果的な手立など伝えたいことがあっても、事前に話し合う時間

子どもにも、個別に支援してもらうことで、意欲をもって学習に取り組むことができた。

休み時間は、子どもたちにとって身近な先輩という立場で、親しみをもって接してくれていた。子どもたちも嬉しそうだった。

てもらった。授業中のノートのチェックの時には、子どもたちは、とても嬉しそうに進んで丸をつけてもらおうとしている姿が見られた。授業で使う教材の準備も協力してもらった。



休み時間に子どもと談笑する様子

をとることが難しかった。

学生が子どもたちの対応で、疑問に思うこと、悩んでいること等も、話し合うことができなかった。それらのことを大学への提出ノートに記している。毎回コメントを書くのは時間的に難しいが、もっとノートを利用して思いを知り、アドバイスしたり対応について考えさせたりする等、学生とのコミュニケーションを大切にしていきたい。

- 来てもらえる時間に制限があり、一年間続けて入ってもらいたいという希望があっても、うまく調節できなかった。学生にとっては希望する教科での体験が難しく小学校側の希望に合わせてもらった。

## 6. 一身田小学校

本年度の一身田小学校で実施した取り組みは以下の通りである。

1. 「まかせてね!きょうのごはん」(6年)
2. 生活に役立つものをつくろう(6年)
3. 校内研修会における指導、助言
4. 世界を結ぼうクラブ(クラブ)
5. 学生による実地研究基礎

以下に活動報告を示す。

\*上記以外にも2月以降実施予定のもの

- ・磁石のふしぎ(3年)
- ・パソコンをつかってみよう(1年)

### 1. 「まかせてね!きょうのごはん」(6年)

#### 【目的】

- ・毎日の食事や食事に使われている食品に関心を持ち、友だちと協力しながら取り組む。
- ・自分の食生活をふりかえり、家族の体が喜ぶバランスの良いメニューを考えて献立をつくる。

#### 【活動概要】

提示された食材を3つのグループに分け、栄養のバランスを考えた。その後、グループで献立を考え、その栄養素を確かめることで、バランスのとれた献立を作る必要性について学んだ。

#### 【成果と課題】

事前に、数回学生と授業について話し合いをし、指導案や授業で使用する絵カードやプリントを検討した。

1時間目の授業は、食材を組み合わせる献立を作る活動であった。グループごとに発表する場面が多く設けられ、子どもたちは、自分の食生活を振り返りながら考え、積極的に意見を述べる事ができた。



さらに、大学側が準備していただいた教材は、子どもたちの視覚に訴えるような教材で、子どもたちの興味を引くことができた。

2時間目は、自分たちで考えた献立を栄養素ごとにわけ、授業の流れの中で、栄養のバランスを考えた献立が必要であることを押さえることができた。

課題としては、子どもたちが書いたプリントについての検討を行えるとよかった。



## 2. 「生活に役立つものをつくろう」(6年) (エプロン作り)

### 【目的】

製作計画をたて、エプロンを作る。

### 【活動概要】

ミシンを使ってエプロン作りをした。布の断ち方やミシンの使い方ですまづいている子についてもらって支援をしてもらった。

### 【成果と課題】

子どもにとってはミシンを使っての2度目の制作であった。しかし、型紙の取り方、縫い代、裁断の場所、等わからない子が多かった。担任一人では、なかなか細かい指導ができないが、数人の学生に来ていただいたことで、子どもは、

やさしく、丁寧に教えてもらうことができ、スムーズに活動に入ることができた。困ったことがあったり、わからないことがあったりすると、学生に声をかけ、すぐ来てもらっている子どもの姿が見られた。

また、学生も進んで、困っている子のそばにすぐに行き、対応してくれたので、子どもたちも安心して活動できた。

できるかぎりの支援をお願いしたところ大学の担当の先生が、学生の方とスムーズに連絡を取っていただき、たくさんの支援をいただいたことに感謝している。

## 3. 校内研修会における指導、助言

本校は、「主体的に学び、仲間とともに高め合う子の育成」を研究主題にかかげ、「学び合う授業」の構築にむけて研究を進めている。

今回は、国語科の守田先生に来ていただき、全体研究授業を参観、その後の研修会で、助言、御指導をいただいた。

来ていただいた日は以下の通りである。

9/19 5年生 人権の授業

10/22 3年 国語科の授業

11/16 5年 国語科の授業

1/21 3年 人権の授業

守田先生から、教師は、授業をしていく中で、何を子どもたちに考えさせたいのか明確にしておくこと、そのためには、話し合いの焦点化がとっても大切である、ということや、学び合いを成立させ、話し合いを有効に働かせるために、教師は、子どもたちに何を話し合い、どのように話し合いを進めていけばいいか、話し合いのルール、仕方を教えることが必要である、ということなど話し合いに関わってのいろいろなことを教えていただいた。

また、文学教材において、学び合いで目指すものは、一人ひとりの読みの豊かさであり、子どもたちの思いが広がり、深まることである。国語の授業では、一つの正解を求めるのではなく、自分も他人も納得する「納得解」になるような授業なことが大切なのでないか、という先生のお話に、ほとんどの教師がうなずいていた。

先生に、教員と共に研修会に参加していただき、専門的な見地から、いろいろなお話を聞かせていただく中で、自分たちの研修の方向性がさらに見えてきたように思う。引き続き3学期も来ていただく予定である。



## 4. ～ 世界を結ぼうクラブ ～

世界には様々な文化があることを知ることと、外国につながる子どもたちにとっては、母国の歴史や習慣、文化を深く知ることアイデンティティを構築すると同時に、日本の子どもたちに発信することを目標として、平成20年度より「世界を結ぼうクラブ」活動を実施してきている。活動には、日本語教育コースの先生3名と1年生10名（中国留学生1名）、5年生の中国留学生1名の11名の学生の支援を受けながら実施している。

### 【1 学期】

クラブを立ち上げた当初よりブラジルにあるめぐみ学園（カリキュラムに日本語を取り入れている小学校）と交流を続けている。

毎年子どもたちと話し合いながら、どんな交流をするかについて年度初めのクラブで決めている。

今年は、日本の祝日、季節をブラジルの友達に紹介しようということで、カレンダー作りをした。子どもたちはペアになってどんな絵を描くか、その絵にどんな文章を書くか考え製作にあたった。ブラジルの子どもが漢字を読めることができるか等を心配してふり仮名をふる子どもの様子もみられた。

出来あがった6か月分のカレンダーを7月にはブラジルに送り、めぐみ学園からは12月に2013年のカレンダーが届いた。カレンダーを見てみると、同じ子どもの絵であっても、育った環境・国によって、色使いやデザインの違いが明らかであった。

そのカレンダーから、子どもたちが文化の違いに少しでも気づくきっかけになればと思い掲示をしている。

## 5. 学生による実地研究基礎

本年度は、4名の学生に特別支援学級各学年に入っていただき、子どもの学習活動の全般の支援をしていただいたり、教師の補助をしていただいたりした。

授業の前に準備をしてもらったり、体育の時間

### 【2 学期、3 学期】

現在沖縄の大学にブラジルから交換留学生として在籍しているMさんに来日してもらい、ブラジルについての話を聞いた。子どもたちは机に座っている時間だったにもかかわらず、比較的生き生きとして目が輝いていた。ブラジルの映像を見ながら、ブラジルと日本の違いを実感すると共に日本の文化について考える貴重な時間をもつことができた。

三重大学の学生と子どもたちが、ブラジルの遊びを楽しんだり、お菓子づくりの体験をしたりと学習を通して、距離も縮まり、笑顔と会話が増えたと思われる。

残り2回のクラブは、学生の提案で進めることになっている。

- \* 中国の留学生が中国について
- \* 三重大学生・お楽しみ

### 【課題として】

大学側連携学生が1年生であるので、授業時間の関係もあり、全員が参加できる時間は限られており、子どもの接し方になれておらず、戸惑っている様子も見られる。もっと積極的に子どもたちに話しかけて、このチャンスをのがさないでほしいと願っている。

またこの活動に学生自身が参加して良かった・楽しかったと思い、充実した活動となっていくには、年度当初より一年間の活動計画に参画し関わっていくことが望ましい。

は、ゲーム等の安全を見守ってもらったりして助かった。

特に、個別に支援の必要な子には、声かけなど、細かな指導ができたことは子どもにとってもよかった。

一方、学生にとっても、直接現場で、子どもたちと関わり、授業の雰囲気を知ることは、今後の教員になろうとする意欲を高める上でとても良いことだと思う。この経験をいかして、がんばってほしい。

しかし、学生の中には、同じ場所で立っていることが多く、児童に積極的に関わろうとする姿があまり見られなかった。参観的な様子が大変気になった。自ら学ぼうとする心構えもしっかりもって望んでいただきたい。

実地研究基礎の目的をもう一度見直し、連携校のお手伝いにとどまらず、現場での実践のチャンスと捉えて、授業に来た時は、子どもを見て、この子にはこういう支援を…この時はこうしたらどうだろう…と自分からもっと積極的に関わってもらいたい。

また、毎回、学生が書いている記録ノートは、

学期に一度見せてもらっているが、かなり細かく思いや疑問などが書かれている。その時自分は、どうすればいいのか、難しいと思った場面を振り返り、今後の自分の動きを熟考している感じが感じられる。とても良い学びになっていると思う。しかし、書かれている内容の中には、担任が、なるほど、とうなずくこともあるし、そこはそういう思いではなかった・・・と思うこともある。その日のうちに学生が思ったこと、疑問になったことなどがあれば、その時間に直接担任に伝えてもらおうと、こちらの思いも伝わり、学生にとっての学びにもなるのではないだろうかと思う。

また、この実地研究基礎は「教育実習」とはちがうが、その趣旨を、学生を送り出す大学側と受け入れる連携校とでもう一度検討、検証し合うことが必要ではないかと考える。

## 7. 北立誠小学校

### 本年度実施した連携活動

1. (1年生) ① 11月 6日 (火) 生活科 「クージー小学校との遠隔会議」
  
2. (2年生) ① 6月 13日 (水) 生活科 「町たんけん～三重大学～」  
② 1月 16日 (水) 生活科 「作って遊ぼう」 1回目  
③ 1月 23日 (水) 生活科 「作って遊ぼう」 2回目
  
3. (3年生) ① 9月10日 (月) 総合「地図を使った防災に関する学習」  
② 11月 9日 (金) 総合「クージー小学校とのテレビ会議に向けた事前授業」  
～身近なユニバーサルデザインについて～  
③ 11月21日 (水) 総合「クージー小学校とのテレビ会議に向けた事前授業」  
～英語指導～  
④ 11月28日 (水) 総合「クージー小学校とのテレビ会議」
  
4. (4年生) ① 6月26日 (火) 総合 「環境学習」  
② 11月14日 (水) 総合 「環境学習」
  
5. (5年生) ① 11月20日 (火) 情報教育「レゴロボットを動かそう」 1回目  
② 11月27日 (火) 情報教育「レゴロボットを動かそう」 2回目  
③ 通年 毎週金曜日 英語科 学生ボランティア授業支援  
④ 1月20日 (木) 英語科フレンドシップ事業「海外へ旅行しよう」
  
6. (6年生) ① 6月26日 (火) 総合「防災について考えよう～地域・通学路の防災～」  
② 9月10日 (月) 総合「地理教育として地図を使った防災に関する学習」  
③ 10月11日 (木) 総合「自然地理から地域(川海沿岸)の防災に関する学習」  
④ 10月15日 (月) 社会科教育ESDの視点からの防災に関する学習」  
⑤ 11月 9日 (金) 英語科「発表原稿の英語変換指導」  
⑥ 11月14日 (水) 英語科「発表時の表現(発音等)指導」  
⑦ 11月20日 (火) 総合「クージー小学校との遠隔会議」
  
7. (特別支援学級)  
① 通年 一人一人の教育的ニーズに応じた児童支援

## 1年生 ① 生活科「クージー小学校との遠隔会議」 永田 成文 先生

### 【目的】

学習した内容を、相互に発表し合い交流を図る。  
簡単な英単語を用いて交流活動を行う。

### 【概要】

毎年、オーストラリアのクージー小学校との交流は3年生と6年生が行っている。しかし、今年度は本校の1年生と、まもなく1年生になるオーストラリアの児童との交流も行い、お互いの国の様子を紹介し合った。

児童にとっては初めての遠隔会議なので、練習の段階ではなかなかイメージができなかったが、その分会場に入ったときの子どもたちの感動は大きかった。

北立誠小学校の1年生は、

#### ①学校の行事

#### ②学校生活の様子

#### ③家での生活の様子

の3つについて紹介した。①は運動会や遠足など、オーストラリアにもありそうな行事を中心に発表した。②は給食、掃除や教科など③は放課後の様子、朝食や日本の宿題など、オーストラリアとは違う文化をボードを使って発表した。

クージー小学校の発表は、テレビを2台使い、片方に〇〇の様子の写真などをつけての発表だった。発表は英語だったが知っている単語には大きく反応し、楽しみながら発表を聞くことができた。また、最後に1対1での質問の交流や日本の子どもたちが知っている「さんぽ」の歌と一緒に歌うなど、より深い交流ができ、子どもたちにとって良い思い出となった。

### 【成果と課題】

言葉が違う中でも工夫しながら伝えようとする姿が見られた。課題は、1年生の児童が3クラス集まって2時間集中するという点であった。

また、クージー小学校の発表が日本語を多く使った発表にする事で、1年生が更に興味を深めて発表を見ることができるようではないかと思う。



【2台のテレビを使っての発表】



【2か国を同時に映す】



【TV会議で交流する子どもたち】



【三重大大学に3クラスが集まった。】



【教室での事前練習】

## 2年生 ① 生活科「町たんけん～三重大学～」

永田 成文 先生

### 【目的】

1. 生活科の「町たんけん」の学習の一環として、校区にある大学を探検し、大学の様子を知る。

### 【概要】

町たんけんでは、校区のさまざまな場所に出かけ、自分たちの住んでいる町の様子を知り、地域の人々や場所に進んでかかわる活動を通して、自分たちの町の良さに気づくことをねらいとしている。

昨年と同様、連携授業の一環としての取り組みであり、12グループに分かれた子どもたちが大学生の考案したルートを探検した。

### 【成果と課題】

大学祭などで大学構内を散策した経験がある児童もいたが、普段はなかなか入ることのできない建物や大学生のおすすめの場所を解説してもらいながら探検できたため、大変興味をもって取り組むことができた。また、大学生とともに活動できたため、交流を深めるとともに安全に探検を行うことができた。



【三重大学の講義室】



【三重大学の食堂】

## ② 生活科「作って遊ぼう」

制作活動

磯部 由香 先生

中西 康雅 先生

### 【目的】

1. 身近な材料を使い、学生とともに遊び道具を製作・体験を行い学生との交流を深める。

### 【概要】

生活科の「作って遊ぼう」の単元では、自分たちで遊び道具を作って体験や交流を行う。今回は第1次に12グループに別れ、学生が考えた遊び道具を教わり共に作る。第2次は自分たちが作った遊び道具で遊んだ。その後、前半と後半に別れ店番と他のグループが作った遊び道具を使って遊ぶ体験活動を行い、グループごとの交流を行いながら学生との交流も深める。

### 【成果と課題】

学生とともに遊び体験、制作活動を行うことができ、学生との交流も深まった。また、今回の体験活動を国語科の「おもちゃまつりへようこそ」の単元にも活用できたのでよかった。



【遊び道具の作成】

### 3年生 ① 総合「地図を使った防災に関する学習」 田部 俊充 先生（日本女子大学）

#### 【目的】

津市の標高マップや水害に関するDVDを活用しながら、防災の基礎的な知識を身につけ、防災に対する意識を高める。

#### 【概要】

まず、「津市の沿岸地域標高マップ」を見ながら、自分たちの住んでいる地域の場所や標高などの事情を確認した。そして、もしも津波に襲われた場合、どこへ避難するのがよいか、地図を見ながら考えた。

次に、水害に関するDVDを視聴して、川の決壊について考えた。

最後に、「防災クイズ」に挑戦して、学習した内容を確認し、自分たちにできる防災について考えた。

#### 【成果と課題】

話を聞くだけでなく、実際の地図やDVDを見ながら説明を聞いたので、子どもたちにとって分かりやすかった。3年生は社会科の学習が始まったばかりなので、地図の見方についても学べてよかった。

### ② 総合「クージー小学校とのテレビ会議に向けた事前授業」

～身近なユニバーサルデザインについて～

永田 成文 先生

### ③ 総合「クージー小学校とのテレビ会議に向けた事前授業」

～英語指導～

荒尾 浩子 先生

### ④ 総合「クージー小学校とのテレビ会議」

永田 成文 先生

#### 【目的】

テレビ会議システムを通じて、リアルタイムで学習の成果を発表し合うことで、クージー小学校との交流を深める。また、英語を使った発表を少し入れることで、英語に親しむ。

#### 【概要】

まずは、オーストラリアのクージー小学校とのテレビ会議に向けた事前指導として、パワーポイントを見ながら身近なユニバーサルデザインについて学んだ。そして、総合的な学習の時間に自分たちが調べてまとめている内容を確認し、クージー小学校の子どもたちに発表したいという意欲を高めた。

次に、テレビ会議で発表する内容が決まった段階で、大学の先生と学生にお世話になり、英語の正しい発音について学んだ。

テレビ会議当日は、パワーポイントを使いながら、「人にやさしい町づくり（ユニバーサルデザインに関する内容）」と「日本の一年間の行事」について、英語を交えながら発表した。また、クージー小学校の子どもたちの同じテーマに関する発表を聞いた。

#### 【成果と課題】

3年生の子どもたちは、1年生の時から毎年、テレビ会議を行っているので、今年が3回目になる。今年は、英語を少し交えて発表できたので、自信につながったように思う。総合的な学習の時間の学習内容を発表できる場をもてた点がよかった。また、同時通訳をしてもらったので、クージー小学校の発表を子どもたちが理解することができた。

当日になって、テレビ会議システムの調子が悪く、映像が向こうに届かなかった点が、残念であった。

（テレビ会議の様子）



## 4年生 ① 総合 「環境学習」 環境ISOボランティアの方々

### 【目的】

1. 個別の環境に適応した植物の姿を観察する。

- ・町屋海岸の植物について
- ・三重大学構内の植物について

### 【概要】

町屋海岸において浜辺の植物について観察をする。海に近い環境ということとその場所に適応する形があることを学ぶことができた。水が少なく海風が吹く環境では、その姿や根に特徴が現れるようで、根を深くまでのばすものや、低い形で根や茎などを張り巡らせるものなどを見ることができた。その形においてもふだん我々の生活している場では見ることのない独特のものも見ることができた。日常生活で見ることのないものへの子どもたちの関心はとても大きかった。植物多様性という言葉を知る良いきっかけとなったことと思われる。

三重大学構内では、普段から見慣れているイチョウなどの秋の木々の葉や実を観察した。5～6人のグループに分かれ、大学生が2人程つき、大学構内の植物について、話を聞きながら構内を散策することもできた。植物が子孫を残すための工夫や、木の名前の由来を知ることができた。葉の形や実の形からそれぞれの木々の特徴も知ることができた。

### 【成果と課題】

植物を少し場所を変えて観察をしてみることで、その場所ごとに違った姿をしており、その実もまた違うことに気づくことができた。普段私たちの生活の中から何気に見ているものも、視点を変えてみるだけで、植物の環境へ適応しようとする戦略に触れさせることができた。

子どもたちが採集した植物の分類など、授業後の展開をもう少し工夫していくことで、更に興味や関心が深まったのではないかと思える。



【町屋海岸での観察】



【三重大学構内での観察】



【三重大学構内での観察】

## 5年生 ①② 総合 「レゴロボットを動かそう」

萩原 克幸 先生

### 【目的】

1. ロボットが動く仕組みを理解する。
2. ロボットの制御を通して、プログラムに興味を持つ。
3. 障害物を避けるゲームを通して、効率的なプログラムを考える。

### 【概要】

1 限目は、電磁石を使ったモーターの仕組みや、工業用ロボットは、目的に合わせて作製されたプログラムに従って作動していることを学習した。5年生では、理科で電磁石を使ったモーターの仕組みや、社会では自動車組立工場で動くロボットの働きについて学習してきた。これらの学習内容を発展した内容としてロボットの制御を学習した。

2～4 限目は、グループに分かれ少人数で実際にロボットを動かす活動を行った。プログラムの内容やセンサーの設定方法を学習し、実際にプログラムをロボットにダウンロードして動かしてみた。最初は、センサーのセッティングや回転角度の微妙な違いによって思っているようにはなかなか動かず、悪戦苦闘していた。しかし、話し合いや微調整を繰り返し、何度か挑戦してロボットを思い通りに動かすことができるようになった。最後に、グループ別にコース上に置かれた障害物を避けてゴールまで完走するゲームを設定した。

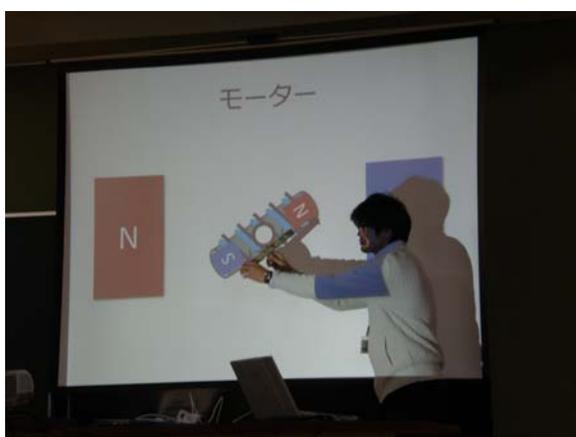
### 【成果と課題】

電磁石やモーターの仕組みを、実際に利用されているロボットの動きを通して理解することができた。また、自動車組立工場で見たロボットは、実際にこのようにプログラミングされて動いていることに気がつくことができた。また、プログラムの設定やロボットの操作を通して、プログラムに興味を持つことができた。

自分たちが設定した通りにロボットが動くため、子どもたちの表情にも笑顔があふれ興味を持って活動することができた。

(児童の感想)

・プログラムを作るとロボットがプログラム通りに動くのがおもしろかったです。思ったように動かないこともあったけど何回も改良してできるようになりました。私はコンピューターに興味はあったけど、プログラムを見たのも作ったのも初めてだったのでよい経験になりました。



【モーターの回るしくみを学習】



【レゴロボットに指令を送る】

## ③ 英語科 (外国語活動) 学生ボランティア授業支援

荒尾 浩子 先生

### 【目的】

1. 一斉指導中、発音や発声に自信のない児童に支援を行い大きな声を出せるようにする。
2. アクティビティのなかで活動を個別に支援する

ことにより、学習内容を定着させる。

3. 効率的にゲームを進めることにより、活動を活性化させる。

### 【概要】

1年間を通して、毎時間6～8人の学生ボランティアの学習支援を継続して受けた。担任とALTによる一斉指導での個別支援とグループに分かれてのアクティビティ（ゲーム）での個別支援を行った。

### 【成果と課題】

一斉指導の中ではALTの発音が聞き取れなかった児童や発音に自信のない児童に支援できるため、



【アクティビティでの支援】

大きな声で発音することができるようになった。グループへの支援では、ルールを徹底できたり解答に自信のない児童に支援できたりしたので、活動が活性化し学習内容の定着を図ることができた。その間担任やALTは、学級全体の進行の様子を確認したり、特に支援の必要な児童に対応したりすることができたのですべての児童にとって細かい支援を受けることができる授業形態であった。



【ワークシートへの書き方を支援】

## ④ 英語フレンドシップ事業「海外へ旅行しよう」

荒尾 浩子 先生

### 【概要】

これまで継続して行われている英語フレンドシップ事業を今年は5年生で交流授業として行った。英語科2年の学生が企画運営する「海外へ旅行しよう」の中で英語での座席の尋ね方や外国の世界遺産や食べ物についての発音を学習した。



【世界遺産のカルタゲーム】

### 【成果と課題】

- ・発音に自信のない児童が大きな声で発音できるようになった。
- ・ゲームのルールを徹底することができるため、一人当たりの児童が発音する機会が多くなり、学習内容の定着を図ることができた。
- ・学生の授業カリキュラムとの関係で、学生の人数確保が困難であった。



【学生に座席を英語で尋ねる】

## 6年生 ① 総合「防災について考えよう④～地域・通学路の防災～」 永田 成文 先生

### 【目的】

防災についての学習の一環として、地域の防災の設備や通学路の危険箇所などについて実際に調べたことをもとに地域の防災について考える。

### 【概要・成果と課題】

北立誠の校区は、海岸に近く学校のすぐ横志登茂川が流れる低地の地域である。また、旧街道沿いには古い木造の家立ち並び、大地震が起これば、東海や最大7メートルの津波が予想される危険な地域といえる。今年度、6年生は総合的な学習の時間に「3.11に学ぶ」をテーマに、防災学習に取り組んだ。①地震の仕組みや東日本大震災の様子、南海トラフ地震で予想される被害、②自分の家の防災、③学校の防災、④地域の防災などについて三重大学をはじめ、消防署や県の防災対策室などにも協力を得て学習に取り組んだ。④の活動一環として、グループに分かれ大学生とともに、自分たちの通学路を中心に防災の設備や危険箇所を調べて回った。大学生とともに活動できたことで、安全面の確保ができただけでなく、大人に近い視点で、危険箇所等を教えてもらうことができ活動の幅が広まった。



【大学生とともに通学路を調べる活動】

② 総合「地理教育としての地図を使った防災に関する学習」 田部 俊充 先生（日本女子大学）

③ 総合「自然地理から地域（川海岸沿）の防災に関する学習」 宮岡 邦任 先生

④ 総合「社会科教育ESDの視点からの防災に関する学習」 永田 成文 先生

### 【目的】

・専門的な立場から、防災について教えてもらうことで、自分たちが学習してきた内容を深めるとともに、防災について新しい知識を得る。

### 【概要・成果と課題】

川海岸沿の防災については、地形の様子や志登茂川の移り変わり、沿岸沿いの危険などを30年前の地図や標高が記された地図を使って教えてもらったのでよく理解できた。また、手作りの実験装置で、土の保水力や現在の舗装が進んだ地域の危険などを、子どもたちが体験しながら学習することができ、興味を持って楽しく学習することができた。



【地面の保水力を実験する子どもたち】

⑤ 英語「発表原稿の英語変換指導」 荒尾 浩子 先生

⑥ 英語「発表時の表現（発音等）指導」荒尾 浩子 先生

【目的】

1. 「防災の学習」について、英語で発表を行うため、英語の正しい表現や発音を学習する。
2. 発表資料（パワーポイント）と発表する内容のタイミングを合わせる。

【概要・成果と課題】

自分たちで発表内容を英訳したが、防災についての言葉や表現は難しく大変苦労した。先生や学生の協力を得て、正しい英語表現や発音・アクセント・自信をもって発表することができてよかった。また、模範となる発音をデータでいただくことにより、各教室で随時繰り返し練習することができ大変助かった。



【英語で発表練習をする子どもたち】

⑦ 総合「クージー小学校との遠隔会議」 永田 成文 先生

【目的】

1. 学習した内容を、相互に発表し合い交流を図る。
2. 英語を用いて交流活動を行う。

【概要・成果と課題】

今年度で5年目になる事業であるが、この学年の児童にとっては、初めて遠隔会議を経験する。総合的な学習の時間で、「3. 1 1に学ぶ」をテーマに防災学習に取り組んだ内容について、8つのグループがそれぞれ小テーマを決めて、パソコンでプレゼンを作り、英語で発表した。また、防災だけでなく、自分たちの文化についても簡単にまとめ発表した。オーストラリアではほとんど地震が起らないが、自然火災が起ることなどを聞き、驚いていた。また、オーストラリアの小学生の食べ物、遊び、生活の様子や学校でのおやつタイムなどの話など、興味深く聞くことができた。

子どもたちは、遠隔会議に対する期待もあり英語での発表に意欲的取り組むことができたが、全文英語で発表であったため、難しさも感じた。また、クージー小学校の子どもたちの発表にもう少し日本語での発表があれば更に興味や関心が深まったのではないかと思える。



【TV会議で交流する子どもたち】

## 特別支援教育 ① 一人一人の教育的ニーズに応じた児童支援

### 【目的】

- ・特別な支援の必要な児童に、それぞれに応じたきめ細かな支援を行う。

### 【概要】

今年度、学生アシスタント4名が学習の支援をしてくれた。

特別支援学級に在籍する児童は、思わぬところでつまずいたり、何かのきっかけで焦ってできなくなったりすることがある。廊下から声が聞こえるなどの些細なことが刺激になり急に集中できなくなることもある。また、交流学級での学習時、一斉の指示だけでは何をどうすればいいのか戸惑っていることがある。何らかの理由で緊張したり、自信をもてなかったり、周りの児童とうまく関われなかったりすることもある。そこで、すぐ隣にいて、できたことを一つずつほめてもらったり、タイミングよく声かけをしてもらったりすることで、自信をもって最後までやり通すことができるようになる。



【特別支援学級での支援】



【交流学級での支援】

通常学級にも、困り感をもつ児童がいる。国語で自分の考えをどう書けばいいか迷う、算数で計算に時間がかかるなど、様々な姿がある。そこで、書く前に言葉を聞き出してもらったり、つまずいているところを指摘してもらったりすることで、見通しを持って取り組むことができるようになる。



【通常学級での支援】



【休み時間の様子】

### 【成果と課題】

授業中、わからなかったり困ったりしたとき、近くにいてすぐに聞ける人がいることは、前向きに学習に取り組もうとする姿勢につながる。担任だけでは対応しきれなかったり、十分な支援をする人的余裕がなかったりする中、将来、学校教育に携わろうと考えている学生たちの意欲的な児童支援は、とても貴重でありがたい。学生たちの、どういう声かけをすればいいのか、一人一人のニーズに応えられているのかなどの戸惑いはあって当然で、打ち合わせをする時間はないながらも、担任がしっかりと伝えていかなければならない。

## 8. 南立誠小学校

本年度の南立誠小学校で実施した取り組みは以下の通りである。

1. 春の遠足 三重大キャンパス（4年生）
  2. ミシンを使って楽しく作ろう（5年生家庭科）
  3. ヒドジョウの血液の流れを観察しよう、植物の光合成と呼吸について（6年生理科）
- 以下に活動報告を示す。

### 1. 春の遠足（4年生）

#### 【目的】

- ・実験や観察を通して、大学の様子を知り、楽しく学ぶ。
- ・みんなと協力し合いながら、目的地まで元気よく歩く。
- ・交通ルールや集団行動での約束を守り、安全に行動する。
- ・みんなと仲良く過ごす。

#### 【概要】

三重大大学に到着後、まずキャンパスを歩き大学構内を見学した。事前指導で、児童に「日本でも珍しい海までつながっている広いキャンパス」ということを話していたが、野球のグラウンドの向こうに本当に海が繋がっていることを確認し驚いていた。また、たくさんの方が自転車で行き来をしている様子にも大学生活を感じていた。

実験や観察では、4グループに分かれて体験した。

「木の実の不思議」グループでは、いろいろな植物の種を見せてもらい、羽のような形の種を飛ばす実験をしていた。「太陽を見てみよう」グループでは、金環日食の話から、太陽メガネの作り方を教えてもらった。「静電気で遊ぼう」グループでは、細長い風船をフェルトでこすって帯電させ、ビニールひもや別の風船を飛ばして遊んでいた。「きれ

いな結晶を作ろう」グループでは、粉を溶かして結晶が作れる事を教えてもらっていた。

#### 【成果と課題】

- ・実験や観察には、事前にしっかり準備をしていただき、子どもたちは、とても楽しい時間を過ごすことができた。
- ・大学生の人が、一人ひとりに親切に接してくれて、子ども達にはとても分かりやすい体験になった。
- ・「大学」の場所は知っていても、実際に入ったことのある子はほとんどいなかったのも、みんな、とても興味を持って、構内のいろいろな施設を見ることができた。このような機会を来年もぜひ持ちたいと思う。
- ・トイレを借りる施設との連絡に手違いがあり、カギがかかっていたが、臨機応変に対応していただけてよかった。構内の下見をしっかりしておく必要がある。



## 2. ミシンを使って楽しく作ろう (5年生家庭科)

### 【目的】

1. ミシンの使い方を習得し、ナップサック(生活に役立つ物)を製作しよう。
2. 安全で正しいミシンの使い方を学習しよう。

### 【概要】

5年生になって始まった家庭科の授業を、子どもたちは、とても楽しみにしながら取り組んでいる。魅力的に感じるのも、他教科にはない実習や体験学習がたくさん組み込まれているためであろう。生活経験の少ない子どもたちだからこそ、自分の手で何かを作り出したい、もっとできるようになりたいという欲求は高い。その中で、ミシンを使って、自分のナップサックを作る授業に入り、自分で作る初めての作品に一生懸命製作を始めた。

事前にミシンを一台ずつ点検してあっても、ほんの少しの操作ミスで作業がストップしてしまい、教師一人では、指導が困難になることが予想される。時間内に実習を進めなければならない家庭科の授業においては、学習支援があると、とても効率的に作業を進めることができる。

そこで、三重大大学の家庭科専攻の学生さんに学習支援として学習補助をお願いした。今日の授業のポイントを理解してもらい、どこまで手を出してもらうのか、どんな場面で支援してもらうのかについては、事前に打ち合わせを行った。

1組は、平ひもを挟んで縫う脇縫いのところを、2組は、脇縫い代を割って縫うあき口のところを中心に補助してもらった。

### 【成果と課題】

- ・5年生児童にとっての初めてのミシン学習になるため、機械の使い方に始まり、技術的なところまでの指導は、個別指導が効果的であると考えられる。数名の学生さんに来ていただき、個別に丁寧に指導していただけたことは、児童にとって大変効果的だった。



- ・学生さんの授業の都合もあるが、個別指導が効果的であるミシン学習には、可能な限り、学生さんの支援をしていただきたい。



### 3. ヒドジョウの血液の流れを観察しよう、植物の光合成と呼吸について〔6年生理科〕

#### 【目的】

1. 「ヒトや動物の体のつくりとはたらき」で、心臓のはたらきと血液の流れを学ぶ。ヒドジョウを用い、尾びれの血液の流れや心臓の動きを観察する。
2. 「植物のつくりとはたらき」で、植物の光合成や呼吸のしくみについて考える。パソコンを利用して、グラフの変化からその仕組みを読みとることができる。

#### 【概要】

- ・6年生の理科「ヒトや動物の体のつくりとはたらき」の単元で、ヒドジョウを使って心臓のはたらきによって血液が全身に送り出され、体内をめぐっていることを観察した。血液の流れは体内でおこっていることであり、観察することは難しい。教科書に紹介されているように、ヒメダカ（メダカ）は体外からでも血液の流れがよくわかるので、よく観察に用いられる。しかし、ヒメダカはすぐに弱ってしまうので、今回、観察中に弱らないヒドジョウ（ドジョウ）を持ってきていただき、血液の流れと心臓の動きを観察した。また、大型テレビにパソコンをつなぎ、パソコンにつなぐことのできる顕微鏡を利用し、ヒドジョウを拡大して血液の流れを学級全員で大型テレビから観察することができた。
- ・6年生の理科「植物のつくりとはたらき」の単元で、植物と空気の関係について学ぶ。教科書には気体検知管を使って二酸化炭素と酸素の量の変化を調べる実験があるが、今回はパソコンを使ってセンサーにより二酸化炭素と酸素の量をグラフ化できるソフトを利用し、植物の光合成と呼吸について実験を行った。センサーをつないだ容器に葉を入れ、光を当てた場合と箱をかぶせた場合では、二

酸化炭素と酸素の量が時間がたつにつれてどのように変化していくかをグラフを見て、全員で確かめた。

#### 【成果と課題】

- ・ヒドジョウの観察では、顕微鏡で一人ひとりが観察するのではなく、パソコンにつなぐことのできる顕微鏡を大学から持ってきていただき、大型テレビで血液の流れと心臓の動きを全員ではっきりと見ることができ、とてもわかりやすかった。また、今回、ヒドジョウを使うことで、途中で弱ることなく観察を続けることができたのはよかった。
- ・植物の実験では、光を当てて10分ぐらいすると二酸化炭素の量が減り、酸素の量が増えてくることがグラフから読みとることができた。また、逆に箱の中に入れると二酸化炭素の量が増え、酸素の量が減っていくことがグラフから読みとることができた。いずれも、目の前の植物と空気との関係が、グラフの変化によってよく理解できた。
- ・持ってきていただいた実験装置を、ぜひ学校でも購入したいと思うが、予算の面でなかなか難しいので大学との連携により児童の学習を深めたい。



## 9. 西が丘小学校

本年度の西が丘小で実施した取り組みは以下の通りである。

1. 6年生 明治維新から世界の中の日本へ・幕末（永田成文先生）
2. 4年生 どんぐりを通して学ぶ自然の面白さ・不思議（平山大輔先生）
3. 5年生 ミシンの実習支援（磯部由香先生）
4. 2年生 メッセージカード作り（萩原克幸先生）
5. 理科における ICT 活用授業実践・参観（下村勉先生）
6. 三重大連携により借用した ICT 機器の活用事例（後藤太郎先生）

以下に活動報告を示す。

### 1. 6年生 明治維新から世界の中の日本へ・幕末

### 永田成文先生と社会科教育コース学生

#### 【目的】

黒船の来航や幕府政治の終わったことの学習を通して、江戸時代に 200 年以上続いた鎖国が終わり、開国が武士中心から天皇中心への変化を求める世の中に大きな影響をもたらし、その結果約 700 年続いた武士中心の幕府が終わったことを理解することができる。

#### 【概要】

2012 年 10 月 1 日 1~4 限 6 年生各教室

本授業は、開国の背景となる黒船来航を扱った。最初に、当時の日本の外交をおさえた。そして、ペリーが浦賀に来航した時の絵を見せ、黒船の来航が日本にとって大事件であったことや絵の中から大砲などが準備されていることに気づかせた。そして、大砲を黒船に対して撃つことができるかどうかを幕府の人の視点に立って考え、日本が約 200 年続いた鎖国を止めることになった背景をとらえさせた。

#### ■学習指導計画（全 3 時間）

開国と幕府の終わりについて話し合う。（3 時間）

- ・開国後の日本の様子について話し合う（1）
- ・開国した理由について話し合う（1）
- ・幕府の政治が終わった理由について話し合う（1）

#### 【成果と課題】

- ・資料が豊富で、児童の視線も黒板に集まってお

り、興味が持続できていた。

- ・授業者の明瞭で落ち着いた話し方が大変聞きやすく、児童の学習定着に効果的であった。
- ・挿絵を効果的に使い、黒船が来たときの日本人のそれぞれの様子に着目させて考えさせることができていた。



## 2. 4年生 どんぐりを通して学ぶ自然の面白さ・不思議

平山大輔先生

### 【目的】

どんぐりをはじめとするおもしろい習性を持つ植物を通して自然の面白さや不思議について知る。

### 【概要】

2012年11月21日(水) 5限目 体育館

学校の校庭にある植物の実(どんぐり等)を取り上げて、何気なく見ている植物も実はおもしろい習性を持っていることを学習した。その後、日本や世界中にも興味深い習性や動きをする植物がいることを、プレゼンの写真や実物を見ながら学んでいった。子どもにとっては、とても興味深かったようで、質問コーナーでは終了時間が来ても終わらないぐらいたくさんの疑問を先生に教えてもらおうとしていた。



### 【成果と課題】

- ・身近に見られるブナ科植物にも、たくさんの「種」があること、また、種毎に様々な戦略を持ち、他の生物とも関わりを持ちながら生活をしていることから、生物の世界の複雑さに触れることができた。
- ・フィールドワークを中心とした研究の様子を紹介してもらったことから「研究することの楽しさ」を知ることができた。
- ・4年生の理科では、生物のくらしと季節の関係について学習する。学習内容に合った講義であった。



## 3. 5年生 ミシンの実習支援

磯部由香先生と家政科教育コース学生

### 【目的】

ミシンの使い方を習得し、生活に役立つ布作品を制作することができる。

### 【概要】

2012年10月11・18・19日 家庭科室

- ・ミシンの出し方としまい方を練習する。
- ・ミシン針の正しい付け方を知り、練習する。
- ・空縫いの仕方やコントローラーの扱い方を知り、

練習する。

- ・下糸の巻き方や各部の名称を調べ、下糸を巻く練習をする。
  - ・写真や師範を見て、下糸の入れ方を理解し、下糸を入れる練習をする。
  - ・縫い始めと縫い終わりのミシンの操作を調べ、直線縫いや意図の始末の仕方を練習する。
- 以上の操作の活動をする支援を学生にお願いをした。

### 【成果と課題】

- ・ミシンの扱い方を支援してもらうことによって、個々の児童に対して細やかな指導を行うことができた。
- ・個へ対応してもらうことは、安全面に留意する上で有益であった。



- ・児童も、年齢的にもあまり離れていない学生に教えてもらうことにより、興味・関心が高まった。



## 4. 2年生 メッセージカード作り

## 萩原克幸先生と情報教育コース学生

### 【目的】

情報機器を有効に活用することにより、メッセージカードを作成することができる。

### 【概要】

2013年2月12日 1~5限 パソコン教室  
2年生5クラス対象

「大きくなった私の勉強」という生活の学習をする。最初に、お家の人から聞き取った思いをもとに感謝の気持ちを表すメッセージを考えさせる。その後、自分の写真をデジカメで撮影し、メッセージ付きのカードを作成する。その際、文章の入力や写真の貼り付け等パソコン操作の支援を大学の先生や学生から受ける。利用するソフトは Open Office Draw である。

### 【成果と課題】

- ・学生の支援を得ることにより、コンピュータの操作を戸惑うことなく、スムーズに操作することができた。



## 5. 5年生 理科におけるICT活用授業実践・参観

下村勉先生と教育学部大学院学生

### 【目的】

引用や著作権について理解し、それに配慮した情報発信ができるようにする。

### 【概要】

2012年11月30日 4限 5年生教室

5年生理科「流れる水のはたらき」の単元で実を行った。

まず、「実験1：流れる水と地面の様子」では、各班で実験したようすを「実験前」「実験中」「結果」の3つの場面を意識させながらデジカメで撮影させた。その後、撮影した写真データを活用して実験のプロセスをWebページにしてまとめさせた。そして、単元の最後には、学習したことを、インターネットから得た資料やデジカメで撮影した写真を使って、画用紙にまとめる活動（新聞作り）を行った。

その後、児童が作成した新聞を、学校外に公開したり、インターネット上で発信したりする場合はどんな問題点が発生するのかについて考えさせた。その中で、「引用」や「著作権」について専門的な知識を持っている学生から説明を受けた。そして、他人の文章を勝手に使ったり、他人の撮影した写真等を勝手に自分の新聞に使ったりすることは、著作権上問題があることを理解させた。しかし、引用というルールを用いることにより、それらの著作物を有効に活用することもできるという事も同時に学習させた。

### 【成果と課題】

- ・専門的な知識を持った学生に「著作権」や「引用」について分かりやすく説明してもらうことにより、児童の理解が深まった。
- ・今まで、あまり意識することなく行っていた、インターネット上の情報を「文章を書きうつす」ことや「写真を印刷して貼る」行為が、実は「著作権」上問題があることを知り、今後の活動に生かせることが期待できる。



## 6. 三重大連携により借用した ICT 機器の活用事例

後藤太一郎先生

### ① デジタル顕微鏡の活用事例

#### ■メダカのたんじょう（5年生理科）

##### 【目的】

- ・メダカを飼育して、雄雌の体の特徴や卵のようすを調べることができる。
- ・メダカの受精卵の変化の様子を観察し、結果を記録することができる。

##### 【概要】

- ・メダカの受精卵をスライドガラスにのせて、電子顕微鏡で観察をする。
- ・その後も、1～2日おきに観察を続ける
- ・電子顕微鏡で観察される画像を、大型テレビに映し出し、卵やその中の様子について話し合う。

##### 【成果と課題】

- ・従来の顕微鏡では、見ることができる対象物をクラスの仲間と情報共有することは不可能であった。三重大学から借用した電子顕微鏡は、対象物をコンピュータの画面に映し出すことができる。そのため、大型テレビを用いてクラス全員で観察したい対象物を容易に共有することができた。
- ・画像が鮮明で、血液の流れや卵の周りにいる微生物の様子もよく分かった。



### ② インターバルレコーダー（recolo）の活用事例

#### ■雲と天気の変化（5年生理科）

##### 【目的】

- ・雲を観察しながら、1日の雲の量や動きなどを調べることができる。

##### 【概要】

- ・天気や雲の量、雲の色や形、雲の動く方位や速さなどを、インターバルレコーダーを活用して記録する。
- ・記録した動画を、大型テレビで再生して、気がついたこと・分かったこと等について意見交流をする。

##### 【成果と課題】

- ・1日の雲の動きを短い動画で見ることにより、雲の動きや量の変化を分かりやすく理解することができた。
- ・新しい機器を活用することにより、児童の興味・関心を高めることができた。



## 10. 一身田中学校

生徒を取りまく現状は、社会や経済の様相を見ると厳しく不透明な部分が多い。そのような中で、やがて社会に出て行く生徒に確かな「生きる力」を身につけさせたい。そこで今年度は学力向上の取組を重点課題として教育活動を行ってきた。確かな学力に裏づけされた社会性豊かな生徒の育成のために、今年度で7年目となる三重大学教育学部との連携による教育活動を推進していきたい。

平成24年度 三重大学教育学部との連携活動

1. 数学科における学習支援
2. 青少年のための科学の祭典の参加
3. 理科における学習支援
4. 理科と家庭科におけるクロスカリキュラムによる授業
5. 家庭科における学習支援
6. 社会科における学習支援
7. 音楽科における学習支援とコラボ音楽祭
8. 英語科における学習支援
9. 創造性を高めるキャリア教育の取り組み

### 1. 数学科における学習支援

#### 【目的】

生徒の授業での疑問や悩みを解決し、基礎学力定着を図る。

#### 【概要】

三重大学教育学部の学生が、授業の一環として毎週決められた授業時間に、授業アシスタントとして授業に参加し、生徒の学習支援を行う。授業毎にフィードバックシートを記入し、担当教員に提出し、授業の振り返りを行う。

#### 【成果と課題】

生徒が、一斉授業では理解できないところや、挙手して質問しにくいときに個別にアドバイスをもらうことで生徒一人ひとりの意欲・学力向上に役立っています。生徒たちからは「気軽に質問できる。」「個別に教えてもらって、分かりやすい。」などの意見もあります。しかし、今年度も大学の授業の関係と時間割の関係上、支援が入らないクラスもあったので、全クラスに支援が入れるように調整をしていきたいと思えます。また、短時間でも授業について教員

と大学生が打ち合わせ・振り返りの時間を持つようにしていきたいと考えています。



## 2. 青少年のための科学の祭典の参加

### 【目的】

理科を楽しく教える立場を体験して、科学のおもしろさに触れ、実験の技能を高める。

### 【概要】

11月10, 11日の2日間三重大学で行われた「科学の祭典」に2年生約30名が参加し、昨年度までと同様に「スライムを作ろう」というブースを設置し、幼児や児童を対象にスライム作りの指導をしました。

### 【成果と課題】

スライムの作り方を覚えることから始まり、スライムの堅さの秘密はどこにあるか、材料を混ぜる比率はどれくらいが適当かなど、時には失敗しながらも、自分で試行錯誤しながら技術を高めていきました。祭典では、幼児たちと会話を弾ませながら一緒にスライムを作りました。

2日間とも休みなく指導し、延べ2000個に迫る勢いで、丁寧かつ熱心に取り込み、予想を上回る成果に生徒たちの表情からは、何とも

言えない成就感・達成感があふれていました。ただ、スライムの質感には、ばらつきがあり、マニュアルの完成度を上げると共に予備実験による周知徹底をはかる必要があると感じます。



## 3. 理科での学習支援

### 【目的】

実験器具を正しく使用し、学習をスムーズに行うことにより、学習の定着を図る。

### 【概要】

平成24年度も昨年に引き続き、1・2年生の理科の時間に、学生が基本的な学習内容の理解と観察や実験の学習支援を行う。

### 【成果と課題】

1年生にとっては、観察や実験は興味や期待が大きい反面、取り扱いに慣れていない実験器具も少なからずあります。そのような状況の中

での授業に大学生の支援が入ることで、顕微鏡を使った観察やガスバーナーを使った学習をスムーズに行うことができました。生徒にとっても、年齢が近いことからか、わからないことがあったときには気軽に聞くことができ、生徒も安心して学習を進めることができました。

課題としては、その日の授業において、どのような支援をして貰うかということについて、打ち合わせをする時間を確保していく必要性があると思います。

## 4. 理科と家庭科におけるクロスカリキュラムによる授業

### (ニジマス解剖実習と調理実習)の実施

#### 【目的】

食材となる生きた魚の解剖実習を行うことで、脊椎動物の体のつくりとはたらきを学ぶとともに、解剖後に調理して食べることで「命をいただいている」という食育の基本を学ぶ。

#### 【概要】

この学習は、三重大学教育学部により考案されたプログラムで全国的にもほとんど例がなく、本校の特色ある授業の一つです。2年生理科では、「動物のくらしとなかま」の単元で、ヒトのからだのつくりを学習します。事前に学習した内容をもとにして、魚類であるニジマスにも自分たちと同じような消化器系、呼吸系、神経系があることを確認します。特に、消化器系と呼吸器系の関係についても気づくことができます。さらに生きた生物を解剖することで、開腹されても力強く鼓動を打つ心臓などを見ることで、写真や図解による知識を超えた「正しい生命観」を身につけることができます。また解剖に使用したニジマスは、続く家庭科でミニエルの材料として調理されます。

#### 【成果と課題】

このニジマスの解剖では、生きた魚に触れる

ことで、生徒は真剣な表情で解剖実習に取り組み、事前に学習した内容を実際に見たり、触ったりして学習ができました。

現在の日本人の食生活は、外食・コンビニ食などの利用で、わざわざ食事をつくらなくてもお金さえ出せば、食べたいものが手に入る状況にあるなかで、学校での調理実習は、つくることの喜びや楽しみを味わうとともに、自分たちの日常の食生活を見直すうえでも意義がある学習です。また、例年、ニジマスに続いてイカの解剖と調理の実習も実施しています。実習に用いるイカの種類選定と解剖マニュアルの完成度を上げていくことが課題であると思います。できれば、食物連鎖や生物濃縮、さらには食の安全についても言及できればと考えます。



## 5. 家庭科における学習支援

#### 【目的】

9月からの教育実習をスムーズに行うために、生徒の現状把握を行うとともに、実習における学習支援を行う。

#### 【概要】

9月に教育実習を予定している学生が、実習担当学級の調理実習の授業に学習アシスタントとして入り、生徒の現状を把握するとともに、生徒の学習支援を行う。

#### 【成果と課題】

学生は、調理実習の事前指導の参観や材料等の準備のアシスタントをする機会もあった。それによって、実習題材の指導の流れや生徒の様子を把握することができ、教育実習の指導計画が立てやすくなったようだ。また、生徒にとってもわからないところをすぐ聞くことができ、スムーズに作業を進められたようだ。

さらに有意義な取り組みにしていけるためには、授業実習をする他の学級の学習支援に入る機会の確保をすすめることだ。

## 6. 社会科における学習支援

### 【目的】

三重大学大学院生の授業を通して、社会科を楽しく学ぶ。

### 【概要】

三重大学大学院生による世界の諸地域（アジア・中国）についての授業の実践。

### 【成果と課題】

今年度は、中国の「一人っ子政策」を題材にし、中国に興味を持ち、中国で行われている「一人っ子政策」がどのようなものかをインタビューを通して知り、その課題を考えました。

実際に中国からの留学生がおり、直接、質問をする中で、教科書には書かれていない実際の「一人っ子政策」にふれ、より考えを深めることができました。

今回は留学生が授業するということで、中学校の教師も司会のような形で授業を進めたことにより、スムーズに授業が進行しました。この取り組みを有意義にするために、大学院生との打ち合わせをしっかりと行うことが大切だと考えています。



## 7. 音楽科における学習支援とコラボ音楽祭

### 【目的】

大学生が授業に入り、パート練習や混声合唱の支援を行うことで個々の音楽的な表現力を伸ばし、豊かな響きを持ったクラス合唱を作り上げる。

### 【概要】

各クラスの音楽の授業に教育学部音楽科の学生が、パート練習や合唱練習の支援に入っている。歌唱だけでなく、指揮やピアノ伴奏の指導も行っている。生徒は大学生の指導で、より自信を持って歌うことができるようになり、豊かで美しいクラスの合唱になった。

10月26日には三重大学三翠ホールで一身田



中学校と教育学部音楽科とのコラボ音楽祭を開催した。

#### 【成果と課題】

本校は歌うことが好きな生徒が多く、授業では心を開きのびのびと合唱練習に取り組んでいる。しかし楽器演奏などの音楽経験が学校以外ではないという生徒が多く、技術面やより深い表現などに自信の持てない生徒もいる。大学生が授業に入ることで、自分にあった歌い方などのアドバイスを受け生徒が安心して歌えるようになる、など大きな成果があった。しかし、大学生も大学での授業があるため、なかなか中学校に出向いてもらうことができない（回数がとても少ない）という課題はある。



## 8. 創造性を高めるキャリア教育の取り組み

#### 【目的】

生徒に学校教育と実社会が密接な関係にあることを実感させるとともに、創造力、チャレンジ精神、コミュニケーション能力、チームワーク力を育む。

#### 【概要】

三重大学教育学部山根教授の開発された起業教育プログラム「会社をつくろう」を実践した。

今年度は、1年生が「地域を元気にする」をスローガンに掲げ、「地域の活性化」をテーマに24の会社を設立した。

各会社で考えたオリジナル商品を11月18日（日）に開催された一身田寺内町祭りで販売活動を行い、ほとんどの商品を完売させた。取り組みの過程で、山根教授から生徒へ直接助言もしていただいた。

#### 【成果と課題】

- ・会社の人達全員で協力出来たこともあったけど、大変でした。いつも簡単に商品を買っているけれど、それが商品化されるまでの裏側では苦労していることが改めてわかりました。
- ・最初は「会社をつくろう」のことを簡単に考え

ていたけど、実際自分がやってみたら会社を一つにすることが大変で、トラブルもいくつかありました。途中でやりたくなくなったときもありましたが、今はやって良かったなあと思いました。会社を起し、運営することは大変ですが、みんな協力し、成功したときの達成感は一人大するより大きいものになりました。

[生徒の感想より]



#### 【成果と課題】

生徒はこの取り組みを通して、地域の方々とのコミュニケーションを図るとともに、地域の一員として自らが課題解決のために行動することの重要性や自分の思いを伝えることの大切さを実

感することができました。

また、販売活動当日は多くの保護者も参観し、生徒が作った商品の完成度の高さやアイデアの豊富さ、一生懸命に販売活動に取り組む姿から我が子の成長ぶりを実感した、良い社会経験になったと思う、という感想も届いています。



24の会社を代表して、4社から26人が1月27日（日）京都大学で開催されたバーチ

ャルカンパニートレードフェア2012に出場し、プレゼンテーションと販売活動を行い、審査員、他の会社の大学生に物怖じすることなく元気な声で丁寧な接客を行い、ほとんどの商品を完売させた。そして、参加者が選ぶ最も素晴らしいベストショップとしてスチューデント賞を受賞されました。



## 1.1. 橋北中学校

本年度の橋北中学校で実施した取り組みは以下の通りである。

1. 教育実習
2. 数学科における学習支援
3. 音楽科とのコラボ音楽祭
4. SSS(Saturday Step-Up School)における支援
- 5~7 保健体育科・家庭科・特別支援における学習支援
8. CST養成事業拠点校

以下に活動報告を示す。

### 1. 教育実習 三重大学教育学部3年生

#### 【目的】

- ・教育実習を通して教科の指導力の向上を図る
- ・教職を目指す学生の実践的支援を行う
- ・生徒に外部の刺激を与え学習意欲の向上を図る

#### 【概要】

平成24年5月15日教育実習に関する合同検討会が津市教育委員会、三重大学、橋北中学校、一身田中学校が参加し開催された。会の中で、今年度のスケジュールについて検討がなされ教頭による全体の事前指導と各教科・学級指導教員の指導開始時期を確認した。

6月下旬から各教員が学生と個々に連絡を取り合い、授業参観や教材研究、指導案作成等に取り組みながら事前指導が開始された。

9月5日実習初日は校長をはじめ生徒指導、人権教育等の各校務分掌担当者から実習に臨むにあたっての心構え等を指導して実習が開始された。



#### 【成果と課題】

本校の教員からは「教科指導を通して自身も勉強になった」「生徒指導を含め自分の指導のあり方を見つめ直せた」等の声を聞くことができた。また、生徒からは年齢が近いこともあり楽しく過ごせたといった前向きな声が聞かれた。

学生からは「自らの指導力、人間力などあらゆる力の向上につながった」「この実習で学んだことを今後活かせるようこれからも大学で精一杯頑張りたい」等の肯定的な感想を残してくれた。

実習後はSSSの指導者として関わりを持ってくれたり、コラボ音楽祭では職員合唱に全員が参加し生徒から声援を受けていた。このような経験を通して教職に対する思いが一段と強まった学生がいたことは嬉しい限りである。

一方、同じ大学から多くの学生が集まるので、やや緊張感に欠ける面が見られた。多くの学生を受け入れる場合、実習教科と指導教員の組み合わせ調整が難しく、指導教員に負担をかけてしまう面がある。

中学校から受け入れ可能な教科と人数をあらかじめ提示し、大学と調整できればさらに充実した実習を行えるのではないかと感じた。



## 2. 数学科における学習支援

### 【目的】

- ・生徒の学力向上を図る
- ・中学生の学習支援を行うことで大学生自らのスキルを高める

### 【概要】

大学生が週1時間ずつ授業の支援を行う。教師のアシスタントとして活動し、生徒の学習支援を行う。



### 【成果と課題】

生徒の支援者が複数となることで、学習への理解が深まっていると言える。授業でのグループ活動では「わからなさ」を出し合って学び合う授業を目指しているが、わからなさを出せない生徒へのサポートを重点的に行ってもらっている。

多くの学生が生徒の目線で支援を行ってくれ、支援してもらう生徒は安心感を抱くことができた。

今年からフィードバック用紙を作成し、授業後に感想などを書いてもらっている。生徒がどこでつまずき、どのような支援を行ったか、授業での気づきなどを書いた文章から、学生の視点が確かなものであると感じる。若く素直な感性で臨んでもらっており私たち教員の反省にもつながっている。

大学の授業との兼ね合いで同じコマに入る学生数が多く、支援に偏りができることは課題と言える。

## 3. 音楽科における学習支援とコラボ音楽祭

### 【目的】

学校祭の文化的行事であるコーラスコンクールでより高いレベルの合唱を行うことを目指す

### 【概要】

- ・6月に連携の関係者会議を開催し、コラボ音楽祭についての打ち合わせを行った。
- ・9月21日に兼重教授、高瀬教授による指揮と伴奏についてのワークショップを本校にて実施
- ・10月第2,3週目大学生が放課後、学級での合唱練習支援
- ・10月23日に三翠ホールにてコラボ音楽祭の実施。森川准教授に合唱コンクールの審査、講評をしていただく。音楽科の大学生による合唱を披露していただいた。



### 【成果と課題】

ワークショップ後、生徒たちは自主的に自分のクラスの歌のどこを聴き手に一番伝えたいのかを話し合う様子が見られた。また、指揮者、伴奏者への指導もしていただき貴重な体験となった。

大学生の支援は継続した指導はしていただけなかったものの、全クラスの歌を聞いてもらい短い時間の中での的確なアドバイスをしていただいた。

校内では、大学生の音楽的な指導支援を期待する声がある。しかしながら文化祭を開催する時期が他校と重なっていることや、大学との授業の兼ね合いで大学生の支援が難しいのが現状である。

また、コラボ音楽祭として実施しているが、どこまで「コラボ」できるかが今後の課題と言える。

#### 4. SSS (Saturday Step-up School ) における支援

##### 【目的】

生徒の学習意欲を活かした土曜日の過ごし方を支援する

##### 【概要】

希望者を募り、学年・教科別に教室を開放している。時間帯は午前中 8:30～10:30 で年間 15 回実施した。教科は数学と英語。大学生が指導者としてボランティアで参加している。



##### 【成果と課題】

参加者が比較的少人数のため、指導者 1 人あたりの生徒数が少なく恵まれた環境で学習できている。また、ボランティアで参加しているためか指導者は積極的で生徒の指導にも誠意が感じられ、生徒の学習意欲も向上している。

今年度は、多くの教育実習生が後期の SSS に率先して参加してくれた。生徒にとっても馴染みのある大学生が指導してくれることとなり、学習効果が上がったと言える。一方で生徒が騒がしくなった際など、どのように生徒に関わればよいかためらいを感じた大学生もいるようである。生徒の SSS への参加の心構えの押さえ直しも必要であるし、学習指導に当然必要とされる学生の生徒に対応する力を向上させることも課題と言える。

#### 5. 保健体育科における学習支援

##### 【目的】

ラート運動における技能向上、補助方法の習得を図る

##### 【概要】

ラート運動の授業で、授業者の全体への説明の補足や、運動時の危険防止のための補助を各ラートについて行った。



##### 【成果と課題】

ラート運動の授業支援は、実習期間中に行われた。後藤教授による説明もあり、生徒にとっては注意しなければならないことや、どのような運動ができるかなどへの理解が深まった。

昨年度までは 3 年生だけの取り組みであったが、今年度は 2 年生にもラート運動を実施した。授業後のアンケートでは、多くの生徒が「是非来年もやりたい」とラート運動への興味の高さを示す結果が出ている。また、3 年生は 10 月のプレ文化祭で発表するという機会を設けたため、より高いモチベーションを持続しながら練習でき、発表会では素晴らしい演技をすることができた。

支援の人数が多いことで安全面での配慮が行き届き、ラート初心者である生徒も安心して運動が行えた。

課題としては、実習中のみでの支援となり支援の期間が短いことがあげられる。

## 6. 家庭科における学習支援

### 【目的】

裁縫・調理実習中の生徒の安全の確保と、生徒の実態に応じた示範や指示などの学習支援を行う

### 【概要】

1年生は裁縫実習「手縫い」、2年生は調理実習「リンゴジャムを作ろう」、3年生は「高齢者体験」の授業に入ってもらった。学習支援、指導案検討、教材作製の協力を行ってもらった。



### 【成果と課題】

2, 3年生の授業では教育実地研究の課題でもあったので授業の内容の提案をしてもらったり、授業のための教材や実習の教具の作製や貸し出しに協力してもらったりした。また、実験・実習では特に多くの支援が必要なので、一人でも多くの支援者がいることで実習のより正確な実施が図られ生徒たちの学習にも効果があった。

課題は継続した支援ではなかったため、生徒が支援者に馴染むのに時間がかかった。日程調節に課題が残った。

## 7. 特別支援における学習支援

### 【目的】

生徒の困り感に寄り添いながら生徒支援を行う。生徒の実態に応じたよりきめ細やかな指導を行い、実地研修としての経験を積む。

### 【概要】

交流学級での学習支援。また、特別支援学級での授業の際の作業支援、個別指導。



### 【成果と課題】

交流学級で支援者が増え、生徒は困っている時にいつでも支援を求めることができるという安心感を持つことができた。体育の授業の支援にも入っていただき、安全に対する配慮も十分に行えた。

学校において教師以外の方とふれあう機会となり、コミュニケーション力が高められた。また生徒が大学生の支援を楽しみにしている様子がみられた。しかし、交流学級ではどのような支援を行うかを支援学級の担任、教科担任、支援者で事前に話し合っておかなければ生徒の困り間に寄り添った指導とは言えない。本年度は三者の連携に課題が残ったと言える。

また、支援員と同じように、必要であれば交流学級で支援学級以外の生徒にも支援できるとよいのではないかなど、支援のあり方も広げていくとよいと思われる。

## 8. CST（コア・サイエンス・ティーチャー）養成事業拠点校

### 【目的】

CST養成による理科授業支援体制の構築

### 【概要】

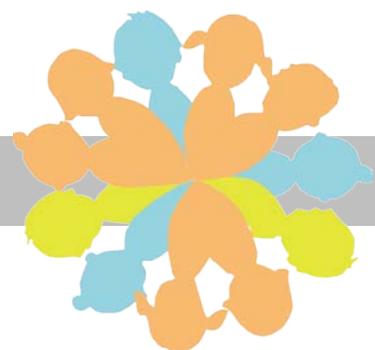
CSTには2つのグレード（Ⅰ種とⅡ種）を設けており、Ⅰ種は経験を積んだ小・中学校教員を対象とし、Ⅱ種は主に三重大学教育学研究科の学生を対象としたもの。Ⅰ種CSTプログラムは114時間（1年間）、Ⅱ種CSTプログラムは199時間（2年間）であり、これらを修了することで、三重CSTとして認定を受ける。

### 【成果と課題】

今年度は準備段階となるため、成果と課題は未知であるが、2月に関係者会議2回、授業参観2回、講演会を実施し準備を進めている。



## Ⅲ 成果報告会



平成 24 年度

## 一身田・橋北校区との連携活動についてのフォーラム

月日： 平成 24 年 12 月 5 日（水）  
時間： 12:00-17:00  
場所： 三重大学総合研究棟 メディアホール  
主催： 三重大学教育学部

### プログラム

12:00-17:00

【ポスターセッション】

(ロビー)

13:00-17:00

【フォーラム】

13:00-13:05

開会

13:05-14:30

第 I 部 ポスターによる活動報告

(1) 活動の概要説明（口頭で 1 分間）

(2) ポスター発表

(ロビー)

14:30-16:00

第 II 部 連携校における教育実習

(1) 連携支援室 2 からの報告

連携支援室 2

(2) 実習生による報告

日本語教育コース

英語教育コース

技術教育コース

(3) 連携校からの報告

南立誠小学校

橋北中学校

一身田中学校

16:00-17:00

第 III 部 連携活動について

(1) 連携校からの報告

南立誠幼稚園、北立誠幼稚園

南立誠小学校、北立誠小学校、西が丘小学校

一身田小学校、栗真小学校、白塚小学校

橋北中学校、一身田中学校

(2) 次年度に向けて

一身田・橋北校区連携推進委員会

17:00

閉会

平成24年度

# 一身田・橋北校区との 連携活動についての フォーラム

12月 5日 (水)

時間／12：00～17：00

場所／三重大学総合研究棟 1階  
メディアホール



## プログラム

12:00-17:00

【ポスターセッション】 (ロビー)

13:00-17:00

【フォーラム】

13:00-13:05

開会

13:05-14:30

第Ⅰ部 ポスターによる活動報告

(1)活動の概要説明(口頭で1分間)

(2)ポスター発表

(ロビー)

14:30-16:00

第Ⅱ部 連携校における教育実習

(1)連携支援室2からの報告

(2)実習生による報告

(3)連携校からの報告

連携支援室2  
日本語教育コース  
英語教育コース  
技術教育コース  
南立誠小学校  
橋北中学校  
一身田中学校

16:00-17:00

第Ⅲ部 連携活動について

(1)連携校からの報告

南立誠幼稚園、北立誠幼稚園

南立誠小学校、北立誠小学校、西が丘小学校

一身田小学校、栗真小学校、白塚小学校

橋北中学校、一身田中学校

(2)次年度に向けて

一身田・橋北校区連携推進委員会

17:00

閉会

お問い合わせ

**三重大学教育学部 連携支援室2**

(教育学部 専門1号館2階)

TEL: 231-9269 E-MAIL: ogawa@edu.mie-u.ac.jp

主催：三重大学教育学部

2012フォーラム  
ポスタータイトル

No.	指導教員	ポスタータイトル
1	中西 正治	数学教育コースと一身田中学校との地域連携 —「数学科教育法」を通して—
2	中西 正治	数学教育コースと橋北中学校との地域連携 —「数学科教育法」を通して—
3	岡野 昇 後藤 洋子	教師—生徒—授業のつながり —津市立一身田中学校での教育実習で学んだこと—
4	岡野 昇 後藤 洋子	教師の役割 —橋北中学校での教育実習を通して学んだこと—
5	岡野 昇 後藤 洋子	ラートで生まれる生徒の表情 —地域連携校での教育実習におけるラート運動の授業補助を通して—
6	魚住 明生	橋北中学校における教育実習の報告
7	磯部 由香 平島 円	一身田中学校・橋北中学校での教育実習を通して
8	早瀬 光秋	橋北中学校での教育実習
9	林 朝子 服部 明子	一身田小学校 世界を結ぼうクラブ
10	永田 成文	西が丘小学校における教育実践について
11	田中 伸明	数学教育コースと一身田小学校との地域連携 —「教育実地研究基礎」を通して—
12	田中 伸明	数学教育コースと栗真小学校との地域連携 —「教育実地研究基礎」を通して—
13	田中 伸明	数学教育コースと白塚小学校との地域連携 —「教育実地研究基礎」を通して—
14	田中 伸明	数学教育コースと南立誠・北立誠小学校との地域連携 —「教育実地研究基礎」を通して—
15	富樫 健二	小学生の身体活動量と健康関連体力の関係について(北立誠小との連携活動)
16	魚住 明生	北立誠幼稚園出前授業 『くぎ打ちとんとん』
17	磯部・吉本 平島・林	家庭科における小・中学校との連携
18	早瀬 光秋	一身田中学校における教育ボランティア 英語授業補助に関する報告
19	早瀬 光秋	橋北中学校におけるボランティア実践
20	河崎 道夫	幼稚園での子育て支援～未就園児保育の運営～
21	河崎 道夫	幼稚園「暗闇部屋」の取り組み
22	平賀 伸夫 荻原 彰	津市立一身田中学校(理科)における授業支援

## 数学教育コースと中学校との地域連携

### —「数学科教育法」を通して—

数学教育コース 62期 29名  
指導教員 中西 正治

数学教育コースでは、一身田中学校・橋北中学校にお願いし、教育実地研究を実施しています。教育実地研究は、週1回、私たち学生が、それぞれの担当する中学校に行き、生徒の学習支援や先生のアシスタントをさせていただき取り組みです。この教育実地研究によって、数多くの素晴らしい経験を積ませていただきました。

以下、中学校での取り組みから得られた感想を2つ述べたいと思います。

#### ☞ 橋北中学校

私は、前期・後期の教育支援と教育実習を橋北中学校で行いました。今年の9月に教育実習がありました。実習に行く前と行った後では、同じ教育支援でも、感じる事、考える事、注目するポイントなど少し違うものになったり変わったりしました。

一番大きく違うなと感じることは、生徒が私のことを先生だと思ってきているところです。前期に実習で担当するクラスの授業支援を何回かさせていただきましたが、私が支援で来ていたことをちゃんと知っていた生徒はごく少なかったです。生徒にとっては「毎週この時間にきて勉強を教えてくださいの大学生の一人」としてしか認識されていないんだなと思いました。実習を行ったから生徒たちが私のことを一人の先生として見てくれたのだと思います。その後、教育支援に行くと、「あっ、

〇〇先生！」と生徒から声をかけてくれたり、机間巡視の際に生徒が質問するときには、前期よりも気軽に質問してきたりするようになりました。

その結果、授業支援にも積極的に取り組むことができ、自分のモチベーションも上がるようになりました。これは実習校と教育支援で行く学校が同じであることの利点でもあるかなと思います。また、実習前に自分の担当するクラスの様子を授業支援という形で見ることができたり、担当クラスでなくても他のクラスの見学でもその学校の雰囲気を知ることができたりして実習に対し不安で一杯であった私にとってはすごく助けになりました。

授業支援では先生方の授業を見学することもできます。教育実習の前と後では、注目して見学するところも変わりました。実際に生徒の前に立って授業をしてみると、うまくいかないことばか





# 教育実地研究

～津市立一身田中学校～

指導教員：中西正治

ポスター作製：中瀬葉月、園田綺美



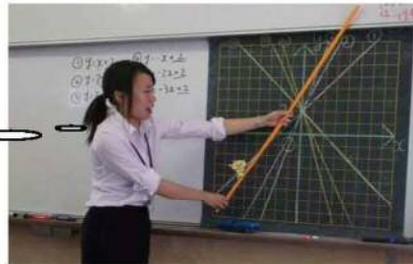
机間指導をすることで生徒たちがきちんと理解しているか確認することができ、生徒たちがどの部分でつまずきやすいか気付くことができ、机間指導の大切さを実感しました。

先生のひとつひとつの言葉を聞いて「こんな問いかけをしたらいいのか」とか「こうやったら生徒の興味をひきつけられるのか」など授業の裏側を意識した視点で見ることができるようになりました。



手をあげてくれるかなあ

この説明で分かってくれるか



教育実地研究を通して学んだことは生徒を観察することの大切さである。生徒の表情や態度から生徒の思いをくみ取ることは簡単ではないが、生徒との信頼関係を築くためには、生徒を見ることはとてもとても重要になってくる。机間指導をしているときにこちら側から積極的に話しかけてコミュニケーションをとり、生徒の理解をはかることが必要であると思いました。

## <教育実習>



4週間実習を通して、児童生徒に教えていくということに関して、中学の実地研究にも活かせることがたくさんありました。授業中先生の話をしっかり聞いているのかわかって聞いているのか、ただノートを写しているだけかわかりにくい生徒はどこにいるかなど教室全体の子どもの様子を見るようになりました。それまでは、どうしても自分の近くにいる子や机間指導をしていて目についた生徒に支援が偏りがちで、加えて授業中先生が話しているときは生徒と一緒に授業を聞いてわかりにくい部分はどこかなど生徒の反応を見ずに考えていることがほとんどでした。しかし実習を終えて授業を聞きながらでも生徒に目を配り、クラス全体の様子を見ながら、つまずいているところはどこなのか、なにがわからないのかを考え支援を行うことが大切だとわかりました。

# 教育実地研究～津市立橋北中学校にて～

先生 わかりません！

指導教員：中西正治  
ポスター作製：宮本宜美



この比例の関係の表を書いてから、グラフを書いてみよう！

少しのヒントを与えるだけで、問題解決への取り組み方も変わること気がついた。グループ活動を通して、生徒同士で説明しあい、学びを深めていた。



教育実地研究を通して、生徒の理解を深めるためには、教具を用いて説明することの大切さや、授業における生徒の表情を確認しながら授業を行うことの大切さを学んだ。クラスによって、授業での雰囲気が違うので、説明の仕方を変えたりする工夫が必要なることを知った。この教育実地研究では、たくさんのことを学ぶことができ、貴重な経験になった。

先生この解き方でいいですか？

先生 この解き方は？

じゃあ、今度は別の解き方でそれぞれといてみよう！



教育実習を通して、授業でのポイントや気を付けることだけでなく、生徒との関わり方、どんな言葉がけや接し方をするかなども学ぶことができた。また、優しいだけの先生ではなく、厳しさも必要であり、けじめをもって生徒と接することの大切さを知った。



<振り返りとこれから> 橋北中学校での実地研究では生徒たちと触れ合うことによって大学で学んできたことが実際の現場でどのようになされているのかを知ることができた。生徒たちは学年やクラスによって大きく異なっていて、支援に入る私たちも工夫をする必要があった。クラス全体を見渡しながら授業についていけない生徒を発見し、生徒に声をかける。「何か困っているところはある？」生徒の反応はまちまちではあるが声をかけることで自分が授業で放っておかれていないのだと思ってほしい。「ここがこうなっているんだよ」と話していく。すると、わかったのだろうか、ある瞬間に子どもたちは「ああ、そうか」などのつぶやきと共にとても嬉しそうな顔をする。その表情を見ると、数学が苦手な生徒にとって授業時間が辛い時間にならず、少しでも学びを深める時間になったのだと思う。私たちは授業が辛い時間にならないような支援をしてきた。そしてこれからも引き続きしていく。

## 教師—生徒—授業のつながり

### —津市立一身田中学校での教育実習を通して学んだこと—

教育実習生 木村有里（保健体育コース3年）

指導教員 清長隆司（一身田中学校）

岡野 昇（保健体育講座）

#### 1. 一身田中学校教育実習実施概要

- ① 実施日時：2012年9月3～28日
- ② 実施場所：津市立一身田中学校
- ③ 担当学年・担当教科：第2学年・保健体育
- ④ 授業概要

第2学年の3クラスを担当させてもらい、体育分野においてはマット運動の領域を担当した。授業内では主に、ほん転技群を中心として取り上げた。その中で「回転した後にピタッと立てるかな？」という課題を設定し、単元を通して回転をした後の起立姿勢を意識させる授業を展開した。また、保健分野では「水と健康」「生活排水の処理」の領域を担当した。

#### 2. 実習へ行くにあたって

教育実習に行くにあたり、事前に5回のガイダンスと2回の指導案検討、ラート研修を行った。6月には何度か授業見学へ行き、担当する第2学年の保健体育の授業を4回見学させてもらった。協力校での実習ということで不安はあったが、一身田中の活発な生徒たちの様子を見て、この子たちにどのような保健体育の授業を展開しようかと楽しみな気持ちが大きかった。

#### 3. 実習中 —教師としての私と生徒とのつながり—

実習が始まり、最初の体育の授業を行ったが、生徒たちも普段とは違う私の授業に戸惑っている様子で、全員が積極的に授業に参加する雰囲気ではなかった。そこで、私は授業以外での生徒たちとの関わりを大切にすることを心掛けた。一身田中は、部活動に熱心に取り組んでおり、毎朝朝練に取り組む生徒たちから「おはようございます！」という元気な

声が飛んできた。私は、放課後は部活動に参加し、休日も試合の応援や演奏会に行くことで生徒たちとの関わりを持つようにした。また、下校時刻の15分前から正門に教師全員と実習生全員が立ち、下校する生徒を見送る下校指導も毎日行った。ここでも生徒たちと会話をしたり挨拶を交わすことで交流を深めることができた。

このような授業以外の場で生徒たちとの関わりを多く持つことで、授業内でも生徒たちの積極的に取り組む姿が見られるようになっていった。初めは互いに探り探りであった私との関係も、授業を進めるうちに技が出来た時には生徒たちから「先生見とって見とって」と声が掛かるほどになっていった。授業が始まる時も、「今日はどんなことするの？」と尋ねてきたり、マット運動に対しての意識にも少しずつ変化が見られた。

#### 4. まとめ 一生徒と授業をつなぐということ—

一身田中の教育実習では、授業外の指導でも生徒たちと関わる機会を多く持つことが出来た。その中で生徒たちと教師である私とのつながりが生まれ、それが私の授業へ積極的に参加していこうという生徒たちの意欲や、マットという教材に対する興味にもつながったと考えられる。教師として生徒とさまざまな場面に関わり、つながりを持つことは、単に生徒と仲良くなるためではなく、生徒と授業をつなぐために重要であることをこの実習を通して学んだ。ここから、この教師と生徒のつながりによって生まれた意欲や興味を、更に授業内で学ぶべきことへ、つまり体育であれば“その運動のおもしろさ”へとどうつなげていくか。それこそが私に求められる力である。

# 教師—生徒—授業のつながり

—津市立一身田中学校での教育実習を通して学んだこと—

保健体育コース3年 木村有里

## —実習前—

- ・ 5回のガイダンス（最後の1回で模擬授業）
- ・ 2回の指導案検討 ・ ラート研修 ・ 4回の授業見学



## —実習中—

生徒たちを授業に積極的に参加させるには？

まずは授業外での生徒とのかかわり

- 生徒たちが熱心に取り組む部活動に参加
- 休日には試合・演奏会の応援
- 毎日の休み時間・下校指導での交流



それによって

教師である  
「私」

「つながり」

「生徒」

「授業」

## —まとめ—

教師としてさまざまな場面で生徒と関わり、つながりを持つことは、単に仲良くなるためではなく、生徒と授業がつながるために重要であることをこの実習を通して学んだ。

この「教師—生徒」のつながりを、更に授業内で学ぶべきことへ、つまり“その運動のおもしろさ”へとどうつなげていくか。それこそが私に求められる力である。

## 教師の役割

教育実習生 藤田有里(保健体育コース3年)

指導教員 岡田興昌(橋北中学校)

後藤洋子(保健体育講座)

### 1. はじめに

私は、平成24年9月5日(水)から10月2日(火)までの1ヶ月間、橋北中学校で教育実習を行った。教育実習が始まる前、教育実習中、教育実習を終えてからの期間の中でどのようなことを経験し何を学んだか、また自分の考え方はどのように変わったかについて考察していく。

### 2. 実習準備

教育実習に行くにあたり、単元や担当クラスを決めるための事前打ち合わせ、夏休み前に3回の授業見学(体育)、夏休みには2回の指導案検討会と何度か橋北中学校に行った。また、ラートの授業で補助につくため、三重大学での授業に参加したり、夏休みには他校の先生方と共に研修会に参加したりした。

この時の私は、教師の仕事を何もわかっておらず、ただ授業をスムーズにしようという想いで指導案を書いてしまい、せっかく事前に授業を見学することができたにも関わらず、指導案を書く中で生徒のことを視野に入れることを忘れてしまっていたように思う。

### 3. 学校での教師の役割

実際に教育実習が始まり、すぐに後悔した。教育実習が始まるまで、私は、指導案が上手くかければいい、授業がスムーズに進むことが1番だと考えていたからである。生徒にとって授業(学習指導)は必要で、意味のある授業を行うことは教師の仕事であるが、それと同じくらい、生活指導や部活指導も大切であるということに気付いた。

教頭先生にも、「できるだけ積極的に部活指導や、下校指導に参加してください。そうすることで、生徒の違う一面も見ることができます」と指導を受けた。確かに授業中とは違った真剣な顔や、笑顔があり、実習期間の経過と共にそのような顔を見ることが増えた。このような指導を積極的に行うことは、学校でのすべての「教師—生徒」の関係に関わっており、授業を行っていく中でも生徒らの態度は変化した。学校という場での教師の役割には授業で生徒を指導するだけではなく、他にも給食、休み時間、下校時や部活動などのありとあらゆる場面での指導を行うことであると気付いた。

また、教師の指導の仕方や接し方によって生徒からの反応は全く異なり、こちらが一步引いてしまえば、相手も一步引いてしまうといった関係がつくられてしまうと感じた。

### 4. おわりに

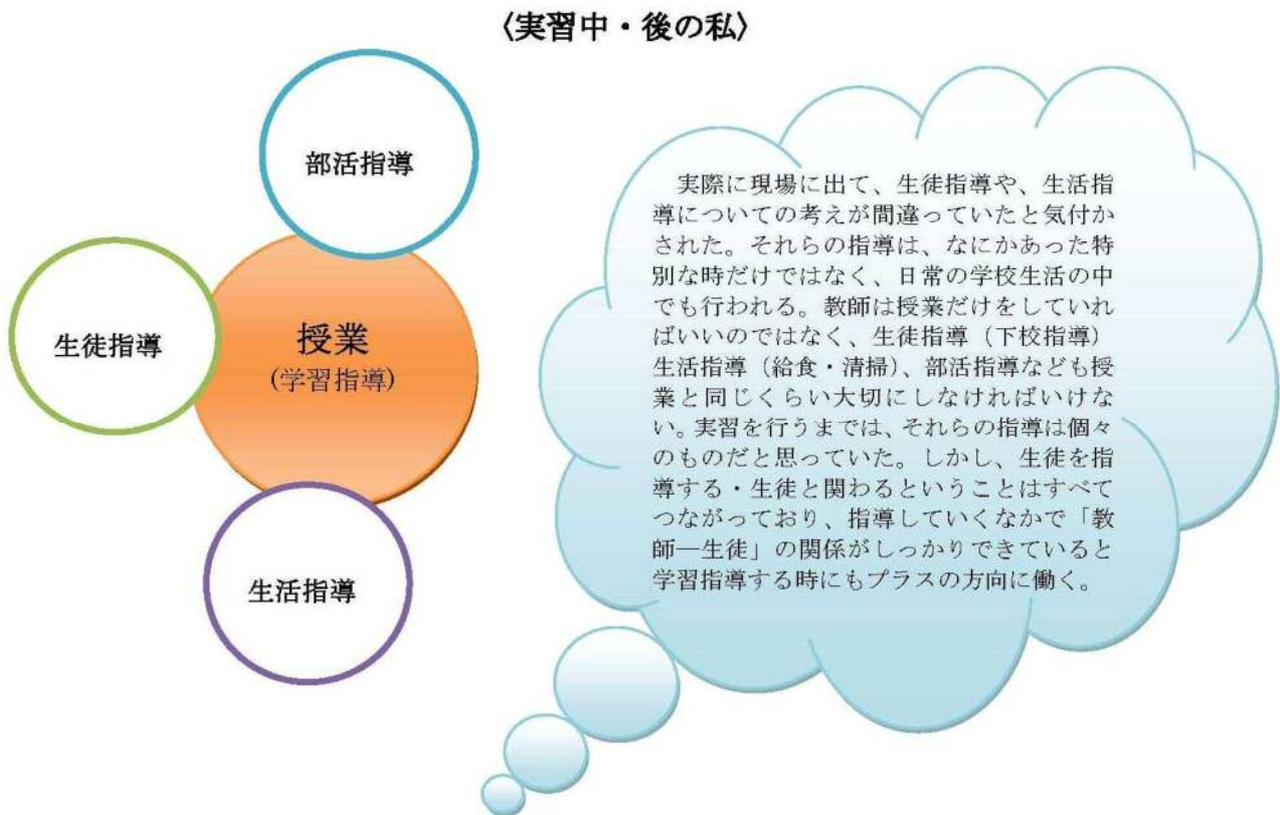
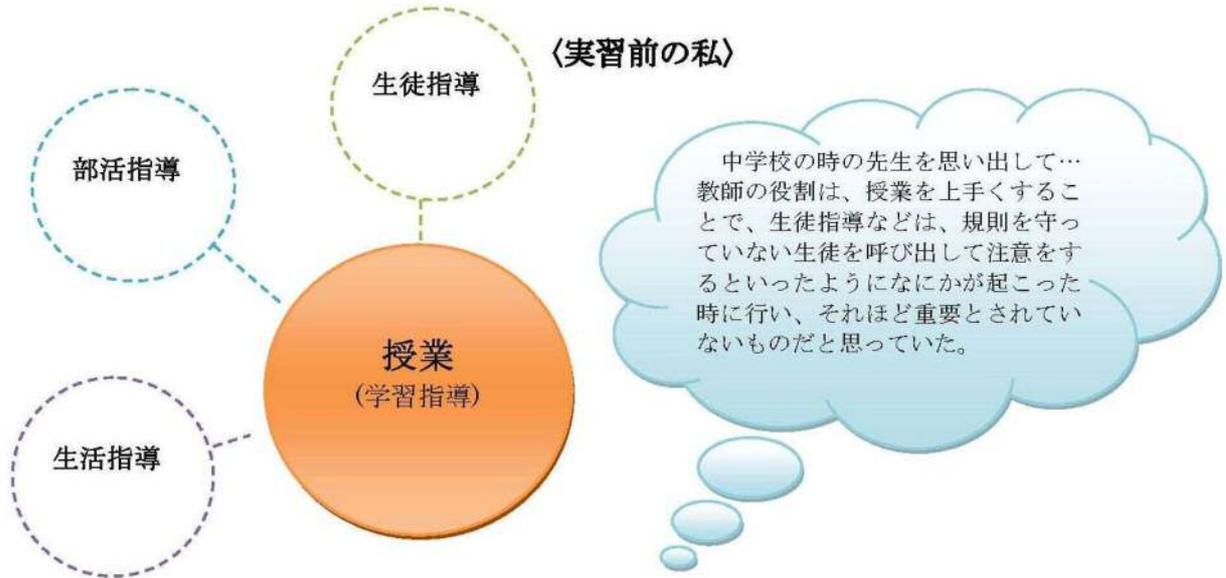
実習前は、「授業うまくできるかな」といった授業のことばかり心配していたが、実際に現場に出て感じたことは、授業時間外の時間(例えば、給食、清掃、部活の時間など)の生徒への指導も、とても大切であるということだった。実習生は年も近く「教師—生徒」という関係を築くことは難しかったが、この関係をしっかりと築き、多くの場面で指導をすることが教師にとってとても重要な役割であると感じた。

実習で学んだことを活かし、これからは授業だけでなく、その他の指導も大切だということを頭において、生徒と関わっていきたい。

# 教師の役割

—橋北中学校での教育実習を通して学んだこと—

保健体育コース3年 藤田有里



## ラート運動で生まれる生徒の表情 —地域連携校での教育実習におけるラート運動の授業を通して—

保健体育コース3年 木村有里 藤田有里  
指導教員 後藤洋子 岡野 昇

### 1. はじめに

私たちは、津市立一身田中学校、津市立橋北中学校（以下、一身田中、橋北中）で教育実習を行った。両校では、保健体育の体づくり運動の領域でラート運動が取り入れられている。本稿では、私たちが教育実習において両校で行ったラート運動の授業の補助について報告する。

### 2. ラート実技研修会について

教育実習に行くにあたり、8月24日（金）に一身田中学校体育館で行われたラート運動実技研修会に、津市内の体育教員と一緒に参加した（写真1）。

ここでは、ラート協会の講師の方からラートの取り扱いや基本的な動き、ラート運動を行うにあたっての注意点などを、実技を交えて指導していただいた。その中で実際に自分たちがラート運動を行ってみることで、ラートで回転するおもしろさや、回転する中で足が抜けそうになるポイントなどの危険なところなどを把握することができた。



写真1

### 3. 教育実習中 —ラートが生み出す生徒の表情—

一身田中においては3年生のラート授業補助、橋北中においては2年生のラート授業補助と3年生にラート運動の基本的な技の指導を行った。

ラート授業の補助を行う中で、多くの生徒たちは普段感じる事のない非日常的感觉のおもしろさから、積極的に色々な技に挑戦していく姿が見られた。しかし、なかには回転することに対する恐怖心を抱く生徒もいた。補助をするにあたって、その生徒たちはどうなった時に恐怖心を抱くかなどに丁寧に耳を傾けるよう心がけ、主に怖いと感じている生徒に対する補助を行った。私たちが補助をしながら回転に挑戦し、出来たときには怖がっていた生徒からも「おもしろい！」と嬉しそうな表情が見られた。

橋北中では指導者として授業も行った。文化祭でのラート運動発表に向け、基本的な技などの見本を行いながら指導した。自らラートを選択してきた生徒が多かったため、授業に意欲的に取り組む姿が見られた。また、生徒は基本的なことができる、更に難しいことに挑戦する意欲を見せ、授業が進むにつれて高度な技に挑戦するようになった。新しい技に成功した時の「先生できるようになったから見とって！」という満足気な表情が授業内で何度も見られた。

### 4. まとめ

ラート運動の授業を行う中で、回転や難しい技が出来た時に見られる生徒らの嬉しそうな表情が最も印象的であった。ラート運動が授業で取り入れられている中学校は全国的にも少ない。しかし、一身田中と橋北中でラート授業を行わせてもらい、このようなラートにおける非日常的感觉や、できたという満足感から見られる生徒たちの嬉しそうな表情から、ラート運動が持つおもしろさを体育の授業内で味わわせてあげることが体育における大きな魅力のひとつになるのではないかと思った。

# ラートで生まれる生徒の表情

—地域連携校での教育実習におけるラート運動の授業補助を通して—

保健体育コース3年 木村有里 藤田有里

## —実習前—

### 8月24日（金）—身田中学校体育館

ラート実技研修会に、津市内の体育教員と一緒に参加した（写真1・2）。ラート協会の講師の方からラートの取り扱いや基本的な動き、ラートを行うにあたっての注意点などを、実技を交えて指導していただいた。実際に自分たちがラートを行ってみることで、ラートで回転するおもしろさや、危険な点などを把握することができた。



写真1

## —実習中—

### ○身田中、橋北中での授業補助

主に、恐怖心を抱く生徒たちの補助にあたったが、その生徒たちも私たちが補助をしながら回転に挑戦し、出来た時には嬉しそうな表情を見せた。

### ○橋北中での授業実践

見本を行いながら基本的な動きの指導をした。生徒たちは授業が進むにつれて高度な技に挑戦するようになり、新しい技に成功した時には、満足気な表情が何度も見られた。



写真2

## —まとめ—

ラート運動の授業を行う中で、回転や難しい技が出来た時に見られる生徒らの嬉しそうな表情が最も印象的であった。ラート運動が授業で取り入れられている中学校は全国的にも少ない。しかし、一身田中と橋北中でラート運動の授業補助をさせてもらい、生徒たちのそのような表情を見て、ラート運動が持つ面白さを体育の授業内で味わわせてあげることは体育における大きな魅力のひとつになるのではないかと思った。

## 橋北中学校における教育実習の報告

教育学部技術コース3年 技術科教育研究室 村瀬達耶

### 1. はじめに

三重大学の地域連携校である橋北中学校で教育実習を行った。実習前から事前ガイダンスや授業見学などを行い、スムーズに実習校に馴染むことができた。実習中には土曜日の授業サポートに参加し、実習後は三重大学とのコラボ音楽祭に参加するなど、地域連携校ならではの様々な取り組みを経験させていただいた。現在も教育実習の延長として週2回T.Aとして授業の補助を行っている。

ここでは、実習中に学んだこととともに、現在続いている授業補助に視点を当てて報告する。

### 2. 活動概要

- ・実習期間：2012年9月5日～10月3日
- ・担当学年：クラス担当3年4組、授業担当1年全クラス、3年全クラス
- ・授業内容  
1年生：木材加工『かんな削りについて』 4時間×5クラス＝全20時間  
3年生：エネルギー変換『機構について』 2時間×4クラス＝全8時間

### 3. 授業実践について

#### 3.1 開発した教材を用いた授業

実習で行う授業内容は、従来から行われている内容である。単元として多くの授業実践例があるが、指導教員からはできる限り自分で考えた授業を行うようにと助言された。そのため、1・3年の両方で、自分なりに工夫し開発した教材(図1)を用いて授業を行うことができた。

時間をかけて、しっかりと構想した教材は、子どもたちの興味を惹くことができる。反対に、指導案などに追われ、教材研究が不十分な教材では、子どもたちに受け入れられず、効果的でない様子が見て取れた。自分がしっかりと取り組んだ教材

であれば、多少学習過程がスムーズに進まなくても、子どもたちがついてきてくれるということを実感できた。



図1：リンク機構の教材

#### 3.2 クラス運営に関わる指導

9月は、それぞれクラスがコラボ音楽祭に向けて合唱の練習をしている時期であった。担当したクラスでも空き時間に合唱練習をしていたが、曲が決まったばかりでクラスがまとまりに欠けていた。

合唱練習の際は、男性パートにつき合唱練習の手助けをした。具体的には、恥ずかしくて歌えないというような生徒には、隣に立って一緒に歌う、楽譜を指でなぞるなどの支援をした。パート間でのいざこざがあるときには、パート毎に話し合っ解決するなど、クラス全体がまとまるように声掛けを行った。学校行事に合わせ、クラス運営についても学ぶことができた。

#### 3.3 授業補助や学習支援

担当学年以外の授業では、授業補助という形で参加させて貰った。実際に教壇に立って授業しているときと違い、一人ひとりの生徒に関わることができ、視線も生徒たちに近い立ち位置で関われる。

補助では、作業が遅れている生徒を中心に、授業内で課題が終わるように支援を行った。それでも授業に追いついていない生徒がいれば、放課後などに補習を行った。

技術は1つの実習教材で時間がかかるものが多く、個々の能力差で進度が大きく変わってしまうことがある。そういったときに、どのような支援を行えばよいかをいろいろと考えることができた。

できれば補習は望ましくないが、そうしなければ差が開いていく一方であるし、教員も空き時間を確保しなければならない。こういった兼ね合いを考え、支援や補助をすることがとても重要であるということを学んだ。

#### 4. 教育実習事後について

既述したように、教育実習後も教科担当の先生に声をかけていただき、教育実習から継続している単元の授業のアシスタントとして呼んでいた。教育学部の授業では現場での実践はあまり多くないため、実際の現場に入ることができることは、とても貴重である。今回のように、実習後の続きで内容が分かっているため、こちらも参加しやすく、実習での経験をそのまま活かせる場となっていると思う。

現在は1年生が木材加工の仕上げに入っている。作品の完成が迫るとともに、個別に対応しなければならない問題が多く、教室全体に注意が行きにくくなってしまう。生徒一人ひとりだけでなく、クラス全体に対して関わるというのは、実際の現場でしか分からないことである。継続的に関わることでクラスの雰囲気を掴み、対応を考えることができるようになってきた。

#### 5. 成果と課題

春から半年以上にわたって関わったことで、学校の雰囲気をより良く理解でき、教員の方々と連携がうまく取れた。初めはハウレンソウ（報告・連絡・相談）など、どうすればよいか分からな

ったことも、ガイダンスから実践を通してできるようになり、その重要性も実感することができた。

しかし、自分の中で優先順位をうまくつけられず、連絡が疎かになり、日誌などの提出物が遅れてしまうことなど、多々迷惑をかけることがあった。社会人としての意識をもっとしっかりと持つべきだったと思う。

生徒との関わりでは、クラスでの清掃指導や下校指導などの生活指導だけでなく、自分の中学時代や受験の話で相談をするなど、積極的に様々な関わり方をすることができた。

課題としては、生徒との距離感が近過ぎたと感じる。すぐに名前と呼ぶこともあったし、つい話し込んでしまい生徒を指導できなくなることもあった。このことは以前からの大きな課題であり、今後自分の中で線引きができるようにしたい。

授業では、教材研究の必要性を再確認するとともに、個人の支援だけでなく、クラスに合わせた学びの形態を考えて授業をするという意識を持てるようになった。

実習中に指導教員や他の実習生からアドバイスをたくさん貰い、授業のやり方や教材の見せ方等、自分なりに上手くできるようになったと思っていたが、実際に指導教員の授業を見せてもらうと、まだまだ未熟であることがとても実感できた。例えば、クラス運営や授業の導入、専門知識・指導技術、指示の出し方等、見習うところが沢山あった。自分に足りない部分を見つけて、さらに自らの力にしていきたいと思う。

#### 6. 終わりに

教育実習の4週間はとても楽しかった。もちろん大変だったし、指導案や教材開発に追われることもあったが、ともに実習へ行った仲間や、先生や子どもたちに支えられて乗り越えられたのだと思う。地域連携校として自分たちが、もっとこういうことをしたい、と強い意志を持って実習や活動を行うことで、よりよい関係や成果が得られると素晴らしいと思う。

# 橋北中学校における実習報告

技術教育コース3年 村瀬達耶

## 教育実習の概要

実習期間：2012年9月5日～10月3日  
担当学年：クラス担当3年4組、授業担当  
1年全クラス、3年全クラス  
授業内容  
1年生：木材加工『かなな削りについて』  
4時間×5クラス＝全20時間  
3年生：エネルギー変換『機構について』  
2時間×4クラス＝全8時間

## 教育実習での目標

- 従来の授業にとられず、自分なりに分かりやすい授業づくりをすること。
- 子どもたちと積極的に関わること。
- 社会人としての態度を養うこと。
- 教師という仕事の実際を知ること。
- 共に実習を行う仲間たちと協力して実習を行うこと。

## オリジナル教材での授業



### 機構についての教材

生徒に伝わりやすい授業をしようと、教材を作製して実習に臨んだ。出来る限り教える立場ではなく、教わる立場になって教材を考え、子どもたちが活動の中で理解できるような教材となるように工夫した。

教材と一口にいても、スライドや張り紙の1つ1つも教材になり、授業づくりに関わってくるのだということが実感できた。

## 実習後の授業補助

### マルチラックの組み立て

教育実習終了後も教科担当の先生の誘いで、自分が担当した単元の授業補助をさせていただいた。教壇とはまた違った視点で子どもたちと接することができた。

作っている作品や作業の速度により、子どもによって進度が違い、持っている課題も様々なため、各々に合った支援が必要であった。

実習中は作品の製作ではなかったため、子どもたちが実際にどういったところでつまづくのか新たに分かり、課題を共に解決していくことで、自らの技術力の向上にもつながった。



## 成果と課題

- 授業の進め方や、教材の見せ方、発問などの大切さが分かった。
- 授業だけでなく、クラスや部活動での子どもたちの実態を知ることができた。
- 子どもたちとの距離の取り方や言葉遣いなど、改善していきたいと感じた。

## 一身田中学校・橋北中学校での教育実習を通して

家政教育コース 62 期：矢部さやか、消費生活科学コース 62 期：中村真帆、藤山千歩子

私たちは9月に一身田中学校および橋北中学校で教育実習を行った。具体的な実習内容は以下のとおりである。

### 一身田中学校（矢部）

#### 【実習前】

授業を担当するクラスの学習支援（調理実習）、担当するクラスの授業見学に行った。

#### 【実習中】

単元：

1年生 「衣服分野」…衣服のはたらき、選び方、取り扱い絵表示、手入れの方法

2年生 「食生活の課題」…朝食の欠食、糖分・塩分の過剰摂取の問題

身近な飲み物を用いた糖度計の実験を行った

3年生 「消費生活」…販売方法、支払い方法、買い物のコツ、悪質商法

※授業以外：朝学活、帰り学活、清掃指導、下校指導、部活動（ソフトテニス部）

#### 【実習を終えて】

事前に学習支援に行ったことで、授業中の雰囲気をもっと掴むことができたので心構えもできてよかった。また、様々な性格の生徒がいる学校で授業を行うことで、クラスごとの対応や机間巡視を通じた個々への対応も学ぶことができた。時には困難を感じることもあったが、良い経験ができたと思う。

### 橋北中学校（中村・藤山）

#### 【実習前】

1年生の学習支援（裁縫の補助）を行った。

#### 【実習中】

単元：

1年生「フォトフレームづくり」…1学期の続き、仕上げ

「衣生活と自立」…衣服購入、試着について

2年生「食品の表示と選択・食品添加物」…生鮮食品、加工食品

※授業以外：朝の会、学活、合唱練習、給食指導、清掃指導、部活動、下校指導

#### 【実習後】

教育実習後も、大学内で行われたコラゴ音楽祭に参加した。

#### 【実習を終えて】

実習前の学習支援は中学校全体の雰囲気も知ることができ、前もった心構えを持って実習に臨むことができたのがよかった。担当学年全部のクラスに関わることができたので、それぞれのクラスに合わせた授業を考えることの難しさを感じた。

大変なことも多々あったが、子どもたちを見ることでたくさんの元気をもらえた。自分自身も成長できるものとなったと思う。

## 一身田中学校・橋北中学校での教育実習を通して (教科:家庭科)

家政教育コース62期:矢部さやか、消費生活科学コース62期:藤山千歩子、中村真帆

### 一身田中学校(矢部)

#### 【実習前】

授業を担当するクラスの学習支援(調理実習)、担当するクラスの授業見学に行った。

#### 【実習中】

単元:

1年生「衣服分野」...衣服のはたらき、選び方、取り扱い絵表示、手入れの方法

2年生「食生活の課題」...朝食の欠食、糖分・塩分の過剰摂取の問題

身近な飲み物を用いた精度計の実験を行った



3年生「消費生活」...販売方法、支払い方法、買い物のコツ、悪質商法

※授業以外:朝学活、帰り学活、清掃指導、下校指導、部活動(ソフトテニス部)

#### 【実習を終えて】

事前に学習支援に行ったことで、授業中の雰囲気をもっと掴むことができたので心構えもできてよかった。また、様々な性格の生徒がいる学校で授業を行うことで、クラスごとの対応や机間巡視を通した個々への対応も学ぶことができた。時には困難を感じることもあったが、良い経験ができたと思う。

### 橋北中学校(中村・藤山)

#### 【実習前】

1年生の学習支援(裁縫の補助)を行った。



#### 【実習中】

単元:

1年生「フォトフレームづくり」...1学期の続き、仕上げ

「衣生活と自立」...衣服購入、試着について

2年生「食品の表示と選択・食品添加物」...生鮮食品、加工食品



※授業以外:朝の会、学活、合唱練習、給食指導、清掃指導、部活動、下校指導

#### 【実習後】

教育実習後も、大学内で行われたコラボ音楽祭に参加した。

#### 【実習を終えて】

実習前の学習支援は中学校全体の雰囲気も知ることができ、前もった心構えを持って実習に臨むことができたのがよかった。担当学年全部のクラスに関わることができたので、それぞれのクラスに合わせた授業を考えることの難しさを感じた。

大変なことも多々あったが、子どもたちを見ることでたくさんの元気をもらえた。自分自身も成長できるものとなったと思う。

## 橋北中学校での教育実習

62期 英語教育コース 古川勢州

橋北中学校の実習では、多くのことを学ばせてもらえました。大きく分けると教師についてと、教えるという事についてです。

教育実習中、橋北中学校の先生に交じって、1日を過ごしていく中で、生徒の立場からでは見ることのできない先生の姿を見ることができました。先生は学校の中で、授業やテストの準備の他にも、人権教育の準備や、文化祭で使う会場の準備、部活動の遠征の準備など、多くの仕事をこなしていきます。また、中学生は私達の想像以上に体力があり、それを持ってあましています。まだまだ精神的に幼いと言える中学生では、様々な問題も発生します。窓ガラスを割る、設備を壊す、あるいは無茶をして怪我をするといった問題や、思春期を迎えた子ども達は人間関係に悩み、イジメなどの問題も発生します。そういった問題行動に対して生徒指導をしていかなければならないので、子ども達が学校にいる間は、先生方が職員室にいらっしゃるのが珍しいほどです。子ども達が帰った後でも、学年などでの会議、家庭訪問などでいられない時も多々ありました。そうした姿を見て、大変そうな先生方は、とても情熱をもって教師をやっておられました。むしろそうした情熱がないと教師をやっていられないと、私は思いました。

教えるということは、教師の仕事の大部分を占めています。授業中、学活など子ども達に伝えたいことは数多くあります。それをどのように、どんな言葉で伝えていけばいいのか、とても難しかったです。私の担当の先生が、教壇に立ち、子ども達に向けて話をする姿を見る時、どうしたらこのように上手く話ができるのだろうかといつも思いました。担当の先生には、「経験」というように言われましたが、もうひとつ「人間性」が大事ともいわれました。生徒の目線に立つことも、生徒達から関心を集めるのも、何より自分の人間性が一番大事というように言われたのが、印象に残っています。教師としてではなく、何においてもまずは、自分の人間性が大事と言われました。生徒達にどれほど伝えたいことが伝わっているかは分かりませんが、伝えたいと思おうことがまず大事なのだと教えてもらいました。

教育実習を通じて、本当に多くの事を学ばせてもらうことができました。ここに挙げたのはその一部で、その全てを語ることはここではできませんが、教育実習を受けるにあたって、お世話になった多くの方に感謝していきたいと思えます。



## 橋北中学校での教育実習

62期 英語教育コース 古川勢州

### 一日の流れ

時刻	
08:00	出勤、出席簿に印鑑を押す
08:20~08:25	職員室で朝の打合せ
08:30~08:40	朝の学活
08:45~09:35	2-4で英語の授業(1限目)
09:35~10:35	空き時間…生徒の学習計画にコメント(2限目)
10:40~11:35	2-2で英語の授業(3限目)
11:45~12:35	2-3で英語の授業(4限目)
12:35~	給食指導
13:05	片付け・昼休み
13:25	予鈴・授業準備
13:30~14:20	2-5で英語の授業(5限目)
14:30~15:20	総合(6限目)
15:25~15:40	清掃指導
15:45~15:55	帰りの学活
16:05~	部活指導
17:30~17:45	下校指導
17:45~	今日の反省会・指導案指導・教材研究
19:30	帰宅

連絡は5分くらいで…。残りは自分で話をします!!

先生もエプロン、マスク、バンドナを付けてやります。

野球部、テニス部、陸上部、卓球部、剣道部、吹奏楽…

一日の感想としては…とても忙しいです!!

授業をしながら、生徒達が、学習計画という連絡帳に描いたコメントに返事を書き、ワークシートを印刷したり、教材を作ったりします。しかし、先生方はその上に生徒指導や、学級通信などの配布物の作成など、もっと忙しそうでした。(汗)

授業面では、今回多くの事を学ぶことができたが、その中でも…

### 活動の主体はあくまで「生徒たち自身」である!!

という点が一番印象残っています。私は常に「喋りすぎ!」と言われ続け、もっと生徒たちに考えさせて、発表させれば、生徒達は分かってくれるし、説明する時間が減って効率も良い!と教えてもらいました。

教育実習は…

実際に現場に出て、子どもたちに接することで、大学の授業では学ぶことのできないことを、沢山学ぶことが出来て、よかったです。大変な分、多くのことを学ぶことができました!!

日本語教育コースの取り組み「学校現場における多文化共生を考える」ver. 5  
 報告者：教育学部 林朝子

【概要】

授業名：人間発達実地研究V

活動場所：津市立一身田小学校「世界を結ぼうクラブ」

※平成20年度からスタート。月1回で年間7～8回実施。

担当教員：秋澤シルビア先生・村田真理先生（一身田小学校）

服部明子・牟羅・林朝子（三重大学教育学部）

参加児童：5年生6名、4年生9名、計15名

参加学生：第1～2回 日本語教育コース3年3名

第4～8回 日本語教育コース1年10名、4年（天師大DD学生）1名

打ち合わせ：6月5日、毎クラブ終了後

クラブ目標：他国の文化や習慣を知り、尊重する。

自国の文化や習慣に誇りを持つ。

他国の文化や自国の文化を外に発信する。

} 多文化共生意識を育てる

学生の目標：小学校のクラブ活動の観察や参加を通して、学校現場における多文化共生について考える。

活動内容：

回/月日	活動内容
①6/18	<b>【ブラジルってどんな所？】</b> ・ポルトガル語で挨拶をする ・ブラジルの地理や風土、学校文化について知る <b>【カレンダー作成準備】</b> ・5グループに分かれ、日本の文化を伝える挿絵入りカレンダーを作り、ブラジルのめぐみ学園に送る ・グループでカレンダーで取り上げたい日本文化について話し合う
②7/9	<b>【カレンダー作成】</b> ・グループでカレンダー作成
③9/24	<b>【ブラジルの音楽で楽しもう】</b> ※学生参加無 ・ブラジルの楽器
④10/15	<b>【ブラジルの遊びを体験しよう】</b> ・Rouba Bandeira（ホウバ・バンデイラ/旗取り）というブラジルの遊びを運動場で皆で行う
⑤11/19	<b>【ブラジルのお菓子を作ろう】</b> ・Queijadinha（ケイジャジーニャ）というブラジルのお菓子を皆で作って食べる
⑥1/28 予定	<b>【中国の文化紹介】</b> 中国からの留学生が中心になって、中国語や中国文化を紹介
⑦2/18 予定	<b>【世界の文化紹介】</b> 日本の学生が中心になって、世界の様々な文化を紹介

## 【学生のレポート】

現段階では、クラブ支援の参加回数が少なく、また、参加後の振り返りも十分に行なえていない。最終的な成果については、本年度の最終報告書で述べたいと思う。ここでは、10月のクラブ参加へのレポートから、多文化共生への気づきに関する部分を抜粋しておく。

10月のクラブでは、“Rouba Bandeira (ホウバ・バンデイラ/旗取り)”というブラジルの遊びをシルビア先生に紹介していただき、児童と学生が運動場で一緒に楽しんだ。以下、その体験を通して考えたことをレポートとしてまとめたものからの抜粋である。

\*\*\*\*\*

- ・小学生が異文化を理解するという点において、言葉で伝えるより実際に体験する方が理解しやすいのではないかと活動を通じて感じた。異文化について理解しようとする際、実際に体験する方が小学生の興味を引き付けるのではないかと教室での児童の様子を見て感じた。
- ・外国人児童が日本人児童と仲良くなるきっかけとして、お互いの国の遊びを紹介し合うのは有効な手段ではないかと考えた。自国の遊びと他国の遊びの共通点や相違点を見つけ出すことで、お互いに興味・関心を持つのではないかと考えた。
- ・同年代の留学生だけでなく、私たちより下の年代の小学生と「異文化」に接する機会ができてよかったと思います。「世界を結ぼうクラブ」という名の通り、「遊び」によって他国の文化を知り、他国の人との交流の場をもうけることで、私たちの中でも子どもたちの中でもどんどん世界が広がっていき、お互いに「世界を結ぶ」経験ができるだろうと思いました。
- ・多文化共生とは、人種・国ごとに異なる文化を認め合い、互いに対等な立場で社会を構成していくことである。そういった意味で今回のように他の文化を知るということは、多文化共生の社会を作っていく過程で大切な第一歩であると感じた。(中略) 今後日本がさらに多文化共生を進めていくのならば、幼いころから多文化に触れる機会をさらに増やしていくべきである。国家間の対立・差別を学ぶ前に、他の国に関する良い面や異なる興味深い文化に触れておくことで、悪いイメージを引き起こす前知識を持たずに馴染んでいけるだろう。まずは他の国に興味をもってもらい、日本も他の国も、文化は違えど本質は同じであることを早い段階で知っておくことで、「対等な立場」で社会を築くことへの近道となる。
- ・ゲームに勝つための作戦会議を開いてお互いの意見を伝え合い、自分とは異なった考え方をする人の意見を聞くことで、最初は考え方の違いで対立してしまうかもしれないが、何回か話し合いを繰り返していくうちにお互いの考え方が分かるようになり、他国の考え方を理解できるようになり、誰とでも分かり合えるようになるのではないかと考えた。
- ・国際的な交流をするには、相手の国のことを知るの大前提の話なのだが、自分の国を知らずして相手の国のことだけ知っていても国際「交流」にはならない。「交流」とは、自分の国の長所・短所・特徴的なことなどを知った上で相手国のことを知ろうとする、ということを目指していると思う。そういった交流するにはいろいろとバランスが大切なのだ。そのバランスをとるために、未来の国際交流の懸け橋となるはずの「子どもたち」に教師はいろいろ教える必要がある。
- ・遊びを体験するだけで終わっては何か足りないのではないかと考えた。遊びの歴史など、もっと詳しいことを知ることも必要だと思う。知ることによって、ブラジルの文化や考え方や新たな面が見えてくるのではないかと考えた。
- ・多文化共生とは、外国人が移住した国のことばかりを知るのではなく、その移住した国の人たちもその外国人の母国について知ることが大切なのではないか。お互いの国の文化を知ることによって、より打ち解けることができると思う。外国人児童のいる学校は、その外国人児童の母国の文化を学ぶという授業を取り入れるのもいいのではないだろうか。

# 一身田小学校 世界を結ぼうクラブ

支援参加学生：

第1回～3回 日本語教育コース3年3名

第4回～7回 日本語教育コース1年10名、4年（天師大DD学生）1名

指導教員：服部明子・牟羅・林朝子

外国につながる子どもたちが多く在籍する一身田小学校において、平成20年4月からスタートした4年生以上が対象のクラブ活動。担当は秋澤シルビア先生と村田真理先生。

クラブの目的：

- ①世界には様々な国や文化があることを知ること
- ②母国の文化や習慣を知り、アイデンティティの確立の一助となること
- ③わかったことや知ったことを皆に発信すること

学生の参加目的は、学校現場における多文化共生について考えるきっかけとすることです。多文化が進む日本において、学校現場にも日本語や日本文化に戸惑う外国につながる子どもたちが多く在籍しています。「多文化」を意識せずに全ての子どもたちが共に学び合える学校空間を築く礎になる活動として、日本語教育コースでは位置付けています。

## 第1～2回： 日本紹介カレンダー作成！

ブラジルの日本人学校「めぐみ学園」に送るカレンダーを作成。日本とブラジルの文化を比べて、ブラジルの友だちが驚くような日本の文化を紹介する楽しいカレンダーです。

【第1回（6月18日）】

- ・クラブの予定
- ・ポルトガル語で挨拶

Meu nome e ~皆元よく自己紹介できるようになりました

- ・ブラジルと日本の学校について
- ・カレンダー作成のための話し合い（グループメンバー、グループ名、取り上げるテーマ）

【第2回（7月9日）】

- ・カレンダー作成

グループで絵の下描きをして、色を塗りました。ブラジルのお友達楽しんでくれるかなあ。



## 第3回（9月24日）： ブラジルの音楽！

学生は不参加でしたが、ゲストの方にブラジルの楽器を演奏していただき、子どもたちはとても楽しい時間を過ごせたようです。

## 第4回（10月14日）： ブラジルの遊び体験！

Rouba Bandeira（ホウバ・バンデイラ/旗取り）という遊びを皆で運動場に行きました。日本の「氷鬼」などと共通する部分もあり、遊びは世界共通なのかなと思いました。

## 第5回（11月19日）：ブラジルのお菓子「ケイジャジーニャ」を作る！

ココナッツ味のお菓子を作り、皆で食べました。食材や味を通して、異文化体験ができました。



今後は、中国人留学生による中国文化紹介、日本人学生による世界の文化紹介などを行う予定です!!

三重大学教育学部社会科教育講座では、三重大学教育学部と一身田・橋北地区連携の一環として、平成25年度から4年次後期に導入の予定である教職実践演習を見据えて、西が丘小学校の先生方と協力して授業実践を行った。この授業実践の連携は平成22年度から継続している。

本年度は、西が丘小学校から、6年社会科の幕末以降の授業を行ってほしいという依頼を受け、黒船来航（1時間）について、教員の指導の下、3年次9月と4年次6月に教育実習を経験している4年生が指導案作成し、授業実践に望んだ。3年次の教育実習で社会科教育講座の学生が開発した黒船来航の授業をベースに、基本の流れ（授業過程や主要教材）は変えないで指導案を改善した。4クラス分の指導案を各クラス担当の4年生がそれぞれ作成し、授業を実践した。

### 《西が丘小学校と三重大学教育学部社会科教育講座との連携》

#### 【授業実践の概要】

- 西が丘小学校 6年1組 担任 村田 智 先生 , 6年2組 担任 上村 瞳 先生  
6年3組 担任 田中 博子先生(連携担当), 6年4組 担任 奥川 大輔先生  
三重大学 教員 永田 成文(授業実践指導・連携担当)  
4年：宇田陽浩(2組担当) 4年：諸岡知徳(1組担当) 4年：服部文哉(4組担当)  
4年：海田恵佑(3組担当) 4年：碓真名都(1～4組サポート) 4年：圓山佳苗(教材提供)
- 授業依頼テーマ：幕末・明治維新から世界の中の日本へ  
○授業実践趣旨：授業実践力をさらにみがく(学生), 教材研究を再考する(教員)  
○授業実践日時：10月1日(月) 1限：8:45-9:25, 2限：9:30-10:10, 3限：10:20-11:00  
4限：11:05-11:45 ※短縮授業(移動)事後反省会 12:00-13:00  
○授業実践場所：西が丘小学校第6学年教室 1限：2組, 2限：1組, 3限：4組, 4限：3組  
○授業実践内容：小単元「開国と幕府政治の終わり」3時間 本時(2/3)：開国した理由について話し合う  
○授業実践形式：基本となる発問と教材を決め、それぞれの授業実践を考える＝4通りの指導案

#### 【事前連携・事前指導】

- 授業実践打ち合わせ：8月1日(水)13:30-14:30 西が丘小学校第6学年担任と三重大永田本時授業「開国」と授業日時と授業形態(4人×各クラス1時間)の決定  
○授業実践再考9月：第1回 教育実習の指導案の説明・改善(90分)課題：新指導案の提案(5人)  
：第2回 改善指導案の説明・共通部分の確認(90分)課題：指導案再改善(5人)  
：第3回 共通教材の確認・簡略模擬授業(90分)

#### 【連携授業検討】

[連携校の先生方から：よかった点と今後に向けたアドバイス]

- 指導案の計画通り進めることができ、児童の視線も黒板に集まっており、興味が持続できていた。  
○楽しい授業にしようとしていただいたことは、児童の心にとってもよく響きました。  
○教科書の挿絵を拡大した掲示物や、黒船と日本の船の大きさの比較は子ども達の関心を高めていた。  
○黒船と日本船の大きさの違いを挿絵で示し、アメリカの船が来たことの驚異をイメージすることができた。  
△発言者と教師だけのやりとりだけで進んで行かないように注意すると、たくさんの児童が理解できる。  
△机間巡視をした時に、発表させたい意見があったとしたら、挙手していなくても指名することもあります。  
△浦賀が江戸に近いこと、出島と浦賀は遠いことを日本地図の位置確認から気づかせることができる。  
△主発問の「大砲を撃とうと考えていたか」が、「撃とうとしていたか、していないか」と変わってしまった。

[学生の反省から：さらに身に付けたい実践力]

- 授業の中で子ども達とのやりとりを楽しめる力や、子どもの発言に対し、もっと対応できる力が必要である。  
○一つの資料をどう使うか、どこまで読み込むかで児童の対応が代わるので、教材研究を深くする必要がある。  
○資料の提示の仕方、授業内での児童に対する発問、声掛けの仕方はもっと力を身につける必要がある。  
○主発問に持っていくために押さえるポイントに気をつけ、授業を一つの流れにする力が必要である。  
○児童に資料の読み取りを促す力、予想外の児童の意見に対応する力、コミュニケーション力が必要である。

#### 【授業実践の取り組み】※1. 目標と準備物は共通, 3. 学習過程は主な学習の流れが共通

1. 目標 黒船来航が日本の開国につながる大きな出来事であったことを絵から読み取り、当時の人々の立場に立って黒船来航への対応について考えることで、開国へと結び付いたことを理解する。
2. 準備物 日本地図(資料1) 黒船来航の絵(資料2) ペリーの写真(資料3)  
日本船(千石船)と黒船(サスケハナ船)(資料4) 大砲の写真(資料5)
3. 学習過程(40分) 4組の事例

学 習 活 動	指 導 者 の 主 な 働 き か け と 予 想 さ れ る 子 ど も の 反 応 等
<p>1. 開国の絵について話し合う。</p> <p>2. 開国の絵から当時の人の立場に立って黒船来航について話し合う。</p>	<p>○「鎖国ってなんですか？」</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・外国と貿易をしない ・外国と仲良くしない</li> <li>・幕府が貿易を独占する政策 ・キリスト教を追い払う</li> </ul> <p>●日本地図を提示し、地図から江戸時代の外交政策の様子と貿易場所、国を確認する。 (資料1)</p> <p>幕府の管理下においてオランダと中国の2カ国のみ貿易していたことや貿易場所は定められており長崎の出島のみ貿易であったことを確認していく。本時では江戸時代後半の日本と外国について学習することを伝える。(5分)</p> <p>○黒船来航の絵(資料2)を黒板に掲示し、「この絵を見て気づいたことをノートに書こう。」と問い、5分間時間を取る。(15分)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・子どもたちは次のようなことを言うだろう。</li> </ul> <p><u>「黒い船(軍艦)が三隻ある。」(四隻) 「小さい船(見回り船)がある。」</u>  <u>「黒い船がこっちに向かっている。」 「日本の船が黒い船に向かっている。」</u>  <u>「黒船来航。」「米俵を運んでいる人がいる。」「大砲が海に向けられている。」</u>  <u>「戦をする格好をしている人がいる。」「全体的に人々はあわてている。」</u></p> <p>大きい船はアメリカの船(軍艦)、小さい船は日本船であることは押さえる。</p> <p>○ペリーの写真(資料3)を黒板に掲示し、「どんな人でしょう？」と問う。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・子どもたちは「ペリー」「軍人」「司令官」と言うだろう。</li> </ul> <p>●黒船ペリーが1853年日本に来航した絵であることを伝える。また、アメリカは捕鯨の食料と燃料の補給基地となるよう開国を迫ってきたことを伝える。</p> <p>●ペリーが来航した場所も地図で押さえる。出島ではなく、幕府に近いところ(浦賀)に挑発的に来た。</p> <p>○日本の船の大きさと黒船の大きさ(資料4)を黒板に掲示し、 「ある日このような大きな船が幕府近くに現れたら幕府の人たちはどう思っただろう？」と問う。(児童の意見から船に着目させる)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・「慌てる。」・「びっくりする。」「驚く。」・「戦う」「ペリーの要求を受け入れる」</li> </ul> <p>●当時の人達も驚き、大騒ぎしたことを伝え、資料2の人々の様子を見て人々があわただしく動いていることを確認する。</p> <p>○絵の中の黒船に着目させ、「何のために準備されているのだろう。」と問う。資料5を提示。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・「攻撃されないため。」「追い払うため。」「威嚇。」「戦うための準備。」</li> </ul> <p>◎「このような大きな船が来たとき、幕府は大砲を撃とうと考えたでしょうか？」と問う。(10分)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>●子どもたちは「撃とうとした。」「撃とうとしてない。」の二つの意見を言うだろう。どうしてそう思うのか理由も考える。</li> </ul> <p>「撃とうとしてない」：「大砲を撃ったとしても勝てなさそう。」・「船の大きさからアメリカの方が強い。」・「慌てているから無理。」・「食料くらいあげてもいいから。」</p> <p>「撃とうとした。」：「撃たないと侵略されてしまうから打った。」・「日本を守るため。」・「食料や燃料供給だけでなく、侵略されてしまうかもしれない。」・「撃たずに何もしないより打った方が良い」</p> <p>●幕府は、ペリーの開国要求の国書を受け取り一年後に返事をする約束し、一度帰ってもらった。</p> <p>○日本(幕府)はこのあとどのような対応を取っていったらどう？</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・「アメリカと仲良くする。」「言うこと聞く。」「貿易をする。」</li> <li>・「要求を断り、戦う。」「今まで通り、長崎だけの貿易をする。」</li> </ul> <p>●いろいろな意見はあったが当時の幕府も開国しようと考え、1854年にアメリカと日米和親条約を結び、要求を受け入れ、また下田と函館の港を開き、貿易を始めたことにより鎖国が終わったことを伝える。(下田と函館は地図で場所を確認)</p>

## 津市立西が丘小学校との連携

### 開国と幕府政治の終わり：開国した理由を話し合う

教育学部社会科教育講座 教員 永田 成文

4年 宇田陽浩, 諸岡知徳, 服部文哉, 海田恵佑, 碓真名都, 圓山佳苗

○授業で使用した資料 [共通]



① 黒船来航の絵

日本文教出版『小学社会6年下』pp.86-87

② ペリーの写真



③ 黒船と日本船



④ 大砲の写真



授業風景

みんなとてもよくなったよ!

《授業実践(2012.10.1)の内容》

1. 開国の絵について話し合う  
導入発問: 黒船来航の絵を見て気づいたことを発表しましょう。  
・船に関する発言 ・人に関する発言  
・ものに関する発言など
2. 開国の絵から同時の人々の立場に立って黒船の来航について話し合う  
主発問: 黒船に向かって大砲を撃つか撃たないか ※各授業で立場が異なる  
A: あなたは将軍として大砲を撃ちますか。撃ちませんか。  
B: ペリーの乗っている船に大砲を撃つべきだろうか。  
C: 大きな船が来た時幕府は大砲を撃とうと考えたでしょうか。  
D: 大きな船が来た時大砲を撃つことができるだろうか。  
※黒船来航が開国に繋がることの確認

○授業で工夫した点

- ・完成した指導案を軸にアレンジを加え、主発問までの学習展開を考えた。
- ・資料と向き合い読み取らせることで、子ども達の思考を働かせようとした。
- ・元指導案の反省等を活かし、資料に対する事実確認を行った。
- ・授業のポイントで子どもとコミュニケーションを取りながら確認した。
- ・発表しやすい発問を中心に授業を展開していき、どんどん発表させた。

《西が丘小学校との連携を終えて-必要な力》

- |                   |                |
|-------------------|----------------|
| ◎ 子どもの発言に対し対応できる力 | ◎ 資料の教材研究を深める力 |
| ◎ 教材提示を効果的に行う力    | ◎ 授業に流れをつくる力   |
| ○ 児童とのコミュニケーション力  | (◎授業者, ○サポート)  |

## 数学教育コースと小学校との地域連携

### —「教育実地研究基礎」を通して—

数学教育コース 64期 14名  
指導教員 田中 伸明

数学教育コースでは、一身田・橋北校区にある5つの小学校（一身田小、白塚小、栗真小、北立誠小、南立誠小）にお願いをし、「教育実地研究基礎」を実施しています。「教育実地研究基礎」は、週1回、私たち学生が、それぞれの担当する小学校に行き、児童の学習支援や先生のアシスタントをさせていただき取り組みです。この「教育実地研究基礎」によって、私たちは、戸惑いながらも児童や先生方に触れ合う中で、数多くの素晴らしい経験を積ませていただきました。

以下、それぞれの小学校のグループごとに、取り組みをレポートいたします。

#### ➤ 一身田小学校にて

私たち4人は、一身田小学校に行かせていただいています。担当するクラスや教科は違いますが、それぞれの場所で子どもたちと接し、授業に参加することで多くのことを学びました。

教える側として初めて授業に参加して、子供たちとどう接してよいか分からなかったり、子供たちに注意した時に聞いてくれなかったりなど、戸惑う部分もたくさんありました。しかし、先生方の助けもあり、子供たちとの触れあい方や、子供たちの指導の仕方などを、少しずつ学ぶことが出来ました。

算数だけでなく、他の教科の授業や、丸つけ、運動会の練習など、授業以外のことにも参加させてもらって、指導の仕方や、教えることの難しさ、教師の大変さを感じました。しかし、子供たちと触れあっている時間はとても充実していて、子供たちと接することの魅力を感じました。

教育実地研究基礎で子供たち、先生方から多くのことを学びました。これから学んだことを活かしていきたいと思います。

(井上・鈴木・日置・松本)

#### ➤ 白塚小学校にて

私たちにとって、この「教育実地研究基礎」は、「教師」という職業に、教える側として接する初めての体験でした。

最初は、緊張して子供たちに接するのまごころなく、授業中に質問をされても、戸惑い、うまく説明できませんでした。また、特別支援学級などでは、子供たちの集中力が途切れてしまったり、内容が分からなくて、勉強から意識をはずしてしまった時など、うまく勉強に気持ちを誘導したり、気持ちの切り替えなどもできなかつたりしました。さらに、昼休み明けの授業などで、昼休みの遊びの空気から勉強への切り替えをさせなければなりません。注意すべきところでも強く注意できずに、なかなか切り替えさせることができず、先生の力をお借りする場面などもありました。このように、最初は、失敗の連続でした。

しかし何回も参加するうちに子供たちの意識の切り替えや、各々の個性なども把握していき、最初に比べたら、徐々に先にあげた問題も対処できるようになっていきました。

この「実地研究基礎」では、子供たちには様々な個性があり、その個性を理解してうまく授業へ

と誘導してあげることの大切さが、改めてわかりました。

実際に教える側の立場から子供たちに接することで、教師としての現場の視点を知ることができました。この経験を自分たちの未来へと活かしていきたいと思います。

(岡村・増田・松井)

### ➤ 栗真小学校にて

私たちは栗真小学校に行き、大学の授業では体験することのできない現場での教育というものに触れることができました。

算数の授業の中で、丸付けをさせてもらったりする時や、分からない子に教えてあげたりする時、どのように教えれば子どもたちにとって分かりやすいのか悩むこともありました。そのようなとき、子どもたちがその問題に対してどのように考え、どこで間違えるのか見きわめることが必要であると教わり、「教える」ということがとても難しいことだと実感できました。また上手く教えられてわかってもらえたときには、教師としてのやりがいを感じられると思えました。

私たちは、授業や休み時間だけでなく、「くりまっこタイム」での、絵本の読み聞かせもさせていただきました。子どもたちが興味を持てる本を選び、興味をひきつけられるような読み方をしなければならぬことが、とても難しく思いました。

栗真小学校にて得られたこれらの貴重な経験を、将来活かせるようこれからも日々努力を続けたいと思います。

(家城・市川・廣田・三橋)

### ➤ 北立誠小学校にて

私は、北立誠小学校に毎週1限の教育実地研究基礎にお伺いしています。北立誠小学校の6年生の算数の授業を、毎週見学させていただき、数学の教員を目指す私にとって、毎回とても参考にさせて頂いています。

最初は、アシスタントと言えど、教える側に初めて立った私には、分からないことも多く、戸惑

っていましたが、最近では、先生の授業を参考にし、子どもたちにどのように教えれば理解しやすく説明できるかなどを考え、質問をしてこなくても問題がわからない児童をこちらから見つけ積極的に教えるにいきえるようになってきました。

また、計算ドリルなども問題の丸付けなどもさせてもらい、そこで子供たちがどのように考え、どこで間違えるのかを見極め、そしてどのように教えるかと、たくさんのことを考えなければならず、教えることがとても難しい事であるとわかりました。しかし、教えることの難しさの一端に触れて、児童が理解してくれたときの喜びも感じることができ、将来役に立つ経験をつまらせてもらっています。

これから先、自分が教壇に立つとき、この経験をうまく活かしたいと思います。

(黒野)

### ➤ 南立誠小学校にて

私はこの「教育実地研究基礎」において、南立誠小学校に行き、講義のような授業ではなく、実際の現場の体験をすることができました。

現場に立って実際に教えるのは初めて経験で、一回目の時は何をしようかかわからず、カタまってしまっていました。

しかし、授業が終わった瞬間に何人もの生徒が回りに来て、積極的にコミュニケーションを取りに来てくれたおかげで、次の回から緊張せずにはいれました。話していくうちにその子達の個性がかなりわかるようになってきて、積極的にコミュニケーションをとってくる子や、そういうのがあまり得意でない子など様々です。そのような個性がとても強い中で、学級を統率していくことの難しさを感じました。

これから先、自分が教師の立場になった時には今回感じたことをいかしていきたいと思いました。

最後になりましたが、「教育実地研究基礎」で、授業に参加させていただいた先生方、本当にありがとうございました。

(松田・山田)

# 教育実地研究基礎

## 一身田小学校において

指導教員 田中伸明

井上実咲・鈴木利香・日置仁美・松本栄珠(数学教育コース 64期)



実際に教育の現場に行き、子ども達と触れ合ったり、現職の先生の話  
聞いたり、普段経験できないことを経験して多くのことを学びました。

これから、その学んだことを活かしていきたいです。



# 教育実地研究基礎



栗真小学校にて

指導教員：田中 伸明

(数学教育 64期) 家城星矢 市川和佑 廣田聖人 三橋史敬



授業などでは体験できない“現場での教育”というものを体験させてもらいました。読み聞かせなどの普段ではできないこともさせていただき、教育の楽しさ、むずかしさを知ることができました。

# 教育実地研究基礎

白塚小学校にて

指導職員：田中伸明

岡村英利奈 増田高也 松井洋樹（数学教育コース 64 期）

あっているかな...?



こうやって解くんだよ



実地研究基礎で初めて児童とふれあい、教師という仕事や、児童との関わり方の難しさ・やりがいなど、この1年で多くの事を学ぶことが出来ました。また、“教師”を目指す私たちにとって、とても貴重な経験となりました。この経験を今後にも生かしていきたいです。

# 教育実地研究基礎

南立誠・北立誠小学校において

指導教員：田中 伸明

松田章吾 山田恵理 黒野聖矢（数学教育コース 64 期）



足し算はこういうふう  
に考えるんだよ！

南立誠小学校での実地研究を通して子どもと接し、先生方が授業を行う様子を間近で見ることで、教師という仕事の大変さ、責任、やりがいなどいろんなことを学びました。この経験で得たことを生かして教師を目指していきたいと思います。



北立誠小学校での実地研究基礎で、こどもたちとふれあいながら、一緒に勉強し、勉強を教えるとともに教師としての大変さなども身をもって実感させられ、責任感を感じることができたので、今後この経験をいかしていきたいです！

## 小学生の身体活動量と健康関連体力の関係について

61期 209519 横田 幸大  
指導教員 富樫 健二

### 1. 緒言

近年、児童を取り巻く環境に様々な変化が生じ、体力低下、肥満・痩身傾向児の増加、外傷(特に骨折)頻度や疾病罹患の増加などの健康問題が顕在化しつつある。これらの背景の一つに、テレビゲームを中心とした外遊びの減少による身体活動量の低下が挙げられる。竹中は、子ども時代の身体活動量が大人になってからの身体活動量に持ち越されるとし、行動の持ち越し効果をねらった習慣づくりの必要性を訴えている。一方、骨粗鬆症とも関わる骨密度は発育期に急速に高まるため、その時期に十分に骨量を増加させ、最大骨量を高めることで将来の骨粗鬆症予防に有効であることが分かっている。つまり身体活動量だけでなく、子ども時代の健康状態も大人になってからの健康状態に持ち越されると考えられる。これらのことから子どもの成長期に関わる学校や教員の役割や責任は非常に大きい。

そこで本研究では小学校教員になるものとして、小学生児童の健康づくりを進める上で必要な情報を得るために、生活習慣記録機(スズケン社製, LifecorderEX4 秒版: 以下 LC)を用いて身体活動量を評価し、小学生における健康関連体力(身体組成、骨密度、体力値)との関係を明らかにすることを目的とした。

### 2. 方法

対象は隣接学園としての連携校であるM県K小学校学校全校児童 342名(男子: 180名、女子: 162名)とし、2012年10月から11月にかけて行った。身体活動量は生活習慣記録機 LCを用いては平日3日間(火曜日~木曜日)の3日間の平均歩数、強度・活動時間から運動量(kcal)を測定した。身体組成、骨密度測定については、クラス担任の協力を得て授業1コマ分の時間を頂き測定を実施した。身体組成はマルチ周波数体組成計(TANITA社製 MC-190EM)を用いて体重、体脂肪率、除脂肪量を、骨密度は超音波踵骨骨密度測定装置(GE Healthcare社製 A-1000 E-102)を用いて右足踵骨の骨密度(スティフネス値)を測定した。また自記式質問紙を用いて食習慣、からだ(初潮の有無、骨折経験、体型認識など)やこころ(健康感、疲労感)、生活習慣、運動習慣について全24項目の回答を得た。体力値は、今年度行われた新体力テストの結果を用いた。統計処理はSPSS社製 PASWStatistics20を使用した。

### 3. 結果及び考察

対象児の性別・学年別の形態、骨密度、身体活動量の平均値±標準偏差は下記の通りである。

	身長 (cm)	体重 (kg)	体脂肪率 (%)	除脂肪量 (kg)	骨密度	歩数 (歩)	運動量 (kcal)
男子 1年(n=39)	119.6±5.0	22.2±3.0	11.5±4.3	19.6±2.0	71.2±14.3	18495.3±3549.8	227.7±61.3
2年(n=36)	125.9±5.8	25.0±3.6	12.4±6.2	21.7±2.2	76.4±1.2	18175.2±4454.3	257.4±80.8
3年(n=18)	133.1±4.7	30.8±6.3	17.2±9.0	25.4±2.9	84.1±6.9	17540.8±4534.3	295.1±110.4
4年(n=38)	135.8±5.4	31.2±5.2	14.7±7.0	26.3±2.6	82.5±9.9	20190.6±5503.4	362.9±121.4
5年(n=25)	142.2±8.6	35.8±6.9	15.0±6.3	30.1±4.2	88.0±7.5	18086.0±6479.6	345.7±122.3
6年(n=19)	146.7±5.8	38.2±8.4	14.3±9.3	32.0±3.9	90.0±15.7	16850.3±3693.1	356.2±137.3
女子 1年(n=41)	120.3±5.9	22.4±3.4	13.5±4.2	19.3±2.3	73.2±6.4	14604.7±2592.4	173.8±47.5
2年(n=33)	123.6±4.7	24.0±3.0	14.3±4.1	20.4±2.0	73.2±8.1	14169.1±2404.6	177.1±37.3
3年(n=25)	131.6±6.0	28.4±4.2	17.3±5.4	23.4±2.7	82.0±11.7	13753.2±3632.2	198.4±68.3
4年(n=20)	135.5±6.9	32.2±6.4	18.7±6.8	25.8±3.5	80.8±9.9	15576.5±2962.0	262.1±69.4
5年(n=26)	144.8±4.8	37.0±5.2	19.1±5.1	29.7±3.0	93.7±12.4	13256.0±3495.6	245.8±83.6
6年(n=12)	151.6±3.1	43.2±7.5	22.3±8.1	33.0±2.5	93.8±9.2	12643.9±3474.2	271.3±80.4

(1) 栄養面と骨密度の関係

骨には牛乳がいいと言われているが、男女ともに質問紙において牛乳を1日0~1杯飲む人と1杯以上飲む人とは、スティフネス値に有意な差は見られなかった。また、乳製品(チーズやヨーグルトなど)や魚など、ビタミンDやカルシウムを多く含む食品についても有意な差は見られなかった。これは今回の質問紙では1日の摂取量の多寡しか聞いていないことや給食等で栄養バランスの良い食事を摂っていることによると思われる。

(2) 生活習慣・運動習慣と骨密度の関係

体力や運動能力についての自信の有無と骨密度では女子で、「自信がある」「少し自信がある」と回答した児童は、「あまり自信がない」「自信がない」と回答した児童と比べて有意に高かった(77.7→82.7 p<0.05)。また平日のテレビ・ビデオ・ゲーム時間と骨密度では、女子でそれらを2時間より多く見たり、したりする児童は、2時間より少ない児童と比べて有意に低かった(84.6→79.5 p<0.05)。これは、先行研究においてもTV+ゲーム時間の長い人ほど有意に運動時間が短いという報告(竹ノ子,2012)があるように、運動時間が短いためではないかと推察される。

(3) からだやことと骨密度の関係

骨折経験の有無とスティフネス値との関係について、男女ともに骨折を経験したことのある児童の方がいない児童よりも有意にスティフネス値が高かった(80.0→84.7,80.4→89.0 p<0.05)。また、女子においてのみ初潮の有無とスティフネス値の関係性を見たところ、初潮を迎えた児童ほど骨密度は高かった(80.1→96.7 p<0.01)。これは、初潮を迎えた女子は骨をつくり、骨からカルシウムが溶けだすのを抑える働きをする女性ホルモン(以下、エストロゲン)の影響を強く受けるためであると推察される。一方、体型と骨密度では、女子で「やせている」「少しやせている」と回答していた児童は「ふつう」と回答していた児童よりもスティフネス値が有意に低かった(83.2→76.3 p<0.01)。また、体型認識と骨密度では、女子で「少し太りたい」「かなり太りたい」と回答していた児童は「今のままだよ」と回答していた児童よりもスティフネス値が有意に低かった(81.8→73.3 p<0.05)。

(4) 身体組成、身体活動量と骨密度との関係

右に身体組成(身長、体重、体脂肪率、除脂肪量)、身体活動量(歩数、運動量)と骨密度(スティフネス値)の相関図を示した。運動量との関係についても男女ともに有意な正の相関関係が認められた(r=0.34、r=0.38 p<0.001)。また骨密度は、上述したエストロゲンの影響を強く受けるとともに、発育によって高まることも示唆された。

	年齢	身長	体重	体脂肪率	除脂肪量	スティフネス値	歩数	運動量
年齢	.840**	.697**	.150	.016*	.486**	-.026	.427**	
身長		.895**	.457**	.052**	.413**	-.155	.469**	
体重			.865**	.276**	.969**	.513**	-.042	
体脂肪率				.911**	.506**	.558**	-.142	
除脂肪量					.692**	.933**	-.099	
スティフネス値						.762**	.529**	
歩数							.403**	
運動量								

\*\* 相関係数は 1% 水準で有意 (両側)。  
\* 相関係数は 5% 水準で有意 (両側)。

4. まとめ

今回の測定から、LCを用いての実測による身体活動量の評価と健康関連体力との関係について考えを深めることができた。しかし私自身の今後の課題としては、今回得られた貴重な情報をもとにして、学校現場に出た時にどのように活かしていくかということである。保健体育に携わる者としてどのような活動(授業)を通して、からだを動かすことを厭わない子どもを育てていくかが最大の課題であり、教科教育分野とも連携・協力を図りながら、子どもの健康づくりを進めていきたいと思う。最後に、今回大変なご協力を頂いた学校の先生方、児童並びに保護者の皆様には、心から感謝の気持ちと御礼を申し上げます。

# 小学生の身体活動量と健康関連体力の関係について

スポーツ健康科学コース 61期 209519番 横田 幸大  
指導教員 富樫 健二



### 連携の目的

子ども時代の身体活動は、大人になってからの身体活動に持ち越されると共に、その時や将来の健康状態と相互作用がある。そのため子どもにおける生涯の健康を考えた時に、成長期に関わる学校や教員の役割や責任は非常に大きい。

↓

小学校教員になるものとして、子どもの健康づくりを進める上で必要な情報を得るために、小学生における身体活動量と健康関連体力(身体組成、骨密度、体力値)との関係を明らかにすることを目的とした。

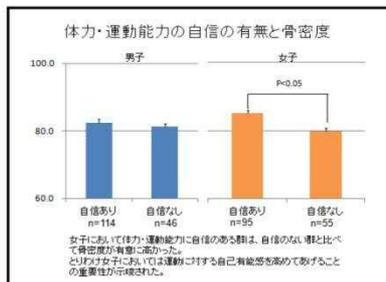
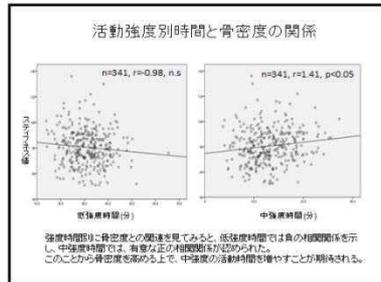
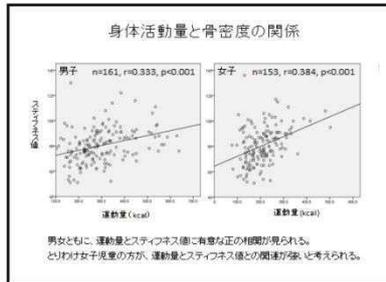
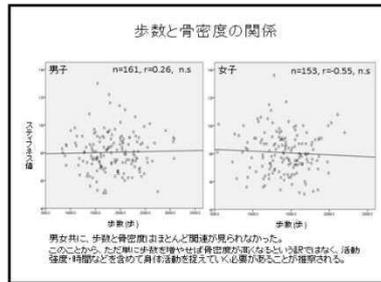
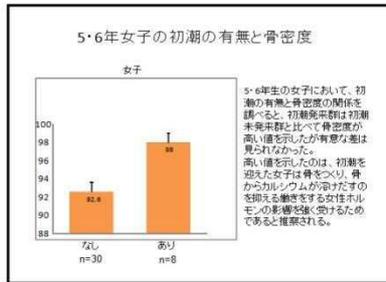


### 対象児の身体特性

年齢(才)	身長(cm)	体重(kg)	体脂肪率(%)	骨密度(g/cm <sup>2</sup> )
男子 1年生 (n=28)	124.95 ± 3.48	22.7 ± 6.3	13.5 ± 3.0	11.5 ± 1.43
2年生 (n=26)	131.75 ± 4.44	25.7 ± 8.0	13.6 ± 3.6	12.4 ± 1.2
3年生 (n=28)	137.40 ± 4.54	29.1 ± 10.4	13.1 ± 4.3	13.8 ± 1.37
4年生 (n=28)	143.90 ± 5.03	32.9 ± 12.4	13.4 ± 3.9	14.0 ± 1.61
5年生 (n=25)	150.86 ± 6.47	34.7 ± 12.3	13.0 ± 4.9	15.0 ± 1.63
6年生 (n=28)	158.59 ± 6.93	34.2 ± 13.3	12.9 ± 5.4	16.2 ± 1.39
女子 1年生 (n=41)	120.3 ± 3.4	22.4 ± 3.4	13.5 ± 4.2	10.3 ± 1.23
2年生 (n=33)	123.6 ± 4.7	24.0 ± 3.0	14.3 ± 4.1	10.4 ± 1.23
3年生 (n=23)	128.4 ± 4.2	27.3 ± 6.4	13.4 ± 3.2	11.7 ± 1.17
4年生 (n=20)	132.1 ± 6.4	28.7 ± 6.8	13.5 ± 3.5	12.8 ± 1.24
5年生 (n=26)	144.8 ± 4.8	37.0 ± 5.2	13.1 ± 5.1	13.7 ± 1.24
6年生 (n=12)	151.6 ± 3.1	43.2 ± 7.5	12.3 ± 8.1	13.0 ± 2.5

### 対象児の身体活動量

学年(才)	運動量(kcal)	低強度活動時間(分)	中強度活動時間(分)	高強度活動時間(分)	活動時間(分)
男子 1年生 (n=28)	18495.3 ± 3548.8	227.7 ± 62.3	35.6 ± 7.0	13.1 ± 3.2	11.4 ± 3.8
2年生 (n=26)	18175.2 ± 4454.3	257.4 ± 80.8	33.6 ± 7.6	14.1 ± 4.3	10.8 ± 4.5
3年生 (n=28)	17540.8 ± 4534.9	295.1 ± 110.4	31.6 ± 6.9	14.8 ± 4.1	9.6 ± 5.1
4年生 (n=28)	20190.8 ± 5503.4	362.9 ± 121.4	34.1 ± 9.9	17.4 ± 4.0	12.0 ± 6.1
5年生 (n=25)	18086.0 ± 6479.6	345.7 ± 122.3	30.7 ± 9.9	15.9 ± 6.0	10.0 ± 6.8
6年生 (n=28)	18559.3 ± 3638.1	345.2 ± 137.3	29.0 ± 5.4	16.2 ± 3.9	8.4 ± 3.6
女子 1年生 (n=41)	14604.7 ± 2582.4	173.8 ± 47.5	29.9 ± 6.0	10.4 ± 2.4	7.3 ± 2.0
2年生 (n=33)	14169.1 ± 2404.6	177.1 ± 37.3	29.6 ± 5.6	10.0 ± 2.1	7.1 ± 2.5
3年生 (n=25)	13753.2 ± 3632.2	198.4 ± 68.3	28.3 ± 6.7	11.0 ± 2.1	6.2 ± 3.5
4年生 (n=20)	15576.5 ± 2962.0	262.1 ± 69.4	31.5 ± 6.5	11.9 ± 3.0	7.1 ± 3.9
5年生 (n=26)	13256.0 ± 3485.6	245.8 ± 83.6	26.8 ± 6.3	11.9 ± 4.9	5.1 ± 4.1
6年生 (n=12)	12643.9 ± 3474.2	271.3 ± 88.4	25.2 ± 7.8	11.5 ± 2.6	4.8 ± 2.0



### まとめ

今回の測定から、生活習慣記録機を用いたの実測による身体活動量の評価と健康関連体力との関係について考えを深めることができた。

今後の課題としては、今回得られた貴重な情報をもとにして、学校現場に出た時どのような生活かをしていくかということである。保健体育に携わる者としてどのような活動(授業)を通して、「からだを動かすことを厭わない子ども」を育てていくかが最大の課題であり、教科教育分野とも連携・協力を図りながら、子どもの健康づくりを進めていきたい。

## 北立誠幼稚園出前授業『くぎ打ちとんとん』

教育学部 技術科教育研究室

## 1. はじめに

現在、遊びの中で「木材を使う」、「くぎ打ちをする」という経験がある園児は少ない。幼児の段階で様々な材料・道具に触れ、遊びの中で豊かな体験をすることは重要である。本研究室では、コースの専門性を活かし、木材を用いたものづくりの出前授業を行った。

本報告では、園児の「気づき」に着目し、出前授業での成果と課題を検討する。

## 2. 取組の概要

- ①実施日：平成24年6月22日・7月11日
- ②実施場所：北立誠幼稚園
- ③参加者：年少児（11名）年長児（17名）
- ④指導者：【年少児】三重大学学生（11名）  
【年長児】三重大学学生（8名）

年長児は6月22日と7月11日の2回にわたりくぎ打ち体験の授業、年少児は7月11日に木材を用いた見立て遊びの授業を行った。

## 3. 活動内容

【年長児】 第1時（6月22日）

過程	園児の活動
導入（15分）	玄能とくぎの説明を聞く。 くぎ打ちの演示を見る。
展開（40分）	自由にくぎ打ち遊びをする。
まとめ（15分）	前に出て作品について発表する。

第1時では、何かを作るためにくぎ打ちをするのではなく、思いつくままにくぎ打ちを楽しむ時間とした。くぎ打ちに興味・関心をもち、くぎ打ちに慣れることをねらいとして取り組んだ。

くぎ打ちを練習する木材としてバルサ材や、くぎ打ちが比較的容易な桐材、木目がはっきりしているパイン材の3種類を用意した。様々な大きさや形の木材を用意し、それらの木材に自由にくぎ打ちをした。くぎについても園児の表現の幅が広がるように、長さや色を複数用意した。玄能については重さの違うものを用意し、個々の力の差に

対応できるように配慮した。

くぎ打ちをする際の注意点については、園児が分かりやすいように絵を用いながら説明し、確実に伝えるようにした。



図1 くぎ打ちをする際の注意点についての説明をしている様子

【年長児】 第2時（7月11日）

過程	園児の活動
導入（15分）	くぎ打ちの仕方の説明を聞く。 玄能の平面と木殺し面について知る。
展開（40分）	壁掛け作りをする。
まとめ（15分）	前に出て作品について発表する。

第2時では、第1時の発展的な活動としてまず桐材に絵をかき、次にその線をなぞるようにしてくぎ打ちを行った。第1時とは異なり、木材にくぎを完全に打ち込むことが必要となるため、玄能の平面と木殺し面や、くぎ打ちのポイントについても説明した。前回から発展した授業を行った。



図2 園児がくぎを打っている様子（左）と園児の作品（右）

【年少児】 7月 11日

過程	園児の活動
導入 (15分)	木材と出会う。 ボンドでの接着方法を知る。
展開 (40分)	木材の組み合わせを楽しむ。 見立て遊びをする。
まとめ(15分)	作品をお互いに見せ合う。

年少児は木材を用いた見立て遊びを行った。具体的には様々な形の軽くて小さな木片と速乾性ボンドを用意することで、園児でも比較的簡単に接着することができ、自由に見立て遊びを楽しめるようにした。



図3 園児と一緒に作品の鑑賞をしている様子

#### 4. 成果

出前授業の前に、指導にあたる学生は何度も幼稚園に足を運び、園児と遊びの中で個々の園児について理解するように努めることから始めた。そのお陰で授業を行う際には、園児たちは安心して活動に取り組むことができたようで、初めて扱う木材やくぎ、玄能などの関わりに集中することができていた。改めて安心して遊ぶことができる場が必要だということが分かった。

年長児におけるくぎ打ちの仕方については、第1時で正しい方法を教え込むのではなく、演示を見せるだけに留めた。その理由として、まずやってみることで、「なぜくぎが曲がってしまうのか」や「どうしたら上手くくぎ打ちができるのか」などの体験的な気づきをしてほしいと考えたからである。木材についても複数用意することで、材質の違いを実感をもって気付く園児も多かった。

くぎ打ちの楽しみ方も様々で、1番柔らかい木材を使い、たくさんのかぎを打ち込むことを楽し

んでいる園児や、くぎの長さを表現に取り入れている園児など一人ひとりの個性を感じることができた。

第2時では平面と木殺し面を上手く使いながら、くぎ打ちをしている園児が多かった。慣れてくると、手首を上手に使いながらくぎ打ちをする園児の姿も見られ、遊びにとどまらず、くぎ打ちの技能が高まったことがうかがえた。

年少児の見立て遊びでは、簡単に木材を接着できるため、一枚の板から表現が広がり、自然と見立て遊びが始まった。見立ては次から次へと変わっていき、同じものでも色々なものに見える園児の発達段階を感じることができた。速乾性のボンドと小さな木片を用いた見立て遊びは、年少児でも簡単に行え、縦にも横にも表現が広がる新たな題材として提案できると考える。



図4 園児の作品

#### 5. 今後の課題

年長児では園児2人に学生1人、年少児では1対1での指導を行ったため、園児に寄り添った支援が可能であった。しかし、個々の学生によって支援の仕方にばらつきが見られた。今後は事前学習会を開き、共通理解を深め必要だと感じた。

材料の木材については、集成材は割れてしまうことが多く、くぎ打ち遊びには適していないことが分かった。園児がより楽しく、くぎ打ちを行うことができるように、材料の見直しをしていくことや、新しく出会う木材や玄能、くぎについて、園児が自らやってみたいと思えるように導入を見直すことを今後の課題とする。

● 概要

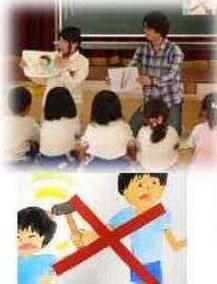
私たちの研究室では、地域連携の一環として毎年出前授業に取り組んでいる。本年度は、北立誠幼稚園で木材を用いたものづくりの出前授業を行った。年長児では『くぎ打ち遊び』、年少児では木片を自由に張り合わせる『見立て遊び』を行い、初めて扱う材料や道具と関わる中での園児の「気づき」に着目し、園児に寄り添う支援を行った。



● 年長児 『くぎ打ち遊び』

【第1時】

玄能やくぎを見せ、くぎ打ちの説明をした。くぎ打ちをする際の注意点については、確実に伝えるために絵を用いることで視覚的にもわかりやすいものとなるように工夫した。くぎ打ちの仕方については全体での説明はせず、演示を見せるのみにとどめた。このことで、園児が体験の中で自ら「気づき」、くぎ打ちに興味をもてるようにした。



色々な木があるよ



キラキラのくぎが星みたい ★

思いつくままにトントン

大きな音だな…

【第2時】

発展的な内容として壁掛けの作成をした。まず洞材に絵をかき、次にその線をなぞるようにしてくぎ打ちを行った。前回とは異なりくぎを完全に打ち込む必要があるので、玄能の平面と木殺し面やくぎ打ちのポイントについても説明した。



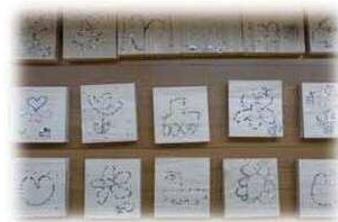
最後は丸い面でトントン!

曲がらないように、そ〜っと



もうすぐ完成!

世界に1つだけの壁掛け完成



● 年少児 『見立て遊び』

木材を用いた見立て遊びを行った。軽く小さな木片と速乾性の木工用ボンドを用いることで、比較的簡単に接着することができ、園児たちは自由に木片を組み合わせていった。一人での見立て遊びが終わると、全体で鑑賞会をし、お互いに作品を見せ合った。



おもしろい形だな♪

公園に見えてきた! 公園♪公園♪



完成!



お友達と見せ合い



● 成果と課題

【年長児 『くぎ打ち遊び』】

「なぜくぎが曲がるのかな。」という疑問をもち、それを改善するために玄能で色々な方向から打つ姿や、木材の材質の違いを実感し、好きな木材を選んでいる姿が見られた。

第1時では体験的にくぎ打ちから道具や材料の特性を感じることができ、第2時では遊びにとどまらず、技能が高まったことがうかがえた。なお、集材材はくぎ打ち遊びには適さないことが分かり、より楽しく活動が行えるような材料の見直しが今後の課題である。

【年少児 『見立て遊び』】

1枚の板から表現が広がり、自然と見立て遊びが始まった。見立ては次から次へと変わっていき、同じものでも色々なものに見える園児の発想の柔軟さを感じる事ができた。

見立て遊びを自然に行っている園児もいたが、積み上げることを楽しんでいる園児もいた。接着する前に、木材と触れる時間を十分に設定し、園児が自ら接着してみたら面白いと感じるような展開にすると、今とは違った表現が生まれるのではないかと感じた。来年度は是非実践したいと考えている。

## 家庭科における小・中学校との連携

家政教育コース4年 大竹美沙紀 加藤明日香 齋藤真奈 新名麻梨 藤澤春香  
 消費生活科学コース4年 小野晴加 加藤裕美子  
 指導教員 磯部由香 林未和子 平島円 吉本敏子

選択授業の「教育実地研究」受講生10名(4年生)は、一身田・橋北地区の小・中学校と、家庭科分野においていくつかの連携活動をおこなっている。単発の授業補助のほか、原則2名1組で担当授業を決め、授業案の提案・指導案の作成などを通して、授業実践に関わっている。その他、家政教育コース、消費生活科学コースの2,3年生も、主に授業補助を通して活動している。活動終了後には、シートに活動内容や気づきを記入し振り返りを行っている。具体的な活動は以下のとおりである。

### 1. 連携活動

- ・一身田小学校6年生  
活動内容：家族の体が喜ぶ一食分の献立作り
- ・南立誠小学校6年生  
活動内容：どのようなことに注意して、献立を考えたらいいかを考える
- ・栗真小学校6年生  
授業内容：各自でお弁当の中身を考え、お弁当を作る
- ・栗真小学校5年生  
授業内容：一人一品、卵料理の調理を行う
- ・橋北中学校2年生  
活動内容：ペクチンの抽出を通して、ジャムができる仕組みについて考える。
- ・橋北中学校3年生  
活動内容：高齢者体験を通して、高齢者の気持ちや苦勞を考える。

### 2. 授業補助

- ・南立誠小学校5年生  
活動内容：ナップサック作りの補助
- ・西が丘小学校5年生  
活動内容：ランチョンマット作りの補助
- ・一身田小学校6年生  
活動内容：エプロン作りの補助

### まとめ

教育実習を行ってから、現場での実践は期間が開いていたので、改めて児童・生徒との対応について考える機会が出来た。今回の実践で各自、様々な課題を持つことが出来た。今後の学校生活、更には教職についてからにも活かしていきたい。

# 家庭科における 小中学校との連携

家政教育コース4年 大竹美沙紀 加藤明日香 斎藤真奈  
新名麻梨 藤澤春香  
消費生活科学コース4年 小野晴加 加藤裕美子  
指導教員 磯部由香 林未和子 平島円 吉本敏子

「教育実地研究」の受講生7名は、一身田・橋北地区の小・中学校と、家庭科分野においていくつかの連携活動をおこなっている。単発の授業補助のほか、原則2名1組で担当授業を決め、授業案の提案・指導案の作成などを通して、授業実践に関わっている。具体的な活動は以下のとおりである。

## 11月までに行った授業実践



### 南立誠小学校6年生

#### 授業内容:家族がよろこぶ食事を考えよう

第1時では、家族が喜ぶ食事を考える中で、食事における栄養バランスや安全性などについて考える実践を行い、第2時では、調理実習を行う上で、調理班ごとに調理の手順を話し合う、効率よく調理を進めるため、調理計画を立てる、分量表を作成するなどの活動を行った。第3時では、第2時で作成した班ごとの調理計画表や分量表を活用し、子ども達自らの計画で実習が進められるようにサポートしていきたい。



### 橋北中学校2年生

#### 授業内容:りんごジャム作りの導入

ジャム作りの仕組みについて、実験を用いたため、視覚に訴えることが出来た。実験に対して、興味を持ち意欲的に授業に取り組む姿勢も見られた。

一方で実験の際に、溶液や方法についてしっかり説明することが出来なかったため、けじめをつけて授業をしていくことの大切さを感じた。

また班活動が上手いかず、意見が活発に飛び交わない班が見られた。班でのコミュニケーションを促すことが難しく、課題となった。



### 栗真小学校6年生

#### 授業内容:主菜の調理実習～お弁当実践～

お弁当実践に向けて、お弁当の献立を一人ずつ考え、2人1組または3人1組で調理実習をした。卵焼きやスクランブルエッグなどの卵を使った主菜と、ベーコン、ハム、ちくわなどを使った主菜を考えた。コンロを使う順番を決めたり、タイムスケジュールを立てたりしながら、限られた時間の中で手順良く調理ができるように工夫する姿が見られた。

授業の中だけで終わるのではなく、家庭でも積極的に調理をする時間が増えるような活動にしたい。



### 栗真小学校5年生

#### 授業内容:ゆでる・炒める料理の調理実習

いり卵、野菜炒め、ポテトサラダといったゆでる・炒める操作がある料理の調理実習を計画した。いり卵の調理実習では、作って食べるだけでなく、身支度や片付けといった調理実習の一連の流れにも着目して、実習を行うことができた。子どもたちは、班ごとでの実習に慣れているために一人一品という課題に困惑していたが、仲間と話し合いながら自分のお気に入りのいり卵を作っている姿が見られた。

調理実習を行うことで調理の楽しさを知り、さらに家庭での実践につながる活動にしていきたい。

## 現在行っている授業実践

### 橋北中学校3年生

授業内容:高齢者体験を通して、高齢者の気持ちや苦労を考える。

### 一身田小学校6年生

授業内容:家族の体が喜ぶ一食分の献立作り

## 11月までに行った授業補助の感想

南立誠小学校:ナップサック作り  
ミシンの台数が限られているので、頻繁に声かけを行い、準備が出来ているか確認を行った。

西が丘小学校:ランチオンマット作り  
前回に上糸のかけ方、空縫いを行っていました。空縫いを行うことで、児童の自信につながると感じた。

一身田小学校:エプロン作り  
早く終わった児童が「誰か手伝ってほしい人居る?」と言ったり、いい雰囲気だった。

**まとめ** 教育実習を行ってから、現場での実践は期間が開いていたので、改めて児童・生徒との対応について考える機会が出来た。今回の実践で各自、様々な課題を持つことが出来た。今後の学校生活、更には教職についてからも活かしていきたい。

# 一身田中学校における教育ボランティア 英語授業補助に関する報告

三重大学教育学部 英語教育コース 3年  
210107 西尾亜利紗 210114 服部和久

## 1. 三重大学と一身田中学校の連携事業

教科	学年	活動内容	期間
国語	1, 2, 3年	・教育実習に向けての授業参観	1学期
数学	1, 2, 3年	・授業研究 ・授業アシスタント	5月下旬～1月下旬
社会	2年	・社会科学特論演習として 大学院生による授業をその支援 ・授業研究及び学習支援	6月 5～6月
理科	2年	・学習支援(ニジマスの解剖)と食 育指導 ・科学の祭典への参加	11月
家庭	2年 1, 2年	・解剖実習と食育指導 ・授業アシスタント(実習)	11月 1学期
技術	1, 2, 3年	・授業支援(パソコン, 木材加工)	1, 2学期
音楽	1, 2, 3年 1, 2, 3年	・合唱指導支援 ・中大「コロナ音楽祭」の開催	7～10月 文化祭 「合唱コンクール」
体育	2, 3年	・「ラート」を使用した授業の実施	2学期
英語	1, 2, 3年	・授業アシスタント	1年間
教育実習	1, 2, 3年	・9月3日～9月28日(4週間)	

(津市立一身田中学校HPより <http://www.res-edu.ed.jp/issinden-j/>)

津市立一身田中学校は三重大学教育学部とさまざまな連携事業を行い、将来の教師を育てる手助けを行っている。左に挙げたのは、その連携計画の一覧であり、その一環として私たち英語教育コースの学生は英語の授業アシスタントとして授業に参加させていただいている。



## 2. 教育ボランティアの内容

【期間】2012年4月～現在

【対象学年】1～3年の全学年

【活動内容】英語科授業アシスタント

配属された各クラスの英語の授業において、担任の先生の授業を補助することが主な内容。

実例としては、

- ・担任の先生と組んで教科書音読におけるロールプレイの実演を行う
- ・机間巡視を行い、支援の必要な生徒に助言し、学習補助を行う
  - －先生の指示通り教科書が開いているか
  - －分からない問題はないか
- ・宿題ができていないかチェックを行う
- ・板書を行う
- ・配布物を配る ... など



## 3. 教育ボランティアを通して学んだこと

### 実際の授業を見られる貴重な機会

現職の先生方の授業を参観できたことで自分で授業を作り上げる際の大きなヒントとなった。(3年 女子)

授業をどう構成するか、子どもたちに対してどのように指導するか、ボランティアとして補助をしながら現職の先生方の動きを観察することで自分で授業を作り上げる際のヒントを得ることができた。机間指導の際にどのような声掛けを行って生徒との関係を作りあげていくか、生徒との距離感の重要性とともに、生徒との関わり方・ふれあい方をありありと学び取ることができた。

### 子どもたちの雰囲気を実感する

補助を通して子どもたちがどのようなところでつまづいているのか、どうサポートしてあげればいいのかということが分かり、とても勉強になりました。(3年 男子)

先生が前に立って授業を進行する間、子どもたちの様子を注意深く観察し、助けが必要かなと思った生徒に声をかけて補助を行ってきた結果、どのようなところで子どもたちがつまづき、苦戦しているのかを理解することができた。授業中の子供たちの雰囲気、子供たちの実際をする有意義な機会である。

### 「先生」という意識

ボランティアとはいえ、子どもたちにとっては「先生」。自分の行動、言動に教師としての責任感を持つという意識が強くなりました。(3年 女子)

担任の先生からも「先生」と呼ばれ、ボランティアとはいえ、教室には一人の「先生」として参加する。当たり前のことだが、子どもたちにとっては私たち大学生が言う一言も先生が言う言葉と変わりなく、行動、言動には責任感が伴う。個別に補助を行う際にも、確かな英語に対する知識が必要で間違いは許されない。日ごろの勉学の重要性も痛感する機会である。

## 4. 教師になる第一歩としての教育ボランティア



教師になるために日々大学で学ぶ私たち学生にとって、教育現場の実際を見ることができ、教育ボランティアという機会は、日々の授業で得た知識を実践としてアウトプットする数少ない場である。授業で得た知識を現場で実際に子どもたちのために活かす場であり、授業では気づけなかったこと、新たに必要と思った知識・技術を明らかにし、以後の大学での学びに活かす場でもある。

また、今年9月から1か月間行った教育実習の際にも、この経験は大きな助けとなった。英語教育コースの学生は一身田中学校をはじめ、三重大学附属中学校やその他協力校で実習をさせていただいた。その際の授業構成、指導法、生徒との関わり方は、この一身田中学校での授業アシスタントを通して学んだことが基盤となった。

私たち教師をめざす学生にとって、日々の授業で得た知識、それを実践する教育ボランティアでの経験、そしてその経験を一人の教師としての技術として実践練習する教育実習、この3つの歯車を大学時代に確立しておくことが、子どもたちにとってよりよい教師になるために、現場で通用する教師になるために必要である。反省点としては、まだまだ子どもたちとの関わりを増やすことができるので、今後より積極的に関わりを持ち、教師としてのスキルを磨いていきたい。



# 橋北中学校における ボランティア実践



活動時間: 指定された土曜日の午前 10 時~12 時の約 2 時間

活動内容: 英語と数学の学習支援

《生徒が取り組む内容》

- ・英語検定、数学検定の過去問
- ・中間・期末試験の対策

## \*良かった点

- ・教育実習前に生徒の習熟度の違いを認識し、生徒個々に対して適切な支援を考えるきっかけとなった。
- ・グループに分かれて学び合う姿勢が良かった。(中学3年生)
- ・机間指導の声掛けの基礎を学べた。
- ・授業外の生徒の様子が伺うことができた。

## \*更によりボランティア実践にするためには…

- ・専門分野外においての支援が十分にできない場面があった。英語科教育コースの学生が中学第 3 学年の数学を教えるのは少し困難さが生じた。そのため、事前に少し情報があると良いと思う。
- ・支援が必要な生徒の情報があると机間指導の際に役立つ。
- ・初めから机間指導を積極的に行う。

英語教育コース 3 年 小林智也  
英語教育コース 3 年 谷中愛梨



# 幼稚園での子育て支援～未就園児保育の運営～

2012 年度教育実地研究

三重大学教育学部幼児教育コース 4 年

【北立誠幼稚園 たんぽぽ会】 関絵里奈・玉置綾・脇阪舞

【白塚幼稚園 ぴよんちゃんクラブ】 岡歩美・小川真友子・奥田静香

【南立誠幼稚園 うさぎ組ひよこ組】 岩永尚子・長谷川佳世・藤原理絵・森岡有紀・山田真由

指導教員：吉田真理子・河崎道夫

## 活動内容

津市内の公立幼稚園（白塚幼稚園・北立誠幼稚園・南立誠幼稚園）で、子育て支援の一環として未就園児保育の運営を行った。園の方やお母さんボランティアの方と共に協力しながら、月 2～3 回未就園児とその保護者を集めて、家でもできる簡単なふれあい遊びや、絵本の読み聞かせ、季節に合わせた制作などを企画して活動した。私たち自身が楽しむことで、会全体も楽しい雰囲気になり、全員のつながりが深められるよう工夫している。また、七夕や運動会などの園の行事の支援にも積極的に参加した。

《人気のあった活動》

ふれあいあそび……ラララぞうきん、バスにのって、大きくなって小さくなって

体操……どうぶつたいそう 1・2・3、サンサンたいそう

制作……うちわ作り、どんぐりのスタンプング、キノコの制作

絵本……たまごをこんこんこん、だるまさんが

## 子どもたちの様子

どの園の子どもたちも、初めはとても緊張した様子であった。保護者から離れられなかったり、中々遊び始められなかったりする姿も見られた。また、話しかけるとうつむいてしまったりと、学生ともかなり距離があったように思う。しかし、回数を重ねる毎に子どもたちも少しずつ慣れていき、笑顔が沢山見られるようになっていった。良い意味で学生と子どもたちとの間に遠慮がなくなり、「えい！」「うわー！！」と、ときにはもみくちやになることも……。子どもたちからも積極的に話しかけてくれるようになってきている。

また、大人との関わりを楽しむだけでなく、他の子どもにも意識が向くようになり、子どもたち同士で「これあげる」「ありがと！」と、一緒に遊ぶ姿も増えてきた。

全体の活動も回を増す毎に、積極的に参加する子どもが増え、盛り上がりを見せている。全体の活動に参加したがる子どもも、廊下から中の様子を覗いたり、部分的に参加したりと、その子なりに楽しんでいるようである。

## 学んだこと

初めは、今まであまり関わったことのなかった未満児と接することに戸惑いを感じていたり、全体の活動では緊張や不安が大きかったが、徐々に慣れていき、学生自身が楽しんで取り組むことができるようになった。そうすることで、会自体が楽しい雰囲気になるということを実感した。また、0～4 歳児という幅広い年齢が同じ空間で活動することへの配慮や、一緒に楽しめる活動を考えることなどの難しさを感じ、その都度みんなでお話し合い、より楽しい会にしていこうと努力している。

# 幼稚園での子育て支援～未就園児保育の運営～

2012 年度教育実地研究

三重大学教育学部幼児教育コース 4 年

【北立誠幼稚園 たんぽぽ会】 関絵里奈・玉置綾・脇阪舞

【白塚幼稚園 びよんちゃんクラブ】 岡歩美・小川真友子・奥田静香

【南立誠幼稚園 うさぎ組ひよこ組】 岩永尚子・長谷川佳世・藤原理絵・森岡有紀・山田真由

指導教員：吉田真理子・河崎道夫

## 北立誠幼稚園～たんぽぽ会～

0 歳から 4 歳の入園前の子どもと保護者が参加し、園の方、お母さんボランティアの方と協力しながら月 2～3 回(月曜日)活動しています。子どもたちは保護者の方が近くにいることで安心し、おもちゃや粘土、お絵かきなど好きな遊びを楽しんでいます。



絵本の前は  
みんなで手遊び！

作品展に向けて  
お芋を作るぞ！



## 白塚幼稚園～びよんちゃんクラブ～

月に 2～3 回(火曜日)に白塚幼稚園で未就園児の親子の会を開催しています。

参加者は、0～3 歳児の親子 10～15 組です。

お母さん先生、園長先生に支えてもらいながら、安心して楽しく遊べる場を作っています。保護者の方や子どもたちと積極的にコミュニケーションを取れるようになってきました。



自由遊びの様子。ボール、積み木  
おままごとコーナーなど。

季節の制作コーナー。今回は、  
作品展に展示する「みのむし」。



## 南立誠幼稚園～うさぎ組ひよこ組～

月 2～3 回(水曜日)に、保育園・幼稚園に入園していない子ども・保護者の方と一緒に季節に合わせた制作活動を行ったり歌を歌ったりしています。絵本を楽しんだり、身体を動かしたりもします。

最近では、子ども同士・保護者の方同士のつながりも見られるようになってきました。

たくさんのお母さん先生の協力もあり、とても温かい雰囲気の中、仲良く楽しく行っています。



作品展ではキノコを作りました。  
11 月からはクリスマスプレゼント袋の  
飾りつけです。



## 子育て支援に関わらせていただいて・・・

子どもたちの成長を毎回感じたり、保護者の方や園長先生と子育てについてお話ししたりできるこの経験は、保育者を目指す私たちにとって、とても貴重なものとなっています。

# 暗闇部屋の取り組みについて

2012年度教育実地研究

三重大学教育学部幼児教育コース 1年

岡田拓海、小澤瑞希、北川優花、志賀彩菜、田上結稀

西尾美沙子、西田恵理、浜口志月、平井未来、細川真子、山田まどか

教育学部人間発達科学コース 2年

川上純、宮上聖良

指導教員：河崎道夫

## 活動内容

白塚幼稚園と三重大学附属幼稚園で、夕涼み会や夏祭りの一環として暗闇部屋の運営を行った。午前中に暗闇部屋の準備を進め、夕方ごろには完成し、子どもたちと一緒に暗闇部屋を楽しんだ。外で子どもたちを並ばせたり、中で見守ったり、身近で子どもたちの様子を見ることができて新鮮だった。

<暗闇部屋とは>

教室内に光が入ってこないように段ボールや遮光カーテンを使い真っ暗にして、長机と段ボールなどで簡単なコースを作り、お化けなどの仕掛けは一切用意せずに子どもたちに暗闇の中を歩いてもらうもの。

## 子どもたちの様子

子どもたちは私たちが準備をしている時点から「何つくつとるのー？」など興味を示していて、完成が待ちきれないようだった。暗闇部屋がやっと完成し、いざ入るとなると緊張したようであまりなかなかな入れない子や、平気な様子ですんなりと入っていく子、最後まで怖がり結局入れない子など反応は様々であった。ゴールして出てきた子たちに共通していたことは誇らしげな顔だった。「全然怖くなかったー」などと先生方や保護者の方に笑顔で嬉しそうに話していた。友達同士で一緒に入ったりして、とても楽しんでいる様子であった。

## 学んだこと

運営をする中で順番を守らずにだだをこねている子どもに対しての先生たちの対応の仕方や、ゴールできた子どもを褒める先生の姿など子どもたちの様子だけではなく、実際に間近で先生方の姿をみることができたことがとても良い経験になった。自分たちの効率の悪さからすべての子どもたちに暗闇部屋を体験させてあげられなかったことは反省すべき点だった。また私たち自身が同じ目線で楽しむことで子どもたちも一緒に笑い、楽しむことができた。

# 幼児教育1年教育実地研究基礎

日時 2012年6月30日(土) 9時30分～20時

場所 津市立白塚幼稚園

参加者 三直太学A類 幼児教育コース64期生11名、人間発達コース2名、河崎道夫(担当教員)、白塚幼稚園の園児たち、保護者の方々、白塚幼稚園の先生方

私たちは、夕涼み会の催しの一環として暗闇部屋を実施しました。暗闇部屋を通して子どもたちがどのような反応をしめすかを間近で見ることが目的としました。お化けなどは一切準備せず暗闇の中に短いコースをつくり園児たちに参らせてもらいました。



まずは、長机の上に段ボールを積み上げ壁を作り、そこに解体した段ボールを貼り付け、ガムテープやビニールテープを使い固定しました。さらに新聞紙をのりですりつけガをしないように、緩やかなカーブのあるコースを作るように心がけました。また入り口にはトンネルを用意し、園児たちが通ってコースの中に入るように作り直しました。



窓から光が漏れてしまうので、窓中に段ボールを貼り付けました。それだけでは光がもれてしまうので上から遮光カーテンをかぶせました。



ボールした子供たちには手作りのステルをあげるととても喜んでいました。何度もチャレンジする子や一度も入れなかつた子がおり、さまざまな反応を見ることができました！

## 実地研究を終えて

暗闇部屋を作っているとき、閉め切るのでとても暑く作業が大変でした。一番苦労したことは光が漏れないように完全に暗くすることでした。作業はぎりぎりまでかかり、大変だったけれど子どもたちの笑顔や泣き顔をみると疲れがふっとびました。子どもたちと身近に触れ合うことができ、とてもよい経験となりました。実地研究にご協力いただいた先生方、温かく見守ってくださった保護者の皆様、そして年役である白塚幼稚園の園児のみなさん、本当にありがとうございました。



## 津市立一身田中学校（理科）における授業支援

理科教育コース 3年 前田昌志・早川賢

### 1. はじめに

平成24年5月から平成25年1月まで三重大学の理科教育法Ⅰ（担当教員平賀伸夫先生・萩原彰先生）、理科教育法Ⅱ（萩原先生・平賀先生）の授業の一環として、津市立一身田中学校において理科の授業補助を行っている。

これまでの活動を元に、学生の「教師に必要とされる力」についての考えがどのように変化していったのかについて報告する。

### 2. 活動について

#### ① 目的

（前期）教育実習に向け、現場の様子を把握する  
（後期）教育実習で学んだ経験を生かし、さらに教育実践への認識を深める

#### ② 実施期間：平成24年5月上旬～7月下旬

10月下旬～1月下旬

#### ③ 対象学校：一身田中学校1, 2年生

#### ④ 参加学生：三重大学教育学部生22名

#### ⑤ 活動内容

一身田中学校において教員が行う理科の授業の見学・補助、実験補助および授業実践を行う。

学生は授業後に、自分が生徒に対し行った支援やそのときの生徒の様子等について記録する。また、4月（活動を行う前）・7月（教育実習前）・10月（教育実習後）・2月（活動終了後）の4回にわたり、「理科の教師としてどのような力が大切だと思うか。具体的に記せ。」というアンケートに回答する。

### 3. 授業支援の意義

1年間を通して授業支援をすることで、以下のような意義があると考えられる。

- I. 教育実習に行くにあたっての準備ができる
- II. 附属学校の生徒とは違う、公立校の生徒の様子をつかめる。（環境の実態）
- III. 授業参観よりも生徒を近くで見ることがで

きる。（教員と同じような机間指導ができる）

IV. 教員の目線や発言・発問内容から、生徒がどのような反応をするかをつかめる。

### 4. 学生に行ったアンケート結果について

4月に行ったアンケートにおいて最も多くの学生が回答した力は、「知識を有すること」であった。その後続く回答としては、「生徒に伝える力（説明が上手にできる・人を引き付ける話術など）」、「身近なもの・生活と結びつける力」、「好奇心を刺激する力」、「教材研究（面白い教材を開発する力など）」、「実験が上手にできる力」などがあつた。

10月に行ったアンケートにおいても、最も多かった回答は「知識を有すること」であったが、次点の回答には変化が見られた。一番大きな変化は「生徒に伝える力」が「生徒理解をもとに授業を組み立てる力」に変化したこと、すなわち生徒の実態を理解した上で授業を組み立てる力が必要であるという認識が生まれたことである。このような変化は、活動を通して自分のイメージする生徒像にギャップを感じたことに因ると思われる。生徒理解によって、そのギャップの埋めていくことが、授業を組み立てる上で重要になると考える。

また教材研究関連の回答が4月時のアンケートよりも増加した。これは教育実習を通して授業づくりの大変さや、授業時における生徒の対応（全く予想していない発言を受ける、など）の難しさを知り、よりその必要性を感じたためだろう。また、生徒に興味を持たせる工夫の必要性が認識されるようになったのも、現場で知り得た理科に興味を持ってない生徒の現状への認識からであろう。

本活動を通して、私たちはこれから教師に必要な力を磨いていきたいと思う。そのために、後期の活動では授業実践を行うことで、より充実した企画・実践を目指していきたい。

# 理科教育法Ⅰ・Ⅱ 三重大学教育学部 理科教育コース 津市立一身田中学校(理科) における授業支援

- 講 義 理科教育法Ⅰ(前期) 指導教員:平賀伸夫、荻原彰  
理科教育法Ⅱ(後期) 指導教員:荻原彰、平賀伸夫
- 目 的 (前期) 教育実習に向け、現場の様子を把握する  
(後期) 教育実習で学んだ経験を活かし、さらに教育実践への認識を深める
- 活動概要 一身田中学校における授業補助、実験補助
- 学 生 三重大学 教育学部 理科教育コース 3年生 14名  
技術教育コース 3年生 3名  
院 生 1名  
数学教育コース 3年生 2名
- 対象学校 一身田中学校 1年生 理科 (受講生 約30名×6クラス)  
2年生 理科 (受講生 約30名×5クラス)
- 期 間 前期:5月上旬~7月上旬  
後期:10月下旬~1月下旬
- 課 題 4回にわたるアンケートへの記入  
①4月(活動を行う前)  
②7月(教育実習前)  
③10月(教育実習後)  
④2月(活動終了後)



## ○授業支援の意義

- I. 教育実習に行くにあたっての準備ができる
- II. 附属学校の生徒とは違う、公立校の生徒の様子をつかめる(環境の実態)
- III. 授業参観よりも生徒を近くで見ることができる(教員と同じような机間指導ができる)
- IV. 教員の目線や発言・発問内容から、生徒がどのような反応をするかつかめる

### 前期の活動

- <単 元>  
1年:植物のくらしとなま  
2年:地球の大気と天気の変化
- <活動内容>  
○授業見学  
○生徒への個別支援  
○実験操作の補助

### 教育実習

- 学 生:理科教育コース  
3年生 14名
- 対象学校:三重大学附属小学校 3名  
三重大学附属中学校 11名
- 期 間:9月上旬~10月上旬

### 後期の活動

- <単 元>  
1年:身のまわりの物質  
2年:化学変化と原子・分子
- <活動内容>  
○授業実践(予定)  
○生徒への個別支援  
○実験操作の補助

### 1年間の流れ



### アンケート

理科の教師として、どのような力が大切だと思いますか。具体的に記してください。

#### 4月当初

- 「知識を有すること」
- 「生徒に伝える力」
- 「身近なもの・生活と結びつける力」
- 「好奇心を刺激する力」

#### 現時点

- 「知識を有すること」
  - 「生徒理解をもとに授業を組み立てる力」
- ↑
- 生徒の実態を理解した上で授業を組み立てる力が必要であるという認識
- ・教材研究関連の回答が4月時よりも増加
- ↑
- 教育実習により、教材研究の必要性を再認識

#### 活動後



### まとめ

今後も本活動を通して、授業を行う上で教師として必要な力をつけていきたい。

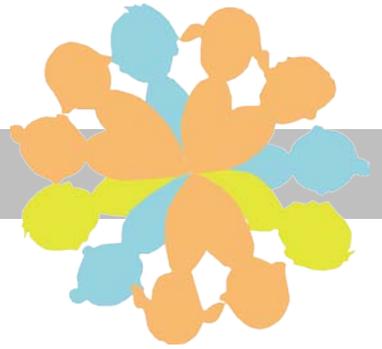
2012年度 連携活動に関するアンケート

	回答者	1. このフォーラムで一番印象に残ったことは何ですか。	2. 学生のポスター発表を見て、学生の学びについてお考えになったことは何ですか。	3. 教育実習関係の発表を聞いてお考えになったことは何ですか。	4. 今後の連携活動に対するご意見・ご要望をお聞かせください。
1	連携関係者 (小学校)	いろいろな学校からのパワーポイント			
2	連携関係者 (小学校)	後藤教授の人材育成の話(最後の・・・)	うまくまとめられていてgoodでした。	学校(現場)と大学はgive and takeです。片方からの見方(一方的な見方)は、少しちがうのではと考える(学校の発表でした・・・)	共にながら、教育を向上させましょう!
3	連携関係者 (小学校)	連携校からの報告の内容がよかった。実際の連携の活動が行われている様子が具体的にわかり、他校の連携活動の内容を知ることができ、本校の今後の連携に生かせるようにしていきたい。		何よりも、学校を知ること、子どもを知ることが第一で、その中で工夫し、努力して実習している生き生きとした実習生の姿を見ることができてよかったです。	・今回の連携校からの発表にもありましたが、もし大学からお借りして小学校の授業で活用できるものとして、どんな機器、教材等があるのかを教えてください。・実地研究学生との打ち合わせ時間の確保と、大学における実地研究生の時間割と連携校の時間割の調整を何とかしたい。
4	連携関係者 (小学校)	各連携校がそれぞれの学校の実態にそって、工夫した連携活動ができていることに感心しました。			教育実地研究で○学校以外)の連携機関で取り組んだことと、学校で取り組んだことと、どんな違いがあるのか?
5	連携関係者 (中学校)	各校からの報告		課題が明確になったのでは。	理工系学部の学生支援、産業人・生産・開発部門からのキャリア教育の支援も望みたい。
6	連携関係者 (中学校)	ICT機器の活用例に驚いた。(西が丘小の発表)		参加できませんでした。	今後も多くの支援をよろしくお願ひします。
7	連携関係者 (中学校)				連携活動が学校現場、大学ともにとても有意義なものであることを再認識できました。
8	連携関係者 (中学校)	多くの連携が行われていることについて、より質の向上について両者で話し合う機会をもつ必要があると感じました。		学生の思いを知ることができました。	
9	連携関係者 (中学校)	他校の連携の様子がよくわかった。		もっときびしく実習生に求めなくてはと感じた。	
10	大学教職員	大学と現場の双方の負担を超えて取り組みが充実してきている。	1分間ではなく、もう少し時間を長くしてあげてもよいと思います。	実習生の数の調整に課題があるが、改組により改善すると思います。	フォーラムの場で異なるコースの学生や、現場の先生方との交流の場面があればよいと思います。
11	大学教職員	連携活動の全体像が良くわかりました。	①他の講座の様子が具体的にわかり参考になりました。②技術の学生のパワーポイントスライドがすばらしかったです。	今後の課題を教えてください。	様々な分野の先生方の参加が増えることを期待しています。大変勉強になりました。ありがとうございました。
12	大学教職員	教師の魅力は「若さ」、教師とは稲作農家との提言		なかなか立派な発表をする学生もいた	大切に育ててゆく必要があります。本日はご苦労様でした。
13	大学教職員	橋北中学校と一身田中学校の教頭先生の報告	教育実習、連携校でのボランティアについては一生懸命やっていることがわかりましたが、それを普通の授業にも反映させることはなぜできないのかな・・・と思います。	Ⅱ部の実習生の報告は各コース1人でやったほうが良いと思いました。2人でやるとあまり具体的に話していないように思いました。	・Ⅱ部、Ⅲ部の要旨も冊子にあるといいなと思いました。(すみません、活動とは関係ないです)・全学年(1～4年生)に活動に関わってもらえたらいいと思います。

2012年度 連携活動に関するアンケート

	回答者	1. このフォーラムで一番印象に残ったことは何ですか。	2. 学生のポスター発表を見て、学生の学びについてお考えになったことは何ですか。	3. 教育実習関係の発表を聞いてお考えになったことは何ですか。	4. 今後の連携活動に対するご意見・ご要望をお聞かせください。
14	1年生	教育実習の発表	いろんな学科の発表が見れて、とても勉強になりました。今日のポスター発表で学んだことを生かして、これからの実地研究に取り組んでいきたいと思えます。	教育実習の大変さを実感しました。終わった時に、良い経験だと思えるような教育実習になるように努力していきたいと思えます。	
15	1年生	様々なコースがそれぞれの方法で小学校と関わっていること。	実際に生徒たちと接することで授業で学ぶことは違うことが学べているように感じた。	大学との授業の兼ね合いが困難なことを知った。学生にはやはり積極性が求められているなど感じた。	今後も教育実地研究を続けていってほしいです。
16	1年生	三重大がいろいろな連携校とつながっていて、それぞれの連携校からの報告の場があったことを知ったこと。	体験談を知ることができること。実際の様子が分かってよい。	準備期間にもいろいろ学べること。	
17	2年生	三重大が思っていた以上に地域と連携していたこと。	子どもたちと関わるときに大切なことを学んでいると思った。子どもたちの「学び」を促すためのサポートのしかたは様々であると感じた。	来年私は教育実習に行くが、目的、自分のすべきことをはっきりとさせ、一つ一つのことに取り組みなくてはならないと思った。	
18	2年生	三重大とまわりの学校がこれほど密接な関わりがあると知らなかった。	私は2年生なので、1～2年違うだけで全然違うと感じた。来年の実習、これからの私に活かしたい。	子どもにどうしたら良いかを考えることが重要だとわかった。実習に向けた準備、心得をもつことは大切だ。	また次の機会にも参加したいと思えます。
19	2年生	連携校と三重大のつながり(初めて知った)の強さ	すみません、見ていません。	先輩の発表から、教育実習のすばらしさが伝わってきたので、それまでに積極的に準備や活動をしていこうと思った。	授業の空きコマで参加したいと思った。
20	3年生	南立誠小学校からの報告“一輪の花”	教材など具体的に紹介しているポスターが良かった。何を学んだのかが分かりにくいポスターもあった。簡潔に内容が濃いポスターを作るのは難しいと感じた。	教育実習について、学生からの目標と教員からの目線を感じる事ができて良かった。実習校に教育実習に行った学生は参加すべきだと思った。	ポスターセッションに来てくれる人が少なかったのが残念。
21	3年生	連携校からの報告があり、実習生・学生が他者の視点(学校側)からの成果や課題を聴くことができ、自らの課題を見直すことができた。	教育法などの授業の一環として地域連携を行っているものが多かった。自分たちは、ゼミの活動として、地域連携活動をさせてもらっていたので、その差異が目についた。学部全体から参加できる連携活動があれば、是非参加したいと思う。	連携が学校・大学にとって、かせにならないようにしていかないと。地域連携校での実習は、とても貴重なものになっているので、ぜひ続けていってほしいし、できれば規模も大きくしていかってほしい。	連携活動の具体的なモデルがあると良いのでは？提案した側、された側がもっと深く関わり活動を行うことで、よりよいものになると思う。特別支援についても連携があればいいなど感じた。
22	3年生	学生のポスター発表(視点が人それぞれであったこと)	学生の学び方は人それぞれであり、教育実地研究や教育実習において私たち自身も学ぶことの大切さを知ることができたと感じた。	教育実習を体験することで、教育に対する考えや感じ方が変化した人がほとんどだと思った。教育実習後の同学年の人の発表は、表情も態度も堂々としているように感じた。	教育実習前の連携活動はとてもためになりました。
23	3年生	どのコースの方のポスターも丁寧にまとめてあり、見やすかったこと。	教育実地と教育実習の違いを知ることができた。各教科によって私自身と同じ経験があれば、違いもあり、生徒との関わりにおいて学ぶことがたくさんあると思えました。	教育実習では、授業だけでなく、給食の時間や下校の時等、生活指導の時間も含めて、コミュニケーションをとり、生徒に教えていくことの大切さがあることがわかりました。	
24	大学院	一身田中学校の教育実習の話。	連携することで現場のことがわかり、貴重な経験になるのではないかと。	来年の教育実習に対する期待と不安。	常により良くできるよう考えていく姿勢が必要。
25	匿名	各校の連携活動の報告がとてもよかったです。			

## IV 資料



平成24年12月7日

平成21年度大学教育・学生支援推進事業  
【テーマA】大学教育推進プログラム  
選定取組大学長 殿

大学教育等推進事業委員会  
委員長 佐々木 毅

大学教育・学生支援推進事業【テーマA】大学教育推進プログラム  
(平成21年度選定取組) 状況調査結果票について (通知)

大学教育等推進事業委員会では、平成21年度に選定された取組について、各取組の実施(達成)状況等の調査を行いました。状況調査は、優れた取組の内容を広く社会に情報提供することにより、財政支援期間終了後の取組の持続的展開やその水準の一層の向上、及び今後の我が国の高等教育の質保証の更なる強化に資することを目的としています。

貴学の取組についての状況調査結果票は、別紙のとおりです。貴学におかれましては、内容に十分留意して、今後の取組の改善・充実に努めていただきますようお願いいたします。

状況調査結果票は、書面調査のみを実施した大学等に対し、その結果を当該大学等に限り開示するもので、公表はいたしませんので、取扱いにはご留意願います。

なお、貴学より提出された事業結果報告書は、独立行政法人日本学術振興会ホームページ(<http://www.jsps.go.jp/j-pue/index.html>)に掲載することなどにより、大学等関係者を含め、広く社会に公表することとしております。

また、本事業の趣旨・目的を踏まえ、優れた取組例を我が国の高等教育に広く波及させるために、取組の内容・経過・成果等について、ホームページを活用するなどの積極的な情報提供に努めていただきますよう、併せてお願いいたします。

(本件連絡先)

独立行政法人日本学術振興会研究事業部研究事業課  
大学教育等推進事業委員会事務局  
〒102-0083  
東京都千代田区麹町5-3-1 (麹町浅古ビル3階)  
電話：03-3263-1105/FAX：03-6734-3387  
E-mail：goodpractice-jsps@jsps.go.jp

大学等名	三重大学
取組名称	隣接学校園との連携を核とした教育モデル

### 大学教育等推進事業委員会におけるコメント等

#### 【実施（達成）状況に関するコメント】

本取組は、本大学が近隣の幼稚園、小学校、中学校、教育委員会等と連携関係を構築し、協同的な学びの体制を整備するためにさまざまな活動を行うもので、計画に沿って進められてきた。このことにより、教員養成のみならず、教員研修においても教育の質向上を実現できたと思われる。社会への情報提供も活発であり、ホームページや新聞等を通じて、他大学や教育関係者に対して広く行われ、また報告書も毎年印刷物として公表されている。

#### 【当該取組の優れている点】

校内のみならず、近隣の学校園や教育委員会を巻き込むなど、幅広い関係者との連携により活動を進めた点で、着眼点が優れている。また学修サポート室や学修サポーターの配置など、学生の学修を支援する体制の整備にも努め、着実に成果が上がるように工夫されている。

#### 【今後の取組において改善が望まれる点】

更に多くの関係機関、関係者との連携協力体制を構築し、活動を継続・発展させていくことが望まれる。

#### 【その他】

取組実施によって明らかになった課題について深く分析して、更に効果的な活動につなげるように努力していただきたい。

一身田・橋北校区との連携活動

平成 24 年度 報告書

平成 25 年 3 月 発行

編集 三重大学教育学部 一身田・橋北校区連携推進委員会  
発行 国立大学法人三重大学教育学部 連携支援室Ⅱ  
〒514-8507 津市栗真町屋町 1577  
Tel/Fax 059-231-9269  
e-mail [chiiki-renkei@edu.mie-u.ac.jp](mailto:chiiki-renkei@edu.mie-u.ac.jp)  
<http://www.edu.mie-u.ac.jp/education/cooperation-n/>  
印刷 伊藤印刷株式会社  
〒514-0027 津市大門 32-13  
TEL 059-226-2545(代) FAX 059-223-2862

表紙イラスト カゲムシャ

